The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の省略現象
Author(s)	甲斐, ますみ
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3171194
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学

博士論文

日本語の省略現象

【提出年月】　1999 年 12 月

言語社会研究科　言語社会専攻

甲斐　ますみ

目次

本稿で用いる表記 ---------- vi

第1章　はじめに ---------- 1

1.　省略とは何か ---------- 1
2.　省略のタイプ ---------- 2
2-1. 省略の三タイプ ---------- 2
2-2. 命令文，感情表出文 ---------- 4
2-3. 一語文 ---------- 4
2-4. メトニミー ---------- 4
3.　本稿の立場 ---------- 5
3-1. 分析対象 ---------- 5
3-2. 省略と結束性 ---------- 6
4.　分析資料 ---------- 6

第2章　省略研究の変遷 ---------- 8

1.　本章の目的 ---------- 8
2.　現象指摘期 ---------- 8
3.　省略分析の発展期 ---------- 11
3-1. 統語理論から機能的分析，そして認知言語学へ ---------- 11
3-2. 談話分析・テクスト分析 ---------- 11
3-3. その他のアプローチ ---------- 13
3-4. 助詞の省略 ---------- 14
4.　本研究の位置 ---------- 14

第3章　情報ベース ---------- 16

1.　本章の目的 ---------- 16
2.　発話のタイプ ---------- 16
3.　情報ベース ---------- 17
3-1. 情報ベースとは ---------- 17
3-2. 情報ベースの要素 ---------- 18
3-3. 情報ベースと情報領域 ---------- 18
3-4. 前景化と心理的トピック ---------- 19

4. 場面依存型発話 ---------- 20
4-1. 場面依存型発話と情報ベース ---------- 20
4-2. 指示の異なり ---------- 24
4-3. 活性化の持続 ---------- 26
4-4. 同定認識 ---------- 27
5. 文脈依存型発話 ---------- 29
6. 本章のまとめ ---------- 31

第 4 章 リンク ---------- 33

1. 本章の目的 ---------- 33
2. リンクとは ---------- 33
3. リンクのタイプ ---------- 36
3-1. 論理的リンク ---------- 36
3-2. 語彙的リンク ---------- 37
3-3. 認知・概念的リンク ---------- 38
3-4. 知識のリンク ---------- 38
3-5. 情報のリンク ---------- 39
4. リンクと省略 ---------- 42
5. 本章のまとめ ---------- 44

第 5 章 1, 2 人称主語の省略 ―単文― ---------- 46

1. 本章の目的 ---------- 46
2. 話者と聞き手 ---------- 46
3. 「は」と「が」の意味機能 ---------- 46
4. 主語指向度 ---------- 48
5. 談話における主語の意味機能 ---------- 51
5-1. 主語のタイプ分け ---------- 51
5-2. 主語のタイプと情報ベース ---------- 53
5-3. 主語の意味機能のタイプと省略との関係 ---------- 56
6. 検証 ---------- 57
6-1. 完全対比主題／完全排他主格 ---------- 57
6-2. 相対対比主題／相対排他主格 ---------- 58
6-2-1. 予測可能 ---------- 59
6-2-2. 予測不可能 ---------- 61
6-3. 論理的唯一主題／論理的唯一主格 ---------- 65
6-4. 完全唯一主題／完全唯一主格 ---------- 67
7. 本章のまとめ ---------- 69

第 6 章　1, 2 人称主語の省略　－複文－ ---------- 70

1.　本章の目的 ---------- 70
2.　従属節の構造 ---------- 70
2-1. 従属節の階層 ---------- 70
2-2. 従属節と主節の主語 ---------- 72
2-3. 本稿の仮説 ---------- 74
3.　検証 ---------- 75
3-1. 完全対比主題／完全排他主格 ---------- 75
3-2. 相対対比主題／相対排他主格 ---------- 76
3-2-1. 予測可能 ---------- 76
3-2-2. 予測不可能 ---------- 78
3-3. 論理的唯一主題／論理的唯一主格 ---------- 79
3-4. 完全唯一主題／完全唯一主格 ---------- 81
4.　B 類の従属節 ---------- 83
4-1. 完全排他主題／完全排他主格 ---------- 83
4-2. 相対排他主格 ---------- 83
4-2-1. 予測可能 ---------- 83
4-2-2. 予測不可能 ---------- 84
4-3. 論理的唯一主格 ---------- 85
4-4. 完全唯一主格 ---------- 86
5.　本章のまとめ ---------- 87

第 7 章　応答発話におけるくり返しと情報構造 ---------- 89

1.　本章の目的 ---------- 89
2.　冗長性と協調の原理 ---------- 89
3.　情報の新旧 ---------- 90
4.　検証 1　－yes-no タイプの疑問文－ ---------- 92
4-1. 取り消し可能性と選択肢グループ ---------- 92
4-2. くり返しの機能 ---------- 95
4-3. 情報のタイプ ---------- 95
4-4. 命題の構成要素 ---------- 96
4-5. 命題構築要素のくり返し ---------- 97
4-6. 命題付加要素 ---------- 100
4-6-1. 手段・道具を表わす「で」格成分 ---------- 101
4-6-2. 様態副詞 ---------- 102
4-6-3. 量や程度を表わす副詞 ---------- 104

4-7. スペース設定点とその他の成分 ---------- 104
4-7-1. スペース設定点 ---------- 104
4-7-2. 二つの副詞 ---------- 106
4-7-3. 二つの副詞と取り消し可能情報 ---------- 107
4-8. モダリティ形式と「のだ」のスコープ ---------- 108
4-9. yes-no タイプの疑問文に対する否定応答発話 ---------- 109
5. 検証 2 －wh タイプの疑問文－ ---------- 111
5-1. 命題構築要素 ---------- 111
5-1-1. 命題構築要素のくり返しと語順のプロトタイプ ---------- 111
5-1-2. 複数の格成分 ---------- 113
5-2. 命題付加要素 ---------- 114
5-2-1. 手段・道具を表わす「で」格成分 ---------- 114
5-2-2. 様態副詞 ---------- 115
5-2-3. 量の副詞 ---------- 117
5-3. スペース設定点 ---------- 116
6. 本章のまとめ ---------- 118

第 8 章 談話の構造とリンク ---------- 119

1. 本章の目的 ---------- 119
2. 話題 ---------- 119
3. 談話の内部構造 ---------- 121
4. 整合性とリンク ---------- 124
5. 談話のまとまりと切れ ---------- 127
5-1. 小実験 ---------- 127
5-2. 被験者と実験方法 ---------- 127
5-3. 実験材料 ---------- 127
5-4. 結果 ---------- 128
6. 本章のまとめ ---------- 131

第 9 章 主題の省略 ---------- 133

1. 本章の目的 ---------- 133
2. 先行研究 ---------- 133
3. 主要素連鎖 ---------- 135
4. 主題化と談話の意味的構造 ---------- 136
4-1. 主題の連続 ---------- 136
4-2. 格成分から主題へ ---------- 137
4-3. 同一主題の連続 ---------- 142

4-4. 主題から格成分へ ---------- 144
5. 同一主題の連続とイベントシフト ---------- 146
6. その他の主題の介入 ---------- 150
7. 1・2 人称主題と談話の構造 ---------- 154
8. 本章のまとめ ---------- 155

第 10 章 推論と省略 ---------- 157

1. 本章の目的 ---------- 157
2. 推論と省略 ---------- 157
2-1. リンクに誘発される推論 ---------- 157
2-2. 空間イメージ省略 ---------- 159
2-3. メトニミー ---------- 160
3. 本章のまとめ ---------- 162

第 11 章 まとめと今後の課題 ---------- 163

引用文献 ---------- 165

謝辞 ---------- 172

本稿で用いる表記

本稿では例文を，次の二種類の方法で記述する。

(1)私は昨日旅行から帰ってきたが，[私は] とても疲れていた。

(2)＜橋本は山田を見ながら竹下に，＞

橋本：①[ø は] 背が高いよね。②山田君と君はどっちが背が高いの。

竹下：①さあ，わかりませんね。②僕は / *[ø は] 180cm ないですけど。

(1)の[ ]は，例文の中で言語化されておらず，言語化しない方が自然な要素を表わす。

(2)の「ø」の記号は，省略されている要素を示す。よって，橋本の発話における「[ø は]」は，「は」を伴う名詞句が省略されていることを表わす。竹下の発話における「僕は/ *[ø は]」は，用例の中で「僕は」が言語化されているが，この名詞句をスラッシュ後方のように省略した場合，自然かどうかを表わす。なお，文法性の判断には「*, ?, ??, ???, #, ↔」の記号を用いる。記号はそれぞれ次を意味する。

* ……	容認不可能。
??? ……	非常に不自然。
?? ……	不自然
? ……	ちょっと不自然。
# ……	言語化あるいは省略すると，もとの意味と異なってしまう。
↔ ……	冗長性から，どちらか一方のみしか言語化できない。

また，文頭に「①，②」などの丸囲み数字がついている場合は，同一話者による，句または文の発話順を示す。

言語の使用者は，文法性を判断する能力を有している。文法性の判断は，まったく文脈から切り離した文について行えることもあれば，発話場面や前後の文脈を考慮してはじめて行えることもある。本稿での文法性判断は，後者のタイプに属する。従って，文そのものを見た場合，何ら非文でなくとも，その文が発せられる発話場面やその文が生起する前後の文脈に照らし合わせた場合，容認不可能だと判断されることがある。このような判断能力は，我々がなぜ意味的にまとまりのある文章や談話を作り上げることが出来るのかという能力と関係している。

第１章　はじめに

1.　省略とは何か

言語には「省略」という現象がある。しかし，省略という用語は，一般的に広い範囲の現象を指す。例えば，「以下省略」といった場合には，省略されている対象がかなり広く，また，省略されている対象が言語的に何であるかはあまり問題とされない。その一方で，「主語が省略されている」という場合には，省略されている対象が文法的に規定できる。そこで本章では先ず，何を省略と呼ぶかの定義付けから行うことにする。

例えば「走る」という行為は，「走る」行為を行う主体を必要とするし，「美しい」という属性は，その属性をもつ対象の存在があってはじめて一つの命題として成立する。そして命題が反映された結果としての統語構造において，述語はその述語と結び付く主語や目的語を支配し，述語によって項をいくつ取るかが決まっている。このように，命題成立のために必要とされる要素は必須成分であり，この必須の要素が何らかの原因で言語化されていないもの，それを本稿では「**省略**」と呼ぶことにする[1]。そして，話者と聞き手の存在する発話のやり取りにおいて，話者の視点から言えば，ある一つの命題を表わすために必要となる構成要素を言語化していないもの，また，聞き手の視点から言えば，ある発話を解釈する上で，意味的復元が必要とされるもの，それが省略である。そして，省略された要素を含む文を「**省略文**」と呼んでおく。

これに対して，副詞や修飾語などは，話者によって言語化された事態，状況などのあり方やそれに対する話者の捉え方，発生時などをあらわす要素であり，命題成立のための必須成分ではない。このような要素は，たとえ言語化されていなくとも省略とは言えない。

省略には，助詞の省略，主語の省略，述語の省略，といろいろなタイプがあるが，本稿では，修飾部を伴わない名詞に，格助詞および主題マーカーの「は」がつく，あるいはつけることのできる「名詞句の省略」を分析の対象とする。

なお本稿での「**主語**」という用語は，いわゆる「は」を伴って文頭に立つ主題および「が」格主語の両方を包括した概念として用いる。そして，「**文脈**（context）」には，言語的に作り上げられる「言語的文脈」と発話場面から得られる「非言語的文脈」の二種類があるが，単に文脈という場合には，この両方を指す。また「**発話**」という用語は，大まかに，「形態的に独立

[1] 寺村秀夫（1982:82）は，「あるコトの表現において，言い換えればある述語にとって，それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられるような補語を『必須補語』，そうでないものを『副次補語』と呼ぶことにする」と述べている。寺村の言う『必須補語』が言語化されていないもの，それが本稿での省略に当たる。

し，意味的な完結性をもつ言語単位」と定義しておく。そして，紙面上に書かれた言葉ではなく，口頭で発せられた言葉であることを特に強調する意味で「発話」という用語を用いるが，本稿の中では「文[2]」という用語も使っており，その際は，「発話」と同じ意味で用いている。

では次章では，名詞句の省略にどのようなタイプがあるかを見ていく。

2. 省略のタイプ

2-1. 省略の三タイプ

名詞句の省略には大きく次の三種類があると考えられる。

❶ 統語的省略
❷ 談話・状況的省略
❸ 場面依存的省略

❶の統語的省略とは，統語的に規定し得るタイプであり，文文法として記述されるものである。このタイプは一般的に「削除」という用語が用いられている[3]。統語的省略は，文脈から切り離しても文法性判断が行える。

次は統語的省略の例である。

＊以下の例文における[　]は文中で言語化されていない要素を表す。

(1) 私は［私が］昨日言ったことを後悔している。
(2) 私は足が遅いけれども，［私は］運動会が好きだ。

❷の談話・状況的省略は，談話の流れや発話が行われる場面から，省略を許される或いは省略をしなければならないタイプのものである。このタイプは，談話内容や文脈によっては，省略を許されなくなる。そしてこのタイプの文は，文脈と照らし合わせることによって文法性判断が行える。

(3) ［君］疲れた？
(4) お祖父さんが私に時計をくれました。でも［その時計は］すぐ壊れてしまいました。
(5) 山本：一郎はケチだよね。
　田中：いや，［一郎は］ケチというより，倹約家なんだ。

---

[2] 「文」を巡っては，山田孝雄(1936)をはじめとして，様々な論議が行われており，文は定義が最も困難な概念の一つであるが，本稿では，こうした問題まで立ち入らない。

[3] John Hinds(1982:21-22)は，「削除(deletion)」と「省略(ellipsis)」を区別し，削除は変形概念(transformational notion)であるが，省略は表層レベルで働く認知的用語であって，聞き手は発話を「表層構造のフレーム」と比べ合わせて何かが省略されているかどうかを決定する，と述べている。

❸の場面依存的省略は，発話が行われている場面を考慮することによって初めて発話の解釈が可能となるもの，また，スクリプト，フレーム，スキーマといった概念がかかわるものを含む。

スクリプト，フレーム，スキーマという用語は，アプローチの違いなどによって，研究者ごとに用いられ方が異なるのだが，簡単に言えば，R. N. Ross (1975) が 'structures of expectations' という用語で説明しているように，「ある一定の文化（又は文化の混合）における世界に対する我々の経験に基づき，世界についての知識を構成し，新しい情報，イベント，経験に関する解釈と関係を予測するために使う知識」と言える。

場面依存的省略は，省略されている要素を言語的に復元しようとした場合，復元結果がいく通りも有り得，一義的には決定し難い。

(6) ＜数人でレストランに入り，メニューを見ながら＞

僕はハンバーグ。

(6) の発話は，場面から切り離された場合，解釈不可能となる。また，この発話の省略されている部分を復元するとすれば，以下のように様々考えられ，一義的には決められない。

(7) a. 僕はハンバーグに決めた。
b. 僕はハンバーグを食べる。
c. 僕はハンバーグをもらおう。
d. 僕はハンバーグを注文する。

次の例も同様である。

(8) タバコ！

この発話が何を意図しているかは場面によって異なり，次のように種々あり得る。

(9) a. タバコを取ってくれ
b. タバコを買って来てくれ。
c. タバコを吸うな。
d. 貸していたタバコのお金を払え。

以上省略を三タイプに分類したが，この他に省略と呼ぶべきかどうか議論の必要なものがある。以下そうした例を見てみる。

2-2. 命令文，感情表出文

(10)［君は］この仕事をやってくれ。

(11)［私は］お腹が減ったなあ。

命令文，感情表出文は主語にくる名詞が決まっており，それ故，主語は言語化されないことが多い。しかし，第5，6章で詳しく論じるように，1・2人称主語であっても，文脈によっては主語の言語化が必要とされることがある。よって，こうしたタイプの文は［ ］で示された部分の要素が省略されている省略文であると考える。このタイプは談話・状況的省略の一種である。

2-3. 一語文

(12)いい天気だ！

(13)1時だ！

(14)車だ！

本稿では，発話の解釈のために何らかの要素を意味的に復元する必要のないものは省略文とは考えない。(12)(13)は，意味的に完結している。また，聞き手はその他の可能な考えられる場面状況をいくつも想起することはないので，省略文とは考えない。

一方(14)は，この発話が起こり得る発話場面が複数考え得る。

(15)＜道を歩いていて前から車が来て＞

あっ，車だ。

(16)＜通りを歩いていて自分の父親の車が止まっているのを見て＞

あっ，車だ。

(15)の場合「車が来た」と言い換えることができ，その意味で場面依存的省略の類に入る。一方，(16)は次のように，「これは」「私の父親の」という要素が省略されている談話・状況的省略のタイプに含まれる。

(16')あっ，［これは］［私の父親の］車だ。

2-4. メトニミー

次の例を見てみよう。

(17)＜鏡を見ながら＞

最近，頭［の毛］が白くなっちゃって…。

(18)<夕方，夕飯を作っている匂いがしてきて>

あ，魚の［焼ける］匂いがする。

(19)A:昨日何を食べた？

B:ブタ［の肉］を食べた。

これらの発話の正しい解釈を行うためには，発話場面や前後の発話内容を合せて考慮する必要がある。どのような場面で発話が行われているか，といった場面とのかかわりが深く，その意味で，談話・状況的省略および場面依存的省略へとつながっている。しかし，ここでは各々，「頭」によって「頭の毛」，「魚の匂い」によって「魚の焼ける匂い」，「ブタ」によって「ブタの肉」を指すことができ，このような指示関係は，メトニミー表現であり，「近接性」「隣接性」の認知のプロセスが関わっている。こうした表現は，［ ］部分が省略されていると考えるのではなく，メトニミーという意味の拡張によって「e1」という表現で「e2」を直接に指示していると考える方が適切であろう。

3. 本稿の立場

3-1. 分析対象

文脈には，「言語的文脈」と「非言語的文脈」の二つがあると述べたが，話者と聞き手の存在する発話場面では，どのような発話も何らかの文脈の中で言語化され，文脈をもたない発話というのはあり得ない。我々は，文脈を考慮し，活用しながら発話の産出および解釈を行っていく。省略はこうした文脈との関係から生じる現象である。そして文脈を備え，意味的なまとまりをもつ構造体が，「談話」である。本稿では，この談話における省略を考察する。談話といっても立場によりその概念規定は様々であるが，本稿では，談話という概念を大まかに次のように規定しておく[4]。

談話:意味的な整合性をもつ発話の連なり

「**整合性**」は，‘coherence’の訳語であるが，ここでは整合性を「談話全体の意味的つながりのよさ，自然さ」と定義しておく。

---

[4] 橋内武(1999:5-9)は，「談話」として意味されるものは，立場の違いから次のように四つあると述べている。

A. 文より大きい単位　B. 言語使用　C. 発話　D. テクスト

Aは形式主義であり，ことばのしくみに重きを置く。Bは機能主義であり，ことばのはたらき，言語使用のあり様に注目する。CはAとBの折衷案であり，談話が文よりも大きい言語単位であることを認めるものの，それはコンテクスト(文脈)にしばられた文だと考える立場である。Dはヨーロッパ言語学の流れにあり，テクストにはテクスト性(textuality)が備わっていなければならないとしている。テクスト性は結束性(cohesion)と卓立性(prominence)，全体的構造(macrostructure)によって支えられている。この立場では掲示や看板もテクストを形作っていると考える。

省略は，談話の構造[5]および談話を構成する要素間の意味的つながり，話者と聞き手のもつ情報，場面，といった要因が相互に作用し，連関しあって起こる現象であると考える。本稿ではこれらの要因を中心に，2-1 節で挙げた「統語的省略」「談話・状況的省略」「場面依存的省略」の三つのタイプのうち主として，「談話・状況的省略」のタイプを対象に考察を進めていく。そして，その分析の方策として，「情報ベース」および「リンク」という二つの概念を提示する[6]。

3-2. 省略と結束性

Halliday and Hasan (1976, 1985) は談話の「**結束性** (cohesion)」について考察している。結束性とは，テクストのある部分を他に結び付ける言語的つながりである。Halliday and Hasan は，結束性を生み出すための手段として，指示詞，主題，同一語彙の連鎖などを挙げている。省略も談話の結束性を生み出すための一つの手段として考えられている。亀山恵 (1999) も，結束性を示す言語表現の一つにゼロ代名詞を含めている。また，日本語の主題省略について分析を行っている畠弘巳 (1985)，砂川有里子 (1990) も，主題の省略によって文章がまとめ上げられる，と主張しており，省略を結束性を生み出す手段として考えている。テクスト分析を行う研究のほとんどで，このような立場が取られている。

しかしながら本稿では，Halliday and Hasan 以来のこれまでの流れに逆らい，省略を結束性を生み出すための一つの手段として考えない。むしろ，談話の中に何らかの結束性があるからこそ，省略が可能になるのだと考える。省略に対するこうした立場は，「リンク」という概念の存在によって省略が可能になる，という本稿の考察から得られるものである。

4. 分析資料

本稿で対象とするのは，対話型の談話における省略現象である。日本語において，対話型の談話と非対話型の談話では構造上の違いが存在する。例えば対話型談話では，発話の現在において聞き手のもつ知識[7]が話し手の文構造に大きな影響を与える。一方，非対話型の談話は，聞き手の知識を考慮に入れておらず，その点で対話型の談話とかなり異なってくる。よって両者は，省略の振る舞いに関しても大きな違いがあると考えられる。そのため，対話型の談話分析と非対話型の談話分析では，別個の原理を考える必要が想定される。

---

[5] 談話の構造については第 8 章で詳しく述べる。

[6] 情報ベースについては第 3 章で，リンクについては第 4 章で詳しく論じる。

[7] 厳密には，発話の現在において，話者が想定する聞き手の知識である。

田窪行則(1988:1)は，日本語において対話型の談話と非対話型の談話では構造上の違いがあり，日本語の文章の談話構造の解明には，対話型の談話構造を基本に取り，そのどの部分が抑制されているかという観点を取るのが有効である，と述べている。この主張が正しければ，対話型談話における省略の分析を行うことによって，非対話型談話における省略の分析に有効な示唆を与えることができると思われる。本稿では田窪の主張を参考にした上で，対話型の談話を分析対象とし，この分析が非対話型の談話における省略分析に貢献できると考える。

対話型の談話を分析する本論文で用いる資料は主として，映画のシナリオ，漫画，小説の会話文である[8]。本稿があえて映画のスクリプトや漫画の中での会話を用いるのは，次の理由による。

先ず，生の会話文は言いよどみや反復，後置，途切れなど文として不完全なものが含まれる。また，その他の談話参与者によって話者の発話が中断されたり，発話が重なったりする場合がある。生の会話文は，分析者がその場にいない場合やその談話参与者と何ら共有知識をもつていない場合に，発話内容を理解しがたいことがある。従って，議論を焦点化するために，話し言葉でありながら，完全な文の連続とまとまりが期待でき，さまざまな内容の談話を複数集めることのできる映画のスクリプト，漫画，小説の会話文を用いることにする。また，映画のスクリプト，漫画，小説の会話文は，話し言葉でありながら，完全な文の連続とまとまりが期待できるという点で，書き言葉と生の会話との中間的性質を持ち，このジャンルの談話の分析は，非対話型の談話分析と会話分析の両方向へ貢献できると思われる。

[8] ただし，第7章の応答発話におけるくり返しの分析では，作例を用いている。それは，映画のシナリオ，漫画，小説の会話文の中では，分析に十分なバラエティのある応答発話の例を見つけ難いという単純な理由による。

第2章 省略研究の変遷

1. 本章の目的

本論に入る前に，これまで日本語における省略に関して，どのような先行研究が行われているのか，代表的なものを概観する。またそれとともに，本研究が省略研究において，どのような位置にあるかを明らかにしたいと思う。

2. 現象指摘期

省略現象の指摘は，明治時代には高津鍬三郎(1891:210-211)が，「国文には我もしくは人といふやうなる，極めて普通なる主詞は，通常之を省くなり。たとへば(我)花を見る。(人人)勉強せよ怠る勿れといふ場合に我，人々などを略するが如し」と述べており，また，岡田正美(1901)は，「(我)明日は上野に行くべし。」という例を挙げて，「或る種の主部を省略することは実に我日本の言語文章の一特色なり(p.13)」とし，さらに説述部の省略，主部・説述部の省略などにも触れている。また，「種々の必要によりて，原文の意義に變動を生ぜざる限に於て文章の語句を省くことあり之を省略法といふ(p.113)」と述べ，文章の中で起こる省略の例を挙げている[1]。

様々な省略のタイプを挙げた最初は松下大三郎であろう。松下(1928)は「含蓄」という用語を用い，例えば，「さ様なら御機嫌宜しういらつしやいまし」と言わずに単に「さようなら」というような場合，その従属すべき「御機嫌宜しういらつしやいまし」の意義を「さようなら」の内へ含んでいるとし，こうしたものを格の含蓄と呼んでいる(復刊版 p.626)。また，何らかの関係で主語に由らずに主体の観念を含蓄する場合を分主性の合主態と名付け，合主態であれば主語は要らないとして，次のような例を挙げている(復刊版 pp.652-659)。以下二重線が主語を必要としない部分である[2]。

例：(a)飛ぶ鳥／(b)彼は旅行することを好む。／(c)春は来れり。

このように松下が「含蓄」と呼ぶ例は，本稿でいう統語的省略から，現代では省略とは考えられていないものまで多様なものが含まれている。

松下に続き，広範囲な省略現象を捉えているのは山田孝雄である。山田(1936:802-803)では，いくつかの省略の例を示し，その後，山田(1954:436-442)において，「従来の

---

[1] ただし岡田は，本来的に文には主部・説述部を欠くことはできないと考えているようである。

[2] 松下は(a)～(c)の各々のタイプについて，次のように説明している。(a)における＝は連体格であって，主体・を修飾しており，主語を要しない。(b)では，＝が－と主体(彼)を同じくするから自己に主語は要らない。(c)は，－が主体を提示するから＝には主語がない。－は主語ではなく，一種の修飾語である。

文法学にも省略についての記述は少なくないが，それらはただ臚列的である。この本の中でこれを組織的に明らかにした」と述べ，語句の省略として，主格の省略，補格の省略，述格の省略，複文中の省略，合文の主句の省略，「の」の上の省略，「と」の上下に於ける省略，複語尾「て」の上の省略，を挙げている。またこの中で最もよく省略されるのは主格だとしている。

山田(1954:440-442)は，省略が行われるのは，話者の思想を急いで発しようとするため，あるいは文章に活気を添えるためなどであって，不必要であるがために省略するというのではないとし，語句の省略には一定の原理があると述べている。原理とは，一つは文法上の重要部分が省略されること，二つはその省略の痕跡が明らかに認められるものであること，である。そして省略の第一要点は原理の一つ目，文法上の重要部分が省略されることであり，主格の省略，「を」「に」に伴われる補格，述格の省略がそれに当たる。二つ目の，省略の痕跡が認められるというのは，主格，補格，述格は文法の理論上必然的に存在すべきものであり，これが言語化されていないことが省略が行われている痕跡の証拠となる，と述べている。

このような山田の省略の捉え方は，日本語の主述構造，そして「理論上必然的に存在すべきもの」を氏がどう捉えているかを反映している。

一方，これまでの研究の流れと異った考えを示すのは三尾砂(1948)である。三尾は，心理学における場の理論に基づいて，文を1)現象文，2)判断文，3)未展開文，4)分節文の四分類する。そして，「お前はこの本が読めるか」に対する「読めます」などは分節文とし，これらは従来不完全文あるいは省略文などと呼ばれてきたが，実際の話の場においては不完全でも省略でもなく，それで完全な文であると主張している。

ただし，この三尾の考えを引き継ぐ主張は，現在は行われていない。

文の連続においてあらわれる，「X ハ」のピリオド(マル，句点)越えという現象を指摘したのは，三上章(1960:118)である。三上はピリオド越えとして，次の例を挙げている。

例:吾輩は猫である。名前はまだ無い。
どこで生まれたかと頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめしたところでニャーニャー泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はここで始めて人間といふものを見た。

三上の省略の捉え方は，「題目『X ハ』は非常にたいせつな成分ではありますが，相手にわかっていると思えば，一回一回繰り返さなくてもいいものですし，場面の状況で了解が成立していれば，初めから一回も言わなくてもすむことがあります(1960:123)」，「問題の事項をXとして，そのXが何であるかきまりきっているとき，または何であってもよいときに，それを省略するのは合理的である，ときめる(1963:29)」，「省略の法則として，わかっていることは

何でも省いてよい，というのが総則である(1970:155)」と，一貫してわかっているものは省略できるというスタンスを取っている。その点で山田の原理に後退している感があるが，三上(1970:155-162)において，談話の観点からいくつかの「省略の細則」を挙げていることは，その後の省略研究の道標を作った偉業と言えるだろう。

三上は，同書の中で下の例を挙げ，「ソレヲ」はなくてもいいが，「ダレガ」がなければ意味がわからなくなるのは，「上着を(脱ぐ)」と「ハンガーにかける」との類縁性により，動詞は前方に類縁性のある名詞があれば，それと結びつく傾向があるためである，と述べている(p.162)。

例：太郎が上着を脱ぐと，(ダレカガソレヲ)ハンガーにかけた。

三上の言う類縁性とは，本稿で提示する「リンク」という概念につながるものであるが(詳しくは第 4 章で述べる)，上記の指摘は，語彙の意味的関係と省略との関わりに着目した最初のものと言えるだろう。

三上の研究で，もう一つ特筆すべき点は，話し言葉における助詞のつかない名詞句について言及していることである(1963:p.110)。三上は，助詞なし名詞句が起こる理由を，独占的な「私が」あるいは「私ニツイテ言エバ」のどちらとも相容れないためであるとし，文章(概して長い)でこのような形がほとんど現れないのは，文脈が形成されているからだとしている。「文脈が形成されている」ということが具体的に何を意図しているか明白ではないが，この指摘は，現代語の話し言葉における助詞の省略という問題を提起したという点で，注目に値する。

近年になると永野賢(1986)が，時枝誠記による文章研究の流れを汲み，文章を文法論の対象として考察している。そして，主語の連鎖を追及する前提作業として，文を主語の観点から，現象文，判断文，述語文，準判断文の四つに分類している(pp.141-146)。このうち「述語文」は，日本語の文表現としては，主語を言わないのが普通の形式であるもので，「地震だ！」「悔しい！」のように主格や主題を念頭に置かずに述語だけを表出したものである。「準判断文」というのは，形としては主語がなくても，明らかに「は」の主語の省略された文と認められるもので，原則として前からの文脈が続く場合であって，単独ならば判断文で表現されるべきものが，先行する文の主語を引き継ぐという関連から文脈上「は」の主語が省略されたものである。述語文については，作者が，平板な描写に堕っしてしまわぬために意図的に主語を隠したもの，また，補われる語句が心理の深層から掘り出したものとしている(pp.186-189)。例えば，夏目漱石の『草枕』の冒頭文，「山路を登りながら，かう考へた。」を挙げ，これを「私は」とか「自分は」とかの省略と考えるべきではなく，述語文として取り扱う方がよい，と述べている(pp.188-189)。このような主張は，永野が文章を表現論の観点から見

ていることに発していると思われる。

さてこの時期になると，省略現象はかつての「わかるものは省略できる」といった捉え方を脱し，様々な省略現象が多岐に，かつ個別的に扱われるようになった。以下，対象とする省略のタイプおよび用いられている分析方法ごとに概説する。

3. 省略分析の発展期

3-1. 統語理論から機能的分析，そして認知言語学へ

統語的省略（削除）の問題は，Nobuko Hasegawa（1984/85）を始めとし，統語理論の枠組みにおいて多くの研究がなされている。この枠組みでは，省略はゼロ代名詞，空範疇（zero category）として扱われ，先行詞との統語的関係から論じられる。しかし扱われる対象は，あくまで一文レベルであり，文法理論を求めることに主眼が置かれるため，話者や聞き手といった要因は排除される。

このような統語規則だけでは十分に説明できない現象を，機能的な方法で説明しようとする流れがある。久野暲（1978）は，視点，共感度および情報の新旧といった観点から，省略およびくり返しの可否を支配する原理を探っている。久野の原理は，「同定可能性」「復元可能性」に基づいており，こうした立場は，牧野成一（1980），神尾昭雄・高見健一（1998），高見健一（1995, 1997）らによって支持され，引き継がれている。しかしその一方で，久野の挙げている個々の原則については，いくつかの反論が出されている（矢野安剛：1981，大島真：1983，Hubbard Maki Hirano：1988，近藤泰弘：1994，甲斐ますみ：1995，1998b，佐々木陽子：1996 など）。

統語重視の分析に対する批判から産まれたもう一つに，心と情報処理のプロセスを解明しようとする立場，すなわち認知言語学がある。山梨正明（1992, 1995）は認知言語学の立場から，日本語の間接的な照応関係に言及している。間接的な照応関係には，含意や推論などがかかわっているが，この問題は，認知科学的アプローチにおける今後の課題と言われる。

3-2. 談話分析・テクスト分析

「談話分析」「テクスト分析」という用語は，多々重複して用いられることがある。しかし厳密に言えば，談話分析は言語使用（language use）にかかわり，テクスト分析は言語体系（language system）にかかわる領域を研究するものである。談話分析は，構造的アプローチ（structural approach）と呼ばれ，話し手・聞き手の意図・行動なども含めた形で談話を記述しようとするが，テクスト分析は，テクストを文の延長上に位置付け，規則によって理論化しようとするものである。この他にも，会話分析（conversation analysis）と呼ばれる領域がある

が，このアプローチは，言語表現の使用の場という問題も取り入れて考えようとする立場にある。

日本語を対象とした談話研究やテクスト研究が盛んになったのは，1980年代に入ってからであるが，こうしたアプローチへの関心の高まりにともなって，目を向けられた現象の一つに，主題の省略がある。その中で用いられた分析手法の一つは，「結束性」という概念である。もともとこの概念は，Halliday and Hasan(1976, 1985)がテクスト分析のために用いたものであるが，畠弘巳(1980, 1985)，寺倉弘子(1986)，砂川有里子(1990)は，結束性の概念をもとに，書き言葉における主題省略の分析を行っている。三者の主張を大まかにまとめると，主題の省略によって談話がまとめ上げられ，前後の文脈に意味的な境界が存在する場合には，主題が言語化される，というものである。また清水佳子(1995)は，叙述の類型から主題の省略を分析している。これらの研究は，大枠的にはテクスト分析の領域に含まれる。

一方，談話分析の領域に含まれる研究として，John Hinds の一連の研究がある。J. Hinds and W. Hinds(1979)は，語りの中で省略がブロックされる二つの要因を示している。一つは，構造的要因であり，省略はエピソード境界を越えることが出来ない，というものである。エピソード境界は，登場人物の変化，時間的セッティングの変化，空間的セッティングの変化によって作られる。二つ目の要因は，語り手の主観的決定にかかわり，登場人物に対して付加的情報を付け加える場合，また，物語の中のピークや重要な部分を示す場合には省略がブロックされる，というものである。また John Hinds(1980a,b)は，トピック階層の観点から名詞の省略を考察するとともに，省略現象の分析には「スクリプト」という概念が必要であることを示している。同じく吉川千鶴子(1988)も，省略現象をスクリプトから説明しようとしている。

スクリプトというのは，ある場面の展開について我々がもつステレオ・タイプ的知識を指す。よく用いられている例は，レストランのスクリプトであるが，そこには「注文→食事→支払」というストーリー性のある場面展開があり，また，「ウエイトレス」などの「役割」が存在する。スクリプトは「スキーマ」という概念と重なって用いられることもあるが，スキーマは，世界についての共有知識を指し，バスにはバスの運転手がいる，といった知識は「バスのスキーマ」から導かれる[3]。スキーマ理論やスクリプト理論では，なぜ唯一の存在でもなく，前方照応でもない初出の対象が‘the’という定冠詞をとるのかといった現象を説明し，認知言語学とも深い関わりがある。

この他，省略を正面から捉えようとした研究ではないが，ある現象を考察する中で，省略

[3] スクリプト，スキーマ，フレームといった概念規定については，Deborah Tannen(1979)に詳しい。

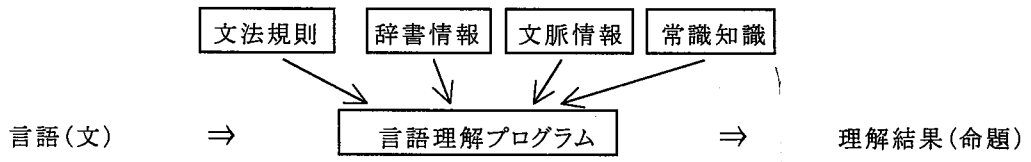
の問題を扱っているものがある。

Patricia M. Clancy(1980)は，語りの中での指示詞選択に関する実験結果を示しており，その中で，省略形式の分布について述べている。John Hinds(1983)は，会話におけるトピックの連続を考察する中で，省略の形式に言及しており，また，Andrej Bekeš(1995)は，新聞記事を対象として，「は」を伴う名詞句が主題となるための条件を探る中で省略の問題を扱っている。これら三者が用いているアプローチは，Talmy Givón(1983)によって提唱されたトピック性を捉えるための数値的手法であり，このアプローチの根幹となるのは，節と文のカウント，および二つの指示の間に介入するその他の指示対象の数である。しかしながら，日本語では節をどう判定するかという根本的な問題が存在するため，このアプローチ自体がはたして日本語に適切であるのかという大きな疑問がある。

3-3. その他のアプローチ

他の学問領域の成果を積極的に言語学の中に取り込み，これまでの伝統的な国語学や言語学の中では扱われていない現象を考察しようとする立場がある。語用論，関連性理論，コミュニケーション論などがそうである。また，社会言語学的アプローチを取る研究もあり，例えば Janet S. Shibamoto(1990)は，性差に着目し，女性と男性で省略の使用度に差があるかを調査している。

この他，人工知能の研究からのアプローチがある。Grosz, Joshi and Weinstein(1995)は，計算機による言語処理を目指して「Centering」というモデルを提示した。Centering 理論は，発話の中にはその他の要素よりもより中心的な要素が存在するという仮説の下に，この属性と話者の指示表現の使用との相関関係を論じるものである。この Centering モデルを，Megumi Kameyama(1985)，Walker, Iida and Cote(1994)は，日本語におけるゼロ代名詞の解釈に適用させている[4]。またこの他，中川裕志(1997)は，複文の省略現象を計算機で処理する可能性について考察している。中川は計算機で言語を理解するシステムを次のように図式化している。



[4] 日本語におけるゼロの解釈は英語における明らかな代名詞の解釈に類似すると言われている(S.-Y. Kuroda:1965, J. Hinds and W. Hinds:1979, M. Kameyama:1985, Walker, Iida and Cote :1994)。

中川によると，上記のうち文法規則，辞書情報は固定化した情報資源であるが，計算機処理において文脈情報や常識知識は一筋縄ではいかないと言う。文脈知識を計算機で利用可能とする方法としては，文の連なりからなる談話において，ある発話以前の文からわかる顕現性の高い要素を集めて，その発話を理解するのに役立つ文脈情報を構築する，あるいは文脈を予め固定してしまう方法がある。ところが，常識知識については日常生活において有効な常識はどのようなものなのか全く暗中模索の状態にあると述べている。

3-4. 助詞の省略

本稿では，助詞の省略について特に考察しないが，省略という現象の中には助詞の省略も含まれる。現代語の話し言葉における助詞の省略は，三上章(1963)によってその現象が指摘され，その後は，助詞をつけることができない文についての研究も含める[5]と，久野暲(1973)，Michio Tsutusi(1983)，筒井通雄(1984)，尾上圭介(1987)，Kiyoko Masunaga(1988)，丹羽哲也(1989)，甲斐ますみ(1991, 1992)，長谷川ユリ(1993)，渡辺謙二(1995)，大谷博美(1995a, b)，丸山直子(1995)，野田尚史(1996)，と多くの研究がなされている。

助詞省略の研究は，伝統的国語学の流れを汲むものから，計量的分析まで，様々なアプローチが取られている。

4. 本研究の位置

以上，伝統的国語学における研究から現代に至るまで，様々な省略の先行研究を概観した。各々の領域で扱われているデータについて言うと，統語的分析，機能的分析，認知的分析では，単文レベルの作例が主である。テクスト分析では主に書き言葉を対象とする。会話分析では全て，そして談話分析では主として，録音機器によって採集した生の会話データを扱う。その他のアプローチについては，研究領域によって扱うデータが異なる。

こうして見ると，話者と聞き手によって作り上げられる談話を分析の対象とし，その中での省略の原理を理論的に求めようとした研究はまだあまり行われていないことがわかる。本稿では基本的に，話者と聞き手によって作り上げられる発話のつながりを分析対象とする。しかしながら，本稿が目指すのは会話分析ではない。本稿が主に引き合いに出し，議論の対象とするのは，機能的分析およびテキスト分析[6]・談話分析の領域で行われている研究であ

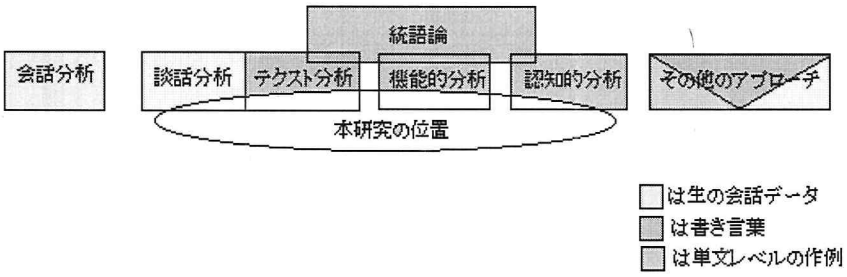
---

[5] 助詞をつけることのできない文は，復元不可能という意味で，正確には省略現象と呼べないが，ここでは省略の研究を広く取り，このタイプの文の研究も省略の研究史の中に含める。

[6] 国語学の文章論は，テクスト分析の中に含めることができる。

る。その上で人間の認知作用に重点をおき，省略を，話し手による発話の産出および聞き手による発話の理解という観点から分析する。そして本稿で提示する理論は，含意や推論といった要素を積極的に取り込もうとするものである。つまり，分析手法としては，認知言語学の成果を参考にしながら，機能的分析およびテキスト分析（談話分析）における研究の問題点を指摘する。そして，これらの理論では説明できない現象を説明可能とし，これらの分析が取り残している現象までもカバーできる新しい理論の構築を目指す。

本研究の位置



第 3 章　情報ベース

1.　本章の目的

省略現象を捉えるための一つの方策として本稿では，「情報ベース」という概念を提示する。

この章では，「情報ベース」という概念を設定することにより，省略現象がより明確に捉えられることを示していく[1]。

2.　発話のタイプ

発話には，場面依存型と文脈依存型の二つのタイプがある。大まかに言えば，場面依存型は，発話の場面に存在する物，人物，状況等の話者，聞き手の両者に視聴覚可能な対象に対して何らかの発話を行うものであり，文脈依存型は，話者や聞き手のもつ情報や知識，記憶などを引き出し，それに対して何らかの発話を行うものである[2]。

発話のタイプに伴い，省略も大きく二つのタイプに分けられる。場面依存型発話で起こる省略は，省略された要素が何を指示しているか，発話場面から求められる。

次の例を見てみよう。[　]の中の要素は言語化しなくとも，不自然ではない。

(1) <二人の人物が箱を運んでいる>

[この箱] 重いね。

(2) <あっという間にご飯を食べてしまった相手に>

[ご飯] もう食べてしまったの？

一方，省略された指示対象が前の文脈の中に現われていることによって，省略可能となるタイプがある。これは文脈依存型発話において起こる省略である。

(3) 昨日 太郎は 学校へ行きました。そして，[太郎は] 花子と会いました。

しかしながら，発話場面に存在する対象についての言及であったり，指示対象が前の文の中で言語化されているにもかかわらず省略できない場合がある。

(4) <刑事が一枚の写真を見せる。写真には風景と人物があまり大きくなく写っている。>

この人 / ???[ø] 知っていますか？

(5) 昔太郎という人がいました。太郎は 体の大きな子供でした。ある日 太郎は /*[ø は] 山へ栗拾いに行きました。

---

[1] 本章は，『世界の日本語教育』第 8 号(1998)に掲載された論文の一部に加筆したものである。

[2] 実際の談話は，これら二つのタイプが組み合わされて作り上げられることが多々ある。

(1)~(3)と(4)~(5)の違いは何だろうか。この問題を本稿では,「情報ベース」および「リンク」という概念を用いて説明する[3]。本章ではこれら二つの概念のうち,先ず「情報ベース」について説明する。

3. 情報ベース

3-1. 情報ベースとは

話者と聞き手が存在する発話の場において,話者は聞き手のもつ情報量を考慮しながら発話を行っていく。話者による聞き手のもつ情報量への考慮は,語順やモダリティ形式,文の並べ方など,文や談話の構築に様々な影響を与える。省略も,聞き手のもつ情報量への考慮によって,その生起がコントロールされる現象の一つである。従って省略現象は,単にその省略された要素が現れる文の統語構造からだけでは十分な説明ができず,省略を広範囲に捉えるためには,話者や聞き手のもつ情報という要因を理論的に組み込む必要がある。

そこで,こうした話者と聞き手のもつ情報と省略の関係を扱うための装置として,「**情報ベース**」という概念を提示する。話者と聞き手はともに,発話の進行にしたがってオンラインで「情報ベース」という概念領域を構築する。そして,この情報ベースを活用することによって,話者は文中の要素を省略し,聞き手は文中の要素が省略された発話の解釈を行うことが可能になると仮定する[4]。

本稿で示す情報ベースの表示は,発話の現在において,話者が聞き手と共有していると想定する概念領域を表わしている。話者は,発話の現在,情報ベースがこれこれの状態なので,聞き手は問題の要素にアクセス[5]可能である,あるいはアクセス不可能であると判断して,発話を産出する。この仮定を情報ベースで表わす。よって,本稿の情報ベースは基本的に,発話産出モデルを示している。

---

[3] (4)は4-4節で取り挙げる。(5)のタイプは第9章で考察する。

[4] 情報ベースは,発話のやり取りにおいて,オンラインで話者と聞き手の意識の中で作り上げられる概念領域であるという点で,その原理をGilles Fauconnierのメンタルスペース理論に負っている。ただし,メンタルスペースはもともと,形式論理学で扱うことのできない指示の例を扱うための方策として提示された概念であり,メンタルスペース理論の根幹をなすのは,「トリガー」と「ターゲット」,そしてこの二つを同定化する語用論的関数,「コネクター」である。コネクターによって,トリガーとターゲットを結び付け,これらの対応関係によって,指示対象の意味解釈を行う(詳しくはFauconnier:1994を参照)。一方,省略も指示の問題であるものの,情報ベースは,スペース間の同定を問題とするものではない。また,スペースへの要素の導入のされ方が,情報ベースとメンタルスペースとでは異なっている。メンタルスペースは言語表現によって構築されるが,情報ベースは,言語表現だけに限らず,記憶や共有知識に基づく要素の導入が行われる。

[5] 「アクセス」という用語については,4-1節を参照されたし。

3-2. 情報ベースの要素

本稿で提示する情報ベースという概念は，発話のやり取りの中でオンラインで生成される概念領域であるのだが，その情報ベースとかかわる個々の情報については，Wallace Chafe が提示する「活性化(activated)」という概念が大きくかかわっている。Chafe(1980:10-12)は，「意識(consciousness)」という用語を用い，旧情報や既知と呼ばれるものは，発話の時点において，話者が聞き手の意識の中にあると想定している情報であり，そのような属性をもつ語は弱いストレスと低いピッチで発音され，しばしば代名詞もしくは省略形となると述べている[6]。本稿における情報ベースは Chafe の言うような，発話の時点において聞き手の意識の中にある，と話者が想定する情報要素の集合体である。つまり情報ベースは，発話の現在において話者によって活性化された情報の集合体であり，談話の進行につれて設定される心理的な概念スペースである。

話者の意識の中で活性化され，情報ベースにインプットされた要素を本稿では「**情報要素**」と呼ぶ。情報ベースにインプットされる情報要素は典型的に，発話の現在において発話の場に存在する対象や個体，談話の中の登場物(対象)や登場人物(個体)，そしてそれらの属性および関係等が挙げられる。また発話内容によっては，場所や時といった情報要素がインプットされる場合もある。情報ベースにインプットされた情報要素は，談話の流れの中で随時キャンセルされ，新しい情報要素にとって替わられ得る。情報ベースにインプットされる情報要素は，どんな要素でもいいわけではなく，談話の中での情報処理において，最も有効で最少のもののみが，情報ベースにインプットされる。情報ベースの中にインプットされる情報要素は，言語的なもの，知覚によるもの等あるが，発話の現在において作り上げられる談話に関連する情報のうち，話者によって活性化された情報である。

3-3. 情報ベースと情報領域

情報ベース内の情報要素は，言語的に導入されることもあれば，記憶や共有知識から導入されることもある。記憶や共有知識などは通常，それぞれの情報の保管庫に仕分けされて保管されている。話者は談話の展開の中で，現在問題としている発話内容にかかわる情報を必要に応じて参照し，あるいは引き出して，情報ベースに「インプット」する。また聞き手は，情報の保管庫の中で，現在問題としている発話内容にかかわる情報を必要に応じて参照し，発話の解釈を行う。この情報の保管庫を本稿では，「**情報領域**」と呼んでおく[7]。記憶や共有知識以外に，それ

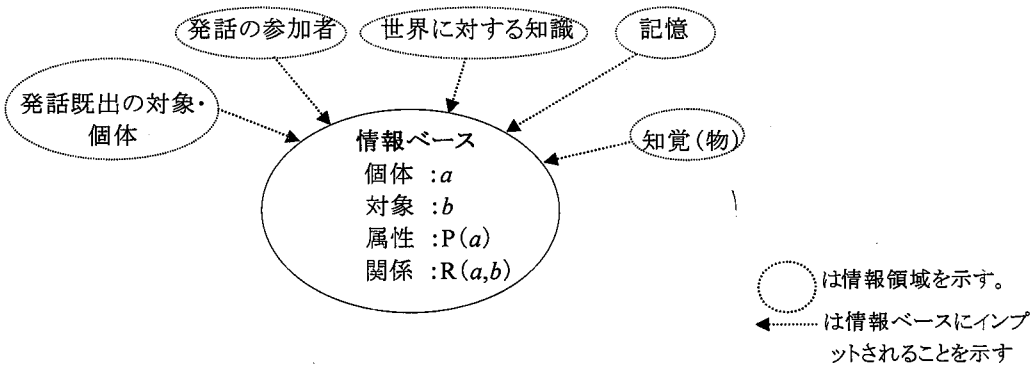
---

[6] Chafe(1980:12)は意識の属性として四つ挙げている。先ず，一度に活性化できる量は限られており，容量に制限がある。第二に，存続時間に制限がある。第三に，連続的なものではなく，急に動く(moves in jerk)，第四に，中心的焦点と周辺的なものがある。これらの属性のうち，第一，二，四の属性は，本稿で想定する情報ベースにも当てはまる。第三の属性については，現在のところ何とも言えない。

[7] 「情報領域」という用語は，杉本孝司先生のコメントから頂いた。

までの談話の中で言語化された情報も，しばらくの間，情報領域に保管される。また，発話の現在では問題となっていない，すなわち情報ベースにインプットされていないが，発話の場面に存在する知覚物や話者や聞き手などの情報も，情報領域の中に保管されている（下図 1 参照）[8]。

図 1



Chafe（1987:22-25）は，話者は発話を行う際，一時的に活性化した情報を次々に言語化するとして，このような情報の断片を‘intonation unit’と呼んでいる。英語における intonation unit は，典型的にその始まりに 2 秒程のポーズがあり，一つの intonation unit に 5～6 の単語を含むと言われる。Chafe は，intonation unit の中で表現される「概念（concept）」が次の三つの活性化状態にあると述べている。

活性化概念（active concept）：人の意識（consciousness）の焦点にある概念。

半活性化概念（semi-active concept）：周辺的意識の概念。

非活性化概念（inactive concept）：現在は長期記憶の中にあり，焦点的にも周辺的にも活性化されていない概念。

情報ベースの中にインプットされている情報要素，および，情報領域内にある情報は，Chafe の示す三つの活性化状態にあると考えられる。情報ベースにインプットされている情報要素は，発話の現在において話者と聞き手に活性化されている。個々の情報領域の中に貯蔵されている状態の情報は，発話の現在において非活性化状態にある。しかし，情報領域に保管されている情報のうち，情報ベースと直接的あるいは間接的に結び付けられている情報，周辺的に知覚されている情報は，半活性化状態にある。

3-4. 前景化と心理的トピック

話者は情報ベースにインプットされている情報の中から，ある情報を「前景化（foreground-

[8] 情報要素のもつ属性や情報要素間の関係は，図 1 で示すように，同一符号「*a*, *b*」を付与するという論理学的表記法であらわす。

ing)」し，一連の発話を行う。前景化という用語は，「背景化(backgrounding)」と対照的に用いられる[9]。Chafe(1972b:50-51)は，「談話のどの時点にも，談話参加者の心の前景にある，ある種の概念，すなわち，その時点で焦点にある概念，が存在する」と述べ，そういった意味単位(semantic unit)を'foregrouded'とラベル付けしている。また，聞き手の意識の中にあると話者が想定できるものが'what is foregrouded'であるとし，'foregrouded item'は，低いピッチと振幅，弱い代名詞として言語化される，と言う。

本稿では，活性化された情報のうち，更に前景化された情報要素を「**心理的トピック**」と呼ぶことにする[10,11]。情報ベースにインプットされた情報要素は，潜在的に心理的トピックとなり得る地位を与えられる。談話の中で，ある情報要素が前景化されると，それに情報を付加する発話が引き続き行われる。次の例文を見てみよう。

(6)私はきのう太郎からプレゼントをもらいました。プレゼントはかわいい指輪でした。

この発話において，話者が心理的トピックして前景化する情報要素は「プレゼント」である。心理的トピックは，発話において話者が最も述べたいこと，最も描きたいことの中心的対象であり，話者はそれに対して何らかの叙述を引き続き行う。つまり，叙述が何についてなされるか，のその「何」に当たるものである。心理的トピックは，文レベルで決定されるのではなく，概念レベルで決定され，具体的には文中で名詞として言語化される。心理的トピックは，実際，叙述を付け加える中心的対象であるため，主題になることも多々あるが，主題とは別物である。心理的トピックは「を」格や「が」格を伴って現れることもある。例えば，次の発話において，前景化される心理的トピックは「ドラマ」である。

(7)昨日，9時からのドラマを見ましたか。私はあのドラマを毎回楽しみにしていましてね。あのドラマは本当に面白いですよね。

以上が情報ベースの説明である。では次節では，場面依存型の発話を取り上げ，このタイプの発話において情報ベースがどのように働き，省略とかかわっているのかを見ていくことにする。

4. 場面依存型発話

4-1. 場面依存型発話と情報ベース

Robert Bernardo(1980)は活性化の状態を，'situational activation(状況活性化)'と'textual activation(文脈活性化)'の二つに分けている。そして，状況活性化される典型的なものとして，談話参与者である話者や聞き手を挙げている。一方，文脈的に活性化される要素とは，前の談話の

---

[9] 前景化という用語は，その由来をロシアフォルマリズムに遡り，本来は詩学で用いられた概念である。

[10] ただし，挨拶表現であるとか，発話内容によっては，心理的トピックを持たないものもある。

[11] 本稿での「心理的トピック」は，甲斐(1995)で「心理的主題」と呼んでいたものと同じ概念を指す。

中で既に言及されている要素，あるいは，既に言及されている要素と意味的関係をもつことにより活性化される要素であると言う。

しかし例えば，話者が自分自身を指す「私」を中心として一連の発話を行ったとする。その際二番目以降の発話に起こる「私」は現場指示なのだろうか，それとも文脈指示なのだろうか。しかもその発話の内容が，過去に起こった出来事，もしくは未来に起こる出来事であったらどうであろう。

話者と聞き手という存在は，発話の場に存在するという意味で現場指示であるのだが，単なる現場指示として発話の中で言語化される以外に，発話の連続の中で，文脈指示として起こる場合もある[12]。そこで，本稿でこれより先用いる「場面依存型発話」という用語は，現在行われている発話の内容が，発話の現在に知覚されている事象に関するものに限定する。

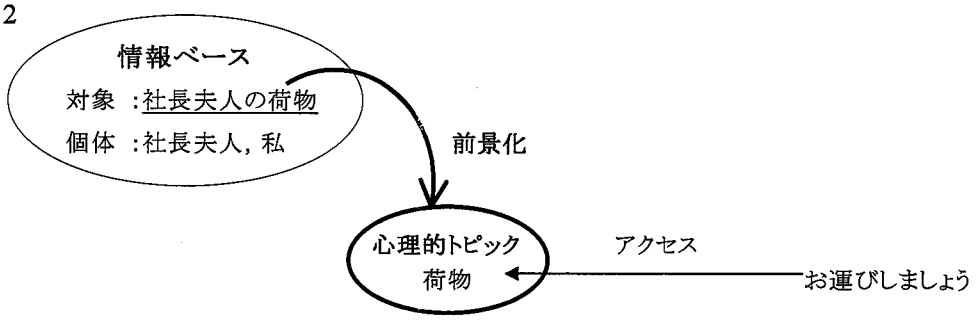
次の例を見てみよう。

(8) <佐々木はデパートから出てきた社長夫人と出くわす。社長夫人は荷物をもっている>
佐々木：お，奥様，佐々木でございます!!　[ø が][ø を] お運びしましょう!!

（やまさき十三「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』No. 679）

ここで佐々木の二番目の発話は，誰が何を運ぶのか言語化されていないが，解釈は一つしかありえず，それは，「佐々木が社長夫人の荷物を運ぶ」である。この発話では次のような情報ベースが活用されていると考えられる。

図 2



前景化された心理的トピックは，「荷物」である。心理的トピックは，話者と聞き手の意識の中で最大限に活性化される。そして話者は，聞き手が，「お運びする」という言語表現と結びつき得る対象が何であるか，情報ベースの中で唯一的に検索し，結び付けることができると想定する。この結び付きを本稿では，インフォーマルに「**アクセス**」と呼んでおく。この話者の想定によって，「お運びする」の対象は省略される。

場面依存型発話において，情報ベースにインプットされる対象は，数限りなくあると考えられ

[12] 話者や聞き手を指示する 1・2 人称指示詞は省略の可否について複雑な様相を呈する。この問題は第 5, 6 章で詳しく論じる。

るかもしれない。しかし我々は常に，自分を中心として世界を認識し，自分と関係の深いもの，また日常と異なるものを優先的に認識しやすい。例えば，その存在さえも気づかない空気であるとか，いつもと何ら変わりのない建物といった情報価値の少ないものは，我々の認識世界で情報として，また何か情報を付け加える価値のある対象物として認識されにくい。こうした活性化されない情報は情報ベースにはインプットされない。

(8)の例において，情報ベースには「社長夫人の荷物」「社長夫人」「私」という三つの情報要素が存在するが，「お運びしましょう」という発話は「社長夫人の荷物」に，そしてそれのみにアクセス可能で，佐々木の二番目の発話は「社長夫人の荷物を運ぶ」という解釈しかあり得ない。それは，「荷物」と「運ぶ」の語彙的つながり，「お～する」という敬語表現，そして「～しましょう」という申し出表現の使用による(このような語彙的関係については第4章で詳しく述べる)。もし(8)の発話が次のように続いていれば，異なる解釈が行われるはずである。

(9)佐々木:お，奥様，佐々木でございます!!　[øが][øを]　お送りしましょう!!

(9)における情報ベースの情報要素は，(8)と同じであると考えられるが，「お送りしましょう」という発話は「社長夫人」という情報要素に，そしてそれのみにしかアクセスできず，「社長夫人を送る」という解釈しかあり得ない。「送る」は人と物の双方に対して用いられ得るが，物を送るという場合には，送り手と受け手が距離的に離れていなければならない。一方，人を送るという場合には，送られる人物がどこかへ行こうとしていることが前提にある。(9)では発話場面から，「送る」という行為が「人」に対して行われるという解釈が優先的になされる。この「送る」と「送られる人物」との語彙意味的なつながり，そして「お～する」という敬語表現，「～ましょう」という申し出表現の使用によって，(9)の第二文目で「社長夫人」が省略可能となる。

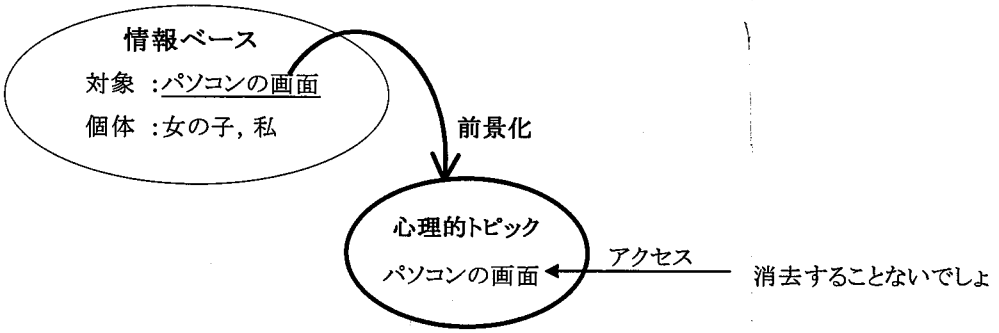
次の発話も場面依存型発話で，省略が行われる例である。

(10)<ロッテは図書館でいつも見掛ける女の子がパソコンで何かしているのを見て，近づき>
ロッテ:あなたも，マルゴット・ランガーについて調べてるの？　あー，何もあわてて[øを]消去することないでしょ!

(浦沢直樹「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』No. 679)

この発話では，次のような情報ベースが活用されていると考えられる。

図3



「消去することないでしょ」という発話が情報ベースの中の「パソコンの画面(より具体的にはパソコン画面上の, マルゴット・ランガーについて書いたもの, もしくは記事)」に, そしてそれのみにアクセス可能で, 「画面を消去する」という解釈しかあり得ないのは, 「画面」と「消去する」の語彙意味的つながり, そして「～でしょ」という聞き手目当ての表現形式の使用による。

では, 情報ベースにインプットされていると話者が仮定する情報であれば, 如何なる要素もアクセス可能で, 従って, 省略可能であろうか。

情報ベースの情報要素にアクセス可能なのは, 場面依存型発話であれば, 発話の場に存在する対象や個体についての描写等の発話が, 述語の語彙的意味の助けや, 明らかに視聴覚可能である等の理由から, 解釈の可能性が一義的でしか有り得ない場合のみである。これを「唯一性」と呼んでおくが, 唯一性は場面依存型発話であれ, 文脈依存型発話であれ, ともに省略を支配する最も重要な, かつ根本をなす原理である。

次のように, たとえ発話の場に存在していても, 聞き手との共有知識として情報ベースにインプットするには情報的価値が低く, そのため聞き手にも共有された情報要素として情報ベースにインプットされていると仮定しにくいもの, もしくはアクセスの可能性が二つ以上あり, 唯一的に決定できないものの場合には, 省略が行えない。

(11) <ニナは探し続けていた男をやっと見つけて, 彼のオフィスに入る。男はニナの意気込んでいる姿を横目にレコードをかけて>

男:この曲 /*[ø], 知ってますか。

(浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』 No. 630)

(12) <ミズコフは空を見上げている。それを見て, 学生たちが>

学生 :どうしたんだ, ミズコフ先生。

ミズコフ:空が /*[ø が], 高いですね。

(はしもとみつお 「水古風～ニッポン人のススメ～」『ビッグコミックオリジナル』 No. 626)

(11)において, 話者がレコードをかけたことを聞き手は知覚しているだろうが, 発話の時点に

おいて聞き手の意識はレコードに向かっていない。(12)においても「空」の存在は聞き手にとって卓越した情報であり，そして活性化されているとは想定し難い。また，「高い」「知っている」という属性や関係をもち得る対象は，発話の場においてその他にも存在し得るため，聞き手が唯一的にアクセス可能だとは想定し難い。そのため，省略は不可能となる。しかし，発話時点において聞き手が対象を十分に活性化していると確証されなくても，上の例におけるレコードの曲や空は聞き手にとって知覚可能であり，従って半活性化概念であるため，次のように，述語部分で言語情報によって唯一性を与えてやれば，聞き手は対象が特定化できると予測され，省略が可能となる。

(13)この曲 / [ø]，プッチーニですよ。

(14)学生 :どうしたんだ，ミズコフ先生。
ミズコフ:空が / [ø が]，透き通るような青さですね。

また，話者も聞き手も対象を意識の中で十分に活性化しているような場面であれば，(11)，(12)と同じ発話であっても次のように省略可能となる。

(15)＜話者は音楽を聴きながらリズムをとっている。聞き手はそんな話者の姿を眺めている。そこで話者が CD プレーヤーを横目で見て，＞
この曲 / [ø]，知ってる？

(16)＜天気のいい日に，話者と聞き手は日向ぼっこをしながら，二人とも空を眺めている。＞
空が / [ø が]，高いね。

ただしこの場合，唯一性が確立され得るほど，目線や態度などが対象に直接的に向かっていなければならない。更に，指差しなどのボディランゲージで唯一性を与えてやれば，聞き手はより対象を特定しやすくなり，省略が可能となる[13]。

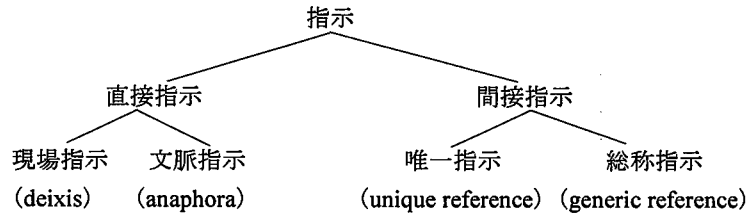
4-2. 指示の異なり

では次に，発話を行っている対象が発話場面に存在するものであり，聞き手もその対象に対して注意を向けていると思われるにもかかわらず，省略が不可能となる場合について見てみる。

吉本啓(1992:107-108)は指示詞を次のように分類している(下図 4 参照)。直接指示とは指示物が外界，出来事記憶，または談話記憶を参照して同定される場合であり，間接指示とは指示物が長期記憶を参照して同定される場合である。これら二つの指示は更に，現場指示，文脈指示，唯一指示，総称指示に分けられる。

[13] ただし，ボディランゲージの問題は本稿では扱わない。

図 4



唯一指示は長期記憶中の世界知識によって指示物が唯一的に定まる場合であり，総称指示はある名詞が示す概念によって把握される外延全体を指示する場合である。こうした分類は省略現象を把握する上でも有効であると考えられる。

例えば発話の場面に存在する話者が，昨日自分自身の身に起こったことについて話をしているとする。このような場合本稿では，情報ベースに設定される過去の場面での「私」という情報要素は，現場指示ではなく，吉本の言う，文脈指示あるいは唯一指示であると考える。こうした指示の違いは省略の可否にも影響を与える。

次の(17)と(18)を比べてみよう。

(17)＜海を見ながら＞

海は /*[ø は] 塩と水でできているんだ。

(18)＜海に着いて海を見て＞

ああ，海が /[ø が] きれいね。

(17)，(18)はともに，話者と聞き手は海を見ている。それにもかかわらず，「海」の言語化・非言語化に差が生じる。続いて次の(19)と(20)を比べてみよう。

(19)＜水族館でクジラを見て＞

クジラは /*[ø は] 哺乳動物だよ。

(20)＜水族館でクジラを見て＞

あ，クジラが /[ø が] 眠ってる。

(17)～(20)はすべて，発話の場に存在する対象について発話を行っているのに，省略の容認度が異なるのはどうしてであろうか。(18)，(20)で話者は，目の前の事態，状況を視覚に入れ，それを直接言語化している。一方(17)，(19)では，話者はそれぞれ眼前の「海」「クジラ」を見て発話を行っているが，この発話内容は眼前の特定の「海」「クジラ」に対して行われたものではない。眼前の「海」「クジラ」をいわば「引き金」として，総称的な「海」「クジラ」について述べているのである。すなわち，(18)，(20)は現場指示であるが，(17)，(19)は総称指示である。このような場合，話者が意識の中で活性化している総称指示の対象を，聞き手も同じように活性化しているとは想定できない。従って，省略は不可能となる。一方，話者も聞き手もある対象を眼前に，その特定の対象

そのものについて言及する場合は，話者はその対象を聞き手も意識の中で活性化していると想定できるため，(18)，(20)のように対象を言語化しなくてもよく，省略が可能となる。

総称的な対象を問題としているのか，非総称的な対象を問題としているのかは，名詞句自体では決められない。述語が一次的現象を述べているのか，一般的・恒久的性質について述べているかによって判断される。ただし，たとえ一般的・恒久的状態を述べていたとしても，それが文脈の中で現われる場合には，主語が文脈指示となり，省略されることもあり得る。

4-3. 活性化の持続

では，聞き手が存在しない場面では，話者の意識はどのように言語形式に反映されるのであろうか。Chafe(1987:24)は，発話の前に話者は発話内の対象を活性化し，それを言語化すると言う。しかし本稿では，発話の前から話者の意識に上っていて，ある一定の期間，活性化されている対象についての発話か，もしくは発話の直前に知覚し，瞬時に活性化された対象についての発話かによって，活性化の質に違いあり，発話の際の言語形式にも差が生じることを主張する。

次の例を見てみよう。

(21)＜お湯が沸くのを今か今かと待っていたところ，目の前でお湯が沸騰して＞

よし，[øが] 沸いた。

(井上優:近刊 からの引用[14])

(22)＜給湯室の前を通ったら，誰が沸かしたかはわからないが，やかんの中のお湯が沸騰していて＞

あれ，<u>お湯が / *[øが]</u> 沸いてる。

(井上優:近刊 からの引用)

(23)＜戸をドンドンと叩く音がして＞

はいはい，聞こえてるよ。<u>戸が / *[øが]</u> 壊れちまうだろ。

(森栗丸 「あじさいの唄 夏の終わりに」『ビッグコミックオリジナル』No.682)

(21)で話者は，お湯が沸くのを待ち構えており，発話時以前からずっとお湯を意識の中で活性化している。そのため「お湯」は省略可能となる。一方(22)では，発話時以前において，話者の意識の中に「お湯」あるいは「やかん」という情報要素は活性化されていない。ここでは，発話直前に知覚された対象を瞬時に活性化し，言語化している。(23)も同様である。このような場合，たとえ独り言であっても情報要素はふつう言語化される。以上の例に見るように，活性化の持続時間によって省略の可否に差が見られる。

---

[14] 井上の研究は，「シタ」と「シテイル」の使い分けに関するものである。井上は，話者が出来事の実現・発生した瞬間を知覚しているか否かによって，「シタ」あるいは「シテイル」の使い分けが行われると主張する。これは活性化が情報要素の言語化・非言語化だけでなく，文末形式にも影響を与えることを示している。

4-4. 同定認識

次に,「同定認識」が関わるタイプについて見てみる。本稿では, ある対象を知識として知っているか否かを問題とするメンタルプロセスを,「同定認識」と呼ぶ。

4-1 節で, 聞き手も話者と同じほど対象を活性化しているとは想定できず, 情報ベースの中にインプットされていないため, 省略が不可能となる例として, 次を挙げた。

(11) <ニナは探し続けていた男をやっと見つけて, 彼のオフィスに入る。男はニナの意気込んでいる姿を横目にレコードをかけて>

男:この曲 / *[ø], 知ってますか。

これに対して, 話者と同様に聞き手も, 対象を意識の中で活性化していると想定される場面では, 同じ発話が, 省略可能となることを, 次の例で示した。

(15) <話者は音楽を聴きながらリズムをとっている。聞き手はそんな話者の姿を眺めている。そこで話者が CD プレーヤーを横目で見て, >

この曲 / [ø], 知ってる?

では 2 節で, 現場指示でありながら省略が不可能となる例として挙げた次の例をもう一度見てみよう。

(4) <刑事が一枚の写真を見せる。写真には風景と人物があまり大きくなく写っている。>

この人 / ???[ø] 知っていますか?

(4) で用いられている述語は, (11), (15) と同じ「知っている」である。また, (4) の発話者は, 聞き手の眼前に写真を提示しているので, 問題の要素は現場指示であり, 話者も聞き手も対象に注意を向けていると言う点で (15) のタイプに近い。それにもかかわらず, (4) が省略不可能となるのは何故だろうか。これには, 唯一性および同定認識の違いが関わっている。

写真は, 話者と聞き手の眼前に存在する。その意味で現場指示であるのだが, (4) の発話を聞いた聞き手は,「この人」という要素が言語化されない場合,「知っているか」と尋ねられている対象を唯一的に予測し難くなる。具体的に写真の何について尋ねられているのか, あるいは写真をもとに別のことについて尋ねられているのか, 発話の解釈は一通りでなくなる。それが (4) を省略不可能とさせている一つの要因である。これには, 写真という存在物が, 多くの情報をもち得るということが影響している。そしてもう一つ, (4) の発話場面では, 刑事は聞き手にいきなり写真を提示して, 質問を行っている。聞き手は写真の中の「この人」で指示される対象を, 自己の記憶の中の情報と照らし合わせて, 同定する作業が求められている。ところが, 話者と聞き手の両者が十分に意識の中で活性化している対象や, 唯一指示として同定できる対象について

行われる同定認識と，共有知識として確立されていない対象について行われる同定認識とでは，省略の可否に差が生じる。

次の例を見てみよう。同じ同定認識であっても，(24)～(27)は省略が可能であり，更に(28)の場合には，言語化が不可能とさえなる。

(24)＜大学内でボーイフレンドが他の女性と楽しそうに話をしているのを見かける。その女性が去った後，すぐ彼のところへ行き，＞

[ø]/ 今の人 だれ？

(25)＜誰かからの電話を夫がとる。電話が終わった後，妻が，＞

[ø]/ 電話の人 だれ？

(26)＜友達に電話をかける。家族の人が電話に出たので，＞

佐藤さんのお宅でしょうか。あの，[ø]/ 私 甲斐ですけど，理恵さん，いらっしゃいますか。

(27)＜取引先の社員が商品をもって，事務室に入ってくる＞

失礼します。[ø]/ 私 サンワ商事の者です。商品をお届に参りました。

(28)＜いつもよく来る取引先の社員が商品をもって，事務室に入ってくる＞

失礼します。[ø]/ *私 サンワ商事です。商品をお届に参りました。

(24)，(25)では，話者と聞き手の意識の中で問題の人物が既に一定期間，活性化されている。(26)，(27)では，聞き手が問題の人物を唯一指示として知っている，あるいは予測でき，対象に関する情報は長期記憶の中で保管されている。(26)，(27)の場合，聞き手は自己の記憶や知識の中で，同定認識を求められている人物についての情報を検索しなければならないが，(28)では，検索する必要もなく，このような場合には対象の言語化は不自然となる[15]。これに対し先の(4)は，聞き手が対象を十分に活性化あるいは認識していない。もしくはまったく知識としてもっていない場合もあり得る。このように，話者もしくは聞き手のどちらかが，対象をまだ十分に活性化あるいは認識していない場合の同定認識では，省略が不可能となる。

次の例は，(4)と同様に，対象が意識の中で活性化されておらず，また対象についての情報が長期記憶の中にも保管されていないため，省略が不可能となる。

(29)＜家の中にいきなり数人の男の人達が入ってくる＞[16]

あなたたちは /*[ø は] 一体だれ！？

(30)＜玄関のベルが鳴る。覗き穴から見ると，スーツ姿の男性が立っている。ドアを開けると＞

---

[15] このタイプは，第5章で考察する，主語が言語化できない完全唯一主題の問題へつながっている。

[16] 「どちら様でいらっしゃいますか」という発話の場合は，(28)とは反対に，省略が義務的となる。これは敬語と聞き手を指示する「あなた」などの2人称代名詞がそぐわないという，いわば文体論的な理由による。

お忙しいところ失礼いたします。私 / ???[ø] 丸山商事の水野と申します。

(31)＜良三は道で友人に会い，同僚を紹介する＞

良三:この男は /*[ø は] 宮井といいます。今年美食倶楽部に入った新米なんです。

（雁屋哲「北海の幸」『美味しんぼ』vol.14 小学館）

以上，場面依存型発話における省略の可否を考察したが，次節では，文脈依存型発話のタイプに移り，そこでの省略現象について見てみる。

5. 文脈依存型発話

次の例を見てみよう。

(32)＜みち子はダンの息子ケニーを夕飯に誘った後，家に送ってきて，ダンと話をする＞

みち子 1:ケニーの部屋に親子三人の写真があったわ。きれいな人ですね。奥さん…。

ダン 1 :[ø は][ø を] 今でもきれいな人だと思っています…でも… お互い忙しくて，相手を思いやる時間がなさすぎました。

みち子 2:[ø から] 今でも連絡は？

ダン 2 :二人はケニーの母であり父ですからね…

みち子 3:きっと別れた理由なんて，他の人には / *[ø には] 分からないことなんでしょうね。

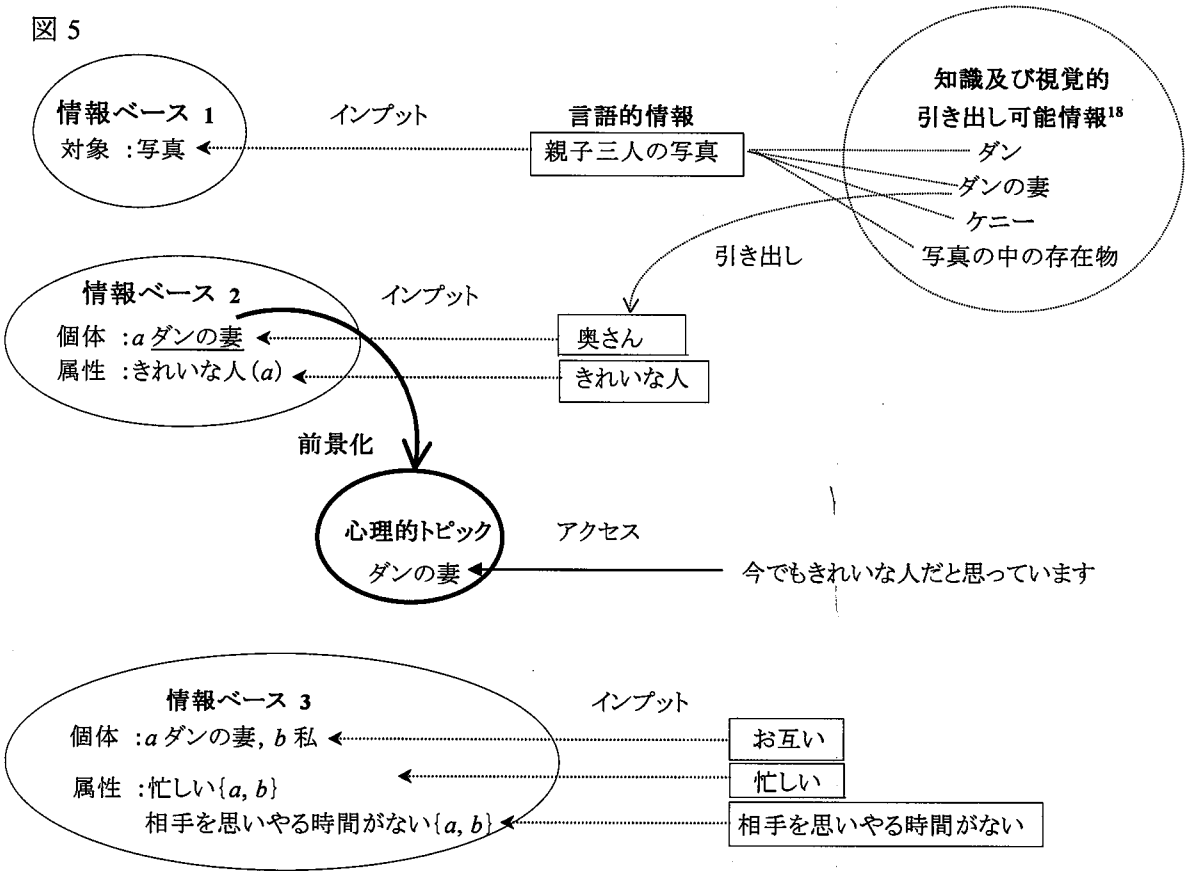
（やまさき十三「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』No. 679）

これら一連の発話では，下図5のような情報ベースが活用される[17]。

みち子1の発話によって情報ベース1，2が構築される。そして談話が展開し，ダン1の発話によって情報ベース2の中の情報要素，「ダンの妻」が前景化され，「ダンの妻」に関する発話が引き続き行われる。ダン1の「今でもきれいな人だと思っています」という発話は，みち子によって与えられた情報ベース2を活用しているため，情報ベースに既にインプットされている個体（ダンの妻）にアクセス可能で，従って省略可能となる。その後，「でも」以下のダン1の発話により情報ベース3が作られ，それに続く一連の発話はこの情報ベースを活用して行われる。一方，みち子3の「他の人」という要素が省略不可能なのは，情報ベースに「他の人」という情報要素がインプットされていないためである。情報ベースにインプットされていない情報要素はアクセス不可能であり，従って省略不可能となる。

[17] 図5に見るように，以下，言語情報によって情報ベースにインプットされる情報要素は，□で囲んで示す。

図 5



では，(32)に変更を加えた例の例を見てみよう。

(33)みち子　:ケニーの部屋に親子三人の写真があったわ。昔の家？　[ø] 素敵ね。

ダン 1　:今でも [ø に] 父が住んでいるんですよ。[ø は] 古いんですけどね。

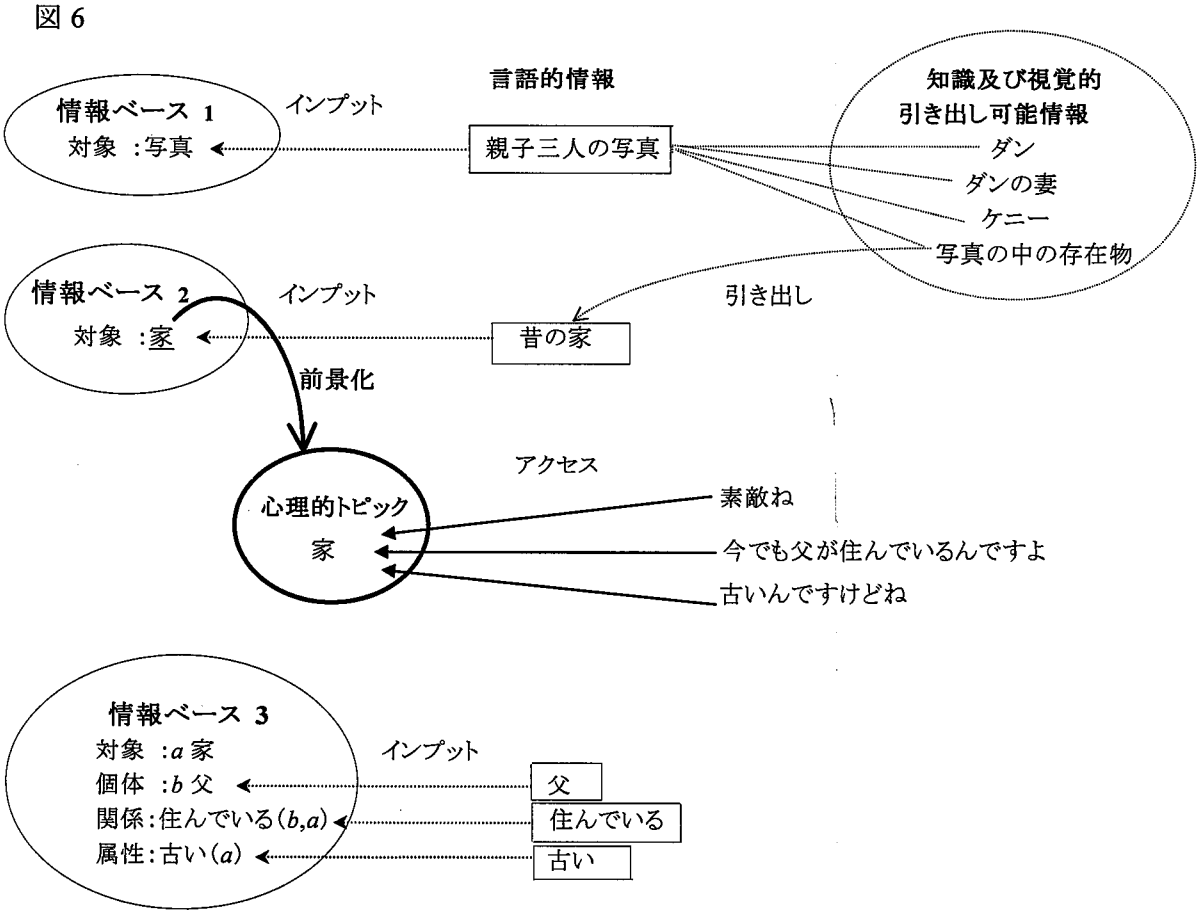
ダン 2 ①　:私達は /*[ø は] [ø を] 補修して，[ø に] 住んでいたんです。

②　:父は /[ø は] [ø を] 補修して，[ø に] 住んでいるんです。

ダン 2 の発話における①と②の省略可能性の違いは，下図 6 のような情報ベースによって説明できる。

[18] 引き出し可能情報は，情報領域内にあり，既に談話の中で言語化されている情報要素に関連する情報である。この情報は，談話が次にどのように展開されていくかの談話の組み立てに関わる。

図 6



みち子の「昔の家？」という発話によって情報ベース 2 に情報要素「家」がインプットされる。その後みち子は，「家」という情報要素を前景化し，それに続くダンの発話は，みち子の発話によって構築された情報ベースを活用し，前景化された「家」という情報要素にアクセスすると同時に，情報ベースに新しい情報要素「父」「住んでいる」「古い」をインプットする。そして，インプットされている情報要素にアクセスするダン 2②の発話は省略が可能であるが，アクセスしようとする情報が情報ベースにインプットされていない①の発話はアクセス不可能であり，従って省略が不可能となる。

以上に見るように，場面依存型発話の場合と同様に，文脈依存型発話においても，問題の要素が情報ベースにインプットされているか否かによってその省略の可否が規定される。

6. 本章のまとめ

本章では，情報ベースおよび心理的トピックという概念を提示した。本章での考察から，場面依存型発話においても，文脈依存型発話においても，情報ベースにインプットされていない要素は省略することができない。一方，情報ベースにインプットされた要素のうち，心理的トピック

として前景化された要素は省略されるということが言える。ただし，活性化はある程度の時間持続していなければならない。また，同定認識の発話の場合，ある程度の時間活性化されている対象や長期記憶の中にある対象を同定するのか，それとも，瞬時に活性化した対象や長期記憶の中には存在しない対象を同定しようとしているのかで，省略の可否に違いが生じる。

本章で示した原理は基本的なものである。談話が複雑になると，情報ベースという概念に加えて，情報ベース内にある要素と要素の間の意味的関係，あるいは発話と発話の間の意味的関係を捉える道具が必要となる。その道具として，本稿では「リンク」という概念を提示する。次章では，この「リンク」について説明する。

第 4 章　リンク

1.　本章の目的

第 3 章で示した「情報ベース」という概念に加えて，本稿では，「リンク」という新しい概念を提示する。この章では，リンクがどのような性質をもち，どのように省略と関わっているのかについて考察する。

2.　リンクとは

次の例を見てみよう。

(1) ＜山岡は，みんなを田舎に連れてくる。あぜ道を歩いている途中，山岡が田んぼを指す。みんながそこを覗いて見ると，＞

すべっ太：どじょうや！

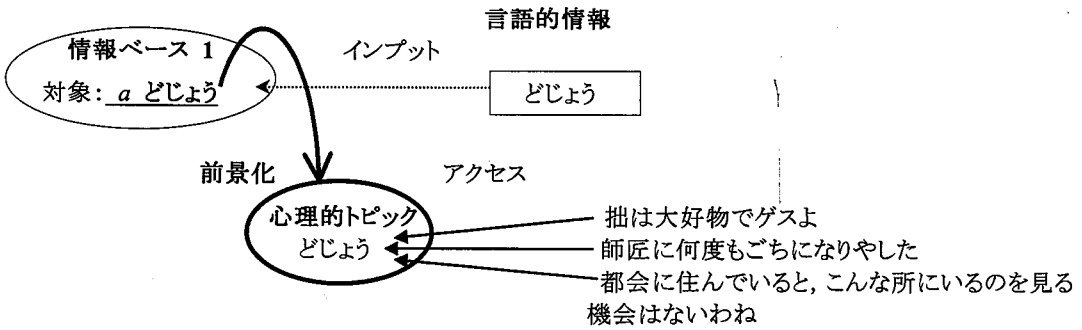
ブラック　：①拙は［ø が］大好物でゲスよ，②師匠に［ø を］何度もごちになりやした。

栗田　　：都会に住んでいると，どじょうが /［ø が］こんな所にいるのを見る機会はないわね。

（雁屋哲「ぼけとつっこみ」『美味しんぼ』vol.14　小学館）

(1) の発話の情報ベースは以下のようになっていると考えられる。

図 1



(1) のすべっ太の発話において，「どじょう」が前景化され，心理的トピックとなる。そしてブラックの発話に引き継がれ，「どじょう」はブラックの第一文目で主語の位置に現れ，第二文目では目的語の位置にきて，ともに省略されている。その後，栗田の発話が続き，栗田の発話で「どじょう」は言語化されているものの，省略も可能である。上の例のように，一旦心理的トピックとなった要素は，発話者が交代してもアクセス可能であると想定され，省略され得る。こうしたアクセスの可能性は，情報ベースにインプットされた情報要素か否かという要因に左右されるということ

を第 3 章で示した。しかし，情報ベースにインプットされていれば，どのような要素であっても省略可能だというわけではない。次の例を見てみよう。

(2) <料理長の中川は，新人の宮井に>

中川 1:①昆布 と カツオブシ は日本料理の味の基本だ。②近頃では，カツオブシを /[ø を]
問屋にかかせてもってこさせる料亭が多いが，美食倶楽部ではそんな不精は許されない。

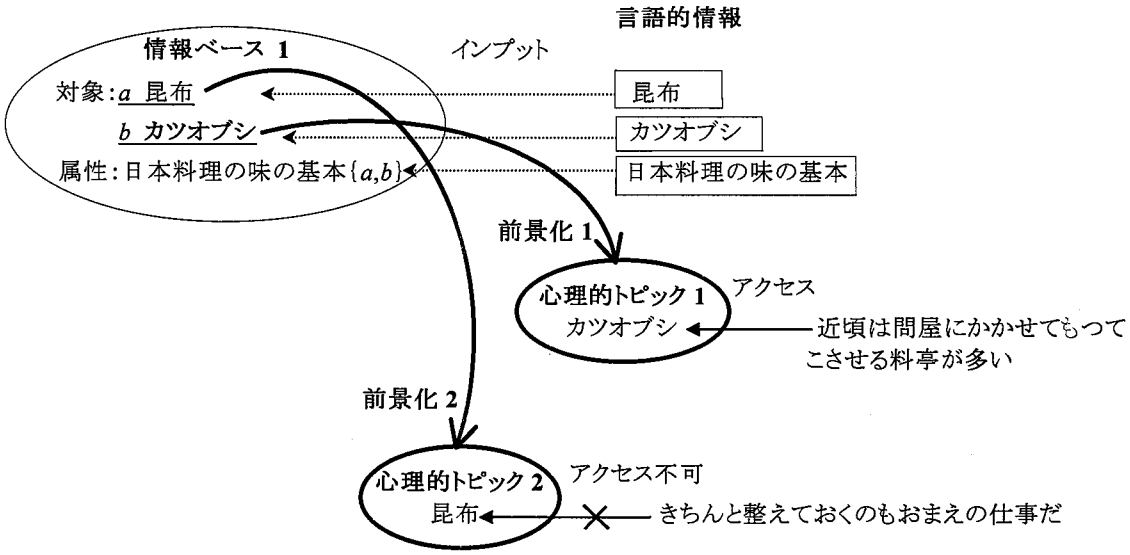
宮井 :はいっ!!

中川 2:昆布を /*[ø を] きちんと整えておくのもおまえの仕事だ。

(雁屋哲「北海の幸」『美味しんぼ』vol.14 小学館)

(2) では次のような情報ベースが活用されていると想定される。

図 2



(2) の中川 1 の第一文目で「昆布」と「カツオブシ」が言語化されており，これら二つの情報要素は情報ベースにインプットされる。そして，中川 1 の第二文目で「カツオブシ」は言語化されているものの，省略してもそれほど不自然ではない。ところが，中川 2 での「昆布」は，省略すると不自然になる。この違いは何であろうか。

省略の可否は，情報ベースにインプットされているか否かに加えて，文の構成要素間もしくは文と文との間に，何らかのつながりや関連性が存在するかどうかという要因が関係する。例 (1) について，一連の発話は眼前の対象について述べられている。現場指示の心理的トピックは，第 3 章で見たように，省略され易い。それに加えて，我々はどじょうが食べものであるという文化的知識をもつている。また，「大好物だ」の対象には食べ物がくるという語彙的関係によっ

て，ブラックの発話における「どじょう」は省略が可能となる。例(2)では，中川1の第二文目に「かかせる」という述語が用いられている。我々は「かく」で表わされる行為がどんな行為か，そしてその行為の対象となり得るのはどんなものかを知っている。このような知識と，その直前に「カツオブシ」という「かく」対象になる要素が言語化されていることから，これら二つの情報は結び付く。そして，中川1の二文目で言語化されている「カツオブシ」は省略も可能となる。それに対して，中川2での「昆布」と「整える」の間には，「カツオブシ」と「かく」の間に見られるような，必然的結び付きが存在しない。そのため，「整える」対象を唯一的に決定しにくく，省略が不可能となるのである。

本稿では，このような，文の構成要素間，もしくは文と文との間の意味的つながりや関連性を作り出す概念として，「リンク」を提示する。リンクには次のタイプがある[1]。

(ア)論理的リンク：行為と行為の対象の結び付き，主体と行為の結び付きなどの要素と要素の意味論理的関係としての結び付き。

(イ)語彙的リンク：同一語句の反復使用，反意性や同一性といった意味的に対応する語句，「なめる－飲む」などの意味的グループを形成する語句の使用によって作られる結びつき。

(ウ)認知・概念的リンク：隣接性に基づくメトニミーや，「バス－バスの運転手」といった関係に見られる，スキーマ，スクリプトなどの我々人間のもつ認知作用や概念に基づく結び付き。

(エ)知識のリンク[2]：「熱い－危ない」「固い－切れにくい」といった，世界に対して我々のもつ一般的知識，「壊れる－修理する」，「正月－お雑煮」などの文化，習慣，知識などに基づく関連性からの結び付き。また，話者と聞き手が事実として知っている共有知識もこの知識のリンクに含まれる。

(オ)情報のリンク：原因と結果，情報の付加などの句と句の間，あるいは文と文の間で認められる意味論理的結び付き，視点の一貫性など。

(1)について，我々はどじょうが食べ物であることを知識として知っている。これは知識のリンクである。「大好物だ」がその対象として取るのは食べ物であるということを論理的リンクから決定できる。この知識のリンクと論理的リンクを活用すると，(1)のブラックの発話で「どじょう」が省略

---

[1] 甲斐(1997, 1998a, 1999)では，「知識・概念的リンク」と一つにしていたものを，本稿では「認知・概念的リンク」と「知識のリンク」に分けている。

[2] John Hinds(1979, 1980a)では，名詞句の省略を扱う中で，話者と聞き手の世界についての知識が省略された要素の解釈に役割を果たすことが示されている。しかしHindsは，どのような場合に，どのような基準で，知識が引き出され，活用されるのか，また，知識にはどのようなものがあるのか，といったことは明らかにしていない。

可能となる。(2)については，我々は「カツオブシ」と「かく」という行為が結び付くことを知っている。これは知識のリンクである。ところが，「昆布」と「整える」の間には何ら意味的な関係，すなわちリンクが存在しない。それが省略をブロックする要因となる。

以上のような意味的関係が，本稿で言う「リンク」である。リンクが存在すると，談話が意味的にかたまり，まとまりを形成する。このかたまり，まとまりは人間の世界に対する知識と談話の中で呈される情報が結びつくことによって，形成される。すなわち，ここで提示するリンクという概念は，人間の世界に対する知識が談話の中で言語情報として現れたものである[3]。

では，次節では，「リンク」を下位タイプごとに詳しく見ていく。

3. リンクのタイプ

3-1. 論理的リンク

文中で要素同士が結合するには，意味的な制約が存在する。その制約を定めるのが論理的リンクである[4]。論理的リンクは，主語と述語，主語と目的語の意味的な共起制限を行う。このような制限によって，以下は非文となる。

(3) *この本はおいしい。

(4) *私は花子を書いた。

話者が，個々の要素を文中の意味的に適切な場所に配置し，その他の要素と結びつかせるのが論理的リンクであり，また，聞き手は，省略された文中の要素が，例えば行為者か行為の対象物かなどに合せて，それまでの発話もしくは関連する情報の中から適切な要素を探し出すが，その探し出す際の条件付けを行うのが論理的リンクである。例えば，「見る」と言う述語は，見る行為者と見る対象を必要とする。見る対象が言語化されていない場合，聞き手は見る対象として意味的に適切な要素を探して発話の解釈を行う。また，「送る」という述語を耳にした場合，直接目的語として例えば，「太陽」といった対象は結びつけない。このような，述語とそれに結びつき得る対象との意味論理的つながりが論理的リンクである。

---

[3] このような考えは Beaugrande and Dressler (1981:6) でも示されており，彼らは，"A text does not make sense by itself, but rather by the interaction of TEXT-PRESENTED KNOWLEDGE with people's STORED KNOWLEDGE OF THE WORLD."と述べている。

[4] 石綿敏雄(1969:143)は，単語が syntactic に結合している場合，単にばらばらに並んでいるのではなく意味的にみて何らかの関係を持ちあっていて，学校文法などでいう主語と述語，修飾語と被修飾語の関係などは単に形だけのことではなくて，むしろ主として意味的に結びあっていると考えた方がよく，単語の結びつきの中には結びつきについての規則や制約が存在することが多い，と述べている。

3-2. 語彙的リンク

石綿敏雄(1969:153)は，例えば，「火山」と「火山灰」の間には類縁性が認められるが，こうした類縁性は「百科事典的知識」によるとしている。この知識は，それぞれの談話で取り上げられているものごとの間の関係に見られる，常識的世界での類縁性である。南不二男(1981:90-91)は，石綿を引用し，ある談話の話題とそれに隣接する他の談話の話題が連続しているか，切れているかの判定にはさまざまな観点があって，一つの見方だけから決まるものではないが，一般性のある一つの観点は，それぞれの談話で取り上げられているものごと，つまり話題になっているものごとどうしの間の，常識的世界における種々の関係に着目するもので，石綿敏雄の「百科事典的類縁性」がこれに当たる，と述べている。このような百科辞典的類縁性を，本稿では語彙的リンクの一つだと考える。しかし，語彙的リンクはこれだけではない。

Halliday and Hasan(1976:274-292)は，文に結束性をもたせる手段の一つとして，語彙によって作られる結束性，「語彙的結束性(lexical cohesion)」，という概念を挙げている。語彙的結束性には次のものがある。

語彙的結束性のタイプ

1. 再叙
   (a) 同一語(くり返し)
   (b) 同義語(近似同義語)
   (c) 上位語
   (d) 一般語
2. コロケーション

同義語は'ascent(登る)－climb(登る)'といった関係，近似同義語は'brand(剣)－sword(剣)'，上位語は'car(車)－Jaguar(ジャガー)'，一般語は'elm(ニレの木)－thing(もの)'といった二つの語の間に見られる関係を指す。コロケーションというのは，'box(箱)－lid(ふた)'，'walk(歩く)－drive(車で行く)'の間に見られるような，互いに何らかの認識できる語彙的・意味的関係に立つもので，体系的な意味関係に依存していると言うよりも，むしろ，同じ語彙的環境を共有する関係にある語彙を示す。

まとまりのある談話には，石綿や南の言う「百科事典的類縁性」や Halliday and Hasan の語彙的結束性が存在するが，本稿では，特に省略にかかわる語彙的つながり，すなわち語彙的リンクとして，次のものを想定する。

a. 同一語句の反復

b. 意味的に対応する語句の使用

　　意味的反意性(例:「開ける－閉める」)

意味的同一性(例:「亡くす－亡くなる」)

c. 意味的にグループを形成する語句の使用

(例:「憂鬱, 心配, 気掛かり…」「歩く, 走る, 駆ける…」など)

d. 同一指示の言い換え表現

Halliday and Hasan の同義語は, 本稿 b の「意味的に対応する語句の使用」のうちの「意味的同一性」に対応する。また, 石綿の挙げている「火山」「火山灰」といった類縁生の関係, Halliday and Hasan のコロケーションは, 本稿 c の「意味的にグループを形成する語句の使用」に, 上位語と一般語は本稿 d の「同一指示の言い換え表現」に対応する。Halliday and Hasan と本稿の違いは, 本稿では b の「意味的に対応する語句の反復」の中に「意味的反意性」というタイプを加えているところにある。

なお, 本稿での同一語句の反復というリンクは, 省略の可否が問題となる要素以外の反復使用について考える。つまり, この反復は, 心理的トピックを省略可能とするためのリンクであり, 心理的トピック以外の部分に同一語句が反復されている場合のことを指す。

3-3. 認知・概念的リンク

メトニミーと呼ばれる現象は, 山梨正明(1992, 1995)に従うと, 大きく, トポニミーとパートニミーという二つに分けられる。トポニミーは, 「場所」や「空間」の隣接関係に基づく表現であり, パートニミーは, 「部分－全体」の隣接関係に基づく表現である。トポニミーやパートニミーによって, 例えば, 「目のまわりにクマをつくる」と言わずに, 「目にクマをつくる」と言えたり, また, 「鍋の中身を食べた」と言わずに, 「鍋を食べた」と言える。

この他, バスにはバスの運転手が存在するといったスキーマ, レストランへ行ったら, 「注文→食事→支払い」といった展開があるといったスクリプトの知識が, 認知・概念的リンクに含まれる。

本稿では, メトニミー表現自体は省略だとは考えない。しかし, メトニミーなどの物事の認知的捉え方を使って, 省略が引き起こされる場合がある。また, スキーマ, スクリプトの活用によって省略が引き起こされる場合もある[5]。

3-4. 知識のリンク

我々は, 「熱いものは危ない」「固いものは切れにくい」「遮断機が下りているときは, 人や車は止る(べきだ)」といった, 世界に対する一般的知識をもつている。また, 「お正月にはお餅を食べる」といった一般的常識や文化, 習慣から得られる知識というものもある。このような知識の

[5] このような現象は, 第10章で扱う。

活用によって，例えば「熱いよ」と言って，「危ないよ」を含意することができる。言い方を変えれば，こうした含意によって「熱いから，危ないよ」の「危ないよ」の部分を省略することができる。

この他，話者と聞き手がともに，事実として知っている共有知識も，知識のリンクに含まれ，発話の産出や発話解釈の際に活用される。

以上四つのリンクは，一連の発話の中に複数存在すればする程一つの談話としてのまとまりが強くなる。しかし，これだけで常に文中の要素を省略可能とすることができるとは言えない。省略に関わる最も基盤的，かつ重要なリンクは，次に述べる情報のリンクである。

3-5. 情報のリンク

情報のリンクは，句と句，あるいは文と文の関係にはたらくリンクであり，これらを何らかの意味論理的関係で結びつけるリンクである[6]。意味論理的関係は接続詞によって明示的に示されることもあるが，多くの場合，接続詞は現れない[7]。本稿では，情報のリンクとして，次のものを想定する[8]。

a. 情報の付加：同一主題に対して，次々と情報の並列的付加を行うもの。「そして」「また」等を用いて情報を添加したり，それまでの内容に情報の補足を行うもの。

b. 帰結　　：前の文脈で述べられた事柄を受けて，その最終的結論や決定を述べたり，前の事柄が原因，理由となって起こった結果や，前の事柄の当然の結果として起こった事柄を述べるもの。典型的には「だから」「よって」等の接続詞が用いられる。

c. 因果・事情説明：前後の文の原因や理由を述べるもの。また，前文で描かれた状況の事情を説明するもの。

d. 対比　　：情報の付加としての対比。ただし，対比の焦点となるものは省略できない。

e. 逆接　　：それまでの内容に反する事柄や前の事柄に対する逆の結果を述べるもの。

f. 質疑応答　：質問とそれに対する答えといった意味的，構文的にペアとなっているもの。

g. 視点の一貫性：能動受動表現の選択や敬語表現などの一貫した使用。

---

[6] 情報のリンクを，文と文の間のみならず，句と句の間にも認めるのは，例えば，「さっきからずっと待っている。しかし，花子はまだ来ない」という二つの文は，「さっきからずっと待っているのに，花子はまだ来ない」という接続助詞によって結合された一文と意味的に等価であり，省略現象は，句と句の意味論理的関係から生じる場合もあるためである。

[7] 市川孝(1978)は，二文間の連接関係は，接続語句の用いられない場合も多い述べている。市川は，接続語句の有無に関わらず，前後の文の連接の方式をとらえようとしている。

[8] 甲斐(1997)において，情報のリンクの下位タイプを挙げたが，本稿ではそれに若干の修正を加えている。

文と文の関係について論じた先行研究の中に，情報のリンクを考える上で有用な考察がある。

市川孝(1978)，永野賢(1986)は，隣り合った二個の文の連続の関係を「連接関係」と呼んでいる。市川は，文の連接関係の基本的類型およびその下位タイプとして次のものを挙げている(pp.89-95)。

(一)順接型：前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型。
　　順当，きっかけ，結果，目的

(二)逆接型：前文の内容に反する内容を後文に述べる型。
　　反対・単純な逆接，背反・くいちがい，意外・へだたり

(三)添加型：前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型。
　　累加・単純な添加，序列，追加，並列・継起

(四)対比型：前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型。
　　比較，対比，選択

(五)転換型：前文の内容から転じて，別個の内容を後文に述べる型。
　　転移，推移，課題，区分，放任

(六)同列型：前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型。
　　反復，限定，換置

(七)補足型：前文の内容を補足する内容を後文に述べる型。
　　根拠づけ，制約，補充，充足

(八)連鎖型：前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型(接続語句は普通用いられない)。
　　連係，引用関係，応対，提示表現との連鎖

また永野は，連接関係として次のものを挙げている(pp.105-108)。

(一)展開型：前の文の内容を受けて，あとの文でいろいろに展開される関係。
　　前の文の語を直接に受けて述べたり，指示語で受けて続けたりすることが多い。接続詞としては，「だから」「それで」「すると」の類が使われる。

(二)反対型：前の文の内容に対し，あとの文でそれと反対の事がらを述べる関係。
　　「だが」「しかし」「でも」「ところが」「それなのに」の類の接続詞を使うことが多い。

(三)累加型：前の文の内容に，後の文の内容を付け加えたり，並列したりする関係。
　　単純に文を連ねていくほかに，「ーも」という助詞を用いたり，「そして」「そのうえ」「あわせて」の類の接続詞を用いたりすることが多い。

(四)同格型：前の文の内容とあとの文の内容とが，同じことをことばを換えていったり，くり返しであったりする関係。

前の文の内容をいいかえたり，要約したり，例示したり，細かく説明したり，くり返したりする。接続詞としては，「つまり」「たとえば」の類が使われる。

(五)補足型：前の文の内容に対して，あとの文で説明を補う関係。

「それは…からだ」とか「…のだ」とかの形か，または，「なぜなら」「というのは」の類の接続詞を用いることが多い。

(六)対比型：前の文の内容にあとの文の内容を対比させ，対立させ，または，選択させる関係。

「ーは……，ーは……」と，助詞の「は」を使うか，接続詞なら「または」「あるいは」「それとも」などの類を使うことが多い。

(七)転換型：話題を転ずる関係。

前の文の内容に対して，ちがった内容のことに話題を変えたり，場面や態度を変えたりする。「さて」「次に」「ときに」「では」などの接続詞が用いられる。

(八)飛石型：文を隔てて続く関係。

(九)積石型：二つ以上の文の集まりが一つの文と直接に連なる関係

市川の一から七までと永野の一から七までの類型はほぼ対応している。

このうち，市川と永野の「転換型」というのは，前文の内容から転じて別個の内容を後文に述べる型であり，話題の変換を引き起こすタイプである。よってこの型は情報のリンクには入らない[9]。それ以外の一から七の類型について，市川，永野の類型と情報のリンクは次のような対応関係となっている。

本稿の 情報のリンク	市川の類型	永野の類型
a.情報の付加	添加型・補足型・同列型	累加型・同格型
b.帰結	順接型・同列型	展開型・同格型
c.因果・事情説明	補足型	補足型
d.対比	対比型	対比型
e.逆接	逆接型	反対型
f.質疑応答	連鎖型の一部…問答形式	
g.視点の一貫性		

市川の「同列型」(永野の「同格型」)と「補足型」(永野の「補充型」)は，本稿ではa～cに分かれる。先ず同列型から見ると，市川が同列型として挙げている「現に」などの接続詞が用いられ得る限定の関係，また永野が同格型に加えている「例えば」といった接続詞が用いられ得る関係は，aの「情報の付加」のタイプに加える。一方，市川が同列型に含めている「すなわち」な

[9] 話題の変換については，第9章で考察する。

どの接続詞を用いて要約・換言を表わす反復の関係，また永野の同格型のうち「つまり」といった接続詞が用いられ得る要約の関係は，bの「帰結」のタイプに加える。

また，市川が補足型として挙げている「ただし」といった接続詞が用いられ得る制約の関係と，「ちなみに」といった接続詞が用いられ得る補充の関係は，aの「情報の付加」のタイプに加える。それ以外の，根拠付けを表わす補足型はcの「因果・事情説明」に入る。そして本稿では，市川，永野では挙げられていない「視点の一貫性」を，情報のリンクに加える。

4. リンクと省略

以上が，本稿が想定する情報のリンクの下位タイプである。では以下，様々なタイプのリンクの存在によって省略が可能となる例をいくつか挙げておく。

(5)どうも，わしは 薬 とか医者というものが好きでない。だいたい，毎日きまった時刻に，[øを] 必ず飲まなくてはならないというのは，面倒くさい。

（星新一 「効果」『おせっかいな神々』新潮文庫）

(6)すっかり おもちが 届いていたのを忘れてて…。[øが]少し固くなりすぎちゃって，[øを] 切るのが大変だわあ。

（西岸良平 「三丁目の夕日 新年パーティ」『ビッグコミックオリジナル』No.630）

(7)＜ある女優が飼っている「キッピ」という名のペットの様子がおかしくなって＞

女優1 :さっきね，キッピちゃんに 香水をかがせたのよ。[øは] とても喜んだので，[øに] 好きなだけなめさせてやったの。[øは] とうとう，ひとビン飲んじゃったわ。

助監督:それで，[øは] どうしましたか。

女優2 :そしたらね，[øが] なんだか弱ってきたのよ。あたし，あわてて救急箱のなかにあったお薬を[øに] 飲ませてやったの。だけど，ちっともきかないのよ。[øを] 早く元気にさせようと，[øに] たくさん飲ませてあげたのに…。

（星新一 「隊員たち」『おせっかいな神々』新潮文庫）

(5)では「薬」が前景化され，心理的トピックとなっている。そして「好きではない－面倒くさい」という理由付け（情報のリンク），また「飲む」という行為と結び付き得るものは飲む対象であるという論理的リンクの存在によって「薬」が省略可能となる。

(6)では「おもち」が心理的トピックとなっているが，「おもちが届いていたのを忘れる」ということが「何日もそのままで放置しておく」ということを意味的に含意しており，そして，「何日も放置すればもちは固くなる」および「固くなれば切るのが大変である」という知識のリンク，また，「固くなる」という属性と結び付き得るものは「固くなる」という属性を持ち得る対象であるという論理的

リンクよって「おもち」を省略することが可能となる。

(7)では「キッピちゃん」が心理的トピックである。ここには,「かがせる」「なめさせる」という発話者側の視点から事態を描いていることを示す使役表現(情報のリンク),「なめる－飲む」という意味的グループを作る語彙的リンク,「弱る－薬を飲ませる」という知識のリンクの存在,「飲ませる」の反復使用による語彙的リンクの存在によって一連の発話が結束し,「キッピちゃん」の省略が可能となる。

次も同じく,リンクの存在によって省略が可能となる例である。

(8)犬の肉は 香港でも食べられるんだけど,表通りのレストランではムリだね。広州は [øを] 大っぴらに食べられるからいいよね。

(「雁屋哲 「美味しんぼ」『ビッグコミックスピリッツ』 No.663)

(9)<社長から明日も欠勤するという電話があったという報告を受けて>

A1:えっ,明日も 社長 休まれる?

B1:いま,[øから] 連絡があったそうです。

A2:[øは] どこか具合でもよくないのじゃ…。

B2:いや,多分そういうことじゃなく,単なる静養だと思いますが。

A3:それにしてはこの時期に 社長が三日も休まれるなんて。

C1:今朝ほど直接,私が [øから] 連絡をいただきましたが,[øは] 至ってお元気でした。

(やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.626)

(8)では「犬の肉」が前景化され,心理的トピックとなっている。そして「食べられる－食べられる」の同一語の反復という語彙的リンクの存在,また「食べる」という行為と結び付き得るものは食べる対象であるという論理的リンク,「香港－広州」の対比という語彙的リンクによって「犬の肉」が省略可能となる。(9)では,「社長」が心理的トピックであるが,ここには,「連絡をする」ではなく,「連絡がある」という発話者側の視点から事態を描いていることを示す語彙表現(情報のリンク),「休まれる」「いただく」「お元気」という社長に対する敬語表現の使用(これらも発話者側の視点から事態を描いていることを示す)といった視点の一貫性に基づく情報のリンクが存在する。また,A1とA3の発話における「休まれる」という同一語彙の反復,A2とそれに対するB2の発話における「具合がよくない－静養」という知識のリンクの存在によって一連の発話が結束し,「社長」の省略が可能となる。

以上,(5)～(9)の例に見るように,一連の発話において,リンクが多ければ多いほど発話間の結束度は強くなる。そして,結束度が強まれば強まるほど省略が行いやすくなる。

一方,次の例に見るように,文脈既出の要素であっても,明らかなリンクが存在しない場合に

は，省略が困難となる。

(10)＜夜，夏子がオフィスに戻ってくる＞

夏子1:ミキちゃん！ まだ残っての？

ミキ1 :うん，徳ちゃんと野島さん，明日の朝早いからって帰っちゃった。

夏子2:一人で 計算も？

ミキ2 :本当はあたしね，子供の頃から 計算って /*[øって] 大嫌いで，最初務めた会社，経理にまわされて一週間で辞めたの。

（柴門ふみ「お仕事です！」『ビッグコミックスピリッツ』No.663）

(11)＜山岡の同僚である田畑，花村，栗田の3人が昼休みにジョギングをしている。それを見かけた山岡が＞

山岡1:こんな車の排気ガスだらけで空気の悪いところを走るのが，体にいいと思うの？

田畑1:えっ…!?

山岡2:さらにそのレモンだ。

花村 :レモンがどうかしたの？

山岡3:それは アメリカから輸入したレモン だろう？

田畑2:そうよ，だから何だって言うの？

山岡4:アメリカから輸入したレモンは /*[øは]，船で運んでくる間にカビが生えるのを防ぐために，全てにOPPという防カビ剤が塗ってある。

（雁屋哲「レモンと健康」『美味しんぼ』vol.14 小学館）

(10)では，夏子2で「計算」が既出であるにもかかわらず，ミキ2で「計算って」は再言語化され，省略すると不自然となる。それは夏子2の，「一人で計算も(した)」とミキ2の「計算が大嫌い」との間に，何ら意味的関連性が存在しないためである。(11)では，山岡3で「アメリカから輸入したレモン」が既出である。しかし山岡4で，同一指示対象の「アメリカから輸入したレモン」は再言語化されており，省略すると不自然となる。これは，「カビが生えるのを防ぐ」「防カビ剤が塗ってある」といった述語情報が，聞き手にとって初出の新しい情報であり，そして前後の文脈に何らリンクが存在しないためである。このように，前文で既出の要素であっても，明らかなリンクが存在しない場合は，省略が難しくなる。

5. 本章のまとめ

本章では，リンクいう概念を提示した。話者と聞き手は発話のやり取りにおいて情報ベースを活用する。情報ベースにインプットされる情報要素は，談話の流れの中で前景化され，心理的トピックとなることがある。ある心理的トピックを中心として行われる一連の発話は，明らかなリンクがあればあるほど，発話間の結束度が強くなる。リンクによって発話の中の要素と要素や発話と

発話が意味論理的に結び付けられている場合，情報ベースにインプットされた情報要素は省略可能となる。しかし反対に，たとえそれまでの談話の中で既出の情報要素であっても，前後の文脈に明らかなリンクが存在しない場合は省略が不可能となる。

第5章 1, 2人称主語の省略－単文－

1. 本章の目的

第3章では，発話場面に存在し，話者と聞き手の意識の中で活性化されている対象は，情報ベースにインプットされ，省略が可能となることを示した。さて，発話場面には，話者と聞き手という対象が存在する。一般的に，話者や聞き手を示す1, 2人称主語[1]は省略がされやすいと言われている。しかし本稿では，たとえ発話場面に存在する話者や聞き手を指す 1, 2 人称主語であっても，無条件に省略可能だと言うわけではなく，その言語化・非言語化の振る舞いは，談話における主語の意味機能にコントロールされていることを主張する。この章では先ず，単文における 1・2 人称主語の振る舞いから考察する。

2. 話者と聞き手

話者と聞き手に関して，Wallace Chafe は一連の研究の中で，「話者は常に前景化(foregrounded)されている(1972b:54)」，「談話参与者である話者と聞き手を示す'I'や'you'と言った概念は'given'であり，対比の場合を除き弱いストレスと低いピッチで発音される(1974:113)」，「1・2 人称指示詞は会話のコンテクスト自体から既に'given status'を得ている(1974:123-124)」，と述べている。英語の代名詞と日本語のゼロ代名詞に共通点があることは既に指摘されている[2](S.-Y. Kuroda:1965, J. Hinds and W. Hinds:1979, P. Clancy:1980, M. Kameyama:1985, Walker, Iida and Cote:1994)が，日本語の場合，話者と聞き手を指示対象とする 1・2 人称主語をひとくくりに旧情報(given)であり，省略可能だと言うわけにはいかない。すなわち，1・2 人称指示対象は発話場面に存在し，お互いその存在を明らかに知っているという特別なステータスをもつからといって，発話場面そのものとは別個の存在である談話という概念領域においても，無条件で常に活性化状態にあって，省略可能だというわけではない。そこで本稿では，1・2 人称主語の言語化・非言語化の振る舞いがどのような要因によってコントロールされているのかを明らかにしていく。

3. 「は」と「が」の意味機能

分析に先だって，明らかにしておかなければならないことがある。それは，文頭に立つ主語名詞句の働きと意味についてである。

---

[1] 本稿では，「は」を伴う主題と，「が」を伴う「が」格主語をまとめて「主語」と呼ぶ。

[2] 英語の場合，話者と聞き手の意識の中で活性化された対象は代名詞化されやすくなる。

これまで「は」と「が」の意味機能については数多くの先行研究がなされている。そのいくつかを挙げると，先ず「は」「が」各々に二つの機能を認める立場がある。この立場の代表としては，三上章(1963他)，久野暲(1973他)の研究がある。

三上(1963)は，「は」に「不問性」と「対比性」の二つの機能を認め，両者は裏表の関係にあり，「は」の本領は不問性であるが，それを発揮しそこなったときに，あるいは故意にそう使った場合に，裏の対比性があらわれると述べている(p.116)。また「が」については「単純」と「排他」の用法があるが，排他性は「が」だけの特性ではなく，他の格助詞にもあり，副詞や動詞にも現われる性質であって，「が」を使わずそこにストレスを置けば，どんな成分でも排他的になるが，この性質を最もよく発揮するのは「が」である，と述べている(pp.198-199)。

一方，佐藤ちゑ子(1976)，野田尚史(1996)，益岡隆志(1991)は，「は」に二つの用法を認めるものの，「は」には主題の「は」の他に主題と対比を同時に表す「は」が存在すると述べている。

また，「は」の本質を対比性に求める立場として，尾上圭介(1973, 1981)，寺村秀夫(1991)，青木伶子(1992)の研究がある。寺村は，「は」の，文中にある要素をとくに際立たせ，ある対比的効果を生じさせる働きを基本と見ており，尾上，青木は，「は」係助詞としての機能は二分結合であり，それは本質的に結合の対比・排他といふ意味的特性をもつとしている。

以上，大きく三つの立場があるわけだが，本稿は，主題と対比を同じに表わす主語が存在するという点において，佐藤，野田，益岡の議論に同意する。本稿では，「は」または「が」を伴う主語について各々次のように考える。「は」を伴って取り出される対象となり得るものが，グループ内に複数存在する場合には，「対比」の意味合いが強く出て，他のメンバーの存在が明確でなくなる程，「主題」の機能が強くなる。従って主題の機能をもちながら対比の意味が感じられる場合，対比の意味をもちながら主題の機能が感じられる場合も存在する。同じく「が」を伴う主格主語についても，「排他」と「中立叙述」といった意味機能は二極的関係にあり，「排他」と「中立叙述」が同時に表わされる場合が存在すると考える。

ただしここで重要なことは，本稿では「は」「が」それ自体に，いわゆる主題，対比，排他，中立叙述といった意味の別が存在するとは考えないという点である。一般的にこうした用語で示される「は」の意味，「が」の意味は，一つの句の中で「は」や「が」が取る名詞句と，その句中にない名詞句との関係で捕らえられた意味である。とすると，こうした意味は，「は」「が」それ自体のみの意味ではなく，主語として選ばれた名詞句の，その当該句中での意味であると言える。だからこそ「は」や「が」といった助詞のつかない助詞なし名詞句の場合も，談話の中でいわゆる主題，対比，排他，中立叙述などの意味を担い得る。従って本稿では，名詞句そのもののが談話において担う意味を考えていく。

4. 主語指向度

1・2 人称主語の言語化・非言語化について考える際，述語がどのような要素を主語として取りやすいかという主語と述語の結びつきは，主語の指示対象を予測する一つの手段となる。つまり，主語と述語との結びつきは，話者が主語の言語化・非言語化の選択を行う上で使用する判断基準の一つであり，聞き手にとっては言語化されていない主語の指示対象を解釈する手段の一つとなる。

主語の特定可能性という点から言えば，例えば，いくつかのモダリティ表現には主語の人称制限を取るものがあり（詳しくは寺村秀夫：1982，仁田義雄：1992 を参照），こうした述語をもつ文は，主語をかなり狭い範囲で特定できる。野田尚史（1991：182）は，主語がなくても主語が誰であるかがわかる，その手がかりとして，文の種類，内面表現・外面表現，方向性のある表現，敬語表現，主文と従属節の主語の一致，連続する二文の主語の一致，を挙げている。中川裕志（1997：109）は，主節が受け身の場合，「くれる」と同様に主語がかなり顕現性の高い視点になると述べている。また，久野暲（1978）は，一般的に言って話し手は主語寄りの視点を取ることが一番容易であるが，動詞の中には主語寄りの視点を要求する動詞と，非主語寄りの視点を要求する動詞があるとし，次のタイプを挙げている。

1） 主語寄りの視点を表わす動詞

・「やる」及び「やる」を補助動詞として構成した複合動詞。

・「貰う，聞く」等，行為対象を主語の位置に置き，行為主体を非主語の位置（奪格）に置く動詞。

・「出会う，結婚する，殴り合う」等の相互動詞。

その他，授受動詞，相互動詞のカテゴリーに属さない動詞で，目的語寄りの視点を取ることが難しいものとして「訪ねる」「送る」「教える」「招待する」「電話をかける」等の動詞。

2） 非主語寄りの視点を表わす動詞

・「くれる」及び「くれる」を補助動詞として構成した複合動詞。

・「寄こす」等。

その他，補強なしで（「-てきた」などの）目的語の視点を表わし得るものとして「プロポーズする」「ぶつ」「呼ぶ」「非難する」「ほめる」等の動詞。

3） 主語寄り，目的語寄り，中立的のどの視点の文とも解釈できる動詞

・「話しかける」「殴る」「ぶつ」「呼ぶ」「非難する」「ほめる」「質問する」「言う」

同じく視点との関わりから鏑木英津子（1977）は，「いとしい，なつかしい」等を「主観表現（subujective expression）」と呼んでいる。これらは話し手の視点寄りの述語で経験主体は話し手である。そして「いとしい，なつかしい」ほど排他的ではないが「お父さん，お母さん，先生，-君」等も主観表現だとしている。主観表現は共感マーカー（empathy marker）の一種であるが，主観表現

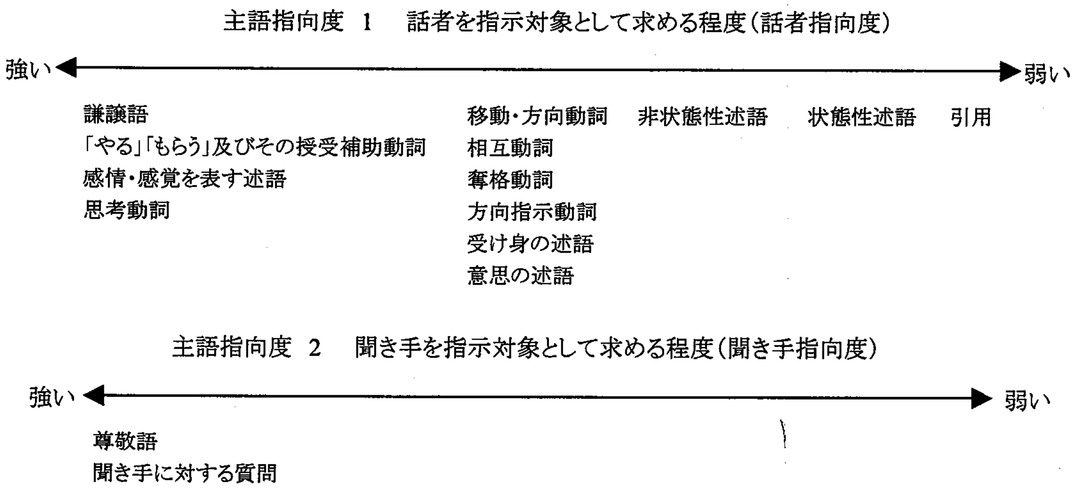
が文の関与者の視点を表わす場合，話者は関与者に共感していなければならず，そうでなければ，その表現は話者の視点を表わすことになると言う。また，大江三郎（1975）は「主観的方向性」という用語を用い，「行く，来る，やる，もらう，くれる」等は動きを単に外から眺め描く動詞ではなく，話し手が（時に他者の視点に乗り移って）動きのできごとの当事者としてこれを内から眺め描く語であり，これらの動きの動詞は「主観的方向性」を表わすとしている。その他「貸す，借りる，教える，教わる，送る，贈る」なども視線の軸が問題となり，方向指示とかかわる動詞であると言う。また，主観的経験の動詞と形容詞を包括して主観動詞と呼び，「思う，望む，願う，愛する，見える，聞こえる」「淋しい，不安だ，心配だ」等を挙げている。

以上の議論を踏まえた上で本稿では，述語の中には主語名詞句の指示対象として話者および聞き手を取りやすいものがあると想定する。例えば，次の発話を聞いたとしよう。

(1)昨日，みち子にプレゼントをあげた。
(2)今朝，電車の中で足を踏まれた。
(3)昨日，何時に寝ましたか。
(4)玄関のところにいる。
(5)かわいい。

(1)～(5)がすべて冒頭発話の場合，(1)の「プレゼントをあげた」主体，(2)の「足を踏まれた」主体は話者であり，(3)は聞き手に対する質問であると解釈するのが最も自然であろう。それに対し，(4)の「玄関のところにいる」，(5)の「かわいい」は，前後の文脈なしでは誰あるいは何についての言及であるか解釈不可能である。このように，述語の中にはその他の条件が同じであれば，主語名詞句の指示対象として話者や聞き手を指示しやすいものがある。これを本稿では「主語指向度」と呼ぶが，主語指向度の強弱関係は次の図 1 のようになっていると考えられる。

図 1



主語指向度のうち，話者を指示対象として求める程度を「話者指向度」，聞き手を指示対象として求める程度を「聞き手指向度」と名付ける。話者指向度のうち，感情・感覚を表す述語は，典型的には寺村秀夫(1982)，仁田義雄(1992)で挙げられている「こわい」のような主語に人称制限をもつ感情状態の直接表出タイプや，「痛い」などの同じく主語の人称制限をもつような述語，大江三郎の言う主観動詞を含める。思考動詞は「分かる」「思う」「気がつく」などである。移動・方向動詞は「行く」「戻る」「来る」などの移動や方向を表す動詞を指し，相互動詞の典型は「会う」「結婚する」などである。奪格動詞は久野暲の言う「貰う，聞く」など，方向指示動詞は「貸す，借りる，教える，教わる，招待する」などのタイプである。意思の述語は，「(わかった)明日するよ」のように文脈上，意思の意味を含む述語や「行こうと思う」といった述語を含める。非状態性述語は，「見る」「(今)食べているところだ」など活動を表わす述語を指し，これに対して状態性述語は，典型的には存在を表わす「いる」「ある」，そして「(ずっと)見ていた」や，属性を表わす「固い」「かわいい」といったものを含める。引用は「そうだ」「と言っている」などの述語である。

述語が右にいくほど，指示対象が何であるかが予測しにくくなり，従って主語の言語化が義務的となっていく。談話における発話の解釈は，あくまで文脈をベースとするが，述語が右に寄るほど，主語名詞句の指示対象は，文脈依存の程度が強くなると言える。反対に，述語が最左のタイプであれば，デフォルトの主語名詞句は話者や聞き手である。よって非言語化されている場合は，話者や聞き手を指示していることが無標であり，話者および聞き手以外の指示対象を指している場合は，有標であるために言語化しなければならない。またそれを示す語尾(「ようだ」「がる」など)を付加しなければならないことがある。

この他，述語ではないが，文中に話者との関係を示す名詞(以下「関係名詞」と呼ぶ)が含まれる場合，話者を指示対象として求める程度を強める。関係名詞には，親族名称，社会的地位の上下関係を示す名詞，所有関係を示す表現などを含める。例えば次の例を見てみよう。

(6)昨日駅前で父を見た。

この文における述語は非状態性述語(活動動詞)が用いられており，主語指向度はそれほど高くない。しかし，「父」という関係名詞を含むことにより，主語は話者を指していると解釈される。

このように述語の中には主語指向度，聞き手指向度の高いものがあり，そうした述語が用いられた場合，主語が省略されやすくなる。ところが，一文レベルではなく，複数の要因が入り混じることが予想される談話レベルでは，主語の言語化・非言語化の振る舞いを話者指向度，聞き手指向度だけでは説明できない。話者指向度，聞き手指向度は，主語を予測可能とさせる要因のうちの一つである。このような要因は他にもあり，その他，話者と聞き手との情報の共有や主語の卓越性などが挙げられる。しかし，主語の省略の可否を決定する第一の要因は，談話における主語の意

味機能である。この主語の意味機能をベースとして，主語を予測可能とする要因が働く。では，次節では，その談話における主語の意味機能とは何かを詳しく見ていくことにする。

5. 談話における主語の意味機能

5-1. 主語のタイプ分け

野田尚史(1996:200-237)は，「は」を明示的な対比を表わす「は」と，暗示的な対比を表わす「は」に分け，次のように説明している。明示的な対比を表わす「は」は，接続助詞でつながれた二つの部分に生起する「は」である。対比の「は」がほぼ必ず使われるのは，対比される部分が構造的に対立しているときであり，対比を主に表わす「は」は，対比される部分のもっとも大きな切れ目の後に置かれる。一方，暗示的な対比を表わす「は」は，対比の相手が明示されていないのに「は」が対比的な意味をもちやすい場合であり，暗示的な対比を表わす「は」が生起する条件には次の四つがある。

1)「は」がついた成分の位置－述語に近い位置におかれている
2)「は」がついた成分の種類－基本語順で述語の近くにある成分
3)「は」がついた名詞の種類－対になる名詞が思いつきやすい.
4)「は」がついた成分の発音－強く高くゆっくり発音される

また，「が」に関して野田は，「が」を表わす排他の意味には，強いものと弱いものがあるとしている。強い排他を表わす文の構造は，二つ以上の候補の中から一つを選び，ほかを排除することを表わす文である。弱い排他は，ただ漠然とほかのものは排除して，一つを選んだと感じられるものであるが，弱い排他を表わす文の構造は，1)恒常的な状態を表わす文，2)意思や命令を表わす文，がある。1)のような文は基本的に主題をもつ文になる。このとき主格が「～が」であれば，述語が主題で，主格が伝えたいことになる。一方，2)は述語が動詞で，意思や命令を表わす文であり，こうした文は主格はふつう言わないが，わざわざ言うと，排他的な意味になる，としている。

では先ず主語名詞句に「は」がついて，対比の意味を表わす場合について考えてみよう。主語であって対比の意味を表わすのは，上記の野田の条件によると 3)と 4)である。しかし，4)について，会話の中で当該の名詞句が対比を表わしているかどうかは，その部分に強いストレスを置いて発音されているかどうかで判断できるだろうが，文字化された言語の分析において，当該の名詞句に強いストレスを置いて読んでも自然であるかどうかによって，自然であれば対比的意味を強くもっていると帰結することはできない。というのは，強いストレスを置いて読んだ場合，もとの意味と異なってしまう場合もあるからである。では，ある名詞句について，それが「対比である」もしくは「主題である」といった判断はどのように客観化され得るのであろうか。野田に従えば，残る条件は 3)の，対になる名詞が思いつきやすいということになるが，この条件は省略現象を考察する上におい

て，また対比と主題を同時に表す名詞句と，対比を表す名詞句の区別を明確にするためにも，更に精密化する必要がある。これは「が」がついた名詞句についても同様である。そこで本稿では，主語を，談話の中で担う意味機能の観点から以下のように分類する。この分類は，主語の指示対象が，その他の主語となり得る対象とどのような関係をもつているかから得られる意味機能である。

「名詞句+(が)」／「名詞句＋(は)」

完全排他主格／完全対比主題：主語となり得る情報要素が他にも存在することが言語的に明らかに示されている中で，当該の情報要素を選択している。あるいは，二つ以上の出来事，状態などを言語的に明らかに対立させて，当該の情報要素を主語として選択している。

相対排他主格／相対対比主題：主語となり得るその他の情報要素が考え得る。あるいは，二つ以上の出来事，状態などを非明示的に対比させ，当該の情報要素を主語として選択している。

論理的唯一主格／論理的唯一主題：文脈や共有知識などから，主語となり得るその他の情報要素が考えにくい。

完全唯一主格／完全唯一主題：文脈や共有知識などから，主語となり得るその他の情報要素が全く考え得られない。もしくは，その他の情報要素を全く問題としていない。

主語名詞句が「は」を伴うか「が」を伴うかは，文構造，述語の意味などの別のレベルで決定されるため[3]，本稿では，談話における主語の取り出され方という点では「は」主題と「が」格主語を同一に扱えると考える。

「完全唯一主格／完全唯一主題」は，主語となり得るその他の情報要素が全く考えられないので，対比・排他といった意味機能はもたない。しかし，「完全唯一主格／完全唯一主題」以外は程度の差はあるものの，明示的あるいは非明示的に対比グループ，排他グループを形成し得る。

談話における主語の意味機能は，1, 2 人称主語に限らない。その他の主語にも当てはまる意味機能である。しかし，1, 2 人称以外の要素の省略の可否については，情報ベースにインプットされているか否か，リンクが存在するか否か，によって規定することができる。それに対し，1, 2 人称指示対象である話者と聞き手は，発話場面に存在し，談話を通してお互いに意識されている。よってリンクが存在すれば省略可能となりそうであるのに，そうとは言えず，単純に一括して省略可能である，あるいは，省略不可能である，と規定できないことによる。

ここで，談話における主語の意味機能から省略現象を分析しようとする方法論に対して，一つの反論が出るかもしれない。それは，主語が言語化されていない場合，その発話をどうやって主

[3] 主語名詞句が「は」をとるか「が」をとるかの原理は，野田尚史(1996)に詳しい。

語の意味機能によって分析できるのかという反論である。

確かに，主語が言語化されている発話に対して，その主語の意味機能はこれこれのタイプであるから，主語が省略できる，あるいはできない，といった議論が成り立つだろう。しかし，主語が言語化されていない場合，主語の意味機能を当てはめることに妥当性はあるのだろうか。

答えは，「イエス」である。

主語の意味機能は，主語名詞句のみを見て，判断できるものではない。文脈，共有知識，前提などを含む，当該の文，あるいは前後の文脈のもつ意味的情報から求められるものである。それ故，主語の意味機能という名称をつけてはいるが，実際は，その文の述語部分で表わされる属性，関係，行為などをもつ要素の意味機能である。そしてこの要素は，言語的に具現化された主語という意味ではなく，情報ベースにインプットされる情報要素という意味の要素である。だからこそ，情報ベースという概念領域を設定する必要があるのだが，情報ベースの中には，言語化されていない要素であっても，概念的に活性化されているものは，インプットされる。そして，そのインプットされている要素に対して，意味機能を設定するのである。本稿では，こうした考えに基づいて，主語の意味機能という用語を用いている。

5-2. 主語のタイプと情報ベース

先程，「は」主題と「が」格主語は，主語の取り出され方という点では同一に扱えると述べた。しかし分析に入る前に，便宜上，「は」主題と「が」格主語を分け，それぞれの意味機能およびその情報ベースを見てみる。先ず，「は」主題の方から説明する。

完全対比主題，相対対比主題，論理的唯一主題，完全唯一主題は典型的には次のような場合である[4]。

•完全対比主題

(7) 橋本：私はマンゴと桃が大好きなんですよ。

木下：マンゴは もう終わりましたが，桃は今ちょうど季節ですね。

•相対対比主題

(8) ＜事務室に入ると，みんながケーキを分けている＞

A：一つどうですか。

B：ケーキは ちょっと最近控えているんですよ。

•論理的唯一主題

(9) 橋本：木下さんは中国へいらしたことがありますか。

木下：私は 二年前に一度北京へ行きました。

---

[4] 主語名詞句の四タイプの違いを明白にするため，ここでは1•2人称以外の名詞句も主語として用いる。

•完全唯一主題

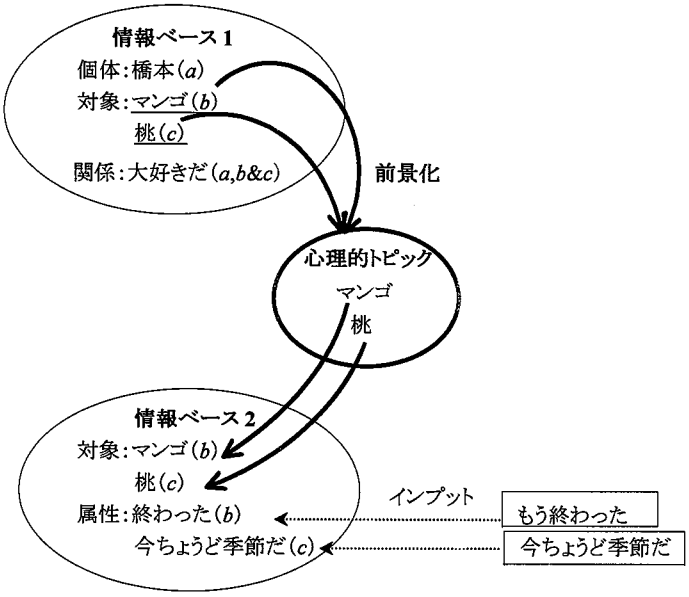
(10)＜上司から明日までにある仕事をやってくれと言われて＞

部下：はい，[私は] わかりました。

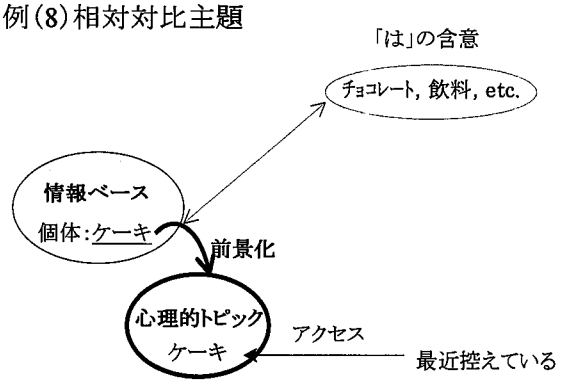
以上，各タイプを情報ベースを用いて図式化すると，図2のようになる。

図2

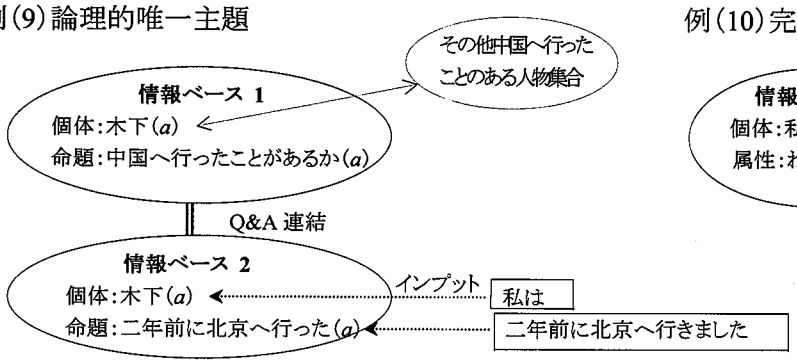
例(7)完全対比主題



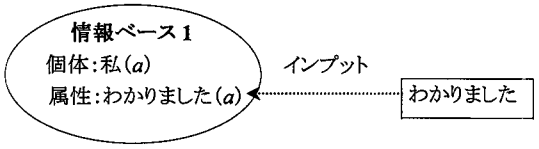
例(8)相対対比主題



例(9)論理的唯一主題



例(10)完全唯一主題



完全対比では，主語となり得る二つ以上の情報要素が，情報ベースの中にインプットされている。一方，相対対比は，対比グループが背景化されており，その背景化された対比グループが，情報ベース内の情報要素と間接的に結びついている。完全対比主題と相対対比主題の違いは，完全対比の場合，対比グループが言語的に明らかに存在するが，相対対比の対比グループは言語的には非明示的であるということにある。上の例(7)で言えば，「控えている」という述語の対

象が「は」を取ることによって，その他の対比グループを暗示的に想起させる[5]。このような含意の情報は，発話の現在において情報ベースと連結し，参照されている情報領域から引き出される。情報領域には，例(8)のように文法的に引き出される含意情報の他，知識，記憶などの情報領域が存在する。

論理的唯一主題は，文脈もしくは話者と聞き手の共有知識から，主語となり得る情報要素が他に考えにくい。しかしながらなお，対比の意味合いは保持し得る。一方，完全唯一主題は，情報ベースの中に主語となり得る情報要素が，只一つのみである。

では次に主格名詞句について見てみる[6]。

•完全排他主格

(11)＜木下は窓からバスが来るのを見ている。橋本は離れたところから，＞

橋本：18番のバスと20番のバスとどちらが先に来ましたか。

木下：18番のバスが 先に来ました。

•相対排他主格

(12)＜お昼御飯の時間になって，光輝は渡された弁当を開ける。光輝は漬物が苦手。＞

光輝：あ，漬物が入ってる…。

里子：私が 食べてあげるよ。

•論理的唯一主格

(13)山田：僕は今度こそ怒ったぞ。もうアイツのことを許せない。

花子：あなたが 怒るのも無理ないわね。

•完全唯一主格

(14)学生：助詞の使い方がよくわからないんですけど。

教師：じゃ，［私が］ 説明しましょう。

以上の主格主語の四タイプに対応する情報ベースは，下の図3の通りである。

主題の場合と同様に，完全排他主格では，主語となり得る二つ以上の情報要素が情報ベースの中にインプットされている。一方，相対排他主格は排他グループが背景化されている。論理的唯一主格は，文脈もしくは話者と聞き手の共有知識から，情報ベースの中に主語となり得る情報要素が他に考えにくい。しかし，排他グループという観点から言えば，相対排他主格ほど意味的に強い排他グループは形成しないものの，なお排他的ニュアンスが含まれ得る。一方，完全唯一

---

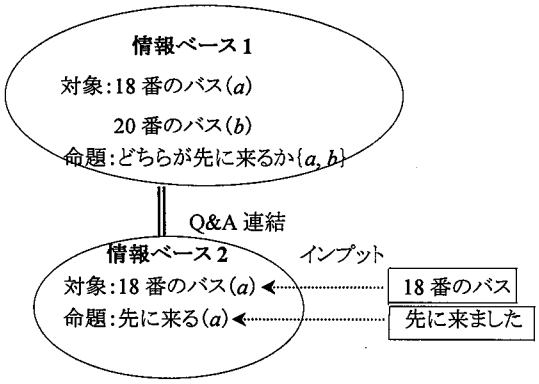
[5] 市川保子(1988)は対比グループを「セットメンバー」という用語で説明している。そして，「「Xは」から「Yは」が対比的に引き出されるのは，「X」の持つ，語としての意味論的特徴に起因する場合と，広くその事態の社会的現実や社会通念的な対立から対比が生じる場合があると言えよう」と述べている(p.7)。

[6] ここでも，四タイプの違いを明白にするため，1･2人称以外の名詞句も主語として用いる。

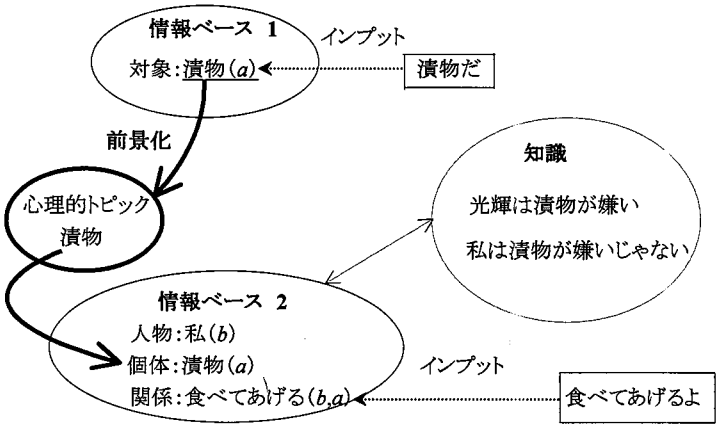
全唯一主格は，情報ベースの中に主語となり得る情報要素が只一つのみである。

図 3

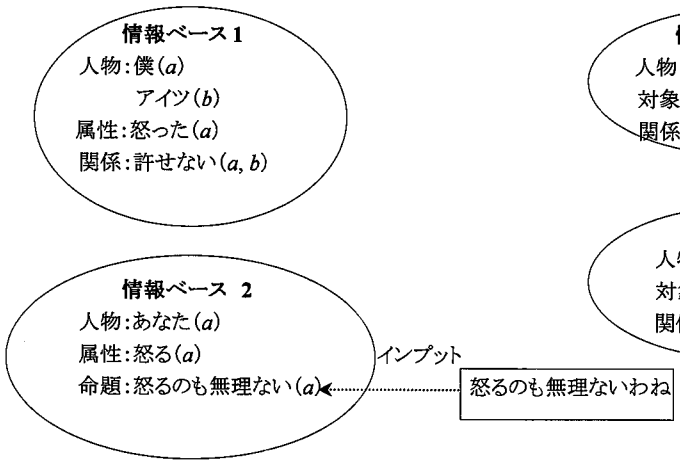
例(11)完全排他主格



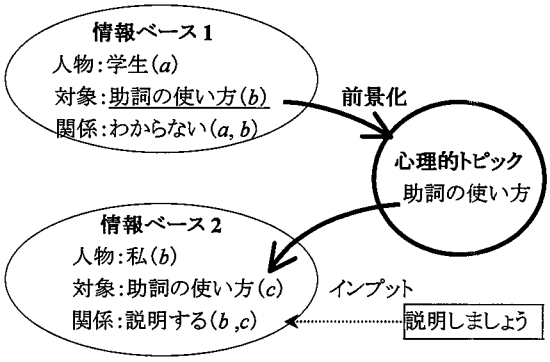
例(12)相対排他主格



例(13)論理的唯一主格



例(14)完全唯一主格



5-3. 主語の意味機能のタイプと省略との関係

主語は，談話における意味機能という観点から大きく四つのタイプに分けられることを示したが，では，これらの主語のタイプと省略との関係はと言うと，次のようになっていると想定する。

主語の意味機能	完全対比主題 完全排他主格	相対対比主題 相対排他主格		論理的唯一主題 論理的唯一主格	完全唯一主題 完全唯一主格
		予測不可能	予測可能		
省略の可否	言語化		言語化・非言語化ともに可能		非言語化

完全対比主題と完全排他主格に関しては，筒井通雄(1984)，久野暲(1973)，甲斐ますみ(1992)等において，対比の「は」や排他の「が」が省略できないこと，また，対比や排他の意味を伴う主語が省略不可能なことが既に指摘されている。しかし本稿では，対比や排他といった概念を，談話の中において，より客観的に捉えようとするところに主眼がある。本稿で提示する情報ベースという概念を用いることによって，強い対比と弱い対比，強い排他と弱い排他が明示的に捉えられる。また，弱い対比，弱い排他のニュアンスをもち得るが，文脈あるいは話者と聞き手のもつ知識から他に主語となり得る対象は考えにくいという第三の名詞句のタイプ(論理的唯一主題，論理的唯一主格)が存在することが示される。

完全対比主題／完全排他主格は，二つ以上の対象や出来事を対立させており，二つ以上の項目を言語的に対立させることによって，対比や排他の意味を強く生じさせることができる。そのため対立する主語はふつう言語化される。一方，完全唯一主題および完全唯一主格は，場面情報や共有知識から，その他の対象が全く問題とされておらず，主語となり得る対象がそもそも只一つのみしか存在しない。主語となり得るその他の対象が全く考えられないので，対比や排他といった意味はもたず，主語は言語化しないのが自然である。相対対比主題，相対排他主格は，聞き手にとって主語が予測可能か否かによって言語化・非言語化の振る舞いに差が生じる。予測可能な場合は，言語化・非言語化ともに可能であり，言語化されれば，対比や排他の意味が強く出る。しかし，予測不可能な場合は省略ができない。論理的唯一主題／論理的唯一主格は，文脈情報や共有知識から，主語となり得るその他の対象が考えられず，主語の予測は可能である。それ故，主語は言語化も非言語化も可能となる。

以下の分析は，用例の中で主語が省略されているものについては，なぜ省略されるのか，また，主語が言語化されているものは，その主語を省略可能かどうか，という観点から行う。では，次節では，主語の各タイプと省略との関係を検証していく。

6. 検証

6-1. 完全対比主題／完全排他主格

完全対比主題／完全排他主格は，述語部分で表される情報と結びつき得る対象が，情報ベースの中に明白に二つ以上存在する。それらを対比対立，排他対立させることに意味があるため，1, 2人称主語であっても，そしてたとえ主語が予測可能であっても言語化される。

では先ず，完全対比主題の例から見てみよう。

•完全対比主題

(15) <春山は少年とキャッチボールをやって，>

春山1:君，野球好きかい？

少年 :初めてだからよくわからない…。
春山2:そうか, おじさんは /*[øは] 大好きだよ。

(毛利甚八 「ケントの方舟」『ビッグコミックオリジナル』 No.682)

(16)<副社長から佐々木に電話がかかってきたことを, 佐々木はダンに伝える>
ダン :カズ, そのことで話があるんですが…。
佐々木:①分かった, 後で聞こう!! ②君は /*[øは] 神輿, 担ぐのは私。③仕切りは任せなさい。

(やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.679)

(17)<大学生の袋田と森野は友人の下宿で飲みながら>
袋田1:俺, 将来農林水産省に入るつもりなんや。
森野:そうか。
袋田2:君は /*[øは] 何になりたい?

(毛利甚八 「ケントの方舟」『ビッグコミックオリジナル』 No.684)

(15)は春山1の「君」と春山2の「おじさん」, (16)は佐々木の「君」と「私」, (17)は袋田1の「俺」と袋田 2 の「君は」が, それぞれ言語的に明示的に対比されており, 完全対比である。そして省略は不可能である。

•完全排他主格

次は, 完全排他主格の例である。

(18)<タヌキうどんとキツネうどんをもってきた店員に>
客A:①こっちがキツネね。②で, 僕が /*[øが], タヌキ。

(19)<妻は自分の店を出したいと思っている。夫はそれに反対している。>
妻:①高橋さんが, 私の料理, お店出してもやっていけるって言ってくれたの。②でも, 高橋さんが保証してくれても あなたが /*[øが] 承知しないわよね。

(18)では, 「僕」と「こっち」で, (19)では, 「高橋さん」と「あなた」の間で, 一方が選択され, 他方が排他されているため, 完全排他主格であり, 省略はできない。

6-2. 相対対比主題／相対排他主格

次に, 相対対比主題／相対排他主格の例を見てみる。相対対比主題／相対排他主格の場合, 聞き手にとって主語が予測可能か否かによって言語化・非言語化の振る舞いに差が生じる。予測可能な場合は言語化・非言語化ともに可能である。そして, 主語が言語化された場合は, 対比や排他の意味が強く出る。しかし, 主語が予測不可能な場合は, 省略ができない。では, 予測可能な例から見ていく。

6-2-1. 予測可能

•相対対比主題

以下は相対対比主題のうち，主語が予測可能な例である。

(20)＜歌手のひなたが貸し切った高級レストランでドジばかりする健太。それを見てひなたは笑う。健太は気恥ずかしさとムッとした気持ちで思わず＞

健太1 ：からかってんだ……。

ひなた1：＜笑いが止まる＞……え？

健太2 ：『知らない』って言ったからだろ。

ひなた2：……。

健太3 ：[øは] 有名人だもんな。そりゃカチンと来るよな。

（戸田山雅司 「7月7日晴れ」『月刊シナリオ』 52-5）

(21)＜ロッテはニナをダンスパーティに連れて行く。＞

ニナ：あ…あたしは /[øは]，こういうとこは，ちょっと…。

（浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(22)＜ロッテはダンスパーティで一人の男性にパートナーになってくれと誘われる。それを見てニナは，＞

ニナ ：やったじゃない，ロッテ!! じゃ，あたしはこれで!!

ロッテ：①あー，待ってよ，ニナ!! ②[ø] ああいうの，趣味じゃない！ ③全然趣味じゃない！いっしょにいてよ，ニナ!!

（浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(23)＜ロッテはカールをダンスパーティに誘う＞

カール1：ダンスパーティー？

ロッテ ：そ…そうなのよ，こういうのあたし，あんまり趣味じゃないんだけど，友達に無理に売りつけられちゃって。

カール2：ごめん，悪いけど [ø] 今夜は無理なんだ。

（浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(24)＜風車売りから帰ってきた義理の娘を継母がぶって＞

娘 ：どうしてぶつの!? 風車だって全部売れたじゃない。

継母：①いやらしい子だねぇ。②どうせ，また色目使って，相撲取りに売ってもらったんだろ。③みっともないねぇ。④[øは] 遊ばれてるのも知らないで！ ⑤街中の噂になって，こっちは /[øは] 恥ずかしくてしょうがないんだよ。

（森栗丸 「あじさいの唄 夏の終わりに」『ビッグコミックオリジナル』 No.682）

以上，(20)～(24)の例はすべて，非明示的ではあるが，対比グループを形成する。(20)の健

太3では，自分や他の人と違って聞き手はという意味合いがある。そして「ひなたが有名人であること」は，健太とひなたの共有知識であるため，主語の予測が可能である。(21)のニナの発話は，パーティが好きなロッテや他の人と話者とが対比されている。そして，感情表現「ちょっと」という話者指向度の高い述語の使用から主語の予測が可能であり，ここでは主語が言語化されているが，省略しても不自然ではない。(22)で，ロッテの第二文目の発話は，他の人と話者自身とが対比されており，そして，感情表現「趣味じゃない」という話者指向度の高い述語の使用から主語の予測が可能である。(23)で，ロッテとカールの一連の発話は，質疑応答のペアであり，また，カール2の「悪いけど」という感情表現，「無理なんだ」という意思表現は話者指向度が高いことから，カール2の主語は予測可能である。(24)で，継母の第四文目の発話では，遊ばれていることを知っている街の人および話者対娘で対比されている。そして，「知らないで」と聞き手に対するコメントを行っており，聞き手指向度が高いため，主語の予測が可能である。第五文目の発話では主語が言語化されているが，遊ばれていることを知らない娘と話者が対比されており，そして，「恥ずかしくてしょうがない」という感情表現による話者指向度の高い述語から主語の予測が可能であるため，主語は省略することも可能である。

•相対排他主格

次は相対排他主格の例である。

(25)＜浜崎は本部長の佐々木にクビだと言われて，＞

浜崎　:この話，聞かなかったあことにするから，もう一度よくダンと相談してみてください。本部長，気苦労から，きっと心身ともに疲れているんスね。大変だ，役員は。

佐々木:①クビを切られる男になんで私が同情されんの!!　②“聞かなかった事”にして貰っちゃ<u>私が /[ø が]</u> 困る!!

（やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』No.679）

(26)＜ある男性がダンス教室に取材に来る。ダンス教室の生徒の豊子はその男性に話しかけて，＞

豊子 1:ねえ，あんたは踊らないの。

若い男:いや，まあ，踊れたらいいなとは思いますけど，中々チャンスがなくて。

豊子2:①ちょっと試してみる？　②[ø が] 相手してあげるから……。

（周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』52-2）

(27)＜一人でダンスホールにいる杉山にダンス教師のたま子は，＞

たま子:相手がいないんだったら [ø が] 誰か紹介してあげましょうか。

（周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』52-2）

(28)＜豊子が過労で倒れる。その見舞いの帰り，ダンス教師のたま子は杉山に，＞

たま子1:杉山さん。

杉山1　:<たま子を見る>
たま子2:豊子さんが元気になったら，彼女と組んで大会に出てみようよ。
杉山2　:ボクには無理ですよ。
たま子3:①あなたなら大丈夫。②私が /[øが] 保証する。

(周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』 52-2)

(25)の佐々木の第二文目は，聞かなかった事にする浜崎と，聞かなかった事にされては困る話者自身とが，排他グループを形成する。そして，「困る」という話者指向度が高い述語が用いられているため，主語の予測が可能であり，主語は省略することも可能である。(26)の豊子 2 では，ダンスを教え得る周りの他の人と話者とが排他グループを形成する。そして，第二文目では「てあげる」という話者指向度の高い述語が用いられており，主語は予測可能である。(27)では，ダンスの相手を紹介し得るまわりのその他の人と話者とが排他グループを形成する。そして，「てあげる」という話者指向度の高い述語の使用により，主語は予測可能である。(28)では，無理だという杉山と大丈夫だと保証する話者とが排他グループを形成する。そして，たま子 3 の第二文目は意思表現「保証する」という話者指向度が高い述語を用いていることから，主語が予測可能であり，主語は言語化しないことも可能である。

以上，予測可能な相対対比主題，相対排他主格の例を見たわけであるが，では，主語が聞き手にとって予測可能な場合，省略するのは言語コスト上自然だと思われるのに，なぜ予測可能となる主語を言語化することがあるのかという疑問が生じる。その理由は，主語が対比や排他だからである。つまり，相対対比主題や相対排他主格は，主語となり得るその他の情報要素を考え得る。非明示的ではあるが，対比グループ，排他グループをもつ。そのため，対比グループとの対比性，排他グループでの排他性から主語を言語化することが可能であり，言語化することによって，対比性，排他性が強く出されるのである。

では次に，主語の予測が不可能なタイプを見てみる。

6-2-2. 予測不可能

•相対対比主題

相対対比主題であっても，聞き手にとって予想不可能な主語は，省略すると不自然になる。

(29) <ダンスパーティで女同士壁の花になって>
ロッテ:あたし達 /???[ø]，なんか浮いてる。

(浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』 No.679)

(30) <大学生四年生の袋田と森野は，友人の下宿で飲んでいる。袋田が森野にいきなり，>
袋田:俺 /???[ø]，将来農林水産省に入るつもりなんや。

森野：そうか。

（毛利甚八 「ケントの方舟」『ビッグコミックオリジナル』 No.684）

(31) ＜サウナの室内。無言で並ぶ健太と上司の岸和田。＞

岸和田1：……君は，こういうとこ，あんまり……来ないのか？

健太1　：えっ，ええ，まあ。

岸和田2：……そうか。

＜ちょっとした沈黙。流れる汗＞

健太2　：あのお，なんで……。

岸和田3：＜おもむろに＞ 俺は /*[ø は] 宣伝になんか来たくなかったんだ。

健太3　：え？ あっ，はあ……。

（戸田山雅司 「7月7日晴れ」『月刊シナリオ』 52-5）

(32) ＜ニナを無理やりダンスパーティに連れてくる＞

ニナ　：あ…あたしは，こういうとこは，ちょっと…。

ロッテ：①まあまあ，そう言わずに，あなたと一緒なら皆，声かけてくるわ。②ホラホラ，みんなこっち見てる！ ③あたしは /*[ø は]，おこぼれにあずかるから。

（浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(33) ＜佐々木は話があるといって浜崎を呼び出すが，なかなか言えない。＞

浜崎　：だからどんな話!? 役員会で社員にボロクソに言われたとか…。切り出しにくい話だってのは分かるけど…。バッチシ話してくれなくっちゃ，本部長。

佐々木：①おうし。②バッチシ話してやる!! ③お前さんは /*[ø は] 我が社に不要!!

（やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(34) ＜課税係の鐘野が税金の取り立てにやってきて＞

鐘野：①あんたのレストラン，かなり業績がいい。②課税係の推計は甘いくらいだ。③問題はその稼いだ金，あんたがどこにやったかだ。④金は遣っても，形を変えて残るものだ。⑤たとえギャンブルで使ったとしても，快楽が残る。⑥金は，捜せば必ずどこかにある。⑦そして，俺達は /*[ø は] それを差し押さえる!!

（佐藤智一 「壁ぎわ税務官」『ビッグコミックオリジナル』 No.682）

(29)でロッテの発話は，「あたし達」と周りで楽しんでいる人達が，非明示的に対比されている。そして，「なんか浮いてる」という状況描写は，話者個人の感想によるものであり，聞き手とは共有されていない情報であるため，主語の予測は不可能である。(30)では，話者や聞き手を含めて大学四年生である皆が，将来の就職先について考えているという前提がある。その前提の下で，袋田は，自分と他の学生とを非明示的に対比している。そして，この発話は，いきなりの話題提出で

あり，聞き手は何の共有知識ももつことができず，主語の予測は不可能であるため，主語は省略すると不自然となる。(31)では，宣伝部は社内の出世コースであるという前提がある。その前提の下で，岸和田3は，宣伝部に来たい他の人と自分とを非明示的に対比している。そして，岸和田3の発話は，いきなりの話題変換であり，「宣伝になんか来たくなかった」主体が誰であるか，聞き手は予測不可能である。(32)のロッテの発話で，声をかけられる聞き手(「あなた」)とおこぼれにあずかる話者(「あたし」)が対比されている。そして，ロッテの第一文目から第二文目まではニナに関する描写で，第三文目ではじめて「あたし」という情報要素は言語化され，これは初出情報であるため，主語の予測は不可能である。(33)の佐々木の発話では，会社の他の社員と聞き手とが対比されている。そして，第三文目の述語情報は，聞き手にまったく共有されていない情報であり，しかも聞き手を指す「お前」という情報要素は，佐々木の第三文目で初出であるため，主語の予測は不可能である。(34)で鐘野の発話は，金を使った聞き手(「あんた」)と，金を差し押さえる話者(「俺達」)とが対比されている。そして，第七文目の述語情報は聞き手と共有されておらず，しかも「俺達」という主語は，ここで初出であるため，主語の予測が不可能である。

•相対排他主格

次に，主語が予測不可能な相対排他主格を見てみる。

(35)＜久しぶりに東京から帰って来た息子に，いつ自分たちを迎えに来てくれるのかと聞いて，＞

久:あの…オレ…もしかしてそんな約束してた…っけ？

母:<u>おまえが /*[øが]</u> 頼んできたんやないか。

(石坂啓 「アイ'ム ホーム」『ビッグコミックオリジナル』 No.684)

(36)＜部下のかつての友人のことについて聞くため，部下を食事に誘って，＞

部下A:次官，ごちそうさまでした。学生時代の馬鹿馬鹿しい思い出話ばかりで，お役に立てたかどうか。

次官 :いいさ，<u>僕が /*[øが]</u> 頼んだんだ。

(毛利甚八 「ケントの方舟」『ビッグコミックオリジナル』 No.684)

(37)＜曽根は死んだという文江の話を聞いて＞

由紀子:あら，そんな噂は聞いてないわ。文江さんだって，今までそんなお話をなさらなかったじゃないの。

文江 :<u>あたしが /*[øが]</u> 殺したの。

(星新一 「金色のピン」『ノックの音が』 講談社文庫)

(38)＜歌手のひなたは友人の会社の新車発表会を見に行き，そこでステージに担ぎ出される。翌日，無契約のタレントを無理やりステージに引っ張り出したとスポーツ各紙で取り上げられる。ひなたのマネージャーの三ツ木は，スポーツ紙を前にしてひなたに＞

三ツ木:①今回は100%君のミスだ。②私が /*[ø が] 処理する。

(戸田山雅司 「7月7日晴れ」『月刊シナリオ』 52-5)

(39) <久しぶりに帰って来た息子に嫁の悪口を言いながら, 急に涙を流し>

久:ど, どうしたの, お母ちゃん。

母:①わしが, あっちもこっちも痛いっていうのにみんな放ったらかしで…②なんで おまえが /*[ø が] 側にいてくれんのだ。

(石坂啓 「アイム ホーム」『ビッグコミックオリジナル』 No.684)

(40) <酒場で, 佐々木は夢想していてハッと我に返る。>

佐々木:①ここはどこ? ②なんで おまえが /#[ø が] ここにいるの?

(やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.679)

(35)の主語は,「他の誰かではなく主語の人物が」という排他的意味合いがある。かつ, 聞き手は記憶喪失であり, 言われている発話内容は, 聞き手にとって知らない情報である。そのため, 主語の予測は不可能である。一方, (36)での次官の発話内容を, 聞き手は事実として知っているはずである。それにもかかわらず, 主語は省略不可能である。それは, 部下Aの「お役に立てたかどうか」という一種の謝り表現に対して, 次官は責任はそちらにないという意味合いでこの発話を行っており, 排他の対象は言語化されていないが, かなり強い排他の意味合いをもつためだと思われる。これは, 言語的に排他グループの対象を明示しないが, 知識および発話内容から, 排他グループを形成するタイプで, 完全排他に近い。(37), (37)の主語は, やはり,「他の誰かではなく主語の人物が」という排他的意味合いがある。そして, 述語部分は, 話者と聞き手の間で共有されていない情報を表わしていて, かつ, 述語は話者指向度が低く, 主語を省略した場合, 主語を唯一的に決定できないので, 主語の予測は不可能である。

(39)の母の第二文目は疑問文であり, 疑問文は基本的に, 聞き手指向度が高いはずである。しかしながら, ここの主語を省略した場合, 直前に「みんな」という別の主語があり, 主語が唯一的に決定できないことから, 主語は省略不可能である。(40)では, 発話の場に話者と聞き手の二人が存在し, 佐々木の第二文目の「ここにいる」の主語となり得る主体は二人いるため, 主語を省略すると, 唯一的に主語を決定できない。

以上見た例は, 述語部分で示される情報が, 聞き手と共有されていない, もしくは, 主語の指示対象が情報ベースにインプットされていても, アクセスの可能性が二つ以上ある, あるいは, 知識および発話内容からかなり強い排他の意味合いをもつ, といった理由から, 主語が省略不可能となっている。

6-3. 論理的唯一主題／論理的唯一主格

次に，論理的唯一主題／論理的唯一主格について見てみる。論理的唯一主題／論理的唯一主格は，談話の流れあるいは話者と聞き手のもつ共有知識などから，主語となり得る対象がその他に考えにくいタイプである。しかし，「他の人と比べて…」「他の人と違って…」といった対比的意味合いや，「他の誰かではなく主語の人物が」という排他的意味合いをもち得，対比グループ，排他グループを形成し得る。こうした，その他の主語が考えにくく，主語の予測が可能である論理的唯一主題／論理的唯一主格は，言語化・非言語化ともに可能となる。

•論理的唯一主題

では，論理的唯一主題の例から見てみる。

(41) ＜泥棒に入った男が絶望的になっている住人を見て，＞

泥棒:いったい，[øは] なんでそう絶望的になっているのだ。

（星新一 「現代の人生」『ノックの音が』講談社文庫）

(42) ＜貸切りのフロアの中央のテーブルにひなたと健太が二人きりで食事している。健太はひなたを見て，＞

健太:……[øは] 日本人……だよな？

ひなた:うん，生まれたのはこっち。

（戸田山雅司 「7月7日晴れ」『月刊シナリオ』52-5）

(43) ＜松岡は商店街の福引きで当たる。係の人が特賞の袋を渡しながら＞

係の人: はい，オーストラリアの旅ですよ。楽しんで来てください。

松岡 :①えーッ，[øは] 海外旅行はどうも…②[øは] 飛行機が苦手だし…。

（弘兼憲史 「黄昏流星群」『ビッグコミックオリジナル』No.682）

(44) ＜精神分析療法の診療所に女がやってきて＞

女:さっきのお電話でお話しましたけど，あたし /[øは]，殺してしまったのですわ。

（星新一 「暑い日の客」『ノックの音が』講談社文庫）

(45) ＜ロッテはいつも図書館で見かけるきれいな女の子に話しかける。＞

ロッテ:一つ質問していい？ あなたみたいな人でも，悩み事なんてあるの？ あなたみたいなきれいな子は，すべて思い通りになるんじゃない？

ニナ :[ø] 何が言いたいの？

（浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』No.679）

(46) ＜風車売りから家に戻って来た義理の娘に＞

継母:①どこほっつき歩いてたんだい!? ②風車だって全然売れてないじゃないか!! ③今日は夕食ぬきだからね。④何だい，その目は!? ⑤[øは] 憎らしい子だねぇ。⑥涙ひとつこぼしやしない。

（森栗丸 「あじさいの唄 夏の終わりに」『ビッグコミックオリジナル』No.682）

(47)＜税金の取り立てに来た税務課の人に＞

男:①私はね，払いたいのはヤマヤマなんです。②でも，今年から税金が上がって…③それに，私事なんですがね，[øは] この前離婚しましてね，[øは] 慰謝料ごっそり取られて…。

（佐藤智一 「壁ぎわ税務官」『ビッグコミックオリジナル』 No.682）

(41)，(42)では，発話場面に存在するのは話者と聞き手の二人のみであり，かつ，聞き手自身の事についての質問なので，主語は聞き手以外考えにくい。(43)の松岡の発話は，係の人の発話に対するコメントである。そして，第一文目では，感情表現「どうも」という話者指向度の高い述語が用いられている。また第二文目は，前文に付加した理由付けであり，かつ，感情表現「苦手だ」という話者指向度の高い述語を用いていることから，主語は話者以外に考えにくい。(44)は，話者は聞き手に電話で発話内容を既に語っており，女の発話の内容は，話者と聞き手との共有知識になっている。そのため，「殺す」という行為を行った主体は他に考えられない。(45)のニナの発話は，直前の発話を受けて，反論を行っており，その主語は，文脈から明らかである。(46)の一連の発話は，眼前の聞き手の態度に対するコメントであり，第四文目もそのコメントが続いているので，主語は他に考えられない。(47)の第三文目では，「私事」という関係名詞の使用があり，また，受身表現「ごっそり取られて」という話者指向度の高い述語の使用から，主語は話者以外に考えられない。

•論理的唯一主格

次に，論理的唯一主格の例を見てみる。

(48)＜息子が交通事故に遭って＞

医者1:折れた骨が皮膚の外へ出ていました。従って当面は骨髄炎などの感染症に注意して，治療していきますので，入院していただくことになりますが…

父　:よ，よろしくお願い致します。

医者2:<u>お父さんが /[øが]</u> 一人で育ててらっしゃるのですか？

（弘兼憲史 「黄昏流星群」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(49)＜橋本は佐知代の，夫婦が分かれる理由は第三者にはわからない，という言葉を聞いて，＞

橋本1 :分からないといえば…あなたと辰さんが別れないでいるという事の方が，もっと他人のボクには分からない。

佐知代:あら，どうして？

橋本2 :言いかえると，[øが] 何故一緒にいるのですか？

(48)の医者2の発話は，敬語という聞き手指向度の高い述語を用いており，また「育てる」という述語情報から，主語は唯一的に決定される。(49)の橋本2の発話は，橋本1の言い換えであり，文脈から主語は明らかである。

以上，論理的唯一主題，論理的唯一主格は，共有知識や談話情報から他に主題を考えられないタイプであり，上に見るように，主語は言語化・非言語化ともに可能である。

6-4. 完全唯一主題／完全唯一主格

では次に，完全唯一主題／完全唯一主格のタイプを見てみる。完全唯一主題／完全唯一主格は，文脈，話者と聞き手のもつ知識などから述語部分で表される情報と結びつき得る対象が只一つしかあり得ない，もしくは，他者との関係がまったく問題とされていない場合に生起する。このような主語名詞句は，言語化されないのが自然である。

•完全唯一主題

先ず，完全唯一主題の例を見る。

(50) <道を歩いていて，デパートから出てきた社長夫人と出くわす。>

佐々木：お，奥様，[ø は]/ *私は 佐々木でございます!!

（やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(51) <副社長から佐々木に電話がかかってくる>

佐々木：①[ø は]/ *私は 分かりました!! ②[ø は]/ *私は すぐお伺いいたします!!

（やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(52) <前を走る人物を車で追っている。>

A：まだ [ø]/ *我々は 追いつけんのか!?

B：飛ばしてはいるんですが，いっこうに距離が縮まらないというか…。

（新田たつお 「サラ忍マン」『ビッグコミックスペリオール』 No.196）

(53) <みち子がダンの息子，ケニーを夕食に誘った後，送ってくる。玄関のベルの音がする。>

ダン　：お帰り，ケニー。

ケニー：ただいま，ダディ。

みち子：①今晩はダン，②[ø は]/ *私は 勝手に誘ってごめんなさい。

（やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(54) <繁華街を小走りに並んでやって来る健太とひなた。ひなたは有名な歌手。>

ひなた1：街中を歩く人の顔なんて，みんなそれほど気にかけないって言ったよね…？

健太1　：うん。[ø は]/ *俺 言った……。

ひなた2：ましてや日曜の公園通りを有名人が歩いてるわけないって，誰もが思うはずだって言ったよね…？

健太2　：[ø は]/ *俺 それも言った……。

（戸田山雅司 「7月7日晴れ」『月刊シナリオ』 52-5）

(55)＜健太はひなたのマネージャーの三ツ木に責められて，＞

三ツ木1:あなたは彼女を利用しようとした。

健太　:＜抗う＞ 僕は利用しょうなんて，そんなことは全然……ただ，あくまで個人的に…。

＜三ツ木，意外そうな視線を健太に送り＞

三ツ木2:①なら，[øは]/*私は お訊ねしましょう。②あなたが100%個人的な意志で彼女を発表会に誘ったのですか？

（戸田山雅司 「7月7日晴れ」『月刊シナリオ』 52-5）

(50)では，丁寧語の使用により，話者指向度が高く，かつ，ここでの発話意図は，他の人物との対比の下に，自分の名前を名乗っているのではなく，相手の注意を喚起することにある。よって，その他の人物がまったく問題となっていない。(51)の第一文目の，「分かりました」および第二文目の「お伺いします」という謙譲語は，話者指向度が高く，主語に話者以外くることができない。そして，一文目の発話も二文目の発話も，聞き手の要請に対する応答発話であり，かつ，他の人物はまったく問題としていない。(52)は，発話の現在，「追いかけている」という事実があり，その他の主語は考えられず，また，その他の人物はまったく問題とされていない。(53)のみち子の第二文目は，「てごめんなさい」の使用により，話者以外の人物を主語と解釈することができない。また，対比グループもまったく形成しない。(54)の健太1，健太2の発話は，各々，ひなた1，ひなた2の確認的質問に対する答えであり，かつ，「言った」という出来事が話者と聞き手の取り消し不可能な前提情報であるため，その他の人物はまったく問題とされない[7]。(55)の三ツ木2の第一文目は謙譲語を使用しており，かつ「しましょう」という話者指向度の高い述語を用いているため，話者以外の人物は主語にくることができず，かつこの発話において，話者以外の人物はまったく問題とされていない。

•完全唯一主格

次は完全唯一主格の例である。

(56)＜ダンスレッスン初日。教師はたま子。生徒は服部，杉山，田中の三人。パーティダンスからやろうと言うたま子に，＞

服部:ちょっと待って下さい。私は分かりますけど，この方々達初めてやったら，モダンもラテンもよう分からんのちゃいます？ ね！

＜小さく頷く杉山と田中。＞

たま子:①そう。②じゃあ [øは]/*私が 簡単に説明しときますね。

（周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』 52-2）

---

[7] 質問に対する答えは，第7章で詳しく考察する。

(57) <松岡は商店街の福引きで当たる。係の人は，特賞の袋を渡しながら，>
係の人1:はい，オーストラリアの旅ですよ。楽しんで来てください。
松岡1 :えーッ，海外旅行はどうも…飛行機が苦手だし…。
係の人2:あら，別に当たったご本人が行かなくてもいいのよ。ご家族の誰かにさしあげるとか…。
松岡2 :①じゃ，[ø が]/ *私が いただきます。②ただし，一枚でいい。

（弘兼憲史 「黄昏流星群」『ビッグコミックオリジナル』 No.682）

(56)では，ダンスを教えている教師はたま子だという前提があり，発話の現在，たま子は正にダンスの説明をしている。そしてここでは，他の人物をまったく問題としていない。(57)の松岡2の第一文目では，謙譲語「いただきます」という話者指向度の高い述語を用いており，かつ，この発話場面では，その他の人物を問題としていない。これら，他の人物をまったく問題としていない発話では，主語は言語化しないのが自然である。

7. 本章のまとめ

本章では，談話における主語の意味機能のタイプを提示した。そして，単文の1･2人称主語を対象として，この意味機能のタイプと省略とのかかわりについて考察を行った。

日本語の1･2人称主語は一般的に省略しやすいと言われている。しかし，本章の議論を通して明らかなように，1･2人称主語であれば一概に省略可能だ，と言うことはできない。主語の言語化・非言語化の振る舞いを決定する第一の要因は，談話における主語の意味機能である。そして，主語の意味機能のタイプをベースとして，主語の予測可能性に関わるファクターが働く。主語を省略しやすくさせるファクターにはいくつかあり，主語指向度，聞き手との情報の共有，主語の卓越性などがある。これらの要因の相互作用によって，主語の言語化・非言語化の振る舞いが決定される。

第 6 章　1, 2 人称主語の省略－複文－

1.　本章の目的

第 5 章では，単文における 1, 2 人称主語の言語化・非言語化の振る舞いについて考察し，省略の可否は，談話における主語の意味機能にコントロールされていることを示した。

この章では，複文に考察対象を移す。複文の中での省略を扱った先行研究には，中川裕志(1997)がある[1]。中川は複文の省略に関連して，主節の主語と従属節の主語の一致・不一致を，計算機処理の観点から論じている。中川の研究は計算機での処理可能性という立場からのものであって，一文単位を考察対象としており，文脈情報や知識常識をどう計算機処理に取り入れていくかは今後の課題だと述べている。これに対し本稿では，談話を対象とし，文脈情報や常識，知識までも扱える理論の構築を目指して，従属節における主語の言語化・非言語化の振る舞いについて考察していきたいと思う。

2.　従属節の構造

2-1.　従属節の階層

従属節について考察を行う場合，従属節の階層構造を考慮する必要がある。

南不二男(1974)は「従属句」の階層を，描述や判断といった意味機能に基づいて設定し，その内部に現れ得る成分について論じている。以下の表は，南の挙げている従属句の構成要素のうち，本稿の議論と関係のある部分のみを抜き出したものである(pp.128-129)。

構成要素＼従属句の種類		A ～ナガラ(継続)	A ～ツツ	A ～テ1	A 連用形反復	A ～連用形(形容詞・形容動詞)	B ～テ2	B ～ト	B ～ナガラ(逆説)	B ～ノデ	B ～ノニ	B ～バ	B ～タラ	B ～ナラ	B ～テモ	B ～テ3	B ～連用形2	B ～ズ(ズニ)	B ～ナイデ	C ～ガ	C ～カラ	C ～ケレド	C ～シ	C ～テ4	C ～連用形3
述語的部分以外の要素	名詞+格助詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	主語(～ガなど)	−	−	−	−	(+)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	提示のことば(～ハなど)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	+	+	+	+	+	+

また野田尚史(1996:171)は，南不二男の従属句の分類をもとに，従属節を次のように四種類に分類している。

---

[1]中川の研究は，コンピュータ言語学の立場から行われたものであるが，管見によると，談話研究，テクスト研究において，日本語の複文における省略を扱った研究は見当たらない。

種類	代表例	「が」	「は」
従属句	付帯状況句（～ながら，～まま，～て） 継起句（～て，～〔連用形〕）	×	×
強い従属節	継起節（～と，～たら，～て，～〔連用形〕） 仮定節（～たら，～(れ)ば，～と，～ては，～ても） 様態節（～ように，～ほど） 時間節（～とき，～まえに，～あとで，～まで） 連体修飾節（～〔名詞〕） 名詞節（～こと，～の，～か） 理由節(1)（～ため，～て，～から〈焦点〉，～ので〈焦点〉，～のに〈焦点〉）	○	×
弱い従属節	理由節(2)（～から，～ので，～のに） 並列節（～て，～〔連用形〕，～し，～けれど，～が）	○	○
引用節	引用節（～と，～って）	○	○

＊「継起句」は従属節と主文の主格が同じもの。
＊「継起節」は従属節と主文の主格が違うもの。

従属句は南のA類，強い従属節はB類，弱い従属節はC類にほぼ対応している。南との違いは，南の扱っていない連体修飾節や引用節，「～とき」「～ため」などの節をとりあげていることである。そしてもう一つ，南が「～ので」と「～のに」をB類，「～から」をC類にしているところを，野田は，焦点になっているときは強い従属節（南のB類），焦点になっていないときは弱い従属節（南のC類）に入れている点にある。焦点とは相手に伝えたい焦点であり，典型的には「どうして」や「なぜ」という質問に答える文である。

従属節内での「は」と「が」の関係について野田は，次のように述べている（pp.169-188）。

従属句の内部には「は」も「が」も現れず，「～は」「～が」が現れているものは従属句の外で，主文の主格である。そのため「は」「が」の使い分けは単文の場合と同じとなる。

強い従属節は，主文への従属度が高い従属節で，「～たら」のような仮定節や連体修飾節が代表である。強い従属節は内部に独自の主題をもつことができないので「は」が使われず「が」が用いられる。ただし，従属節の主格と主文の主格が同じ時は，ほとんど「は」が使われる。このときの「～は」は主文のものである。

一方，弱い従属節は，従属度が低く，独立度が高い。弱い従属節の中で「は」を使うか「が」を使うかは，基本的には単文の使い方と同じである。ただし，従属節の主格と主文の主格が同じときは，ほとんど「は」が使われる。このときの「～は」は従属節の中のものだと考えられる。

上の表に見るように野田は，「ので」「のに」「から」を焦点という観点から，二つのタイプに分けている。しかし，実例に当たってみると，焦点になっているか否かをどのように客観的に判断するか，その基準は一義的に求められない。そこで本稿では，焦点か否かという基準ではなく，文末にきて，次の発話との間にポーズが認められ，そこで一つの発話を終了させていると判断できる「ので」「のに」についてはC類に入れ，発話が終了していない場合にはB類に入れることにする。また，「から」については，南に従い，すべてC類に含める。そして，南の扱っていない「～とき」「～た

め」節を，野田に従い，B 類の中に入れることにしたい。なお，本稿での以下の議論は，南の用語を用いることにする。

2-2.　従属節と主節の主語

以上，南と野田の考察を出発点とし，従属節の中の主語について考察する。しかし本稿では，南や野田が示しているように，C 類の従属節であれば主題，主格ともに現われ得，B 類の従属節であれば対比あるいは主格が現われ得る，と一律に言えるわけではないことを示していく。

次の例を見てみよう。

(1)＜夫が会社をクビになったらどうするかと聞かれて，＞
みち子：あたしはパートでもなんでもやって，[ø]　彼を助けるわ。

（やまさき十三「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』No.679）

(2)＜久しぶりに帰って来た息子に＞
母 1：久，いつ迎えに来てくれるんだい？
久　：え？
母 2：[ø]　おまえに呼ばれたら，[ø]　いつでも東京行く気でいるんだよ。

（石坂啓「アイ'ム ホーム」『ビッグコミックオリジナル』No.684）

(3)＜ロッテは学校の廊下でカールをダンスパーティに誘う＞
カール：ダンスパーティー？
ロッテ：そ…そうなのよ，こういうのあたし，あんまり趣味じゃないんだけど，[ø]　友達に無理に売りつけられちゃって。

（浦沢直樹「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』No.679）

(1)，(3)は，主節の主語が言語化されておらず，(2)は，主節の主語も従属節の主語も言語化されていない。では，(1)～(3)の主節および従属節の主語を，どちらも言語化してみる。

*「↔」の記号は，冗長性から，言語化はどちらか一方でなければ不自然であることを示す。

(1')みち子：[あたしは]　パートでもなんでもやって，↔[あたしは]　彼を助けるわ。

(2')母 1：久，いつ迎えに来てくれるんだい？
　久　：え？
　母 2：[私は]　おまえに呼ばれたら，↔[私は]　いつでも東京行く気でいるんだよ。

(3')カール：ダンスパーティー？
　ロッテ：そ…そうなのよ，こういうの　あたし，あんまり趣味じゃないんだけど，↔[あたし]　友達に無理に売りつけられちゃって。

上の三例はすべて，主節の主語と従属節の主語が同一指示である。その両方を言語化すると，不自然となる。三例はこのように表面上同じように見える。ところが，従属節の階層構造を考慮すると，内部構造が異なっている。

南と野田の説明に従えば，(1)の「て」節は A 類，(2)の「たら」節は B 類，(3)の「けど」節は C 類に属する。A 類の従属節内には主格も主題も表れ得ないが，B 類の従属節内には主格は現れることできる。C 類の従属節内には主格も主題も現れることができる。従って主語が同一指示であり，表面的には同一指示名詞句が削除されなければならないように見える(1')～(3')は，次のように各々構造が異なっている。

*「i」の記号は，同一指示を表わす。

A 類

(1')［あたし i は］〔［ø i］パートでもなんでもやって］，〔［あたし i は］彼を助けるわ。

B 類

(2')［私 i は］〔［ø i］ おまえに呼ばれたら］，〔［私 i は］ いつでも東京行く気でいるんだよ］。

C 類

(3')〔こういうの あたし i，あんまり趣味じゃないんだけど］，〔［あたし i］友達に無理に売りつけられちゃって］。

A 類の(1')は，従属節内に主格も主題も現われることができず，文頭に現れる主題は，主節内の主題が文頭へ前置化されたものである。B 類の(2')は従属節内部に独自の主題をもつことができず，文頭に現れる主題は，主節の主題が文頭へ前置化されたものである。C 類の(3')で，従属節内の主題は，従属節独自のものであるが，従属節と主節の主題が同一指示であり，冗長性から，どちらかの主題を省略しなければ不自然となる[2]。

野田は，強い従属節(南のB類)の主格と，主文の主格が同じ場合は，ほとんど「は」が使われ，このときの「は」は主文のものだと述べている。ところが，次の例は，主格が出現可能な B 類の「たら」節であり，従属節内の主語と，主節の主語と同一指示であるが，両者言語化しても，(1')～(3')ほど不自然だと感じられない。また，同一指示の連続から冗長性を感じるというのであれば，

---

[2] 主節，従属節ともに，同一指示の主題の連続である場合，冗長性から，どちらか一方しか言語化できない。この制約は，次の例に見るように，一・二人称に限らない。

(例)＜豊子はダンス教師の舞を見ながら，＞

豊子：彼女はね，こうして遠くの方から見てるのが最高なの。今はリーダーと別れちゃったから，↔［彼女は］ ここで教えてるけど，↔［彼女は］ 本当だったら競技会とデモンストレーションに忙しくてそんな暇ないんだから。

（周防正行「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』52-2）

省略すべきは主節の主語の方だと思われる。(4)と(4')を比較してみよう。

(4)＜健太は同僚に，歌手のひなたとデートする仮定の話をして，＞
健太：なあ……もし，もし仮に，万が一…［ø が］望月ひなたとデートすることになったら……
［ø は］どうすればいいと思う？

（戸田山雅司「7 月 7 日晴れ」『月刊シナリオ』52-5）

(4')なあ……もし，もし仮に，万が一…［俺が］望月ひなたとデートすることになったら……［俺は］どうすればいいと思う？

また，次の(5)と(5')を比較してみよう。

(5)＜渓流でフライフィッシングをしている健太。手元にかかった小魚を引き寄せて，＞
健太：いいか，［ø］助けてやるから，今度はお前のパパを連れてこいよ。

（戸田山雅司「7 月 7 日晴れ」『月刊シナリオ』52-5）

(5')いいか，*俺 / *俺が / *俺は 助けてやるから，今度はお前のパパを連れてこいよ。

「から」節は南の C 類に入る。C 類は主格も主語も出現可能である。しかしながら，(5')に見るように，従属節内の主語はどのような言語形式であっても言語化すると不自然である。たとえ，野田の言う強い従属節（南の B 類）だと考えたとしても，主格が現われることができないのは説明できない。とすると，従属節内の主語の言語化・非言語化は，単に従属節の階層構造だけでは説明できないということになる。

2-3. 本稿の仮説

野田（1996：6）が，「一般に，複文の主文のほうは，単文と同じ性質をもっている。しかし，従属節のほうは，単文とは違う性質をもつていることがよくある」と述べているように，主節における主語の言語化・非言語化の振る舞いは，単文と同じ原理にコントロールされていると考えてよい。一方，従属節の中の主語の現われ方については，二つの問題を考えなければならない。すなわち，主語名詞句の現われ方は，先ず一次的制約として，従属節の階層構造によって規定される。そしてその制約の下に，談話における主語の意味機能によって，主語の言語化・非言語化の振る舞いが決定される。第 5 章で，単文における主語の言語化・非言語化は，主語の意味機能によって規定されることを示したが，本稿では，主語の意味機能と省略の関係が，基本的に従属節の主語にも当てはまると主張する。このように，主語の意味機能を考慮しなければならない根拠は，先の例(4')(5')から支持される。(4')は B 類の「たら」節だが，同一指示の主節の主語と従属節の主語を両方とも言語化しても，(1')～(3')ほど不自然ではない。また，(5')の「から」節は C 類であり，原理的には「が」主格も「は」主題も生起可能なはずである。にもかかわらず，(5')の従属節の主語はどのような言語形式であっても言語化不可能であるからである。

そこで本稿では，従属節のタイプと，主語の省略との関わりを次のように考える。

A類の従属節：主格も主題も現われ得ないので，省略の可否という問題は成立しない。

B類の従属節：対比と主格が現われ得るが，省略の可否は，主語の意味機能によってコントロールされる。

C類の従属節：主格，主題とも現われ得るが，省略の可否は，主語の意味機能にコントロールされる。

第5章で，主語の意味機能のタイプと省略の関係を示したが，それをもう一度ここに挙げておく。そして，この関係が，従属節の主語にも当てはまるという本稿の仮説を，次節以降，主語の意味機能のタイプごとに検証していく。

主語の意味機能	完全対比主題 完全排他主格	相対対比主題 相対排他主格		論理的唯一主題 論理的唯一主格	完全唯一主題 完全唯一主格
		予測不可能	予測可能		
省略の可否	言語化		言語化・非言語化ともに可能		非言語化

3. 検証

先ず，従属節の中に，主格も主題も現われ得るC類の従属節から見ていく。C類は，南，野田に従うと，主格も主題も出現可能なはずである。基本的にはそうであるが，この節で検証していくように，主語を言語化できない場合もある。また反対に，主語を必ず言語化しなければならない場合もある。主語の言語化・非言語化の振る舞いは，談話における主語の意味機能にコントロールされている。ここではC類に属する従属節のうち，「から」「時」「けど」「が」「て4」「のに」「ので」の例を挙げる。

3-1. 完全対比主題／完全排他主格

最初に，完全対比主題／完全排他主格のタイプから見る。完全対比主題／完全排他主格は，主語になり得る対象が，他に存在することが言語的に明らかに示されている中で，その他の情報要素ではなく当該の情報要素を選択する。このタイプは，主語が言語化されるのが自然である。

•完全対比主題

(6)加藤：橋本さんと山下さんと，どちらが年上ですか。

橋本：山下さんは /*[øは] 20歳ですが，私は25歳です。

(7)＜山下は，共働き夫婦の田中に，＞

山下：田中さん夫婦は共働きですよね。家事とか子供の世話とか，どうしてるんですか。

田中：妻は /*[øは] 朝に強いんですけど，私は朝に弱いんです。だから，二人で仕事を分担

してます。

(6)では,「山下さん」と話者の「私」が,(7)では「妻」と「私」が言語的に対比されている。このような場合,上の例に見るように,主語は言語化される。

•完全排他主格

(8)上田:山田さんと橋本さん,どちらがこの件を担当することになったのですか。

橋本:私が /*[øが] 担当することになりましたから,山田さんはこの件から外れます。

(9)橋本:今日の日本とロシアの試合,結果どうだった。

宮沢:日本が /*[øが] 勝って,ロシアが負けた。

(8)は話者の「私」と「山田さん」が,(9)は「日本」と「ロシア」が言語的に排他グループを形成する。そして,主語は言語化される。

3-2. 相対対比主題／相対排他主格

次に,相対対比主題／相対排他主格のタイプを見る。相対対比主題／相対排他主格は,間接的,非明示的であるが,対比グループ,排他グループを形成する。相対対比主題／相対排他主格のうち,主語が予測できる場合は,言語化・非言語化ともに可能である。ただし,第5章の単文の考察で述べたように,予測可能な主語は,言語化・非言語化ともに可能であるが,言語化した場合,対比や排他の意味が強く出る。一方,主語が予測不可能な場合,省略は不可能である。では,主語が予測可能なタイプから見ていく。

3-2-1. 予測可能

•相対対比主題

次は,相対対比主題の例である。

(10)<ロッテは学校の廊下でカールをダンスパーティに誘う>

カール:ダンスパーティー?

ロッテ :そ…そうなのよ,こういうの あたし /[øは],あんまり趣味じゃないんだけど,友達に無理に売りつけられちゃって。

(浦沢直樹「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』No.679)

(11)<浜崎はクビだと本部長に言われて,>

浜崎:①だって…現に年俸制が敷かれているアメリカなら分かるけど,日本で本部長にクビって言われて,オレが「はい,さようですか」って納得すると思う? ②そっりゃ [øは] 喜んで辞めたって構わないけどオレの場合,退職金3億 は必要スよん。

(やまさき十三「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』No.679)

(12)<みかげの仕事場に,一人の女性が尋ねてくる。>

みかげ 1:失礼ですが，どちら様ですか？
真美　　:奥野です，ちょっと話があって来ました。
みかげ 2:①申し訳ありませんが，[ø は]　今は仕事中ですので……②夜にでも自宅の方に電話していただけませんか？

（森田芳光「キッチン」『月刊シナリオ』45-12）

(10)は，2-2 節で挙げた(3)の例である。ロッテの発話には，他の人はダンスパーティが好きかも知れないが，自分については，といった対比的意味合いが含まれる。また 2-2 節で示したように，主節の主語は従属節の主語と同一指示であるが，この対比的意味の存在から，両方の主語を言語化したとしても，まったくの許容不可というわけではない。そして，感情表現「趣味じゃない」という話者指向度の高い述語が用いられていることから，主語は予測可能である。(11)は，その他の社員あるいはその他一般の人々と話者とが対比されている。そして，感情表現「構わない」による話者指向度の高さから，主語は予測可能である。(12)みかげ 2 の第一文目における「ので」節は，発話間に途切れがあるので，C 類に入れる。ここでは，話をしに来た真美と仕事中のみかげが対比されている。そして，みかげが仕事中であることは場面から明らかであり，主語は予測可能である。

•相対排他主格

次に相対排他主格の例を見る。

(13)＜健太は同僚に，歌手のひなたとデートする仮定の話をして，＞
健太:なあ……もし，もし仮に，万が一…[ø が]　望月ひなたとデートすることになったら……どうすればいいと思う？

（戸田山雅司「7 月 7 日晴れ」『月刊シナリオ』52-5）

(14)＜健太はひなたが有名な歌手だと知らなかった。ひなたは健太を誘い，高級レストランを貸切で食事をする。健太は緊張のあまりソースをこぼしかけたり，ドジをする。それを見て，ひなたが笑うと，＞
健太 1　:からかってんだ……。
ひなた 1:＜笑いが止まる＞……え？
健太 2　:『知らない』って言ったからだろ。
ひなた 2:①からかおうなんて思ってなかった…。②ただ，『知らない』って言われてちょっと気になって…③[ø が]　電話くれたからそれで…④とにかく，ごめんなさい…。

（周防正行「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』52-2）

(15)＜杉山はダンスホールにはじめてやって来る。栄子は杉山を見て，＞
栄子:①あんた，せっかく，踊りにきたんでしょ。②こんなとこ立っててどうすんの。③ね，[ø が]　教えてあげるから，一緒に踊ろ。

（周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』 52-2）

(13)は2-2節で挙げた(4)の例である。ここでは，デートをする主体として話者が選ばれている。そして，「万が一」という仮定を示す語句の使用，主節の「どうすればいい」という述語から，主語は予測可能である。(14)のひなた 2 では，連絡をする可能性が話者にも聞き手にもあったが，自分ではなく，聞き手の方が電話をくれたという共有知識が，話者と聞き手の排他グループを作る。そして，第三文目は「くれる」という話者指向度の高い述語を用いており，主語は予測可能である。(15)では，発話場面には大勢の人間がいて，杉山にダンスを教えてあげられる人は他にもいる。この文脈情報が，その他の人と話者との排他グループを形成する。そして，第三文目は「あげる」という話者指向度の高い述語を使用しており，主語は予測可能である。

これら相対対比主題／相対排他主格は，もともと対比や排他の意味合いをもっており，主語を言語化すると，対比や排他の意味合いが一層強くなる。

3-2-2. 予測不可能

相対対比主題／相対排他主格のうち，それまでの文脈や場面から，述語と結びつき得る主語についての情報がなく，聞き手が述語と結びつく主語を予測できない場合は，主語を言語化しなければ不自然となる。

•相対対比主題

(16) ＜鐘野と石上は税務官。税金滞納者のもとへ取り立てにやってきて，ネクタイを引き締める同僚の石上を見て，鐘野は，＞

鐘野：君は /*[ø は]，顔にしまりがないからさ，むしろ，敵に笑顔で接した方がいいと思うんだなあ。

（佐藤智一 「壁ぎわ税務官」『ビッグコミックオリジナル』 No.682）

(17) ＜息子が教師に反抗したと知らされた親が，学校に文句を言いに来る。＞

大政：うちのタケルはやさしい人間なんです。虫さえも逃がしてやる，そんなやさしい人間が，それだけ怒ったということは，教師側に問題あるんじゃないですか。

校長：うちは /*[ø は] 質のいい教師がそろっていまして，全国的にも評価を受けています。

(18) ＜街行く女性を見ながら＞

①ブーツ履いてる人が多いね。②私は /*[ø は] 足が太いから，ブーツは似合わないわ。

(16)では非明示的であるが，聞き手と，その他の人が対比されている。そして，「顔にしまりがない」という描写は，話者の主観的判断であり，聞き手と共有されていない情報であるため，主語の予測は不可能である。(17)の校長の発話は，その他の学校と「うち」とが対比されている。そして述語部分は，聞き手と共有されていない情報をあらわしており，主語の予測は不可能である。

(18)では，話者とその他の人々が対比されている。そして，「足が太い」という描写は，初出情報であり，話者の主観的判断であるため，聞き手には主語の予測ができない。

•相対排他主格

(19)＜みち子はダンに，どうして離婚せずに夫と一緒にいるのかと聞かれて，＞

みち子：①あの人と結婚しようと決める前に，ひとつだけ自分に確かめたことがありました。②もし，あたしが／???[øが] 大病して何年か入院した時，気持ちに無理なく，あたしのことを面倒見てくれるかしら？ ③もし，この人が大病した時，私も気持ちに無理なくこの人の面倒を見てあげられるかしら？…④この事に確信が持てたとき，結婚しようと思ったのです。

（やまさき十三「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』No.679）

(20)＜佐々木は浜崎に話があって，浜崎と飲みにやって来る。途中話が横にそれた後，何の話かと聞かれて＞

佐々木：①おう，そうだった!! ②お前が／???[øが] あまりトンチンカンな話をするから 酔っぱらってしまったんだ。

（やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』No.679）

(19)の一連の発話における人物情報は，夫と話者の二人である。そして，みち子の第二文目の発話で，「大病して入院する」という情報は，初出であるため，主語が省略されると，潜在的に主語となり得る主体が，夫と話者の二人存在するため，主語を唯一的に決定できない。(20)では，話者ではなく聞き手が，という排他的意味合いをもち，そして，第二文目の「トンチンカンな話をする」という描写は，初出情報であって，かつ，話者の主観的判断であり，聞き手には主語の予測は不可能である。

3-3. 論理的唯一主題／論理的唯一主格

次に，論理的唯一主題／論理的唯一主格のタイプを見る。

•論理的唯一主題

(21)＜大味のところへ税金を取り立てにやってきた国税局の不破が大味は何ももつていないのを知って，＞

不破：①いいか，大味さんっ!! ②私はあきらめない。③金がないなら，作ってもらう！ ④毎日，[øは] 店が終わるたびに行くから，少しずつでも払ってもらうよ，いいね。

（佐藤智一 「壁ぎわ税務官」『ビッグコミックオリジナル』No.682）

(22)＜同僚と中国広州へ旅行へ来て，＞

A1：さて，今夜は何を食えるのかな？ 楽しみだな。

B1：“食は広州にあり”と言うけれど本当だね。中華料理ばかり毎日食べても飽きないものね。

C1：そうかねえ？ 香港と比べりゃ，どうってことないんじゃないの？ それに出てくる料理がどれも変わりばえしなくてさ…。

A2:お，言うじゃないか！

C2:[øは] せっかく広州に来たんだから，広州でなければ，というものを食べたいねえ。

（雁屋哲「美味しんぼ」『ビッグコミックスピリッツ』No.663）

(23)＜杉山は，ダンスホールに遊びに行く。そこで，ダンス教室の教師，たま子に会う。＞

たま子:①やだ。②私，ここでアルバイトしてんのよ。③一人もんでしょ，④レッスンない日はすることないし，[øは] 踊らないのも寂しいから，ここでダンサーしてるの。

（周防正行「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』52-2）

(24)＜みかげは，雄一の家を出て行った後，久しぶりに雄一に連絡をする。そこで，雄一の母が入院したことをはじめて聞かされて，＞

みかげ:でも連絡ぐらいしてくれても……。

雄一 :①僕は，初めて一人暮らしをしている。②みかげも絵理子もいなくなって [øは] とても寂しいけど……みかげは料理でガンバッテるし，一人になっちゃったって電話出来ないだろ…③僕も強くなりたいし……。

（森田芳光「キッチン」『月刊シナリオ』45-12）

(21)では，税金を取り立てる人物の方が大味の店へ行くという前提が存在する。そして，第四文目の「行く」という話者指向度の高い述語の使用から，主語は唯一的に決定できる。(22)では，話者と聞き手が広州に来たという出来事は事実であり，話者と聞き手との取り消し不可能な前提情報である。それ故，主語は唯一的に決定できる。(23)では，第二文目のはじめに，「私」という話者を指示する主語が言語化され，続く発話は，話者を主語として連なっている。また，第四文目の「から」節で，感情表現「寂しい」という話者指向度の高い述語を使用していることから，主語は唯一的に予測される。(24)では，第一文目の「初めて一人暮らしをする(こと)」と第二文目の「寂しい(こと)」の間には因果・事情説明という情報のリンクが存在する。この情報のリンクおよび「寂しい」という話者指向度の高い述語の使用から，主語は唯一的に予測可能である。

•論理的唯一主格

(25)＜照雄は典子に今日，忙しいと言っていた。典子は一人で映画を見に行って，帰ってくる。＞

照雄:えーっ，一人で映画見に行っちゃたの？

典子:①うん。②[øが] 今日は忙しいって言ってたから，一緒に行くのは無理だと思って…。

(26)＜夜，犬のタローの様子がおかしくなって。＞

今朝，[øが] 餌をやったとき，タローは何ともなかったけど…。

(25)は，照雄が忙しいと言ったことは，話者と聞き手との共有知識であり，この共有知識から，主語は唯一的に決定できる。(26)では，「餌」は人間から動物へやるものだという知識のリンクの活用，および，「やる」という話者指向度の高い述語の使用から，主語は唯一的に決定できる。

3-4. 完全唯一主題／完全唯一主格

次に，完全唯一主題／完全唯一主格のタイプを見てみる。このタイプは文脈上，主語となり得るその他の人物がまったく存在しない，あるいは話者はその他の人物をまったく問題としていない。このような完全唯一主題／完全唯一主格は，主語を言語化すると不自然である。

•完全唯一主題

(27) ＜みかげは，引越しの準備をしている。そこに大家が入ってくる。＞

みかげ 1：大家さん……。

大家 1　：どうです？

みかげ 2：借り手が見つかったみたいですね。

大家 2　：①そうなんだよ，みかげちゃん……②[ø は]/ *私は　品がいい家族なんでいいかなと思ったんだけど……③みかげちゃんの方がまだ都合悪いなら何とかのばしてみるけど……。

（森田芳光「キッチン」『月刊シナリオ』45-12）

(28) ＜茂はひさしぶりにみかげに電話をする。＞

茂の声 1：一人で何やってんだよ……。

みかげ 1：この家出るの……もうこの部屋，電話ぐらいしかないんだよ……。

茂の声 2：何だ，アブナイとこじゃないか，このまま連絡とれなかったら……ひどいな。

みかげ 2：ひどいなって……＜そういう関係じゃもうないじゃないのニュアンス＞。

茂の声 3：[ø は]/ *みかげは　忙しいようだけど……ちょっと会わないか。

（森田芳光「キッチン」『月刊シナリオ』45-12）

(29) ＜雄一は，みかげに自分の家に越してくることをすすめる。みかげに部屋を見せて，＞

雄一 1：ここが君の部屋っていうのは，どうかな？　もちろん，レイアウトなんて全然かえちゃっていいし，ベッドが気に入らなければ，取り替えてもいい……。

みかげ：ここで，本を読まないの……。

雄一 2：[ø は]/ *僕は　読むつもりだったんだけど，リビングで寝ころびながら読んじゃう。

（森田芳光「キッチン」『月刊シナリオ』45-12）

(30) ＜A は B の携帯電話に電話をして，＞

花子：今どこ？

太郎：[ø は]/ *僕は　もう家の前だから，今から入るよ。

(27) で，借り手を決定する決定権は大家にしかない。そのため，大家 2 の第二文目の「いいかなと思う」主体は他の誰とも対比グループを形成し得ず，また，他の人物はまったく問題とされない。(28) では，人物情報は話者と聞き手のみである。そして茂の声 3 において，話者はみかげ以外の

人物をまったく問題としていない。(29), (30)は，質問に対する応答発話であるが，この発話状況において話者は，その他の人物をまったく問題としていない。

•完全唯一主格

(31)＜渓流でフライフィッシングをしている健太。手元にかかった小魚を引き寄せて，＞

健太:いいか，[ø]/*俺 /*俺が　助けてやるから，今度はお前のパパを連れてこいよ。

（戸田山雅司「7 月 7 日晴れ」『月刊シナリオ』52-5）

(32)＜子供の宿題を見てほしいと妻に言われて，＞

ワタル:①ああ，[ø は]/*僕が 後で見てあげるけどちょっと待ってくれよ。②僕も急いでやらなくちゃならない宿題があるんだ。

（西岸良平「三丁目の夕日　宿題」『ビッグコミックオリジナル』No.682）

(33)＜息子が交通事故に遭って，医者がレントゲン写真を見ながら，＞

医者:①右足の脛の骨が二本とも折れております。②とりあえず，[ø]/*私が 応急処置をほどこしておきましたが，腫れがひきしだい手術を必要とします。

（弘兼憲史「黄昏流星群」『ビッグコミックオリジナル』No.679）

(34)＜俳優の南条は自動車学校の合宿所にやってくる。宿泊部屋を見て，あまりの狭さに付き人の服部が＞

服部 1:どこか遠くてもちゃんとしたホテルを探してきましょう。

南条　:行くな服部！　オレは楽しみながら，免許がとれるとは思ってないぜ……ここでガンバるよ……どうせ地の果てまで来たんだ。オレ一人でガンバらせてくれ。

服部 2:①本当にだいじょうぶですか？　②もし [ø]/*南条さんが ダメだったらスグでんわして下さい。

（森田芳光「免許がない！」『月刊シナリオ』50-3）

(31)は先程の 1 節で挙げた(5)の例である。ここで，健太は「やる」という話者指向度の高い述語を用いている。そして，発話場面において，「助ける」人物は話者のみであって，その他の主語となり得る人物はまったく存在しない。(32)のワタルの第一文目は，聞き手の要請に対する返答であり，「てあげる」という話者指向度の高い述語が用いられている。そしてここでは，主語以外のその他の人物が，まったく問題とされていない。(33)の医者の第二文目において，「ておきました」という話者指向度の高い述語が用いられている。そして，応急処置をしたのが誰であるかは，話者と聞き手との前提であり，共有知識であり，その他の人物は，まったく問題とされていない。(34)の服部 2 の第一文目の「だいじょうぶ」と第二文目の「ダメだ」の間には帰結という情報のリンクが存在することから，主語は予測可能である。そしてここでは，聞き手以外のその他の人物はまったく問題としていない。

以上のように，主語となり得るその他の人物がまったく存在しない，あるいは，その他の人物をま

ったく問題としていない，完全唯一主題／完全唯一主格は，主語を言語化すると不自然となる。

4. B 類の従属節

この節では，B 類に属する従属節について考察する。南，野田に従うと，B 類の従属節内部に現われることができるのは，対比あるいは主格である。しかしながら，本稿で示していくように，主格あるいは対比であれば一律に言語化できるというわけではない。B 類の従属節における主語の振る舞いはC類と同様に，談話における主語の意味機能にコントロールされている。ここではB類の従属節のうち，「たら」「なら」「のに」「ば」「ても」「と」，そして理由・原因・継起・並列な動作状態を表わす「て」の例を挙げる。

4-1. 完全排他主題・完全排他主格

南は，B 類の従属節内に，主題は現われることができないが，対比の意味の主語は現われることができると述べている。そこで先ず，完全対比主題の例から見てみる。

•完全対比主題

(35)あなたは /*[ø は]　それで納得できても，わたしは納得できない。

(36)私は /*[ø は]　手紙をもらえなかったのに，彼は私が嘘をついたと誤解してるの。

(35)では，「あなた」と「わたし」が，(36)では「私」と「彼」が言語的に明白に対比されており，従属節内には「は」を伴う主語が言語化されている。そして，この主語の省略は不可能である。

•完全排他主格

(37)あんたが /*[ø が]　1,000 万円出すつもりなら，わたしは 1,500 万円出すよ。

(38)君が /*[ø が]　来れば，彼女が嫌がる。

(37)では，「あんた」と「わたし」が，(38)では「君」と「彼女」が言語的に明白に排他グループを形成し，主語は言語化されるのが自然である。

4-2. 相対排他主格

次に，相対排他主格のタイプを見る。相対排他主格は，主語が予測可能か否かによって，その言語化・非言語化の振る舞いも異なる。相対排他主格のうち，先ず，予測可能な例から見る。

4-2-1. 予測可能

次は，主語が予測可能な相対排他主格の例である。

(39)＜一度盗みに入った泥棒が戻ってきて，泥棒に「おれを泥棒だと言ってくれ」としつこくせがまれて，＞

順平：[ø が]　それで気がすむのなら，言ってもいい。

（星新一「盗難品」『ノックの音が』講談社文庫）

(40)＜本部長の佐々木は，浜崎と飲んでいて，一瞬夢想する。ハッと我に帰り，＞

佐々木1:ここはどこ？ なんでお前がここにいるの？

浜崎 :①やだなぁ，本部長!! ②料亭で一人でクイクイ飲んで酔っぱらっちゃって。③[ø が] ここじゃ話にならんから場所変えよって，ここに来たんじゃないスか。

佐々木2:おう，そうだった!!

（やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(41) <撮影に家を使わせてほしいと政治家の荒山のもとへプロダクションの経営の女性がやってきて>

江川:門の表札を拝見しますと，有名な政治家の荒山先生。お忙しい方なので無理とは思いましたが，一応お願いだけしてみようと…。

荒山:なるほど。

江川:[ø が] おいやでしたら，ほかの家を探しますけど，いけませんでしょうか，先生。

（星新一 「感動的な光景」『ノックの音が』 講談社文庫）

(42) <鐘野と不破は二人で税金の取立てに行って，>

鐘野:①君は，顔にしまりがないからさ，むしろ，敵に笑顔で接した方がいいと思うんだなあ。②でねっ，僕が /[ø が] こう，どっか指さしたら，その方角を見て笑ってほしいんだ。

（佐藤智一 「壁ぎわ税務官」『ビッグコミックオリジナル』 No.682）

(39)の人物情報は，話者と聞き手の二人であり，話者と聞き手が排他グループを形成する。そして，「しつこくせがむ（という行為）－気がすむ」の間には帰結という情報のリンクが存在し，また，主節の「てもいい」という話者指向度の高い述語の使用から，主語は予測可能である。(40)の浜崎の第三文目では，話者ではなく，聞き手が言い出したという前提があり，それが話者と聞き手の排他グループを形成する。そして発話時点において，聞き手は一瞬状況がつかめなくなっただけであり，本部長である聞き手が場所を変えようと言ったことは，話者と聞き手の共有知識であるため，主語の予測は可能である。(41)では，頼み事をする話者と，それが嫌かもしれない聞き手とが排他グループを形成する。そして，「お願い－おいや」の間には帰結という情報のリンクが存在し，また，従属節では敬語が使用されていることにより，主語が予測可能である。(42)の発話場面では，人物情報は話者と聞き手の二人のみであり，この二人が排他グループを形成する。そして第二文目では，従属節に「こう」という話者の視点からの方向性を指す語句が使用され，主節には「てほしい」という話者の視点を示す話者指向度の高い述語が用いられていて，従属節の主語は予測可能である。

4-2-2. 予測不可能

次は，予測不可能な相対排他主格の例である。

(43) <ケニーは，友達の家から帰ってきて，父親に>

ケニー:ダディ, もし ボクが /*[øは] イケないことをしたら, お仕置きに押し入れに入れていいんだよ。

(やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.681)

(44) <佐々木は, ダンの改革案について話をする。>

佐々木:①さっそくダン提案は役員会に提出されて, ②一部守旧派の反対があったが, ③私が /*[øが] 強力に支持して, ④結果的にダン提案は前向きに推進されることとなった。

(やまさき十三 「釣りバカ日誌」『ビッグコミックオリジナル』 No.679)

(43)の主語は, 「このボクが」という排他的意味合いをもつ。そして, 従属節の述語「イケないことをする」は, 初出の情報であり, 話者と聞き手の間では共有されておらず, 主語は予測不可能である。(44)の第三句目の主語は, その他の人物ではなく「私が」という排他の意味合いをもつ。そして, 第一・二句内で, 「役員会」「保守派」と主語となり得る候補が存在し, 「私」は初出情報であるので, 主語を言語化しなければ, 予測不可能となる。

4-3. 論理的唯一主格

次に, 論理的唯一主格のタイプを見る。

(45) <妻を忘れてしまった夫を医者に見せて, 昨日の出来事を説明する。>

妻:①きのうの夜, ひどく酔っ払っておそく帰ってきたので, あたしかっとなってしまいました。②勢いよく彼を突きとばし, 実家に帰ってしまいましたの。③だけど, [ø] 今日になって反省し戻ってきてみると, どうも様子が変でした。

(星新一 「謎の女」『ノックの音が』 講談社文庫)

(46) <みかげは料理の専門家になる修行中。みかげは久しぶりに茂と会う。茂は, みかげが雄一の家から出たと聞いて, ふられたのだと思い, ふられたくらいでメソメソするなと言う。>

みかげ:ふられてなんかいないって……茂って本当にバカね……別れてよかったわ……。

茂　:①バカでも気をきかせることは出来るさ……②バカなフリして説教たれるとかさ……③ま, 料理ガンバレよ! ④[ø] 一人前になったら, 俺が幹事で, みかげの料理を食べるパーティ開くからさ……。

(森田芳光 「キッチン」『月刊シナリオ』 45-12)

(47) <タクシーを待っているみかげ。そこへ雄一のワゴンが接近する。ドアを開け, 雄一が出てくる>

雄一:①空車が来てないよ……②もし [øが] 助手席がいやなら, ウシロの席がいいよ……③一人で考えられる……④僕が運転していると思わなきゃいいんだ……。

(森田芳光 「キッチン」『月刊シナリオ』 45-12)

(48) <母は久しぶりに帰って来た息子に嫁の悪口を言いながら, 急に涙を流す。>

久:ど，どうしたの，お母ちゃん。

母:①わしが /[øが]，あっちもこっちも痛いっていうのにみんな放ったらかしで…②なんでおまえが側にいてくれんのだ。

（石坂啓 「アイ'ム ホーム」『ビッグコミックオリジナル』 No.684）

(45)では，話者を主語とする発話が連なっている。そして，第一・第二文目の「かっとなって突きとばす」と第三文目の「反省する」の間には情報のリンクが存在する。また，第三文目には「戻ってくる」という話者の視点を示す述語，および，「てみる」という話者指向度の高い述語を使用していることから，主語は唯一的に予測可能である。(46)で，みかげが料理の修行中であることは，話者と聞き手の共有知識である。また，第三文目の「がんばれ」と第四文目の「一人前になる」の間には「がんばればー人前になれる」という知識のリンクが存在することから，第四文目の主語は，唯一的に予測可能である。(47)では，話者は運転者であり，聞き手が座り得るのは助手席であるという知識のリンクが存在し，また，第二文目で「なら」による条件の提示をし，主節で聞き手に助言を行っているという論理的関係から，主語は唯一的に予測可能である。(48)の母の発話は，聞き手の質問に対する応答発話である。そして，第一文目で「痛い」という感覚を示す，話者指向度の高い述語が用いられていることから，主語は唯一的に予測可能である。

4-4. 完全唯一主格

次に，完全唯一主格のタイプを見る。このタイプは主語を言語化することができない。

(49)＜ニナを無理矢理ダンスパーティへ連れて行き，＞

ニナ　:あ…あたしは，こういうとこは，ちょっと…。

ロッテ:①まあまあ，そう言わずに，②[øが]/ *私が あなたと一緒なら皆，声かけてくるわ。③ホラホラ，みんなこっち見てる！ ④あたしは，おこぼれにあずかるから。

（浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』 No.679）

(50)＜不眠症の槍村は，山岡に骨のない魚を食べさせてやると言われる。＞

槍村:①あの晩寝床に入ってから，恐れていた通り，骨のない魚のことばかり頭に浮かんで仕方がない…。②いったいどんな魚なんだ，どんな形をしているんだと，考え続けたんです。③ところがです。④[øが]/ *ボクが 気がついたら朝なんです，⑤それも，気がついたのは妹に起こされたからなんです。

（雁屋哲 「骨のない魚」『美味しんぼ』 vol.14 小学館）

(51)＜俳優の南条がバックの運転練習をしている。そこに，映画スタッフの池上らがやってきて。＞

池上:[øは]/ *私が パイロン置きましたので，パイロンを車と思って，思いっきり練習して下さい。

（森田芳光 「免許がない！」『月刊シナリオ』 50-3）

(52) <息子の手術を担当した医者が, >

医者:①折れた骨が皮膚の外へ出ていました。②従って [ø]/ ???我々が 当面は骨髄炎などの感染症に注意して, 治療していきますので, 入院していただくことになりますが…

(弘兼憲史 「黄昏流星群」『ビッグコミックオリジナル』 No.679)

(49)のロッテの発話は, 話者と聞き手の二人のみの主体情報のうち, 第二文目「なら」節内の述語部分で「あなた」と聞き手を言語化していることから, 主語は予測可能である。また, ロッテの第二文目は, その他の人物はまったく問題としていない。(50)は, 第一文目の「寝床に入る」と第四文目の「気がついたら朝」の間にはストーリー性の展開があり, 同一主体が主語であると論理的に導かれ, 主語は予測可能である。また, 槍村の発話内容で, その他の人物はまったく問題とされていない。(51)で, 話者のパイロンを置くという行為は, 場面から話者と聞き手の共有知識となっており, 主語は予測可能である。そして, この発話場面において, その他にこの行為を行う人物は存在せず, また, 話者はその他の人物をまったく問題としてない。(52)の第二文目, 「治療していく」のが医者である話者だということは, 話者と聞き手の共有知識である。そして, その他にこの行為の行為者となり得る人物はまったく存在しない。

以上のように, その他の人物をまったく問題としない発話では, 主語を言語化すると不自然となり, 主語は義務的に省略しなければならない。

5. 本章のまとめ

本章では, 従属節の中の主語を対象として, その言語化・非言語化の振る舞いについて考察した。従属節の主語は, 先ず, 従属節の階層構造によって, 主語の現われ方が規定される。A 類の従属節には, 主格も主題も現われることができない。B 類の従属節に現われ得るのは, 対比あるいは主格主語のみである。一方, C 類の従属節は, 主格も主題も現われることができる。

しかしながら, 主語の言語化・非言語化については, この条件だけでは不十分であり, 主語の意味機能を考慮する必要がある。A 類の従属節は, 主格も主題も現われることができないので, 主語は義務的に非言語化される。B 類の従属節には, 対比もしくは主格しか現われ得ないので, その主語の振る舞いは, 完全対比主題についての制約と, 四タイプの主格主語についての制約がかかわる。C 類の従属節は, 主題も主格も現われ得, 単文の場合と同様に, 主語の言語化・非言語化は, 談話における主語の意味機能によって規定される。完全対比主題／完全排他主格の場合は, 主語を言語化しなければならない。相対対比主題／相対排他主格は, 主語が予測可能か否かによって, 省略の振る舞いが二分される。論理的唯一主題／論理的唯一主格は, 主語が予測可能であるので, 言語化・非言語ともに可能である。完全唯一主題／完全唯一主格は, 主語

対排他主格と論理的唯一主題／論理的唯一主格は，従属節の主語と，主節の主語が同一指示である場合，冗長性によりどちらか一方のみを言語化することが好まれる[3]。

[3] 本稿では特に言及しなかったが，従属節のもつ論理的意味によって，主節の主語と従属節の主語が異なる指示対象を求める場合，反対に，同一指示対象を求める場合が存在し，この論理的関係は，主語を予測する手段の一つになると思われる。しかし，これについての詳しい考察は，将来の課題としたい。

第 7 章　応答発話におけるくり返しと情報構造

1.　本章の目的

談話を構成するそれぞれの文構造は，多種多様なものがあり，談話の中の発話の切れと繋がりのタイプもまた様々である。本章では，こうした多種多様な文タイプのうち，質問とそれに対する答えという，質疑応答ペアの発話に着目し，省略を別の角度から眺めてみようと思う[1]。

質疑応答ペアの発話における答えの部分（以下，「応答発話」）は，最も省略がおこりやすい。というのは，話者 A からある不確定部分を含む命題が提示され，聞き手 B は少なくとも，求められているその不確定部分を満たす情報を提供すれば，話者 A に対して求められる最低限の情報は与えたことになるからである。そこで問題となるのは，反復言語化（くり返し）の可否である。

応答発話におけるくり返しを巡る先行研究にはいくつかあるが，議論の出発点とされるものに久野暲（1978）の分析がある。久野は省略とくり返しについて，情報の新旧や視点に着目し，談話分析の一考察方法を提示している。また，牧野成一（1980）は，久野の議論を引き継ぐ形で，反復の順序は原則的に省略の順序の制約の裏返しが成立するとしている。久野の情報の新旧という原理の細部については，その後多くの反論がなされているが（矢野安剛：1981，大島真 1983，Maki Hirano Hubbard：1988，近藤泰弘：1994，佐々木陽子：1996 他），本章では，出発点として久野の情報の新旧（重要度）という概念をもう一度取り上げて再考し，応答発話における省略とくり返しの問題を，情報構造の観点から考察する。

2.　冗長性と協調の原理

よく言われるように，質疑応答ペアの発話において，質問者によって発された言語要素をすべて繰り返すと，次のように冗長的で不自然な発話となる。

(1) A：昨日，私からのメールを読みましたか。
　　B：はい，昨日，あなたからのメールを読みました。

これに関して牧野成一（1980：28,39）は，全反復くり返しは，応答発話を行う話者 B が回想的に確かめながらゆっくり言う場合や，相手の言った文の内容をかみ砕き確認している場合には可能だが，そうでなければ不自然であると述べている。

---

[1] 本章は，『日本語教育』98 号 に掲載された論文に加筆したものである。

一方，次のように，必要最小限の情報しか与えずに発話を終結する発話は，時としてぶっきらぼうな，もしくは会話を発展させようとする意志のないような印象を与えることがある[2]。

(2) A：昨日，私からのメールを読みましたか。
　B：ええ。
(3) A：この料理，おいしいですね。
　B：ええ。

(2)，(3)のBの発話は，次のように本動詞をくり返せば，丁寧さや，会話構築への協力的意志が，より感じられるようになる。

(4) A：昨日，私からのメールを読みましたか。
　B：ええ，読みました。
(5) A：この料理，おいしいですね。
　B：ええ，おいしいですね。

このように応答発話におけるくり返しの有無は，丁寧さ，会話構築への協力の意志の有無といった語用論的意味を付随させる。これがくり返しは談話的機能であると言われる一所以でもあろう。しかしながら，このような語用論的意味を別にして，くり返しをコントロールする要因が他に存在するように思われる。

3. 情報の新旧

久野暲(1978:15)は，一部の要素を省略して他の要素を残す場合，次の制約が存在するとしている。

省略順序の制約：省略は，より古い(より重要度の低い)インフォメーションを表す要素から，より新しい(より重要な)インフォメーションを表す要素へと順に行う。即ち，より新しい(より重要な)インフォメーションを表す要素を省略して，より古い(より重要度の低い)インフォメーションを表す要素を残すことはできない。

そして，より新しいインフォメーションを表わす要素は，文法的機能或いは格関係によって決まるのではなく，語順によって決まると述べ，この制約を示す例として次のような例文を挙げている(pp.52-54)。

(6) A：次郎ハ，花子ト ボストン(ニ) 行ッタ？
　Ba：ウン，ボストン(ニ) 行ッタヨ。

---

[2] ここではイントネーションの問題は考慮していない。

Bb:*ウン，花子ト 行ッタヨ。

久野は，(6)Bb の非適格性は，新しい，より重要なインフォメーションを表わす「ボストン(ニ)」を省略し，「花子ト」を残していることによるとし，また，動詞の直前の要素の「ボストン(ニ)」は顕著な強調ストレス無しで，より新しいインフォメーションを表わす要素と解釈できると述べている。

語順に基づいて，旧から新へのインフォメーションの流れを想定する主張は，その後，高見健一(1995, 1997)，牧野成一(1980)に引き継がれている。しかし，久野他の言うように，本当に語順の後の方がより新しいインフォメーションを表わすのだろうか。つまり，情報価値の相対性は，語順を主要因として決定されるのだろうか。そしてそれ故，語順の後の要素は，常にくり返し可能なのであろうか。

次の例を見てみよう。

(7)A: 今朝 新聞で 事件の記事を 見ましたか。

B1: ええ，見ました。

B2: ええ，今朝 見ました。

B3: (?)ええ，新聞で 見ました。

B4: ???ええ，事件の記事を 見ました。

(8)A: 新宿で 鈴木さんと 6時に 会えましたか。

B1: ええ，会えました。

B2: (?)ええ，新宿で 会えました。

B3: ???ええ，鈴木さんと 会えました。

B4: ええ，6時に 会えました。

語順を基にした新旧のスケールのみで説明がつかないのは，(7)については，語順的に後の要素をくり返ししているB4の発話が不自然であり，(8)については，語順的に後の要素をくり返ししているB3の方が，B2よりも不自然であるという事実が明らかにしている。

また久野，高見は，動詞が文の焦点でない場合には，その直前の要素が焦点を表わすと述べている。次の例は高見(1997:8)からの抜粋である。

(9) 太郎は 花子と 京都へ 行ったの？

(10)太郎は 京都へ 花子と 行ったの？

高見は，(9)では疑問の焦点が「京都へ」であり，(10)では「花子と」であると解釈されると説明する。

ところが，次の例を見てみよう。

(11)これから 山田さんと 電車で 会社へ 帰りますか。

この例において，久野が述べているように，疑問の焦点は動詞の直前の要素である「会社へ」だと判断するのは，直感に反する。こうして見ると，久野他が主張する，日本語は新から旧への情報の流れを持ち，動詞が文の焦点でない場合，その直前の要素が焦点を表わすという原則は，一般化できる妥当なものであるのかという疑問が生じる。

Maki Hirano Hubbard(1988:40-41)は，久野の情報の新旧という概念に対して，話者と聞き手が文中の要素に対して同じ情報の新旧度を想定している必要はなく，新旧の概念は単独談話では適用されるかもしれないが，発話境界を越えては適用されないと異論を唱えている。また牧野は，「反復は一般に話し手の立場からは旧情報の反復ではなく，新情報として反復しているつもりなのである(p.41)」と述べており，この記述は，話者と聞き手の間で新旧の情報の想定が異なる可能性を示唆している。

確かに情報の新旧(重要さ)という概念は使いやすくはある。そして，牧野，高見がいくつも挙げているように，旧から新への情報の流れが構文と結び付いていることを示す例も多い。しかし，その新旧の情報の価値を語順に求めた場合，少なくとも(7)B4，(8)B3 の不自然さを説明するには十分でない。更に，情報の新旧をどう決定するかは，得てして主観的判断に頼りがちとなる。また，新旧という用語自体にも問題がある[3]。そこで本稿では，くり返しの可否をコントロールするのは，情報の新旧ではなく，取り消し可能性であると主張する。この主張の妥当性を以下検証していく。

4. 検証1 －yes-noタイプの疑問文－

質疑応答ペアの発話は，yes-noタイプの疑問文とwhタイプの疑問文に分かれる。本節では先ず，yes-noタイプの疑問文から見ていく。

4-1. 取り消し可能性と選択肢グループ

次の例を見てみよう。

(12)<ケーキのみがAとBの目の前にある>

A: ケーキ，食べる？

B1: うん，食べる。

B2: ㎜うん，ケーキ，食べる。

(13)<Aは矢野さんを探している>

A: 矢野さんを 見ましたか。

---

[3] 新旧情報と焦点は別の概念であって，焦点であっても新情報である必要はない。詳しくは Wallace Chafe (1976)を参照のこと。

B1: はい，見ました。

B2: ???はい，矢野さんを 見ました。

(14) <会社で。クライアントが来るのを待っている>

A: クライアントは 来ましたか。

B1: はい，来ました。

B2: ???はい，クライアントは 来ました。

それぞれB2の応答発話が不自然となるのはなぜだろうか。yes-noタイプの疑問文において，話者はある命題を想定し，その命題の真偽判断を聞き手に求める。聞き手は，自己の知識や知覚，事実に基づいて真偽判断を下すわけであるが，その真偽判断の下し方は，「はい」と「いいえ」の二者択一とは限らない。話者によって想定された命題の構成如何によっては，命題の部分否定や部分修正もあり得る。例えば，先の(7)，(8)の例であるが，各 A の発話に対して，次のような返答もあり得る。

(7') A:今朝 新聞で 事件の記事を 見ましたか。

B:ああ，昨日のニュースで 見ました。

(8') A:新宿で 鈴木さんと 6時に 会えましたか。

B:7時に 会えました。

部分否定や部分修正があり得るということは，他の選択肢の存在があり得，選択肢グループを形成するということである。他の選択肢の存在があり得る要素は，場合によっては聞き手によって取り消され，他の選択肢が選ばれることもある。このように取り消しが可能な要素は，応答発話においてくり返しが可能となる。反対に，取り消し不可能な要素はくり返しが不可能である。では先の(7)，(8)の質問の中の要素を否定の対象にし，別の情報を付加してみる。

(7") A: 今朝 新聞で 事件の記事を 見ましたか。

B1: 今朝ではなく，さっき見ました。

B2: 新聞ではなく，テレビで見ました。

B3: *事件の記事ではなく，テレビ欄を見ました。

(8") A: 新宿で 鈴木さんと 6時に 会えましたか。

B1: 新宿ではなく，会社の前で会えました。

B2: *鈴木さんではなく，木村さんと会えました。

B3: 6時ではなく，5時に会えました。

他の選択肢が存在せず，従って取り消しの不可能な要素は，否定の対象にすることもできない。

(12)～(14)の B2 の発話が不自然であるのも，それぞれ，(12)では，発話時点において食

べる対象となり得るものがケーキのみであり[4]，(13)では，話者 A は他の誰かではなく矢野さんを探している，(14)では，話者 A は他の誰かではなくクライアントを待っているという状況であり，他の選択肢の存在があり得ず，取り消し不可能な要素をくり返ししたためである。では，(12)～(14)の質問文の中の要素を否定の対象にしてみる。

(12')＜ケーキのみが目の前にある状況で＞

A：ケーキ，食べる？

B：*ケーキではなく，クッキーを食べる。

(13')＜A は矢野さんを探している＞

A：矢野さんを 見ましたか。

B：*矢野さんではなく，木下さんを見ました。

(14')＜会社で。クライアントが来るのを待っている＞

A：クライアントは 来ましたか。

B1：はい，来ました。

B2：*クライアントではなく，他の人が来ました。

このように，応答発話でくり返しができない要素は，否定の対象にすることもできない。

久野，牧野の両者は，要素がより古い，より重要でない要素でも，もし対比が可能なら「反復順序の制約」を破ることができるとしているが，対比とは正に選択肢グループを形成するということである。

続いて次の例を見てみよう。

(15)＜夜，夏子が事務所に戻って来てミキを見つける＞

夏子：ミキちゃん！ まだ残ってたの？

ミキ 1：うん。

ミキ 2：*うん，残ってた。

ミキの応答発話で，「残っていた」をくり返しすると不自然となる。これは，「残っていた」事実自体を取り消すことが出来ないからである。話者の目前に聞き手が存在し，聞き手は事務所に残っているのは事実である。事実は否定しようがない。よって取り消し不可能なのでくり返しは不自然となるのである。反対に次の例のように，話者の想定した命題の真偽の如何は聞き手しか知りようがなく，取り消しの可能性があれば，くり返しは許される。

(16) A：疲れた？

---

[4] ケーキの他にクッキーもあり，それを話者も聞き手もともに知っている場合ならば，(12') B の発話は不自然でなくなる。またそのような場合は，質問文自体，他の発話形式が使われる可能性がある。

B1:うん。

B2:うん，疲れた。

以上の例を通してみると，応答発話における要素のくり返しの可否は，情報の新旧（重要度）というバロメーターのみによって決定されるのではなく，話者によって提示された要素の取り消し可能性という要因が関わっているということが言える。では，くり返しの機能は何なのだろうか。

4-2. くり返しの機能

Gail Jefferson（1972）は，会話のストラテジーとしてのくり返しの機能に着目し，次の三つのくり返しの機能を挙げている[5]。

1. 'questioning' repeat ： 話者の不信や驚きを示す。
2. 'laugh token' repeat ： 'product-item'に対する話者の評価や話者が楽しんでいることを示す。
3. 'affirmative' repeat ： 'product-item'の正しさを確信，認識する。

本稿では，取り消し可能な要素であれば，くり返し可能であると主張するが，Jefferson に従うと，くり返しの有無は聞き手の発話意図に任せられるということになる。聞き手の発話意図とはすなわち，話者によって提示された情報の再確認，対比，驚き，評価，確認等である。そして，どの要素をくり返しするかは，聞き手がどの要素を重要と感じるかによる。

取り消し不可能な要素が，応答発話においてくり返し不可能なのは，取り消し不可能な情報は真偽判断に関わらない命題構築のための核であり，前提部分であるからである。前提であるが故，くり返しの必要はなく，またくり返しする意味もなく，それをわざわざくり返しすると再確認や驚き等の意味も生じず，単に不自然な発話となる。それに対し，取り消し可能な要素は，聞き手にとって再確認や評価する情報価値があると判断され得る情報である。

4-3. 情報のタイプ

では，ある発話を聞いて，我々はその発話の命題を構成する構成メンバーのうち，どの部分が話者の聞きたい情報であり，どの部分が命題構成における前提情報であるか，どのように判断しているのであろうか。

yes-no タイプの疑問文を発する際，話者は命題を構成する構成メンバーを何らかの根拠の

---

[5] Jefferson は，'product-item'という用語を，'referred item'にほぼ相当する意味で用いている。簡単に言えば 'product-item'は，繰り返して言語化される前の発話の中の要素である。

基に設定する。話者の根拠のもとに選ばれる要素であるが，その根拠にはいくつかの種類がある。

先ず，話者と聞き手がともに事実として知っていて，否定しようのない共有知識，また，他の選択肢がなく，選択肢グループを形成し得ない情報がある。こうした情報は，命題構築における前提部分となり，この前提情報は取り消し不可能である。一方，取り消し可能な情報は，他の選択肢が存在し，選択肢グループを形成し得る情報である。聞き手にとって選択肢グループを形成し得る情報には以下のものがある。

・聞き手の感情，意志，評価

・聞き手のみ知り得る事実

このような情報は，他の選択肢の可能性が存在するので，取り消されることがある。

では，選択肢グループを形成する情報は，命題の構成要素という観点から見ると，どのような成分なのだろうか。

4-4. 命題の構成要素

話者の発する命題の中には，動詞が意味的，統語的に必要とする必須の格成分と，様態，手段などの，命題に対して付加的な成分とがある。本稿では，命題に必須の格成分を「命題構築要素」と呼び，命題に付加的な成分を「命題付加要素」と呼ぶことにする。命題構築要素は，命題を構築する上で，明示的・非明示的に関わらず，必要とされる必須成分であり，例えば，動作述語であれば行為を行う行為者，行為の対象である。命題構築要素のくり返しは，次節で述べる語順のプロトタイプが関わってくる。

命題付加要素は，様態，場所，手段などを表わす成分で，「命題の核」である命題構築要素に付加的に情報を表わす要素である。これらは話者の命題構築の際，付加されない場合もある。疑問文において，話者の仮定する命題の中に命題付加要素を含む場合は，基本的に，疑問の焦点はそこに置かれる。その理由は，付加的情報はそれが選ばれ，わざわざ言語化される情報価値をもつためである。命題構成上の必須のメンバーではない要素を，話者が命題の中に加えるということは，それが命題を構成する上で何らかの重要な情報を担うためである。従って，応答発話における命題付加要素のくり返しは，可能か不可能化ではなく，義務的か恣意的かという選択になる。ただし，副詞のタイプによってはくり返しが恣意的となる場合があり，これは副詞の限定のし方によって規定される[6]。

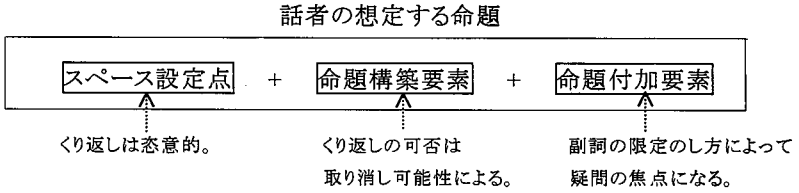
一方，「昨日」などの文頭に置かれる時の副詞，「新宿では」などの主題化された要素は，話

[6] この問題については 4-6 節で詳しく考察する。

者が仮定する命題が表わす事態，状況の「スペース設定点（reference point）」として機能する。スペース設定点とは，聞き手が話者の仮定するスペースにアクセスするための入口となり，いわば，命題の標識のようなもので，スペースへの接近を助ける役割を果たす。それ故，応答発話におけるスペース設定点のくり返しは恣意的となる。

本稿では，話者の命題は，下図のように構成されていると考える。

図 1



では次節では，命題構築要素のくり返しについて見てみる。

4-5.　命題構築要素のくり返し

先に述べたが，久野は，新旧のインフォメーションの流れは，語順によって決まり，最も新しいインフォメーションを省略し，より古い（より重要でない）インフォメーションを表わす要素を残すことはできないと言う。しかし，下の例は，文脈が与えられれば，どの要素もくり返しが可能だと思われる。

(17) A：ルーブルで　モナリザを　見ましたか。
　B1：はい，見ました。
　B2：はい，ルーブルで　見ました。
　B3：はい，モナリザを　見ました。

(18) A：浅草で　食事を　しましたか。
　B1：はい，しました。
　B2：はい，浅草で　しました。
　B3：はい，食事を　しました。

(19) A：子供に　英語を　教えていますか。
　B1：はい，教えています。
　B2：はい，子供に　教えています。
　B3：はい，英語を　教えています。

(20) A：スーパーで　香辛料を　売っていますか。
　B1：はい，売っています。
　B2：はい，スーパーで　売っています。

B3:はい，香辛料を 売っています。

(21)A:花子に お金を 払いましたか。

B1:はい，払いました。

B2:はい，花子に 払いました。

B3:はい，お金を 払いました。

こうした例は，久野の原則に対する単なる例外と言って片づけられないほど，数多く存在する。しかし，上の各例 A の質問部分を次のように変えてみると，応答発話の容認度に差が生じる。

(17')A: モナリザを ルーブルで 見ましたか。

B1: はい，見ました。

B2:*はい，モナリザを 見ました。

B3: はい，ルーブルで 見ました。

(18')A: 食事を 浅草で しましたか。

B1: はい，しました。

B2:*はい，食事を しました。

B3: はい，浅草で しました。

(19')A: 英語を 子供に 教えていますか。

B1: はい，教えています。

B2:*はい，英語を 教えています。

B3: はい，子供に 教えています。

(20')A: 香辛料を スーパーで 売っていますか。

B1: はい，売っています。

B2:*はい，香辛料を 売っています。

B3: はい，スーパーで 売っています。

(21')A: お金を 花子に 払いましたか。

B1: はい，払いました。

B2:*はい，お金を 払いました。

B3: はい，花子に 払いました。

以上の例を観察すると，「を」格で表わされる要素が文頭に来た場合は，それに続く要素が疑問の焦点となるということに気づく。

これには，スクランブルされた要素の前提化および語順に対する我々のプロトタイプ認識が関わっている。先ず前提化についてであるが，Talmy Givón(1983:22)は，トピックになりやす

さの階層を次のように示している[7]。

意味的格役割の階層: AGT > DAT / BEN > ACC > OTHERS
文法的役割の階層 : SUBJ > DO > OTHERS

この階層に従えば,「を」格を伴う目的語は,主語に続いてトピックとなりやすい。(17')〜(21')の例は,「を」格で表わされる要素が文頭位置に立つため,トピックとして解釈される。Givón の言うトピックは,前提ー焦点との対応関係で捉えることができる。トピックは前提情報となる。疑問の焦点とは解釈されない。そして残りの要素が疑問の焦点として解釈される。

次に,語順のプロトタイプ認識についてであるが,佐伯哲夫(1975)は,成分的条件にもとづく語順傾向と,構文的条件にもとづく語順傾向があることを指摘し,前者について,以下のような語順の傾向を示している。

位格(とき「ニ」→ところ「デ」)→主格「ガ」→与格「ニ」→対格「ヲ」
共格「ひとト」/受身の「ひとニ」→もの
「ガ」→発格「カラ」
発格「カラ」→対格「ヲ」
発格「カラ」→着格「ニ・へ」
到達点「ニ」→対象「ヲ」
位格「カラ」→「ガ」→能動詞
自然描写:位格「ニ」→もの「ガ」→所動詞
人事描写:ひと「ガ」→位格「ニ」→能動詞

久野他の,動詞が文の焦点でない場合,動詞の直前の要素が最も新しい,重要な情報を表わす,という主張は,実は我々の一般的語順に対するプロトタイプ認識が関わっている。述語は必須成分としていくつかの要素を必要とするが,我々は,その必須成分と述語の結びつき方のより自然で一般的な順序をプロトタイプとして認識している。こうしたプロトタイプの語順を乱すような,前置化された要素は,トピックとしての解釈がなされる。トピックは,それまでの文脈から話者と聞き手の共通認識となっており,それ故,取り消しが不可能である。この取り消し不可能な要素をくり返しし,他の選択肢グループを形成し得る要素をくり返ししないことから,(17')〜(21')の各 B2 の不自然が生じているのだと思われる。

また,「を」格をとる動作動詞と,「を」格で表わされる要素との結びつきはもっとも強く,文中でその他のさまざまな項と共起する際,「を」格名詞句は動詞の直前に置かれることをプロトタイプとして認識している。従って,「を」格で表わされる要素の後ろに,他の要素が挿入されると,

[7] Givón は「主語(subject)」は統語的概念であるが,「トピック(topic)」は談話機能的概念であるとしている。

一般的プロトタイプと異なることになり，何か特別な意味をもつ情報だという解釈が発動されることとなる。

以上のようなプロトタイプ認識，そして，文頭「を」格のトピックとしての役割が相互作用し，(17')～(21')のような疑問の焦点の解釈が行われるのである。「を」格以外の格成分についても，場所を表わす「で」，「に」，「へ」，「と」，等で，プロトタイプの語順をもつものは，前置化されるとトピック的役割を担う。そして，取り消し可能である要素をくり返しせずに，トピック的役割を担う要素をくり返しした発話は不自然となる。しかし，プロトタイプ語順に違反しない場合，もしくは一文中に多くの要素が含まれ，厳密なプロトタイプ語順の認識が薄れる場合には，文脈によってさまざまな解釈の可能性があり得，応答発話におけるくり返しの可否は，取り消し可能性によって定まる。

次もプロトタイプの語順を犯すことによって焦点解釈が生じる例である。

(22) A：急行に 淡路で 乗り換えますか。

B1：はい，乗り換えます。

B2：*はい，急行に 乗り換えます。

B3：はい，淡路で 乗り換えます。

これがプロトタイプの語順に沿っていると，次のように応答発話のくり返しに不自然さはなくなる。

(23) A：淡路で 急行に 乗り換えますか。

B1：はい，乗り換えます。

B2：はい，急行に 乗り換えます。

B3：はい，淡路で 乗り換えます。

以上に見るように，命題構築要素のくり返しの可否は，プロトタイプ語順によって説明ができる。プロトタイプ語順が示すものは，前提と焦点の情報構造である。前提情報はくり返しができない。前提情報は取り消し不可能な情報であるので，命題構築要素のくり返しの可否は，取り消し可能性にコントロールされているとまとめることができる。

4-6.　命題付加要素

では次に，命題付加要素が，応答発話においてどのような振る舞いを見せるのか見てみる。命題付加要素は，それが選ばれ，わざわざ言語化される情報価値をもつ。そのため，応答発話における命題付加要素のくり返しは，可能か不可能化ではなく，義務的か恣意的かの選択となる。

4-6-1. 手段・道具を表わす「で」格成分

次のように，述語部分のあり方を規定する「で」格成分は，命題付加要素である。

(24) A：電車で 学校へ 行きますか。

B1：*はい，行きます。

B2：はい，電車で 行きます。

B3：*はい，学校へ 行きます。

(25) A：手で すしを 食べますか。

B1：*はい，食べます。

B2：はい，手で 食べます。

B3：*はい，すしを 食べます。

(26) A：鉛筆で ここに 書きますか。

B1：*はい，書きます。

B2：はい，鉛筆で 書きます。

B3：*はい，ここに 書きます。

これらの例も動詞の直前の要素をくり返しした場合，不自然な発話となり，疑問の焦点が動詞の直前の要素ではないことを示している[8]。

こうした「で」格を伴って手段・道具を表わす要素は，ほとんどの動詞に対して必須成分ではない。必須成分でない情報をわざわざ言語化するというのは，言語化するだけの情報価値，理由をもつためであり，それ故，その部分が疑問の焦点となる。そして応答発話では，この疑問の焦点部分のくり返しが義務的となる。

続いて，次の例を見てみよう。

(27) A：いつも通り 電車で 家へ帰りますか。

B1：*ええ，帰ります。

B2：ええ，いつも通り 帰ります。

B3：ええ，電車で 帰ります。

B4：*ええ，家へ 帰ります。

本動詞のみをくり返しした B1 の発話，および，「家へ」をくり返しした B4 の発話は，不自然となる。この応答発話の不自然さを生じさせる原因は，先に述べたように，応答発話において必然的に疑問の焦点となる「で」格で表わされる要素を，疑問の焦点として解釈していないため

---

[8] なお，動詞部分のみをくり返しすることが許されないのは，動詞部分で表わされる情報が前提情報であって，取り消し不可能なためである。

である。また,「いつも通り」は副詞であり,命題付加要素であるが,「電車で帰る」ことを含意しており,これら二つは意味的に同等である。そのため,「電車で」を言語化する代わりに「いつも通り」を疑問の焦点としてくり返すことも可能である。

4-6-2. 様態副詞[9]

述語部分で表わされる行為が,話者と聞き手の前提情報であり,その行為のあり方を限定する様態副詞が含まれる場合は,手段・道具を表わす「で」格情報と同様に,疑問の焦点となる。そして,応答発話においてくり返ししなければ不自然となる。

(28) A: 急いで 帰りますか。

B1: *ええ,帰ります。

B2: ええ,急いで 帰ります。

(29) <AとBは,これからドライブに行くつもりである。車の中で。>

A: のんびりと 行きますか。

B1: ???ええ,行きましょう。

B2: ええ,のんびりと 行きましょう。

(30) A: この二つの薬を 一緒に 飲みますか。

B1: *はい,飲みます。

B2: はい,一緒に 飲みます。

(28)〜(30)の述語部分は,取り消し不可能である。このような要素をくり返しし,疑問の焦点であって,他の選択肢が存在し得る副詞部分をくり返ししない発話は,不自然となる。

行為のあり方を限定する情報であれば,句相当の場合も疑問の焦点となり,応答発話でくり返しが必要となる。

(31) A: 電話して 行きますか。

B1: *ええ,行きます。

B2: ええ,電話して 行きます。

(32) <重い荷物を見て>

A: 手で持って 帰りますか。

---

[9] 何を「副詞」と定義するかは大きな問題である。国文法では語の機能面だけで品詞分類を行うことはせず,語性を中心としてこれに機能や用法,形態などの面を加味して分類を行っている。一般的には,被修飾語の意味から,情態副詞,程度副詞,陳述副詞の三つに分けられる(cf.『日本語教育辞典』p.140)。これに対し本稿では,意味を基準に副詞という用語を用いている。ただし本稿は,副詞の分類を研究の中心とはしていないので,ここで述べる副詞のタイプの相互関係や体系的なことは考慮に入れていない。

B1:*ええ，帰ります。

B2: ええ，手で持って 帰ります。

この他，様態副詞とは言えないが，行為や状態のあり方を限定する命題付加要素であれば，次のような「から」成分も，様態副詞や「で」格成分と同じ振る舞いをし，応答発話においてくり返しが必要となる[10]。

(36)A　:正面から出ますか。

B1:*ええ，出ます。

B2: ええ，正面から出ます。

ところが，たとえ質問文の中に様態副詞が含まれていても，それが，述語部分で表される行為や状態のあり方を強く限定するものでない場合，そして，述語部分で表される情報が取り消し可能な場合は，様態副詞は疑問の焦点とならず，応答発話でのくり返しが義務的でなくなる。

(33)A:冬は 肌が がさがさに 荒れますか。

B1:ええ，荒れます。

B2:ええ，がさがさに 荒れます。

(34)A:光輝は ぐっすり 寝ていますか。

B1:ええ，寝ています。

B2:ええ，ぐっすり 寝ています。

(35)A:音が キシキシ 鳴っていますか。

B1:ええ，鳴っています。

B2:ええ，キシキシ 鳴っています。

各質問文で，話者 A がその真偽を問いたい疑問の焦点は，副詞で表される行為や状態のあり方ではなく，述語部分である。(33)では，「(肌が)荒れるかどうか」，(34)では，「(光輝が)寝ているかどうか」，(35)では，「(音が)鳴っているかどうか」が話者の聞きたい焦点であり，この部分は，話者と聞き手の共有知識でも前提でもない。そして，その質問に対する答えの応答発話では，それぞれ，「荒れていること」が「がさがさに」を，「寝ていること」が「ぐっすり」を，「鳴っていること」が「キシキシ」を含意することができる。こうした理由により，疑問の焦点とならない様態副詞は，応答発話において，くり返しが義務的とはならない。

---

[10] (36)の例は，三原健一先生のご指摘から頂戴した。

4-6-3. 量や程度を表わす副詞

述語部分で表わされる状態や行為を量や程度的に限定する副詞は，付加説明的要素であり，疑問の焦点とはならず，応答発話における言語化は恣意的となる。量や程度を限定する要素は取り消しが可能である。従ってくり返しが許されるのであるが，量や程度というのは動作の手段や様態と異なり，量や程度の判断の基準には個人差があり，その個人差をわざわざ取り出して疑問視することは我々の日常生活においてあまりないからだと思われる。このような情報は，疑問の焦点とするのではなく，自己の基準と異なる想定が提示されれば，部分修正を加えて自己の判断を提示すればよいからである。

(37) A:あのゴルフ場は 駅から かなり 遠いですか。
　B1:ええ，遠いです。
　B2:ええ，駅から 遠いです。
　B3:ええ，かなり 遠いです。

(38) A:パーティには 大勢 来ましたか。
　B1:ええ，来ました。
　B2:ええ，大勢 来ました。

(39) A:たくさん 食べましたか。
　B1:ええ，食べました。
　B2:ええ，たくさん 食べました。

(40) <お酒のボトルを見て>
　A:ちょっと 残ってますか。
　B1:ええ，残ってます。
　B2:ええ，ちょっと 残ってます。

以上，命題付加要素の考察から，「で」格成分や様態副詞が，述語部分の行為や状態のあり方を強く限定し，また，述語部分が前提情報を表す場合には，応答発話で必ずくり返さなければならないが，一方，述語部分が取り消し可能情報であり，行為や状態のあり方を限定しない様態副詞，量や程度を表わす副詞は，応答発話でのくり返しが恣意的であると言える。

4-7. スペース設定点とその他の成分

4-7-1. スペース設定点

時の副詞や，文頭で主題化された場所を表わす成分などは，スペース設定点となる。スペース設定点は，下の例に見るように，応答発話においてくり返しが恣意的である。

(41) A: 明日 来ますか。

B1:ええ，来ます。

B2:ええ，明日来ます。

(42)A: 一年後 戻りますか。

B1:ええ，戻ります。

B2:ええ，一年後 戻ります。

(43)A: 日本では 失業率が 高いですか。

B1:ええ，高いです。

B2:ええ，日本では 高いです。

B3:ええ，日本では 失業率が 高いです。

(44)A: 岡山には のぞみは 止まりますか。

B1:ええ，止まります。

B2:ええ，岡山には 止まります。

B3:ええ，岡山には のぞみは 止まります。

スペース設定点は，文修飾の副詞として働く。こうして見ると，久野，高見の言う通り，文修飾の副詞と述部修飾の副詞は統語的，意味的に違いがあり，文修飾の副詞と述部修飾の副詞の二分割のように思える。ところが，副詞はその意味，機能によって，単なる二分割ではなく，階層性が存在する。次の副詞は行為のあり方を限定，修飾しているが，応答発話において繰り返さなくとも不自然ではない。

(45)A:あの夫婦は 始終 もめていますか。

B1:ええ，もめています。

B2:ええ，始終 もめています。

(46)A:あの人は しょっちゅう 文句ばかり言ってますか。

B1:ええ，言ってます。

B2:ええ，しょっちゅう 言ってます。

B2:ええ，文句ばかり言ってます。

(47)A:健康には，常に 注意をしていますか。

B1:ええ，しています。

B2:ええ，注意をしています。

B3:ええ，常に してます。

「始終」「しょっちゅう」「常に」という副詞は，頻度を表わしている。これらの副詞は文修飾の副詞と異なり，「は」を付加して主題化することはできないが，述語から遠く離して，文頭に移動させることが可能であり，命題全体によって表わされる事態の生起のあり方を述べるという点に

おいて，時の副詞に近づき，スペース設定点として機能する。よって，疑問の焦点とはならず，応答発話においてくり返しは義務的でなくなるのだと考えられる。

なお，時の限定に関わる副詞のうち，次のように時間の幅に関わる限定も，応答発話においてくり返しは義務的ではない。

(48) A：あの人は 一週間 何も食べなかったんですか。

B1：ええ，食べなかったんです。

B2：ええ，一週間 食べなかったんです。

B3：ええ，何も食べなかったんです。

(49) A：時計が 二時間 鳴り続けたんですか。

B1：ええ，鳴り続けたんです。

B2：ええ，二時間 鳴り続けたんです。

(50) A：今日から三日間 帰って来ませんか。

B1：ええ，帰ってきません。

B2：ええ，今日から 帰ってきません。

B3：ええ，三日間 帰って来ません。

(51) A：12 時から 1 時まで 休みですか。

B1：ええ，休みです。

B2：ええ，12 時から 休みです。

B3：ええ，1 時まで 休みです。

4-7-2. 二つの副詞

では，時に関わる副詞が一文中に二つ以上含まれる場合はどうだろうか。

(52) A：いつも 八時に 家を出ますか。

B1：ええ，出ます。

B2：*ええ，いつも 出ます。

B3：ええ，八時に 出ます。

B4：*ええ，家を出ます。

「いつも」「八時に」という副詞について，「いつも」はスペース設定点であり，「八時に」は時に関係する副詞である。このように一文中に異なる機能をもつ副詞が二つ以上存在する場合は，述語部分の行為のあり方を限定する副詞を省略し，スペース設定点の方をくり返すことはできない。これは，情報価値の高い方を省略できないためである。ただし，「八時に」という副詞は時を表わしており，時を表わすスペース設定点に意味的に近づくため，義務的な疑問の焦点

の解釈は行われず，くり返しは義務ではない。一方，(52)B4 の不自然さは，命題構築における前提部分，すなわち話者と聞き手の前提となっており，それゆえ取り消し不可能な「家を出る」という要素のみをくり返ししたことによる。B2の不自然さは，焦点ではなく，スペース設定点として機能する文修飾の副詞のみをくり返ししたためである。以下の例も同様の理由により，応答発話のくり返しに違いが生じる。

(53)A：毎朝 6時に 起きますか。

B1：はい，起きます。

B2：*はい，毎朝 起きます。

B3：はい，6時に 起きます。

(54)A：この事件は 歴史上 極めて 重要ですか。

B1：ええ，重要です。

B2：*ええ，歴史上 重要です。

B3：ええ，極めて 重要です。

4-7-3. 二つの副詞と取り消し可能情報

話者の仮定する命題の中に，スペース設定点として機能する副詞，また，述語部分に表わされる状態や行為に対して時間的限定を加える副詞，そして，選択肢グループを形成し，取り消し可能な要素，の三つが存在する場合，応答発話におけるくり返しはどうなるのだろうか。

(55)A：昨日 駅で ずっと 待っていましたか。

B1：ええ，待っていました。

B2：*ええ，昨日 待っていました。

B3：ええ，駅で 待っていました。

B3：ええ，ずっと 待っていました。

(56)A：大学に入ってから，ずっと アルバイトを していますか。

B1：ええ，しています。

B2：?ええ，大学に入ってから しています。

B3：ええ，ずっと しています。

B1：ええ，アルバイトを しています。

(55)，(56)の質問文に含まれる時間的限定を加える副詞は，述語部分で表される行為を限定している。上の例に見るように，応答発話では，こうした副詞，もしくは，取り消し可能な要素をくり返さずに，スペース設定点として機能する副詞の部分のみをくり返すことはできない。よって，再言語化の順序は，「取り消し可能な要素＞副詞＞スペース設定点」に従わなければ

ならないと言える。

4-8. モダリティ形式と「のだ」のスコープ

以上，応答発話における命題構築要素，命題付加要素，スペース設定点のくり返しについて見たわけであるが，次に，文末形式について述べることにする。文末にモダリティ形式を伴う場合は，伴わない場合と異なる現象が生じる。次の例を見てみよう。質問の文末形式が異なると，応答発話の文末形式も変化する。

(57) A：いつも 6 時に　起きますか。
　　B：　はい，起きます。
(58) A：6 時に　起きるんですって？
　　B：???はい，起きるんです。
(59) A：高橋さんは　北海道に　越しますか。
　　B：はい，越します。
(60) A：高橋さんは　北海道に　越すんですって!?
　　B：???はい，越すんです。

「だって」という伝聞の真偽を確かめるモダリティ形式は，その直前に「のだ」を必要とする。「のだ」はそれより前の要素全体をまとめ上げ「のだ」のかかわるスコープを作り上げる働きをもつ。このように「のだ」によってスコープ化された場合，聞き手 B はその命題全体について応答しなければならない。次の二例の対比も，「のだ」の有無による違いを示している。

(61) A：あなたは　今朝 8 時に　来ましたか。
　　B：はい，来ました。
(62) A：あなたは　今朝 8 時に　来たんですか。
　　B：*はい，来たんです。

一方，応答発話において「のだ」を要求しないモダリティは，次のように要素のくり返しが義務的とはならない。

(63) A：6 時に　起きるんだろう？
　　B：はい，起きます。
(64) A：6 時に　起きるそうだね？
　　B：はい，起きます。
(65) A：高橋さんは　北海道に　越すんだろう？
　　B：はい，越します。
(66) A：高橋さんは　北海道に　越すそうだね。

B:はい，越します。

以上，限られた数ではあるが，モダリティ形式および「のだ」との関係について見た。上記の例から，モダリティ形式を伴う応答発話における文中要素のくり返しは，モダリティ形式が「のだ」という形式を必要とするかどうかが関わっていると言える。

4-9. yes-noタイプの疑問文に対する否定応答発話

否定の応答発話は，否定の意味的スコープ，限定詞などとの関わり合いにより実に複雑な様相を示す。よってその詳細な分析は別稿に譲ることにして，本稿では，肯定の応答発話との比較において概観できる二，三の現象を指摘するにとどめる。

顕著な現象の一つとして，話者と聞き手の共有知識である前提部分の要素は，否定の応答発話においてもくり返しが許されない。先の(12)～(14)の例の質問に対し，否定の応答発話をしてみる。

(12”)<ケーキのみがAとBの目の前にある>

A: ケーキ，食べる？

B1: いいや，食べない。

B2:*いいや，ケーキ，食べない。

(13”)<Aは矢野さんを探している>

A: 矢野さんを 見ましたか。

B1: いいえ，見ていません。

B2:*いいえ，矢野さんを 見ていません。

(14”)<会社で。Aはクライアントが来るのを待っている>

A: クライアントは 来ましたか。

B1: いいえ，来てません。

B2:???いいえ，クライアントは 来てません。

(12”)～(14”)の「ケーキ」，「矢野さん」，「クライアント」のように取り消し不可能な前提情報は，肯定の応答発話の場合と同様に，否定の応答発話においてもくり返すことができない。

続いて，次のように副詞を含む文を見てみよう。

(28’)A: 急いで 帰りますか。

B1:*いいえ，帰りません。

B2: いいえ，急いでは 帰りません。

(29’)A: のんびりと 行きますか。

B1:*いいえ，行きません。

B2: いいえ，のんびりとは 行きません。

(30')A: この二つの薬を 一緒に 飲みますか。

B1:*いいえ，飲みません。

B2: いいえ，一緒には 飲みません。

4-6-2 節で，様態副詞は疑問の焦点になると述べたが，否定の応答発話においても，こうした副詞はくり返さなければならない。そして，否定の応答発話の場合，くり返される副詞部分には「は」を付加して，その部分を否定することを明らかに示す必要がある。

では次に，一文中に選択肢グループを形成する要素が複数含まれる場合について見てみる。

(8''')A:新宿で 鈴木さんと 6時に 会えましたか。

B1:いいえ，会えませんでした。

B2:いいえ，新宿で 会えませんでした。

B3:いいえ，鈴木さんと 会えませんでした。

B4:いいえ，6時に 会えませんでした。

(8''')の B1〜B4 の否定の応答発話はすべて，「会えなかった」という事象そのものの不成立を表わす。そして，くり返しされた要素は，選択肢グループ内の選択肢が選ばれるという対比的意味合いの強調よりも，話者 A の提示した要素の再確認的機能を帯びている。

これが，話者が提示する疑問の一部を修正しようとする場合には，その要素に「は」を付加して，否定の対象を限定する必要がある。

(17'')A:ルーブルで モナリザを 見ましたか。

B1:いいえ，見ませんでした。

B2:いいえ，ルーブルでは 見ませんでした。

B3:いいえ，モナリザは 見ませんでした。

(18'')A:浅草で 食事を しましたか。

B1:いいえ，しませんした。

B2:いいえ，浅草では しませんでした。

B3:いいえ，食事は しませんでした。

(19'')A:子供に 英語を 教えていますか。

B1:いいえ，教えていません。

B2:いいえ，子供には 教えていません。

B3:いいえ，英語は 教えていません。

(20'')A:スーパーで 香辛料を 売っていますか。

B1:いいえ，売っていません。

B2:いいえ，スーパーでは 売っていません。

B3:いいえ，香辛料は 売っていません。

(21")A:花子に お金を 払いましたか。

B1:いいえ，払いませんでした。

B2:いいえ，花子には 払いませんでした。

B3:いいえ，お金は 払いませんでした。

以上の例に見るように，取り消し可能な要素および様態副詞に関しては，否定の応答発話と肯定の応答発話で同じ振る舞いが観察される。しかし，一文中に選択肢グループを形成する要素が複数含まれる場合には，否定の応答発話は，事象そのものの不成立を表わし，繰り返された要素は再確認的機能を帯びる。

5. 検証2 －wh タイプの疑問文－

この節では，wh タイプの疑問文に考察対象を移し，wh タイプの疑問文に対する応答発話について見ていく。

5-1. 命題構築要素

5-1-1. 命題構築要素のくり返しと語順のプロトタイプ

質問文の中に疑問詞と本動詞のみしか含まない場合，応答発話でのくり返しの問題は生じない。それは，疑問詞の部分が常に疑問の焦点であり，その部分は必ず言語化されるからである。

(67)A:どこへ 行きますか。

B:横浜へ 行きます。

(68)A いつ 行きますか。

B:来月 行きます。

(69)A:何を しますか。

B:テニスを します。

では，質問文の中に疑問詞と本動詞以外，もう一つ格成分が含まれる場合には，くり返しにどのような影響が現れるだろうか。

(70)A:ルーブルで 何を 見ましたか。

B1:モナリザを 見ました。

B2:ルーブルで モナリザを 見ました。

(71)A:淡路で 何に 乗り換えますか。

B1:急行に 乗り換えます。

B2:淡路で 急行に 乗り換えます。

(72)A:浅草で 何を しましたか。

B1:食事を しました。

B2:浅草で 食事を しました。

(73)A:あの歌を どこで 聴きましたか。

B1:旅行先で 聴きました。

B2:あの歌を 旅行先で 聴きました。

(74)A:東京へ 誰が 行きますか。

B1:社長が 行きます。

B2:東京へ 社長が 行きます。

(70)～(74)の結果に見るように，応答発話において疑問詞で表わされる不確定な部分を埋め，かつ，格成分をくり返しても不自然には感じられない。では，上の質問文の語順を変えてみる。

(70')A:何を ルーブルで 見ましたか。

B1:モナリザを 見ました。

B2:モナリザを ルーブルで 見ました。

(71')A:何に 淡路で 乗り換えますか。

B1:急行に 乗り換えます。

B2:急行に 淡路で 乗り換えます。

(72')A:何を 浅草で しましたか。

B1:食事を しました。

B2:食事を 浅草で しました。

(73')A:どこで あの歌を 聴きましたか。

B1:旅行先で 聴きました。

B2:旅行先で あの歌を 聴きました。

(74')A:誰が 東京へ 行きますか。

B1:社長が 行きます。

B2:社長が 東京へ 行きます。

一文中に言語化された項が，疑問詞以外に格成分一つの場合，応答発話における格成分のくり返しは，yes-no タイプの疑問文と異なり，プロトタイプ語順に影響を受けない。それは，どのような語順にせよ疑問の焦点は疑問詞の部分であり，応答発話において，その部分は必ず

言語化されるためである。焦点部分が言語化されれば，それよりも情報価値の低い要素のくり返しは恣意的となる。そして，くり返しされた場合その要素は，聞き手による情報の再確認の意味合いを帯びる。

5-1-2. 複数の格成分

一文中に，疑問詞と複数の命題構築要素が含まれる場合はどうだろうか。

(75) A：誰が 花子と 広島へ 行きましたか。
　B1：太郎が 行きました。
　B2：太郎が 花子と 行きました。
　B3：*太郎が 広島へ 行きました。

(76) A：太郎は 誰と 広島へ行きましたか。
　B1：花子と 行きました。
　B2：花子と 広島へ 行きました。
　B3：太郎は 花子と 行きました。

(77) A：太郎は 花子と どこへ 行きましたか。
　B1：広島へ 行きました。
　B2：花子と 広島へ 行きました。
　B3：*太郎は 広島へ 行きました。

(75)と(77) のB3不自然さは，動詞の直前にくる要素は情報的に重要な価値をもつ，という久野と高見の仮説をまたもや疑問視する。(75)～(77)に共通して言えるのは，疑問の焦点とともに他の格成分をくり返しする場合，「と」格で表わされる要素をくり返ししなければ不自然になるということである。「と」格要素をくり返ししない応答発話はすべて行為者単独の行為という解釈を生じさせ，質問の命題とそれに対する答えの命題が異なる命題を形成してしまう。これは「と」格のもつ意味からの制約である。

では，「と」格成分以外の場合はどうであろう。

(78) A：いつ 新聞で 事件の記事を 見ましたか。
　B1：昨日 見ました。
　B2：* 昨日 新聞で 見ました。
　B3：* 昨日 事件の記事を 見ました。

(79) A：どこで 鈴木さんから そのことを 聞きましたか。
　B1：相談室で 聞きました。
　B2：* 相談室で 鈴木さんから 聞きました。

B3:* 相談室で そのことを 聞きました。

(80)A: 誰が 田中さんに 花を 渡しますか。

B1: 木村さんが 渡します。

B2:???木村さんが 田中さんに 渡します。

B3:* 木村さんが 花を 渡します。

(78)～(80)のように，質問文中に，疑問の焦点となる疑問詞の他に複数の項が言語化される状況は限られている。すなわち，話者Aの発話の前に聞き手Bの発話があり，そこでBは，(78) では「新聞で事件の記事を見た」，(79)では「鈴木さんと6時に会った」，(80)では「新宿と誰かに6時に会った」ということを話題にしており，それを前提としてAが更なる情報を求めているという状況である。そのような場合，前提情報内で情報価値の階層付けをすることはできない。そして，前提情報の一部のみを取り出してくり返しすることはできない。一部のみを取り出すと，それに何らかの情報価値を加えることになるからであるが，そのような情報価値の差は Aの発話内にはないからである。次の例は，「と」格で表わされる情報を含み，しかも前提の一部のみを取り出していることによって応答発話に不自然さが生じている。

(81)A: 太郎は どこで 花子と テニスを しましたか。

B1: 運動公園で しました。

B2:* 運動公園で 花子と しました。

B3:* 運動公園で テニスを しました。

B2:???太郎は 運動公園で しました。

B3: 太郎は 運動公園で 花子と しました。

B2:* 太郎は 運動公園で テニスを しました。

5-2. 命題付加要素

次にwhタイプの疑問文における命題付加要素の振る舞いを見てみる。

5-2-1. 手段・道具を表わす「で」格成分

先ず，wh タイプの疑問文に，手段・道具を表わす「で」格成分が含まれる場合はどうなるだろうか。

(82)A: 新幹線で どこへ 行きますか。

B1: 長野へ 行きます。

B2: 新幹線で 長野へ 行きます。

(83)A: 誰が 車で 来ますか。

B1:?木下君が 来ます。

B2:　木下君が　車で　来ます。

(84) A:　誰が　マジックで　書きましたか。

B1: ?橋本君が　書きました。

B2:　橋本君が　マジックで　書きました。

(85) A:　何を　新聞紙で　作りますか。

B1:　大きな鶴を　作ります。

B2:　大きな鶴を　新聞紙で　作ります。

(86) A:　どこで　銃で　撃たれましたか。

B1:　36 ストリートで　撃たれました。

B2:　36 ストリートで　銃で　撃たれました。

上の結果に見るように，yes-no タイプの疑問文では必ずくり返しが必要であった「で」格成分であるが，wh タイプの疑問文には，「で」格成分よりも情報価値の高い不確定部分が含まれ，応答発話ではその不確定部分を埋める情報が言語化されるので，「で」格成分のくり返しは恣意的となる。

5-2-2. 様態副詞

次に，wh タイプの疑問文の中に様態副詞が現れる場合を見てみよう。

(87) A:　どこで　のんびり　過ごしたいですか。

B1: (?)ハワイで　過ごしたいです。

B2:　ハワイで　のんびり　過ごしたいです。

(88) A:　誰が　一生懸命に　やっていますか。

B1: (?)高橋さんが　やっています。

B2:　高橋さんが　一生懸命に　やっています。

B3:　高橋さんです。

(89) A:　いつ　十分に　休暇を取れますか。

B1: (?)来月　取れます。

B2:　来月　十分に　取れます。

(90) A:　何語を　流暢に　話せますか。

B1: * スペイン語を　話せます。

B2:　スペイン語を　流暢に　話せます。

(91) ＜橋本は超多忙な人物で，食事もままならない。しかし，A は B に，橋本が珍しくゆっくりとご飯を食べているところを見たと聞いて，＞

A:　いつ ゆっくりと ご飯を 食べていましたか。

B1:* 一昨日 食べていました。

B2:* 一昨日 ご飯を 食べていました。

B3: 一昨日 ゆっくりと ご飯を 食べていました。

応答発話におけるくり返しは，(87)～(89)と(90)～(91)の二つのタイプに分かれる。(90)～(91)は，応答発話において様態副詞をくり返さなければ容認不可であるが，(87)～(89)はそれほど不自然ではない。この差は，(90)～(91)では各々，「X 語が話せること」，「ご飯を食べていたこと」が質問の前提となっており，その前提の下で，「話せる中でも流暢なのは何語か」，「食べていた中でもゆっくりだったのはいつか」を尋ねていることによる。それに対し(87)～(89)は各々，「のんびりすごすのはどこか」，「一生懸命にやっているのは誰か」，「十分に休暇が取れるのはいつか」をたずねており，様態副詞は不確定部分の条件付けを行っていないし，また，焦点を強く表してもいない。

このように，yes-no タイプの疑問文と同様に，応答発話における様態副詞のくり返しの義務化は，その副詞がどの程度述語部分で表される行為や状態を強く限定しているか，述語部分の情報が取り消し可能か否かによって言語化の有無が決定される。

5-2-3. 量の副詞

では次に，述語部分で表される行為や状態の量を表す副詞について見てみよう。

(92) A: 誰が たくさん 食べましたか。

B1: 橋本さんが 食べました。

B2: 橋本さんが たくさん 食べました。

(93) A: 人が どこへ 大勢 来ましたか。

B1: 体育館へ 来ました。

B2: 体育館へ 大勢 来ました。

B3: 人が 体育館へ 大勢 来ました。

(94) A: 何が 少しだけ 残っていますか。

B1: ?果物が 残っています。

B2: 果物が 少しだけ 残っています。

yes-noタイプの疑問文に対する応答発話では，量の副詞のくり返しは義務的ではなかった。上の例に見るように，wh タイプの疑問文に対する応答発話でも，量の副詞のくり返しは義務的でない。

5-3. スペース設定点

yes-no タイプの疑問文では，スペース設定点となる時の副詞や，主題化された場所を表わす要素は，応答発話においてくり返しが恣意的であった。では，wh タイプの疑問文ではどうだろうか。

(95) A：昨日 どこへ 行きましたか。
　B1：上野へ 行きました。
　B2：昨日 上野へ 行きました。
　B3：上野です。

(96) A：いつも どこへ 行きますか。
　B1：バイトへ 行きます。
　B2：いつも バイトへ 行きます。
　B3：バイトです。

(97) A：日本では 何が 安いですか。
　B1：電気製品が 安いです。
　B2：日本では 電気製品が 安いです。
　B3：電気製品です。

yes-no タイプの疑問文と同様に，wh タイプの疑問文でも，応答発話におけるスペース設定点のくり返しは義務的ではない。

では，頻度を表わす副詞の場合はどうだろうか。yes-no タイプの疑問文では，応答発話においてくり返しが義務的でなかった。

(98) A： 誰が しょっちゅう 文句を言っていますか。
　B1：(?)橋本さんが 言っています。
　B2： 橋本さんが しょっちゅう 言っています。

(99) A： どこで よく 大会が 開催されていますか。
　B1： 青森で 開催されています。
　B2： 青森で 大会が 開催されています。
　B3： 青森で よく 開催されています。

(100) A： 何を 常に もつていますか。
　B1： 携帯電話を もつています。
　B2： 携帯電話を 常に もつています。
　B3： 携帯電話です。

yes-no タイプの疑問文と同様に，頻度を表す副詞は，wh タイプの疑問文に対する応答発

話においても，くり返しが義務的ではない。

6.　本章のまとめ

以上，応答発話における要素のくり返しについて考察を行った。

先ず，yes-no タイプの疑問文から言うと，本稿での議論を通して，前提情報は取り消し不可能であり，取り消し不可能な情報は肯定の応答発話でも否定の応答発話でもくり返しを許されない，ということが明らかになった。

話者の命題は，命題構築要素，命題付加要素，スペース設定点の三つから構成される。命題構築要素のうち，プロトタイプ認識を犯す要素は疑問の焦点と解釈され，肯定の応答発話でも，否定の応答発話でも，くり返ししなければならない。命題付加情報については，「で」格成分や様態副詞が述語部分の行為や状態のあり方を強く限定し，また，述語部分が前提情報を表す場合には，必ずくり返さなければならない。しかし，量の副詞や，述語部分が取り消し可能情報であり，疑問の焦点でない様態副詞の場合には，くり返しは恣意的となる。スペース設定点，および，意味的にスペース設定点に近づく時に関わる副詞，時間の幅に関わる副詞は，くり返しが恣意的である。

モダリテイ形式については，文末に「のだ」を必要とするか否かによって，応答発話の中でのくり返しに差が生じる。モダリティ形式が「のだ」を必要とし，「のだ」によって疑問部分がスコープ化される場合，聞き手はそのスコープ全体に対して応答しなければならない。

whタイプの疑問文については，疑問の焦点は常に疑問詞で表わされる不確定部分であり，応答発話ではその部分が必ず言語化されるため，語順のプロトタイプ認識の問題は生じない。「で」格成分についても，yes-noタイプの疑問文と異なり，疑問の第一の焦点とはならないので，くり返しは恣意的となる。その他の要素については，yes-no タイプの疑問文と同じ振る舞いが観察され，様態副詞は，くり返しが義務的なものと，義務的ではないものと，二つのタイプに分かれる。また，スペース設定点，量の副詞については，くり返しが義務的ではない。

第 8 章　談話の構造とリンク

1.　本章の目的

談話とは，「意味的な整合性をもつ発話の連なり」である。では，談話の内部構造はどうなっているのだろうか。本章では，談話の内部構造に焦点を当て，リンクとの関わりから談話の構造を探ってみる。

2.　話題

談話の構造を考える上で，明らかにしておかなければならない概念がある。それは，「話題」である。話題という用語は，談話分析およびテクスト分析においてよく用いられるが，この概念は談話構築，テクスト構築において重要な役割を果たすとともに，省略現象とも大いに関係がある。例えば，主題省略の分析において，「話題が変わる箇所では主題の省略ができない」といった議論がなされている（砂川有里子：1990，畠弘巳：1980）。しかしながら，話題という概念は言語分析の中で一般的な意味で使われていることが多く，話題の認定基準は現在のところ統一した見解が示されているとは言い難い。また，話題と省略との関係についても未知の部分が多い。

いわゆる「話題」とは一体何なのであろうか。この概念はこれまで，「意図」「中心思想」「主題」「トピック」「テーマ」など様々な用語で表わされている。本稿ではこのうち「話題」という用語を用いることにするが，では，話題というのはどのような性質を持ち，談話の中で具体的にどのように現われるのであろうか。

Keenan and Schieffelin（1976：338）は，「discourse topic」という用語を用い，これを，「話者が新情報を与えている，又は要求している命題（のセット）」と定義している。また，塚原鉄雄（1963：249），John Hinds（1980a：32），福地肇（1985：11）は，話題の性質について言及しており，塚原は，「題材の中心となるのが主題である。主題は，作品にも，文章にも，文にも，そして，文節（連文節）にも存在する」と述べ，Hindsは，「会話におけるトピックは一つの項目や概念に制限されておらず，実際様々な程度の相互関係を含む，複雑な実体（entities）であることがある」としている。福地は，「談話とはいくつかの文が連なったもので，全体として一つのまとまった内容をもつていおり，これが効果的に相手に伝わるためには，中心となるテーマがあり，それに沿って各文が有機的につながることによって文から文への流れがスムースになっていかなくてはならない」と述べている。三者の見解をまとめると，談話あるいは文章は中心となるテーマ（トピック）をもち，それは重層構造をなしている，と言うことができよう。

また，主題の連鎖から文章の話題を捉えようとする立場がある。北原保雄（1984：101）は，「文章は，いくつかの段落から構成され，その一つ一つの段落は，また，いくつかの文によって

構成されている。そこで，一つ一つの文の主題を総合すると段落の主題がとらえられ，そうして得られた段落の主題を総合すると，その文章全体の主題がとらえられるのではないかということが考えられてくる」と述べている。

では，主題と話題はどのような関係にあるのだろうか。次の例を見てみよう。

(1) 花子 1：前に友達が フェラガモの靴 を履かせてくれて，それ以来，私フェラガモの靴にはまっているの。

貴子　：でも，フェラガモって高いんじゃない？

花子 2：だから，私はいつも海外旅行に行く人にフェラガモを買ってきてもらうの。

花子 1 から花子 2 までの発話における主題は，「私－フェラガモ－私」となっている。しかし，一連の発話の話題が「私（について）」だとは考えられない。話題は何かと尋ねられたら，「花子がフェラガモの靴にはまっていること」あるいは「フェラガモの靴」と答えるであろう。北原は主題イコール話題と結論付けているわけではない。主題が話題を示すことがあると述べているにすぎないが，上のような例を見ると，主題が話題を示すことがどれほどの範囲で起こるのか疑われる。以上のことを鑑みて，本稿では，「話題」を大まかに次のように規定することにする。

話題：意味的に整合性をもち，まとまりのある談話がそれを中心として，またそれについて語っているある概念。

談話はある話題の下に展開されるが，話題ははっきりとした文，あるいは文中の要素として言語化されるとは限らない。このような話題という概念を客観的に捉えるためには，「話題の中心」から帰納的に求めることが有効だと思われる。話題の中心とは，一連の発話の中でくり返し表われる[1]言語要素である。こうした考え方は，永野賢（1986：294-297）でも示されている。永野は，文章全体にわたってくり返される語を「主要語句」と呼び，国語教育における「中心語句」や「重要語句」は，文章に述べられている内容を大づかみに受容するための，つまり，要旨をとらえるための手掛かりにすぎないが，主用語句は，文章の主題やモチーフに関わりの深い，いわば中核となる語句であって，文章の統一的構造を解明するための一つの観点である，と述べている。発話の中でくり返し表れる要素が連続して主語位置に立つ場合は，話題の中心イコール主語となるが，話題の中心は主語以外の位置に立つ場合もある。そして，この話題の中心こそが本稿で言う「心理的トピック」である。第 3 章で示したように，心理的トピックは前景化され，省略可能となる。実際上の例（1）は，次のように「フェラガモの靴」を省略することが可能である。しかも，「フェラガモの靴」が言語化されなくとも，我々はなお，下の談話を耳にした際，話題の中心は「フェラガモ」だと判断するであろう。

---

[1] 「表われる」としたのは，必ずしも言語化されるとは限らないためである。

(1')花子1:前に友達が フェラガモの靴 を履かせてくれて，それ以来，私［øに］はまっているの。

貴子:でも，［øって］高いんじゃない？

花子2:だから，私はいつも海外旅行に行く人に［øを］買ってきてもらうの。

このように本稿では，話題という概念は，主題とは切り離して考えるべきであり，むしろ，話題の中心である心理的トピックが，談話の中でどのようにあらわれるか，そのあらわれ方によって話題が捉えられると考える。そして談話は，話題を中心として意味的にまとまりを形成する。では，談話の内部構造はどのようになっているのだろうか。

3.　談話の内部構造

書き言葉によって作り上げられる文章を対象として，その単位を明らかにしようとする試みがいくつかなされている。「段落」と「文段」に関する議論がその一つである。

田中久直(1964)は，文章の改行が意味のひとまとまりをあらわすという立場をとっている。これに対して，形式的段落とは別に，文章には内容上のまとまりがあると仮定し，それを「文段」と呼ぶ立場に，時枝誠記(1960)，塚原鉄雄(1969)，市川孝(1978)，佐久間まゆみ(1986, 1989)などがある。ただ，これらの研究では，佐久間を除き，内容上のまとまりをどのような基準で判定するかを明確にはしていない。これに対し佐久間は，市川の議論を発展させ，文段には提題表現とそれについての叙述表現を伴った文，そして，その相当表現という言語形態面の指標を伴うものであるという仮設を立て，文段の単位認定のための基準の一つとして，「提題表現の統括機能」および「接続表現の統括機能」という観点を設けている。しかしながら佐久間の研究は，文章を対象としており，話し言葉には適用し難い。本稿では，話し言葉を分析の対象としている以上，会話文によって作り上げられる談話の単位認定に有効な基準を探らなければならない。

会話を対象とした研究では，南不二男(1981)が，談話の「連続」の関係を認める基準として以下の二つ挙げ，この二つの基準のどちらかに合わないものは「断絶」としている。

a. 相接する二つの談話の内容に百科事典的観点からなんらかの類縁性が認められる場合。

b. 二つの談話が相接していなくても，aの基準によって内容が連続していると認められる談話の連鎖があり，その前または後に一つの内容上異質な談話をはさんではじめの談話の連鎖と内容上類縁性のある談話がある場合。

しかし南は，「なんらかの類縁性」の「なんらか」が具体的にどういうものか，また「内容が連続している」「内容上異質」ということをどのような基準で判断するかは明らかにしていない。これに対し本稿は，南の言う類縁性をリンクという概念で具体化する。かつ，リンクは内容上のまとまり

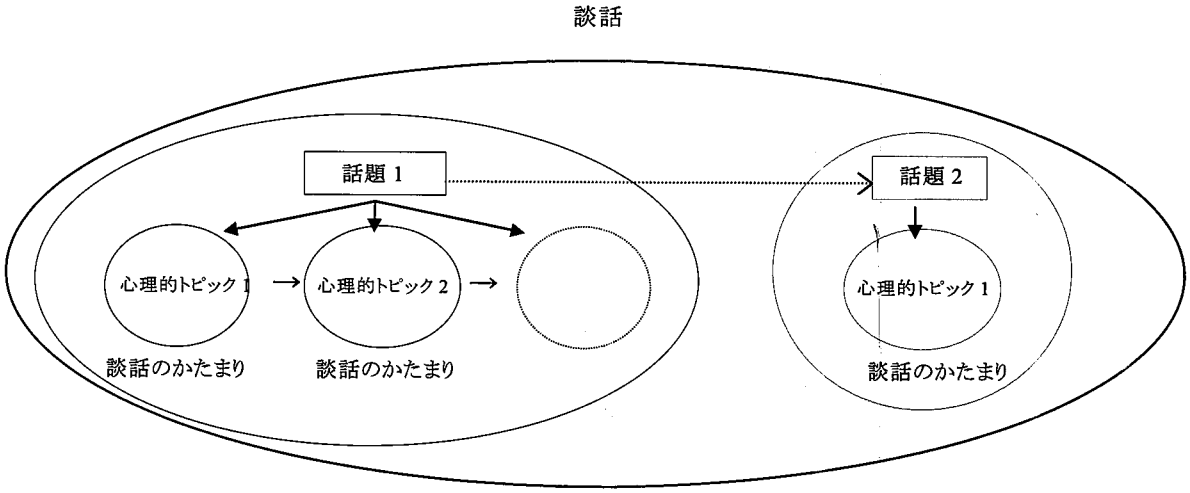
と切れを判定する有効な手段であると主張する。そして，談話の単位認定基準としてもう一つ，「心理的トピック」を用いる。

意味的整合性をもつ談話は，ある話題を中心として作り上げられ，「談話のかたまり」を形成する。

談話のかたまりは，話者の最大関心事を中心として，意味的にまとめ上げられる単位である。本稿での「談話のかたまり」という単位は，国語学の文章研究で用いられている「文段」および南の「話題」という概念単位よりも小さい単位を想定している[2]。「文段」や南の「話題」という単位は，下図 1 のように，ある一つの「話題」によってまとめ上げられている談話のかたまりよりも大きな単位に相当する。ある話題から，一つの談話のかたまりしか形成されないこともあるし，複数の談話のかたまりが形成されることもある。

談話のかたまりにおける最大関心事は，話者が描こうとする事態や状況における概念的中心であり，言い換えれば，話者が何についての事態や状況を描こうとしているか，のその「何」に当たる部分である。そして，この話者の最大関心事こそが，情報ベースの中で前景化された「心理的トピック」である。こうした本稿で言うところの「談話のかたまり」「話題」「心理的トピック」の関係は以下のようになっている。

図 1



上の図では，話題 2 は話題 1 から引き出され，相互に関連性がある。しかし，話題 1 と話題 2 とで全く関係のない話題が新しく選択されることもあり，その場合には，そこで談話は一つの切れを作り，別の談話が新しく作り上げられることになる。話題 1 と話題 2 とで一つの談話を構築

[2]「談話のかたまり」を甲斐（1995）では，「Small Discourse（SD）」と呼んでいた。

している場合には，話題 1 と話題 2 を包括する，更に大きな話題を想定することが可能である。

以上が，本稿の想定する談話の内部構造である。

段落と段落（文段と文段）や話題と話題のつながり，すなわち連接，の型については多くの研究がある。例えば，田中久直（1964）は，段落の連接の型として，発端，承接，反復，補足，並列，対比，転換，統括を挙げている。南不二男（1981）は，話題の連接の関係として，変化，発展，回帰，停滞，断続，進出，再出を挙げている。しかしながら，本稿では，文段や話題よりも小さな単位，「談話のかたまり」を想定する。そして，省略現象はこの談話のかたまりの中での，文と文との意味的関係によって起こると考える。

次の例を見てみよう。

(2) 図書館で勉強しようと思ってはじめてこの大学の図書館へ行った。*[ø] 各学部毎にあり，全部で 5 つだ。　（吉川千鶴子：1990:89 からの引用）

この例の中の二つの文は，「図書館」について語っている。しかしながら，上の二つの文の間には何らかの意味的切れが感じられる。そしてこの意味的な切れが省略をブロックしていると考えられる。吉川千鶴子（1990）は，省略の不可能さを「視点がずれている」ためであると説明している。しかし，視点という概念は，便利ではあるが，その反面，何を視点と呼ぶかはっきりせず，吉川の説明でも「視点がずれる」ということが何を意味しているのか明白ではない[3]。本稿では，上の例での省略の不自然さを，リンクの観点から説明する。

第 4 章で，リンクとして五つの下位タイプを挙げ，そして，談話の中に，複数のリンクが存在すればするほど意味的にまとまり，省略が行いやすくなると述べた。例 (2) における一文目の心理的トピック，および，二文目の心理的トピックはともに「図書館」である。しかし，これらは別個の心理的トピックである。つまり，心理的トピック 1 と心理的トピック 2 がたまたま同じであるだけであり，談話のかたまりは別々に作られている。一文目は，心理的トピック「図書館」を中心に，「図書館へ行ったこと」が描かれているが，二文目は，心理的トピック「図書館」を中心に，「図書館の数」が描かれている。そして，「図書館へ行く－図書館の数」の間には，意味論理的関係は存在しない。つまり，それぞれ別の談話のかたまりを形成しており，それ故，二文目の図書館は省略が不可能となるのである。

本稿では，談話のまとまりと切れには，五つのリンクのうち，情報のリンクが最も深く関わっていると考える。というのも，文章，談話の整合性，および，文章，談話のまとまりと切れといった談話の意味的構造を決定するのは，前後の文脈の意味論理的関係だからである。では，この問題を，次節で詳しく見てみることにする。

---

[3] 本稿では，視点を情報のリンクの一つと考えるが，本稿での視点という概念は，述語部分で言語的に表わされると考える。

4.　整合性とリンク

本稿では，発話が連なって形成される談話の中で，省略の可否を最終的に決定するのは情報のリンクであると主張する。では，こうした主張がどのような根拠に基づくのかを，談話の「整合性」という観点から見てみる。

談話の中で，情報要素の省略を可能とさせる第一の要因は，リンクの有無である。第 4 章で，リンクとして，論理的リンク，語彙的リンク，認知・概念的リンク，知識のリンク，情報のリンク，の五つを挙げた。このうち，発話が連なって形成される談話の中で，省略の可否を最終的に決定するのは，情報のリンクである。というのも，談話の整合性および意味的まとまりを作り上げるのが，情報のリンクだからである。では先ず，整合性とリンクの関係について考えてみる[4]。

論理的リンクは基本的に，述語と結びつき得る対象の共起制限に関わり，これ自体は，談話の整合性に直接には関係しない。認知・概念的リンクについても，「目にクマをつくる」といった表現を可能とするメトニミーの効力は，談話の整合性に関係しない。また，レストランでは，「注文→食事→支払い」といった展開があるといったスクリプトの知識は，談話のストーリ展開には関係するが，談話の整合性自体には関係しない。談話の整合性に関係があると考えられるのは，語彙的リンク，知識のリンク，情報のリンクである。しかし，この三つは対等な力関係にあるのではなく，相互に強弱および階層関係がある。

語彙的リンクは，文と文との結束性を作る働きをもつものの，単体では，談話の整合性を作り上げるには不充分である。例えば，次の例を見てみよう。

(3)昨日，私は公園まで歩いた。子供が走った。公園は滑り台がある。
(4)私の目の前で，ドアが閉まった。玄関の戸が開いた。

(3)の中には，「歩く－走る」という意味的グループを形成する語彙の反復，および「公園」という語彙の反復がある。(4)では，「ドア－戸」が意味的グループを形成し，また，「閉まる－開く」の間には反意性がある。しかし，このように表面上の語彙的リンクが存在しても，(3)，(4)の例に整合性が存在するとは言えない。というのは，前後の脈略に論理的関係が存在しないからである。このように，語彙的リンクはあくまでも，文と文の間に，論理的関係を作る情報のリンクが存在する上で，整合性に対する効力を有効に発揮するリンクなのである。

続いて，知識のリンクに関わる例を見てみよう。

(5)ストーブが熱くなっている。子供は危ないことが大好きだ。
(6)氷は固い。包丁の刃が折れた。

---

[4] 第 1 章で定義したが，「整合性」とは，「談話全体の自然さ，あるいはすわりのよさ」である。

(5) では，「熱くなる－危ない」の間に，(6) では，「固い－刃が折れた」の間に知識のリンクが存在する。知識のリンクは，推論を誘発させる[5]。従って，知識のリンクが存在する場合は，他のリンクに比べると，整合性が作り出されやすい。しかしながら，(5)，(6) に見るように，知識のリンクだけの場合，聞き手は文章の整合性を生み出すために，かなりの推論を働かさなければならない。

これに対し，情報のリンクは，連続する文や発話の間の意味論理的関係を示すリンクであるため，整合性と最も関わりがある。第 4 章で，情報のリンクの下位タイプとして，情報の付加，帰結，因果・事情説明，対比，逆接，質疑応答の六つを挙げた。では，各々の下位タイプが，談話の整合性とどのように関わっているか，例を挙げながら見てみることにする。

•情報の付加

情報の付加は，同一主題に対して，次々と情報の並列的付加を行うものである。典型的には，「そして」「また」等の接続詞が用いられる。次の例は，情報の付加の関係を示している。

(7)　花子さんのところへ行きなさい。そして，謝りなさい。

(8)　先ず，鍋に塩を入れます。つぎに，パスタを入れます。

(9)　彼女はスタイルがいい。しかも，頭もいい。

•帰結

帰結の関係は，前の文脈で述べられた事柄を受けて，その最終的結論や決定を述べたり，前の事柄が原因，理由となって起こった結果や，前の事柄の当然の結果として起こった事柄を述べるものである。典型的には「だから」「よって」等の接続詞が用いられる。次の例は，帰結の関係にある。

(10)　彼は時間になっても現われませんでした。そこで，私は彼に電話してみました。

(11)　はじめて月下美人の花が咲いた。すると，たくさんの人が月下美人を見にやってきた。

(12)　彼は事業に失敗した。その結果，彼は家を売り払わなければならないことになった。

•因果・事情説明

因果・事情説明は，前後の文の原因や理由を述べるもの，また，前文で描かれた状況の事情を説明するものである。典型的には，文末に「からだ」や「のだ」が用いられる。因果・事情説明の関係は，次のような例で示される。

(13)　昨日，自転車で転んだ。それで，足を怪我してしまった。

(14)　彼女はアルバイトを始めるそうだ。今度の夏にヨーロッパを旅行しようと思っているからだ。

(15)　地面が濡れている。雨が降ったのだ。

---

[5] 推論と省略の関係については，第 10 章で考察する。

•対比

対比は，情報の付加という意味での対比である。ただし，対比の焦点となるものは省略できない。この関係を表す代表的な接続詞には，「というより」「一方」「それとも」などがある。次の例は，対比の関係にある。

(16)　彼女は倹約家だ。というより，ケチだ。

(17)　花子は甘いものが好物だ。一方，太郎は甘いものが大の苦手だ。

(18)　次の会議は月曜日がいいですか。それとも，火曜日がいいですか。

•逆接

逆接は，それまでの内容に反する事柄や前の事柄に対する逆の結果を述べるものである。この関係を示す典型的な接続詞には，「しかし」「そのくせ」「ところが」などがある。次の例は，逆接の関係を示している。

(19)　図書館へ行った。しかし，閉まっていた。

(20)　彼は持ち物にうるさい。そのくせ，ケチだ。

(21)　山田君は昨日，今日学校に来ると言った。ところが，来なかった。

•質疑応答

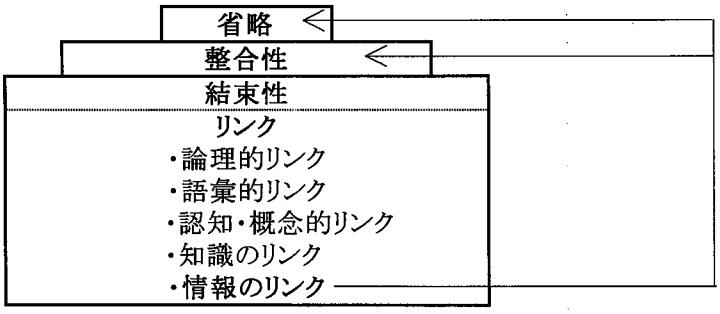
これは，質問とそれに対する答えの関係である。この関係は，どちらか一方が欠けても成り立たない。

(22) A：明日来ますか。

　　B：はい，来ます。

以上の例に見るように，情報のリンクが存在すれば，そこに整合性が存在しないということは有り得ない。というのは，情報のリンクは，文と文，発話と発話とを何らかの意味論理的関係で結びつけるリンクだからである。こうしたことから本稿では，談話の整合性を生み出す力を最大に発揮するのは文間レベルではたらく情報のリンクだと考える。一方，表面的な言語的つながりという意味での結束性だけが存在しても，前後の文脈に整合性があるとは限らない。これは語彙的リンクの例で示したとおりである。整合性は，意味的な結束性を基盤として作り出されるのである。そして省略は，文章，談話の中に意味的結束性および整合性があってはじめて生起し得る。結束性や整合性のない文章，談話の中で省略は生起することはできない。文章の整合性に最も関わりがあるのは情報のリンクであるので，従って，情報のリンクは省略とも深い関係をもち，省略の可否に大きな影響を及ぼすことになる（下図 2 参照）。

図 2



では，次節では，談話の意味的なまとまりと切れの問題について考察する。

5.　談話のまとまりと切れ

5-1.　小実験

談話をまとめ上げ，意味的な結束性を生み出す働きを行うのはリンクである。前後の文脈にリンクが存在しなければ，談話はそこで切れることになる。こう仮説すると，人がある文章を読んで，どこに文章の区切りがあると感じるのか，その判断には一般的な傾向があるはずだと考えられる。この仮説を検証するために，ある試論的小実験を行った。

5-2.　被験者と実験方法

被験者　：岡山大学文学部の学生（男女）

人数　　：19 名

実施日　：97 年 6 月

実験方法：被験者に改行なしの文章を見せ，改行した方がいいと思われる箇所があれば，そこに「／」印を入れてもらう。改行を行った方がいいと感じる箇所には，いくつでも印をつけてよいとする。被験者に提示する文章はもともと，改行された複数の段落から構成されている。実験では，その改行を取り去り，改行なしの連続した文章として被験者に提示した。

5-3.　実験材料

実験に使用した文章は，次のものである。各文の先頭には番号をつけ，改行なしに提示した。

＜資料 1＞

①まだ明けやらぬホテルの中庭に観光バスが待っていた。②イタリア人観光団の一行がチャーターしたバスだったが，飛び入りで仲間に入れてもらう。③ぼくのホンの片言のイタリア語が，ご

ターしたバスだったが，飛び入りで仲間に入れてもらう。③ぼくのホンの片言のイタリア語が，ご愛嬌だったとみえ，妙にもてて無料のゲストにしてくれる。④バスは薄暗い町の中を抜け，舟つき場へ向う。⑤バスを降りると，待ちかまえていた物乞いの人々が「バーブー・ジー（旦那さま）1ルピーを」と，一行を取り囲む。⑥突き出す手がレプラで崩れ，指が無い人や，立って歩けない子供が地面を這いながら，ぶらぶらした両足を引きずって，必死に追いすがる。⑦前日，一人で街を歩いたときよりも，一段と激しく人が群がる。⑧我々が観光団だったからである。

＜資料 2＞

①町を見て回るのに，ここでも例によって，3 輪車のオート・リキシャに乗りまくった。②高いホテルに泊まっていると，ちょっと不便なことがある。③車を呼んでもらうとき，ハイヤーかタクシーに限られることだ。④ぼくが愛用するオート・リキシャは，ホテルの格式に馴染まないらしく，「呼べない」という。⑤車にもカースト制度があるらしい。⑥ダメだという理由を，どう答えるか？と悪戯心をだして聞いてみたら，「タイヤが 4 つある車でないとダメなんです。オート・リキシャは残念なことに，タイヤが 1 つ足りません」。⑦また一本とられた。⑧オート・リキシャの運転手達も，別に差別の不当性を訴えるでもなく，当然のこととして受け入れている。⑨町からホテルへ帰ってくるときも，門の手前で止り，「これから先は歩いてくれ」という。⑩タクシーの場合は，玄関まで横付けしてくれるが…。⑪ホテルから外出するときに，わざわざ外へ出て拾うのは面倒だが，タクシーより料金が安い，ということだけにこだわっている訳ではない。⑫町の中に入り，人々のごく自然な日常生活に触れたいと考えるなら，タクシーよりもオート・リキシャの方がいいのである。⑬タクシーだと，町の人との触れあい方が，微妙に違ってくるからだ。

（以上　妹尾河童『河童が覗いたインド』新潮社）

5-4. 結果

結果を見ると，改行をした方がいいと感じる箇所はまったくバラバラというのではなく，複数の被験者が改行した方がよいと一致して感じる箇所が見られた。

次の資料1について，③と④の間に改行を入れた被験者は 19 人中 14 人，④と⑤の間は 9 人，⑥と⑦の間は 4 人である。では，実験で使った文章の中に，どのようなリンクが存在するか見てみよう。

*意味的に関連のある語彙および同一語彙の反復には同一符号を付けている。

＜資料 1＞

①まだ明けやらぬ a ホテルの中庭に観光 b バス c が待っていた。

②イタリア人 d 観光団 b の一行 b がチャーターしたバス c だったが，飛び入りで仲間 d に入れてもらう。

③ぼくのホンの片言のイタリア語 d が，ご愛嬌だったとみえ，妙にもてて無料のゲスト d にしてくれる。

1) 14/19

④バス c は薄暗い a 町の中を抜け，舟つき場へ向う。

2) 9/19

⑤バス c を降りると，待ちかまえていた物乞いの人々 e が「バーブー・ジー（旦那さま）1 ルピーを」と，一行 b を取り囲む。

⑥突き出す手がレプラで崩れ，指が無い人 e や，立って歩けない子供 e が地面を這いながら，ぶらぶらした両足を引きずって，必死に追いすがる f。

3) 4/19

⑦前日，一人で街を歩いたときよりも，一段と激しく人が群がる f。

⑧我々 b が観光団 b だったからである。

被験者が区切りを入れた箇所は，人数の大小は別として三箇所存在する。上に見るように，「バス」「観光」という語彙は文章を通して数カ所で反復使用されている。それによって，文章全体の話題の一貫性には貢献しているわけであるが，被験者がその間に区切りを入れているということは，語彙の反復使用が必ずしも文章，談話のまとまりと切れを決定する第一の要件ではないことを示している。区切りを入れられた箇所のうち，③と④，④と⑤の間には「イベントシフト」が存在する。ここでの「イベントシフト」という用語は，出来事や状態が存在する場面の変化，または，行われている出来事や状態そのものの変化を意味する。上の例のイベントシフトは，二重下線を引いた「（バスが）待っていた」，「（バスは）船つき場へ向う」，「バスを降りる」の部分で表されており，これらの間には，時間の経過を伴ったストーリー進展が見られる。

それに比べ，①に対する②，③は，時間の経過やストーリー進展は存在せず，これらの内容は，①の「観光バス」がどんなバスなのかの情報の付加である。同様に，⑤に対する⑥は，「物乞いの人」の様子の説明であり，⑦も，「物乞いの人」が追いすがる様子を前日と対比させて説明している。⑥～⑦の間には，区切りを設定した被験者が 4 人いるが，この 4 人の被験者は，「前日」という，時間の変化を示す語彙に影響を受けたのではないかと思われる。続く⑧は，「から」という理由を表わす語彙を用いて，⑦の原因・理由付けを行っているので，ここに意味的切れは見られない。

イベントシフトについては，意味的な切れを作り出す場合もあるが，常に意味的断絶を作り出すとは限らない。④～⑤のように，「バスは舟つき場へ向う－バスを降りる」は時間的流れにそっており，これを談話の切れと判断した被験者が 9 人いるものの，談話の継続と捕らえる被験者も 10 人いるわけである。

次に資料 2 を見てみよう。資料 2 については，①と②の間に改行を入れた者が 19 人中 12 人，⑤と⑥の間が 4 人，⑦と⑧の間が 5 人，⑧と⑨の間が 7 人，⑩と⑪の間が 9 人である。

＜資料 2＞

1) 12/19

①町 a を見て回るのに，ここでも例によって，3 輪車のオート・リキシャ b に乗りまくった。

②高いホテル c に泊まっていると，ちょっと不便なことがある。

③車 d を呼んでもらう e とき，ハイヤーf かタクシーf に限られることだ。

④ぼくが愛用するオート・リキシャ b は，ホテル c の格式に馴染まないらしく，「呼べない e」という。

2) 4/19

⑤車 d にもカースト制度があるらしい。

⑥ダメだという理由を，どう答えるか？と悪戯心をだして聞いてみたら，「タイヤが 4 つある車 f でないとダメなんです。オート・リキシャ b は残念なことに，タイヤが 1 つ足りません」。

3) 5/19

⑦また一本とられた。

⑧オート・リキシャ b の運転手達 b も，別に差別の不当性を訴えるでもなく，当然のこととして受け入れている。

4) 7/19

⑨町 a から ホテル c へ帰ってくるときも，門の手前で止り g，「これから先は歩いてくれ」という。

5) 9/19

⑩タクシーf の場合は，玄関まで横付け g してくれるが…。

⑪ホテル c から外出するときに，わざわざ外へ出て拾うのは面倒だが，タクシーf より料金が安い，ということだけにこだわっている訳ではない。

⑫町 a の中に入り，人々のごく自然な日常生活に触れたい h と考えるなら，タクシーf よりもオート・リキシャ b の方がいいのである。

⑬タクシーf だと，町 a の人との触れあい h 方が，微妙に違ってくるからだ。

ここでは，「町」「ホテル」「タクシー」「オートリキシャ」という語彙が文章を通して反復使用されている。しかし，被験者はその間に段落を設定しているという結果を見ると，やはり語彙の反復使用は，文章，談話のまとまりと切れを決定する第一の要因ではないことが示される。段落を設定した人数が最も多いのは，①と②の間，次に⑩と⑪である。内容を見ると，②～⑩は，ホテルに泊まって不便なことについて述べており，⑪～⑬は，筆者がオートリキシャを使う理由を述べている。

先ず②～⑩の中身についてみると，②に対して③は，「ことだ」を使って具体例の提示を行っている。④は③の理由付け，⑤は④に対するコメントである。②～⑤は時空間を離れた描写であるが，⑥は会話文が含まれており，この点に着目したと思われる被験者が 4 人，ここに区切りを設定している。続く⑦は⑥に対するコメントであり，ここに意味的な切れは存在しない。

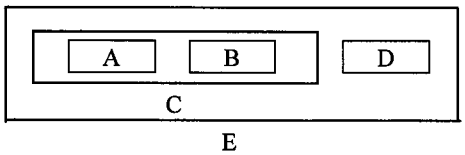
⑧は，「オートリキシャの運転手達」という新しい主題で始まっている。この点に着目したと思われる 7 人の被験者は，ここに区切りを入れている。ここに区切りを設定しなかった多数派の 12 人は，②～⑤で示されている事実の描写に対するオートリキシャの運転手の反応として，前の文脈につながっているまとまりと判断したのだと思われる。

⑨，⑩は，②～⑤で述べられている不便なことの具体例を更に示している。これを継続と捉えたと思われる 12 人はここに区切りを設けていない。区切りを設けた 7 人の被験者は，「町からホテルへ帰ってくるとき」という時設定のイベントシフトを表す表現に影響されたのだと思われる。

⑪～⑬については，筆者がオートリキシャを使う理由を述べている。また，「ホテルから外出するとき」というイベントシフトを表す表現があり，話の内容が変わると感じた 9 人の被験者は，ここに区切りを入れている。しかし残りの 10 人は，意味的切れとは判断していない。それは，⑪～⑬が，「不便でもなお筆者がオートリキシャを使う理由」を説明しており，これは①～⑩が述べている内容全体に対する理由付けの関係となっており，この関係を重視したのではないかと思われる。

以上の実験結果を見ると，市川，永野，佐久間が述べているように，文章，談話は重層構造をなしていることがわかる（下図 3 参照）。

図 3



この文章，談話の重層構造の中のどの点に着目するかによって，談話のまとまりと切れの設定が異なってくる。例えば，上図 3 のうち，A と B はそれぞれ別個のかたまりであっても，C という単位の中ではまとまっている。また，A，B を含んだ C は，E という単位の中で D と関わりをもち，つながっている。まとまりの単位が大きくなればなるほど，そのつながりはゆるやかなものへとなっていく。しかし，ゆるやかにつながった構造体であるが，文章，談話全体の整合性という点では，なお，まとまっていなければならない。

6.　本章のまとめ

この章で，談話の整合性を作り出すのに最も効力を発揮するのは情報のリンクであると主張した。以上の小実験から，談話のまとまりと切れに最も関係があるのは，文と文との意味的つながりを示す情報のリンクや時間の経過を含むストーリー進展であることが示された。

談話の中の意味的つながりを示すのは，情報のリンクである。ただ，省略の可否という問題に

ついては，談話全体のゆるやかなまとまりと切れよりも，より狭い範囲のまとまりと切れの影響によって起こってくる。この狭い範囲というのは，本章で述べた「談話のかたまり」である。時間の経過を含むストーリー進展も，単に時間の経過（時間的ギャップ）が存在するだけでは，省略という現象をブロックすることにはならない。これらの問題を，次の章で主題の省略という観点から，見ていくことにする。

第 9 章　主題の省略

1.　本章の目的

発話が連なって作り上げられる談話という構造の中で，主題は省略と深く関わりがある。この章では主題に焦点を当て，主題の省略について，談話の意味的構造から考えてみる。そして，本章での考察を通して，主題の省略の可否は，情報のリンクおよび話題の変換の有無という要因に強くコントロールされていることを示していく[1]。

2.　先行研究

これまでに，主題と省略との関わりについて，いくつかの研究がなされている。

Hinds and Shibatani (1977:44) は，主題化は省略に先んじ，省略はある要素が談話の中に導入された直後ではなく，既に主題化されている（スポットライト化されている）ときに起こる，と述べている。Walker, Iida and Cote (1994) は，Grosz, Joshi and Weinstein (1983, 1995) によって提唱された Centering モデルを用いて，日本語のゼロ代名詞がどのように解釈されるかの調査結果を示している。Centering モデルは言語のコンピュータ処理を目指して発展した理論であり，発話の中にはその他の要素よりもより中心的な要素が存在するという仮説の下に，この属性と話者の指示表現の使用との相関関係を見るものである。Walker, Iida and Cote は，Centering モデルを日本語のゼロ代名詞の解釈に適用させた分析から，省略されている要素は直前の発話の主題を指示していると解釈されやすい，という結果を示している。

一方，主題の省略が困難となる場合について，砂川有里子 (1990) は書き言葉を対象とした分析の中で，「なんらかの原因で話題に境界が設定され，そのためにそれ以前の主題を維持することが困難になったとき，『は』を用いて再び主題を設定し直す必要が生じる (p.24)」と述べ，主題の維持が困難となる要因として，他の登場人物の介入，脈略の不整合，時空間的なギャップ，語り様式の変化，書き手の視点の変化を挙げている。また，J. Hinds and W. Hinds (1979:201) は語りを対象とした分析から，語りはいくつかのエピソードで構成され，その統語的境界は scene setting，エピソードの境界をマークする転移句 (transitionary phrases or clauses)，setting をシフトする語彙項目（「あくる日になって」「しばらくの間」など）で表わされるが，省略はエピソード境界を越えることはできない，としている。

そしてもう一つ，直接に主題の省略について論じたものではないが，特筆すべき研究として Talmy Givón (1983) を挙げる。Givón は，統語的概念である「主語 (subject)」に対して，「トピック

---

[1] 本章は，『日本語・日本文化研究』第 9 号に掲載された論文に加筆したものである。

(topic)」は談話機能的概念であるとし，談話におけるトピックの同定性について論じている。そしてその中で，話者や聞き手がトピック同定に困難さを感じる要因について，次のように述べている(pp.10-12)。

(a)**レジスター[2]の中での欠如の長さ(length of absence from the register)**：

定のトピックがはじめて談話に導入される場合や，トピックが定であっても長いギャップの後にレジスターに戻ってくる場合は，処理が困難となる。一方，ギャップが短いほど，トピック同定が容易になる。従って，トピックが前の節の中にある場合，同定は最も容易となる。

(b)**その他のトピックによる潜在的干渉(potential interference from othe topics)**：

レジスターの中にその他のトピックが存在するほど，そして，特にこうしたその他のトピックが，問題のトピックが存在する節の中で意味的な役割をもっているほど，トピックの同定は困難となる。

(c)**意味的情報からの可能性(availability of semantic information)**：

特にその他のトピックがレジスターの中にあり，潜在的干渉となっていて，トピック同定が困難な場合，節の中のいわゆる「重複的な」意味的情報は，トピック同定を容易にする役割を果たす。このような情報は主に，節の述部から得られる。この情報は，特定の意味／文法的役割には特定のトピックが関わるといった一般的可能性(generic probabilities)に関わる。

(d)**主題情報からの可能性(availability of thematic information)**：

特にレジスターの中で，その他のトピックが潜在的に干渉している場合，前の談話から得られる主題情報はトピック同定に役立つ。このような情報は，特定可能性(specific probabilities)から得られる。

また「継続(continuity)」という観点から Givón は，次のように示している。

a. 継続しているものは，より予測可能である
b. 予測可能なものは，処理し易い
反対に，
c. 非継続もしくは分裂したものは，予測しにくい
d. 予測しにくいもの，従って意外なものは，処理しにくい。

Givón がトピック同定の困難さに関して挙げている c は，本稿の第 5 章で示した，主語指向度に関係する。a, b, d については，この章の分析の中で，順次考察していくことにする。そして本章では，以上の先行研究を出発点とし，次の点をあきらかにしていきたいと思う。

1) Hinds and Shibatani および Walker, Iida and Cote は，省略されている要素は主題であると述べ

[2] Givón の「レジスター(register)」という概念は，本稿の「情報ベース」に近い。

ているが，前の発話で主題であった要素が，続く発話において同じく主題位置を占めていても，省略不可能となる場合がある。

2) 前の発話で主題となって言語化された要素が，続く談話の中で格成分になった場合，また格成分が主題になった場合，省略が行えるときと，行えないときがある。

3) 砂川および J. Hinds and W. Hinds が省略をブロックする要因としてあげている，時空間のギャップ（シーンの変化），他の登場人物の介入，という条件は再考の必要がある。

3. 主要素連鎖

永野賢（1986：133-134）は，「文の連続する中で主語の果たす役割は，それぞれが一つの文の主語であると同時に，先行する文ないし後続する文の主語との関わりをもっている。このように，文章を構成するすべての文の主語が，文章全体を通して何らかの相関関係をなしている事実に着目することによって『主語の連鎖』という観点が浮かび上がってくる」と述べている。

第8章で述べたが，主題と話題，主題と心理的トピックとは別物である。しかしながら，主題の省略を考察するために，談話の中での「主語」の連なり，すなわち主語の連鎖，を見ていくことは有用であると思われる。しかし，単に線状としての主語の連鎖を見ればいいと言うわけではない。主語の連鎖は，文の意味的構造との関わりから見なければならない。文の意味的構造とはすなわち，リンクである。それによって，主語のつながりを有機的に捉えることができる。こうした考えを前提として本章では，各談話の中での，「主要素の連鎖」を談話の意味的構造から見ていくことにする。主要素とは，先ず，「が」格主語と「は」主題の両方を含む主語，そして，現在主語でなくとも，続く発話の中で主語に昇格する格成分，あるいは，前の発話で主語であったが，現在格成分となっている要素，の三種類を指す[3]。次の例を見てみよう。

(1) ＜洋子は，京子に絵美子の話をする＞

洋子：①昨日，絵美子 a が / *[ø が] 私 b の家に 来たんだけど，彼女 a とても落ち込んでたの。②それで，[øb は][øa に] 聞いてみたの。③どうしたのって。④そしたら，なんと [øa] あの彼と別れたって言うのよ。⑤それに，絵美子 a がかわいがっていた猫がいなくなっちゃったらしくって，彼女，二重のショック受けてるの。

京子：①そうなの。②絵美子，かわいそう。

この例の主要素連鎖は下のようになっている。

[3] 続く発話の中で，格成分から主語となるもの，そして，主語から格成分になるものは，例(1)の「私の家」と「私」の関係のように，もとの要素の一部分であることもある。

(1) ①*絵美子が*:私の家 / 彼女 ― ②ø(私は):ø(彼女に)…③© ― ④ø(彼女):あの彼と ―
④〔絵美子が〕猫 / 彼女 ‖ ②絵美子

主要素連鎖表の中の記号は次を意味する。

「‖」:話者境界

「―」:文境界

「/」:句境界

「…」:直前の文との倒置関係

「:A」:Aは主語以外の格成分

「〔B〕C」:〔 〕は関係節や「コト・ノ・ト」で終わる名詞節。Bは節の中に現れる主要素。Cは関係節化された名詞。

© :明確な主語をもたない文,主語がないことが無標の文

主語連鎖表の中の斜体太字:省略できない主語

また例文の中で,二つ以上,主要な要素があらわれている場合,同じ指示対象には,「a,b…」等の同一符号をつける。

4. 主題化と談話の意味的構造

4-1. 主題の連続

Hinds and Shibataniは,省略は談話導入の直後ではなく,主題化(スポットライト化)された後に起こると述べている。またWalker, Iida and Coteは,文の読み手は省略されている要素が直前の文の主題を指示していると判断しやすい,という調査結果を示している。しかしながら本稿では,省略されている要素は,直前の発話の主題だというこれらの主張が,必ずしもすべての例に当てはまるわけではないことを示していきたいと思う。

次の例を見てみよう。確かに,次の例で省略されている要素の指示対象は,前の発話の主題である。

(2)<自分の父について話す>

娘:①父は 三十年前,事業に失敗し,ひどい暮らしになってしまいましたの。②そのため,[øは]その時生まれたばかりだった男の子を,手放さなければならなかったそうですわ。③でも,その後[øは]死物ぐるいで働いたおかげで,今では財産もでき,何の不自由もなくなりました。

(星新一「財産への道」『ノックの音が』講談社文庫)

(3)<杉山家,書斎。パソコンで絵を措いている千景。入ってくる昌子>

千景1:お父さん,帰ってきた?

昌子1:①まだ。②[øは]この頃,水曜日は決まって遅いんだから。

(周防正行「Shall weダンス?」『月刊シナリオ』52-2)

(4) <派遣社員についてみんなで話をしている>
有馬 1:派遣社員のメリットは，先ず仕事を一から教えなくともいいこと。
有馬 2:[ø は]　その日からすぐ使えるってことだな。
宮本　:[ø は]　得意技を持っているってことよね。

(林律雄 「山口六平太」『ビッグコミック』 No.765)

これらの例は同一主題が連続しており，二文目以降の主題が省略されている。では Hinds and Shibatani の言うように，一旦主題としてスポットライト化されていなければ，省略はできないのだろうか。

4-2. 格成分から主題へ

次の例を見てみよう。次の例では，格成分として既出の要素であるが，続く発話で言語化されており，省略すると不自然となる。

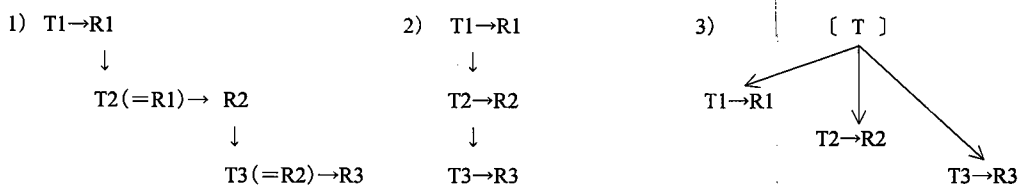
(5) <舞はブラックプールというダンス大会へ出場したときのことを回想しながら，>
舞:①私が　初めて選手としてブラックプールに行ったのは二年前の五月でした。②***私は /*[ø は]***
　子供の頃からの夢の実現に確実に近づいたことに興奮していました。

(周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』 52-2)

こうした例を見ると，Hinds and Shibatani の主張が妥当であるように思われる。

Jan Firbas (1974:22) は 'communicative dynamism' の観点から，最も小さい程度の伝達情報量を担う要素 (既知の情報) で始まり，最も大きい程度の伝達情報を担う要素 (未知の情報) を加えていきながら伝達を促進していくのが伝達の効果としては最適であると述べている。また，文と文とのつながり方について František Daneš (1974:118-119) は，FSP (= Functional Sentence Perspective) の観点から，テクストのつながり (connexity) はとりわけ TP (= Thematic Progression) によって表されるとし，次の三つの主要な TP タイプを挙げている。

1) 単純線上 TP:最も基本的な TP で，各 R (Rheme) は次の発話の T (Theme) になる。
2) 連続する (一定の) theme の TP:一つのそして同じ T が一連の発話に現われ，異なる R がリンク付けされる。
3) 派生した T の TP:特定の発話の theme は (パラグラフやその他のテクスト部分の) 'hypertheme' から派生される。



Firbas や Daneš の観点に従うと，(5)の第一文目は，主語部分が旧情報を，そして述語部分の「二年前の五月でした」が新情報を示しているので，続く発話はこの新情報を主題として何か新たな情報を付け加えるというのが新旧の情報の流れに添う。しかしながら，第二文目は「私」を主題として，私についての叙述という新しい談話を構築している。これが省略をブロックしているのだと思われる。このように本稿では，スポットライト化の有無というよりも，談話構造の意味的つながりが省略を不可能とさせるのだと考える。

(5)の談話を次のように，同一時空間の出来事であることを示す「その時」という表現を加え，また第一文目の新旧の情報構造を変えてみよう。二文目の主題が省略可能となる。

(5')舞：①二年前の五月，私は 初めて選手としてブラックプールに行きました。②その時，[ø は] 子供の頃からの夢の実現に確実に近づいたことに興奮していました。

ただしこの例は，第一文目の主語が主題で，主題継続の構造になっており，Hinds and Shibatani の，省略の前に主題化（スポットライト化）が必要であるという主張，また，Walker, Iida and Cote の，省略されている要素は直前の文の主題であるという主張を支持することになる。

ところが次の例を見てみよう。次の例は，格成分が続く発話で主語位置にきて，直接省略されている。

(6)＜良子は，自分の店の客である一人の男と店のママとの関係について話をする。＞

良子：①よくある話だけど，私の先輩だったママ a と 妻子持ちのあの人 b が恋愛して，②[ø a は] 本気だったのよね，③[ø a は] 子供が出来たのに ④先輩 a は /[ø a は] 自分から身を引いちゃった。

（毛利甚八 「ケントの方舟」『ビッグコミックオリジナル』No.684）

先の(2)，(3)の例では，一旦主題として打ち立てられた要素が，続く発話においても主題として継続されており，同一主題に対して何らかのコメントを付け加えていくという構造になっている。主題省略が可能となった(5')の例も同一主題の連続で，その主題に対してコメントを付け加えるという情報付加の構造になっている。情報の付加は情報のリンクの一つである。これに対し(6)は，格成分が主題となって省略されており，談話構造は(2)(3)(5')と異なる。(6)の主要素連鎖を見てみると，次のようになっている。

(6) ①ママと：あの人が / ②ø（先輩は） ― ③ø（先輩は） / ④先輩は

談話に登場する人物情報は「ママ（先輩）」と「あの人」である。良子 2 の発話では，「恋愛する－子供が出来る－身を引く」という起承転結的つながり，および，「本気だった（から）－身を引く」という理由付け，といった情報のリンクが存在する。そして，子供が出来るのは男性ではなく女性だ

という世界に対する知識によって，良子2の第二，第三句目における主題が省略されるのである[4]。また第四句目の「先輩は」という主題は，ここで言語化されているが，以上の要因から省略も可能である。このように前後の文脈に情報のリンクが存在すれば，Hinds and Shibatani の言うように，一旦主題化（スポットライト化）されなくとも，格成分から主題位置にきて直接省略が可能となる。

続いて次の例も，問題の要素がそれ以前に主題化されていないにもかかわらず，省略されている。

(7) ＜つめに色を付ける薬を開発中だという部下の報告を聞いて＞

上司：いい着眼だな，色がはげるということもない。

部下：①その過程で，ばかげた薬の発見が なされました。②[ø は] 一時的に頭がおかしくなる作用のあるものです。③[ø は] まさしく，ばかげた薬。④[ø は] 何の役にも立たない。

（星新一 「黄色い薬」『夜のかくれんぼ』新潮文庫）

(8) ＜森野は良子から，少年とキャッチボールをして，その姿をある男に見せてほしいと頼まれる＞

森野1：キャッチボールの依頼人は，あの男 だったのか。

良子 ：ええ，[ø は] 古くからのお客さんなの。

森野2：[ø は] 守君の父親なんだろう？

（毛利甚八 「ケントの方舟」『ビッグコミックオリジナル』No.682）

これに対して，次の(9)～(12)の例は，格成分が主題になり，省略が不可能である。

(9) ＜モグリで手術をする少女に会って＞

天馬1：どこでこんな技術，覚えた？

少女1：父が 医者だったから…。

天馬2：だった…？

少女2：①*父は / *[ø は]* ベトナム人医師で，私を連れて東ドイツに留学…②そのまま残って小さな診療所を開業してた…。③でも，壁が崩壊して…。

（浦沢直樹 「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』No.685）

(10) ＜ライヒワインは Dr.テンマの協力者である。ライヒワインはヴァーデマンという弁護士とそのパートナーのバウルをずっと探していた。やっとその弁護士と連絡が取れ，会いにやってくる。＞

弁護士1 ：①留守がちで申し訳ない。②彼も私も調査に走り回ってまして。

ライヒワイン1：調査？

弁護士2 ：ええ。Dr.テンマを 支援している，彼の元患者たちにね。

---

[4] これには，「ママ」と「あの人」がどちらが先に言語化されているかという語順も関係しているかもしれないが，語順の問題は今後の課題である。

ライヒワイン2:彼らは何と…？

弁護士3 :***Dr.テンマは / ???[ø は]*** 素晴らしい医者のようだ。

（浦沢直樹「MONSTER」『ビッグコミックオリジナル』No.743）

(11)＜不釣り合いだと栗田との再婚を渋るたか子に，山岡は，＞

山岡 :ふたりは立派につりあっています。

たか子:①でも…私は 亡くなった夫に やはりわだかまりがあるんです。②***主人は / *[ø は]*** 秋田出身でした。③東京に出てきてから，ずっと働きづめでした。④私と結婚してからも私と娘のためにダンプを運転して，盆も正月もなく働きづめでした。

（雁屋哲「美味しんぼ」『ビッグコミックスピリッツ』No.658）

(12)＜舞は世界最高のダンス大会，ブラックプールへ初めて行ったときのことを回想しながら，＞

舞:①私が初めて ブラックプール a に行ったのは五歳の時だった。②街の中心にあるタワーのボールルームはとても大きくて立派で，私は知らない人に混じって，一生懸命ステップを真似しながら踊ったわ。③***ブラックプール a は / ???[ø は]*** 父と死んだ母の憧れだった。

（周防正行「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』52-2）

(7)～(8)と(9)～(12)の差は，Hinds and Shibatani の主題化の有無という理論，Walker, Iida and Cote の，省略されている要素は直前の発話の主題であるという理論では説明できない。どちらも主題化されていないにもかかわらず，前者のタイプは省略されており，後者のタイプは言語化されているからである。では，(7)の部下の発話と，(8)の一連の発話の主要素連鎖を見てみよう。

(7) ①ばかげた薬の発見が ― ②ø(その薬は) ― ③ø(その薬は) ― ④ø(その薬は)

(8) 依頼人は:あの男 ‖ ø(あの人は) ‖ ø(あの男は)

(7)で，「ばかげた薬」は前景化された心理的トピックである。(7)の談話構造は，この心理的トピックに対して二文目以降コメントを付け加えていくという形になっている。また，(8)で前景化された心理的トピックは「あの男」であり，ここでも，続く発話の中で前景化された心理的トピックについて何らかのコメントを並列的に付け加えていくという談話構造をもつている。こうした情報の並列的付加という談話構造が，主題の省略を引き起こしているのである。

それに対し(9)～(12)は，談話の中に「話題の変換」がある。

先ず(9)について，天馬1～少女2までの主要素連鎖を見てみよう。

(9) ø(君) ‖ 父が ‖ © ‖ ①***父は*** / 私を ― ②ø(父は)

情報ベースにインプットされている人物情報は，聞き手と聞き手の父の二人である。そして，同一指示対象を指す「父が」と「父は」は連続生起しており，間にその他の主要な人物情報は介入し

ておらず，指示対象の連続性から言えば，「父」という談話要素は卓越しているはずである。にもかかわらず，少女2の第一文目で「父は」という主題は，再言語化されており，省略すると不自然である。では，談話の内容はどうなっているのだろうか。

天馬1〜少女1までの発話は，少女の医療技術について語られている。一方，少女2では話題が「父の過去」に移っている。この話題の変換が，主題の再言語化を強要しているのである。

次に(10)の例について見てみよう。弁護士1〜弁護士3までの主要素連鎖は次のとおりである。

(10) ①© — ②彼も私も ‖ © ‖ 〔Dr.テンマを〕彼の元患者たち ‖ 彼らは ‖ ***Dr.テンマは***

Givón はトピックの同定性について，レジスターでのギャップが短いほど，同定が容易になると述べている。弁護士2の「Dr.テンマを」と弁護士3の「Dr.テンマは」の間には，「元患者たち」「彼らは」という人物情報が介入しており，しかも「Dr.テンマを」は関係節の中の要素であって，指示対象が離れている。これが弁護士3で主題「Dr.テンマは」を言語化させなければならない一つの要因であると考えられる。しかし要因はそれだけではない。

弁護士1〜弁護士2とライヒワイン2〜弁護士3の間には，話題の変換がある。弁護士1〜弁護士2までの発話は，話者が不在であった理由が述べられている。しかし，ライヒワイン2〜弁護士3では，Dr.テンマに対する患者たちの評判に話題が移っている。この話題の変換により，「Dr.テンマは」は前文で既出であっても，ここで再言語化されるのである。

次に(11)を見てみよう。たか子の発話における主要素連鎖は，次のとおりである。

(11) ①私は：亡くなった夫に — ②***主人は*** — ③ø(主人は) — ④ø(主人は)：私と

主要素連鎖を見ると，「主人は」という主題の直前に，同一指示対象の「亡くなった夫」が言語化されており，間にその他の人物情報は介入していない。しかし，ここには話題の変換がある。たか子の第一文目は，自分が再婚したくない理由について述べているが，第二文目では，主人を主題として，主人の背景について話題が移っている。こうした話題の変換から，前の発話で既出である「夫(主人)」が，第二文目で再言語化され，かつ省略すると不自然になるのである。

続いて(12)の主要素連鎖を見てみよう。

(12) ①〔私が：ブラックプールに〕の — ②ボールルームは / 私は — ③***ブラックプールは***

第三文目の主題「ブラックプール」は，それ以前の発話に現れる同一指示対象が離れており，またそれが名詞節の中にある。これも主題の省略を困難とさせている一つの要因であるが，それに加えて第三文目は，それ以前の発話と話題が変換している。第二文目までは，話者がはじめてブラックプールへ行った時のことが述べられている。しかし第三文目は，ブラックプールに対する

父と母の想いについて描いている。そしてこれら二つの話題の間には，何ら因果関係がない。すなわち，情報のリンクが存在しない。それが第三文目の主題を言語化させ，省略をブロックしている最大の要因だと思われる。

このように省略の可否は，主題化の有無ということよりも，話題の変換によってコントロールされているということが言えよう。Givón が述べているような同一指示対象からの距離の長さも，主題を再言語化させ，省略を困難とさせる一つの要因ではある。しかしこれは第一の要因ではない。というのは，同一指示対象が隣接していても，省略がブロックされる場合があるからである。主題の省略をブロックする第一の要因は，話題の変換である。そして，たとえ既出の情報要素であっても，話題が変わる場合は省略が行えない。一方，話題が変らず，同じ話題が引き継がれている場合には，前の発話の中で主題でなくとも，省略され得ると言える。

話題の変換は，情報のリンクが存在しないところで形成される。よって，話題の変換があれば情報のリンクが存在しない，と言いかえることができる。しかし，逆の言い方，すなわち，情報のリンクが存在しないから話題が変換する，という言い方は必ずしも適切ではないので[5]，一応，話題の変換と情報のリンクの有無は別個の要因として分けておく。

4-3. 同一主題の連続

では次に，Hinds and Shibatani, Walker, Iida and Cote の主張への反例となる，別のタイプの例について見てみる。次の例は，同一指示対象が主題位置で連続している。これらは一旦主題として言語化されており，スポットライト化されている要素であるはずなのに，続く発話の中で再言語化されており，省略すると不自然となる。

(13) <誠が好きになった「たか子」という女性がどんな人か説明している>
誠　　：彼女は ご主人を交通事故で亡くしたんだ。
山岡　：そうか，で ［ø は］ 亡くなったご主人に操を通すためにお兄さんと結婚できないと…。
ゆう子：*たか子さんて / ??[ø]* おいくつなの？

（雁屋哲「美味しんぼ」『ビッグコミックスピリッツ』 No.658）

誠からゆう子までの主要素連鎖は次のとおりである。

(13)	彼女は ‖ ø(彼女は)：亡くなったご主人 / お兄さんと ‖ *たか子さんて*

ここで「彼女」「たか子さん」という表現で指示される人物は，最初に誠の発話の中で主題として言語化されている。そして続く山岡の発話の中では省略されている。それにもかかわらず，ゆう子の発話の中で「たか子さん」は言語化されており，省略すると不自然となる。誠と山岡の発話は，

[5] このような言い方が適切でない例として，(5)，(22) が挙げられる。

「たか子が誠と結婚できない事情」という話題のもとで，「たか子」という情報要素を前景化し，心理的トピックとして一連の発話を行っている。ところがゆう子の発話では，話題が「たか子の年齢」に移っている。このように話題が変換する場合には，たとえそれまでの発話の中で情報ベースにインプットされたはずの情報要素であり，しかもそれが主題であっても再言語化され，省略すると不自然となる。

続いて次の例を見てみよう。

(14) <急な仕事で結婚式になかなか現れない母親の再婚相手を息子の裕太がなじって，>

裕太：①あんな奴 キライだっ！ ②バカヤローッ!! ③[ø は] ママほっといて，どっか行っちゃったじゃないか!! ④あいつは /[ø は] やっぱり悪い奴だっ!!

母親：①裕太!! ②聞いて，裕太。 ③*臼木さんは /???[ø は]* ね，人が困っているとほっとけないの。④[ø は] やさしい人なの。⑤大丈夫，[ø は] きっと裕太やママのこと，うんと大事にしてくれるはずよ。⑥ママは，あの人を信じてるの…。

（一丸 「おかみさん」『ビッグコミックオリジナル』 No.626）

裕太から母親までの主要素連鎖は，次のとおりである。

(14) ①あんな奴 － ②© － ③ø(あいつは) － ④あいつは ‖ ①© － ②© － ③*臼木さんは* － ④ø(臼木さんは) － ⑤ø(臼木さんは) － ⑥ママは：あの人を

息子の第一文目で，「あんな奴」と主題として言語化された指示対象は，続く第三文目で主題継続で省略されている。第四文目は言語化されているものの，同一主題の継続で省略しても不自然ではない。ところが，母親の発話の第三文目は，同一主題の連続であるのに再言語化されており，省略すると不自然である。息子の発話も母親の発話も，臼木という人物について述べているはずであるのに，母親の第三文目の主題が省略不可能なのはどうしてだろうか。

裕太の発話内容を見てみると，話者自身が臼木を嫌いな理由について述べている。母親の発話は，そうした裕太の発話を受けて，主題のいわば「仕切りなおし」をし，臼木を主題に立て，裕太の発話を否定している。そして，発話の内容は，聞き手にとっては新情報である，臼木の性格について述べられている。このような話題の異なりによって，同一主題の連続であっても，再言語化され，省略すると不自然になるのである。しかし母親の発話の第三文目で，一旦主題を言語化した後は，情報の並列的付加をしており，だからこそ母親の第四文目，第五文目では主題が省略される。

次の例も同様である。

(15) <ビール職人の盛沢は，新しいオーナーの仁木社長に黒い枝豆を出すが，仁木はそれが腐っていると思い，盛沢をクビにする。数日後，山岡は仁木を連れて枝豆取りに行き，黒大豆を食べさせる。>

山岡 1:①普通の枝豆は大豆の枝豆ですが，これは丹波名物の黒大豆の枝豆です。②最高の枝豆です。③これ以上のものはありません。④盛沢さんも　この黒大豆の枝豆を手に入れるのは苦労されたでしょうね。

社長　:①なんてことだ…②なぜ　盛沢は　あの時それを言わなかったんだ。

山岡 2:①***盛沢さんは / ???[ø は]*** 心を大事にする方です。②[ø は]　心が通じなかったとわかったら，言い訳をするようなかたではありません。

（雁屋哲「ビールと枝豆」『美味しんぼ』vol.14　小学館）

山岡 1 から山岡 2 までの主要素連鎖は次のとおりである。

(15)

①普通の枝豆は / これは　－　②ø(これは)　－　③これ以上のものは　－　④盛沢さんも: この黒大豆の枝豆を　‖　①© －　②盛沢は　‖　①***盛沢さんは***　－　②ø(彼は)

「盛沢（さん）」で指示される対象は，山岡 1 の第四文目で初めて言語化され，続く社長の発話で主題となっている。そして，同一主題の継続であるのに，山岡 2 の第一文目では再言語化され，省略すると不自然である。山岡 1～山岡 2 までの発話内容を見てみよう。山岡 1 と社長は，盛沢が恐らく黒豆を苦労して手に入れたであろうことについて述べている。一方山岡 2 では，盛沢の性格について話題が変換している。この話題の変換が主題の省略をブロックしているのである。だからこそ，同じ話題が続く山岡 2 の第二文目は，主題が省略されている。

ただし同一主題の連続の場合，その他のケースと異なるのは，(12)～(14) に見るように，たとえ不自然さが存在するとしても，問題の主題を省略した場合，まったく発話の解釈が行えないほど容認不可能となるわけではないという点である。その理由は，談話の中にその他の人物情報が介入しておらず，しかも問題の要素は主語位置を占め続けているので，主語が予測しやすいためだと考えられる。こうした主題の卓越性は，Givón の「主題情報からの可能性」という要因における「特定可能性」と関係する。

4-4. 主題から格成分へ

次は一旦，主題として言語化された要素が，続く発話の中で格成分となるタイプを考察する。次の例を見てみよう。

(16) ＜森野はベンチにおいてあるスイカを見て，スイカの話を子供に聞かせる＞

森野 1:おっ，スイカ a じゃないか。

森野 2:①暑い暑い夏のことでした。②ゴリラから分かれた人類の祖先 b は，アフリカの大地がカラカラに乾いたので，喉をひりひりさせながら水を求めて歩き続けました。③すると，砂漠にぽつりと　緑色のボール a'が　落ちているではありませんか。④[ø a'を]　食べてみると，[ø a'に]　まる

で滝が閉じ込めてあるように［ø a'から］水があふれ出て，［ø a'は］ヒト b の命を助けたのです。⑤それ a'は，“シトラス・ラナタス”という スイカ a の御先祖様で，それ以来，人類 b は ***それ a'を / *[ø を]*** 砂漠を渡る時の水筒代りに使うようになり，ヒト b と一緒に スイカ a も世界に広がっていきました。

（毛利甚八 「ケントの方舟」『ビッグコミックオリジナル』No.684）

森野 2 の発話における「スイカ」を中心とした主要素連鎖は以下のようになっている。

(16)

①© ― ②人類の祖先は ― ③緑色のボールが ― ④ø(祖先が) :ø(ボールを) / ø(ボールに) / ø(ボールから) / ø(ボールは) ― ⑤***それは*** / 人類は:***それを*** / スイカも

ここで問題となるのは，森野 2 の第五文目，主題「それは」が格成分「それを」となり，省略がブロックされている点である。だが先ずは，それより前の部分から見てみよう。

森野2の第三文目の「緑色のボール」は「が」格主語として言語化され，その後，続く発話で「を」格，「に」格，「から」格の位置に現われて省略し続けられた後，第四文目の最後の句で主題位置で省略されている。ところが，第五文目では同一主題の連続にもかかわらず再言語化されており，省略すると不自然である。ここで省略が不可能なのは，その前の発話「人の命を助けた」ということと「スイカのご先祖様である」ことが何の因果関係もなく，二文間には情報のリンクが存在しないためである。これは，4-3 節で見た，主題継続でも情報のリンクが存在しなければ省略が不可能となるタイプに含まれる。

さて問題は，第五文目の「それを」が，同じく第五文目の文頭の主題「それは」と同一指示であるにもかかわらず再言語化されており，省略すると不自然な点である。ここで省略をブロックしている要因は何だろうか。ここでも情報のリンクが関わっている。「スイカのご先祖様」であることと「水筒代わりに使うようになった」ことの間には，何ら因果関係が存在しない。そのため，意味的な切れが生じ，たとえ直前で主題として言語化されており，卓越した要素であったとしても，再言語化が必要となり，省略すると不自然となる。

次の例も主題が格成分となり，省略がブロックされている。

(17) ＜相原は為朝に，為朝の妻が出て行ったときのことを聞く。＞

相原 1:行くとき，何か言いましたか？

為朝 1:①いいえ，なんにも言いません。②突然いなくなっちまったんです。③あのときは，ルミと二人で途方に暮れました。

相原 2:ルミは，為朝さんがムショに入って，一人ぼっちになっちゃったんですね。

為朝 2:私は，***ルミを / *[ø を]*** 残していくことに，ずいぶん悩みました。

（宗田理 『ぼくらのメリークリスマス』 角川文庫）

相原1〜為朝2までの主要素連鎖は下のようになっている。

(17) Ø(奥さんは) ‖ ①ø(妻は) — ②ø(妻は) — ③ø(私は):ルミと ‖ ルミは ‖ 私は:*ルミを*

相原2は「ルミは」を主題として，かつてのルミの状況について述べている。一方，為朝2は相原2の発話内容を受けて話を続けているものの，発話内容は，当時の話者の思いについて述べており，話題が変換している。この話題の変換が，「ルミを」を再言語化させているのである。

5. 同一主題の連続とイベントシフト

この節では，J. Hinds and W. Hinds(1979)および砂川有里子(1990)の，時空的ギャップおよびシーンの変化が省略をブロックするという主張について検証を行っていく。

次の例を見てみよう。同一主題の連続にもかかわらず，続く発話で主題が言語化されている。

(18)<利き酒会の席で>

山岡:①穂積先生がおっしゃっていましたが，日本酒は 今新時代を迎えているのです。②第二次大戦以前，*日本酒は /*[ø は]* まだ江戸時代からの古い技術を引きずっていました。

(雁屋哲「美味しんぼ」『ビッグコミックスピリッツ』No.636)

ここでの主要素連鎖は次のとおりである。

(18) ①穂積先生が / 日本酒は — ②*日本酒は*

山岡の第一文目で「日本酒は」は主題として現われており，第二文目も同一主題の継続である。それにもかかわらず，二文目の主題は再言語化されており，省略すると不自然となる。この不自然さを引き起こしている要因は，「イベントシフト」の存在である。J. Hinds and W. Hinds および砂川が述べているように，第一文目と第二文目の内容にイベントシフト(時空間のギャップ)が存在するためである。ただし砂川は，時空間のギャップという概念を，どの程度の差をもってギャップと呼ぶのか，明らかにはしていない。また，J. Hinds and W. Hinds も，どの程度の変化を以って'scene setting'と呼ぶのかを明らかにしていない。本稿では，描かれているイベント生起時が単純に時間的に異なっていることを時空間のギャップと考え，これをイベントシフトと呼ぶことにする。

第一文目では現在のことが述べられているのに対し，第二文目では第二次世界大戦以前のことが述べられており，二文間にはイベントシフトが存在する。それが山岡の第二文目の主題を再言語化させ，省略をブロックしているのである。しかし，第二文目の主題が再言語化され，省略不可能となる要因は，これだけではない。もう一つの要因がある。それは，話題の変換である。

山岡の第一文目では，穂積が日本酒について述べた内容が語られているが，第二文目では，第二次世界大戦以前の日本酒の技術について述べられいる。そしてこれら二文間を意味的に関

連付ける情報のリンクは存在しない。それによって，同一主題の継続であっても，再言語化され，省略すると不自然となっているのである。

続いて次の例を見てみよう。

(19) 田中 1:①気持ち悪いですか。②やっぱり，ぼく，気持ち悪いですか。

＜服部も豊子も杉山も，田中のその尋常ならぬ様子に言葉を失う。＞

田中 2:①[ø は] 生まれて初めて好きになった人にもそう言われました。②でも，それは普通の時で，ダンスしてるときじゃなかった。③***ぼくは / ???[ø は]***，お医者さんに勧められて，健康の為にダンスを始めました。

（周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』 52-2）

田中 1 から田中 2 までの主要素連鎖は次のようになっている。

(19) ①ø(ぼく) — ②ぼく ‖ ①ø(ぼくは) — ②それは — ③***ぼくは***

話者を指示する「ぼく」は田中 1 の第二文目で主題として言語化され，その後，田中 2 の第一文目において主題位置で省略されている。ところが，第三文目で同じ主題継続の「ぼくは」は再言語化されており，省略すると不自然となる。第 5 章で，1・2 人称主語は述語のタイプや文脈から主語が予測可能な場合，省略可能となることを示した。また Givón (1983:12) は，継続している要素は予測しやすいと述べている。第三文目の主語位置の「ぼくは」は述語が受け身であり，さらに前の文脈から卓越した主題情報であるため，主語の予測は可能なはずである。しかしそれにもかかわらず，この主題を省略すると不自然に感じられる。こうした不自然さを引き起こしている要因は，(18) と同じく二つある。

一つの要因は，イベントシフトである。田中 2 の第一文目および第二文目は，かつて好きになった人に気持ち悪いと言われたときのことについて話しをしている。一方第三文目では，最近医者にダンスを勧められたことについて話をしており，この二つの出来事の間にはイベントシフトが存在する。このイベントシフトが主題の再言語化を強要し，省略を不自然にさせているのである。

もう一つの要因は，話題の変換である。田中 1 から田中 2 の第二文目までは，自分が気持ち悪いと言われたことについて述べている。しかし第三文目の内容は，自分がダンスを始めた理由になっており，話題の変換が見られる。こうした話題の変換が，同一主題の連続であっても省略をブロックし，再言語化を強要するのである。

ところが，田中 2 の第三文目を次のように変えてみる。すると，主題は省略が可能となる。

(19') 田中 1:①気持ち悪いですか。②やっぱり，ぼく，気持ち悪いですか。

田中 2:①生まれて初めて好きになった人にもそう言われました。②でも，それは普通の時で，ダンスしてるときじゃなかった。③[ø は]，お医者さんに勧められて，健康の為にダンス

を始めたのに。

「のに」という言語表現は，情報のリンクを明示する言語的手段であり，逆予想の関係を示す。「のに」を使うことによって，田中1の発話に対する逆予想という関係が築かれる。先に，田中2の第三文目の「ぼくは」が再言語化され，省略が不自然となる要因を二つ述べた。一つはイベントシフト，もう一つは，話題の変換である。しかし，これら二つの要因は対等な関係というわけではない。(19')に見るように，イベントシフトの有無よりも，話題の変換の有無の方が強い制約として働くのである。先の(18)の例も，次のように二文間を対比という情報のリンクで結び付ければ，イベントシフトが存在しても，主題の省略は可能となる。

(18')①穂積先生がおっしゃっていましたが，日本酒は 今新時代を迎えているのです。②しかし，第二次大戦以前は，[ø は] まだ江戸時代からの古い技術を引きずっていました。

J. Hinds and W. Hinds および砂川は，時空間のギャップや scene setting が省略をブロックすると述べているが，(18')(19')に見るような情報のリンクの存在は，イベントシフトがあるにもかかわらず，主題の省略を可能とさせる。

次の例もイベントシフトが存在する。

(20) <舞は，自分がダンスのパートナーと別れた理由を語って，>

舞：①彼 b は言いました。②カップルを解消しようと。③彼 b は勝っても負けても，このブラックプールを最後にカップルを解消しようと思っていたというのです。④私 a には 理解できませんでした。⑤[ø a,b は] 誰よりも長く一緒にいて世界を目指していたのに，どうして 私 a を 裏切るのか。⑥*私 a は / *[ø は]* すぐに日本に帰ってきました。⑦そして，[ø a は] 彼 b を見返してやりたい一心で，優秀なダンサーを探しました。

(周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』 52-2)

ここでの主要素連鎖は次のようになっている。

(20) ①彼は…②© — ③彼は — ④私には…⑤ø(私達は) / ø(彼は)：私を — ⑥*私は* — ⑦ø(私は)

第四文目，第五文目に，「私には」「私を」と同一指示対象が言語化されているにもかかわらず，第六文目の「私は」は言語化されており，省略すると不自然である。要因の一つは，イベントシフトが存在することによる。第一文目から第五文目までの，彼がカップルを解消しようといった場面と，第六文目の，話者が日本へ帰ってくる場面にはイベントシフトが存在する。それが主題の省略をブロックする原因となっている。

もう一つの要因は，第五文目と第六文目の間に情報のリンクが存在しないためである。だからこそ，次のように「だから」などの帰結関係を示す接続助詞を使用し，直前の文との間に情報のリン

クを作り上げれば，第六文目の主題は，省略が可能となる。

(20')④私には理解できませんでした。⑤誰よりも長く一緒にいて世界を目指していたのに，どうして私を裏切るのか。⑥だから，私は /[øは] すぐに日本に帰ってきました。

続いて次の例を見てみよう。和歌子の発話で，第二文目までと第三文目の間には一見，イベントシフトが存在しそうであるが，それにもかかわらず，主題は省略されている。

(21)＜豊子が過労で倒れる。杉山は，豊子の娘と話をする。＞
杉山　:ずっと，お母さんa お一人で？。
和歌子:①ええ，物心ついた時には父bは死んでましたから。②そのころから 母さんaは/ [øは]，あんたが大きくなったら，[øaは] ダンス習うからね，ってしょっちゅう言ってたんです。③[øaは] 父bと出会ったのが勤めてた会社のダンスパーティーだったらしいんです。
(周防正行 「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』 52-2)

杉山から和歌子までの主要素連鎖は次のようになっている。

(21) お母さん ‖ ①父は — ②母さんは / ø(私は) — ③ø(母は):父と

杉山の発話において「お母さん」という人物情報が初めて言語化され，その後，和歌子の発話に引き継がれて，この要素は和歌子の第二文目の発話以降，主題位置で継続されている。内容を見てみると，和歌子の発話の中の第二文目は，話者が物心ついたときから現在までについて述べており，一方，第三文目は母が父と出会ったときについて述べており，間にイベントシフトが存在する。しかしながら，第三文目の主題「母は」は省略されている。これは何故だろうか。理由は，第三文目が第二文目で述べている内容の理由付けを表しているためである。このように，前後の文脈にイベントシフトが存在しても，何らかの情報のリンクで結ばれていれば，結束関係が築かれ，主題の省略が可能となる。

事実，三文目の文末を次のように変え，情報のリンクを形成しなければ，省略は不可能となる。

(21')杉山　:ずっと，お母さんa お一人で？。
和歌子:①ええ，物心ついた時には父bは死んでましたから。②そのころから [øaは] あんたが大きくなったら，[øaは] ダンス習うからね，ってしょっちゅう言ってたんです。
③*[øaは] 父bと出会ったのが勤めてた会社のダンスパーティーでした。

以上の考察から，イベントシフトは省略の可否をコントロールする第一要因ではなく，話題の変換，すなわち情報のリンクの有無こそが省略の可否をコントロールする第一要因であることがわかる。前後の文脈を関係付けるリンクが存在する場合は，イベントシフトがあっても，主題が省略し続けられる。情報のリンクは，イベントシフトによる途切れを回避し，二文間に結束性を生み出すのである。

6. その他の主題の介入

この節では，他の主題が介入するタイプの談話を考察する。Givón は，トピックの同定が困難となる要因の一つに，他のトピックの潜在的介入を挙げている。では，次の例を見てみよう。

(22) <ダンス教室で。杉山はフロアでレッスン中の舞に目がゆく。奇麗だと思い，じっと見詰める。目が一瞬合って，微笑みかけられたような気がし，思わず顔がゆるむ杉山>

豊子1:先生a，きれいだもんね。

<いつのまにか豊子が隣に座っている。>

豊子2:①あんたbも，***あの人a/*[ø]*** 目当てなんでしょ。②だったら，個人レッスンにしなきゃ。③ま，だけど，どうせ［øaに］相手にされっこないんだから，グループレッスンにして良かったわよ。④***彼女aはね/*[øは]***，こうして遠くの方から見てるのが最高なの。⑤[øaは] 今はリーダーと別れちゃったから，ここで教えてるけど［øaは］本当だったら競技会とデモンストレーションに忙しくてそんな暇ないんだから。⑥あのおやじc なんかさ，週に三日も通っちゃって，［øaに］馬鹿にされてんのも気がつかないんだからね。⑦ま，そのうち辞めるだろうけど，あんたb もいつまで続くかね。

（周防正行「Shall we ダンス？」『月刊シナリオ』52-2）

豊子1から豊子2までの主要素連鎖は次のとおりである。

(22) 先生 ‖ ①あんたも:***あの人*** — ②ø(あんた) — ③ø(あんた):ø(あの人に) / ø(あんた) — ④***彼女は*** — ⑤ø(彼女は) / ø(彼女は) — ⑥ あのおやじ / ø(彼女に) — ⑦ø(あのおやじ) / あんたも

本稿では，一つの談話に二人以上の人物情報が主題としてあらわれる場合，その省略の可否は次のようになっていると想定する。

ある談話が，Aという人物を主題として談話を展開していく中で，途中Bという人物を主題とする文(句)が介入し，そしてその後また A を主題とする文(句)があらわれるという構造をもつとする(下図1参照)。

図1

①	A
②	A
③	B ：格成分A
④	A

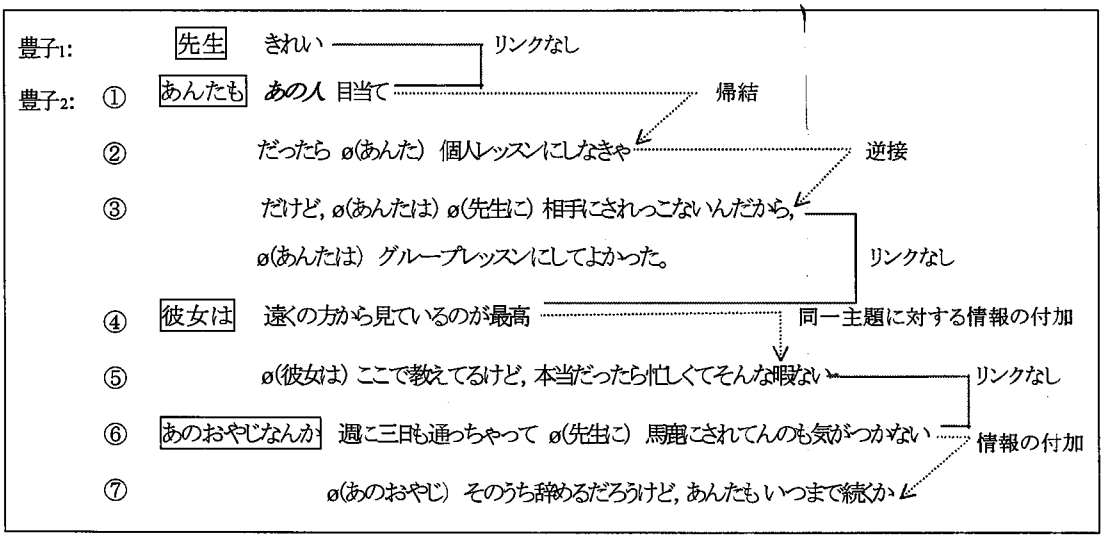
このような場合，B を主題とする文(句)が，全体の談話に意味的に組み込まれ，前後の文(句)

と何らかの意味論理的関係を築いていれば，すなわち情報のリンクが存在すれば，第四文(句)目の主題Aは省略可能となる。また，第三文(句)目のBを主題とする文(句)の中の格成分Aは省略可能となる。一方，第三文(句)目が，そこで前後の文脈を切り，意味的に別の談話を形成する場合，第四文(句)目の主題Aは省略不可能であり，また，第三文(句)目の中の格成分Aも省略不可能となる。

例(22)の談話構造は次の図2ように図式化できる。

*表内の丸数字は文の発話順を示し，斜め太文字の単語は省略できない要素を示している。

図2



豊子2の発話には三人の人物情報が含まれている。各々の人物情報は，主語位置ではじめて言語化されており，一度言語化された後は，続く発話で情報のリンクが存在する場合，省略されている。

では，一旦主題としてあらわれた要素が続く発話において，他の人物を主題にもつ文の中で格成分としてあらわれる場合はどうなるだろうか。

豊子2の第一文目の「あの人」は，豊子1に同一指示対象が言語化されているにもかかわらずここで再言語化されており，省略すると不自然となる。これは，その前の発話「先生がきれいなこと」と「杉山は先生が目当てであること」が直接的な因果関係を持たず，情報のリンクでつながっていないこと，そして「目当て」の対象は，「目当て」という述部からは唯一的に予測不可能なことによる。しかし，一旦言語化された後は，リンクの存在により，続く第三文目で「に」格位置で省略される。ところが，第四文目ではまた主題位置にきて再言語化されており，省略すると不自然となる。これは，「相手にされっこないから，グループレッスンにして良かった」ことと「遠くの方から見ているのが最高」なことには因果関係がなく，情報のリンクで結ばれていないためである。

次に豊子2の第六文目であるが，第五文目と第六文目の間には明らかなリンクが存在しない。

にもかかわらず，「あのおやじ」を主題とする文の中で「先生に」は省略されている。これはなぜだろうか。ここでの省略は，二つの前後する文の間のリンクによるものではなく，談話を通したリンクの作用による。豊子2の第一文目「あんたもあの人目当てなんでしょ」という「も」を含む発話は，教室に通う人の多くが先生目当てだということを含意しており，「あのおやじは週に三日も通っている」という情報は，その一例を示している。そして，第三文目の「相手にされっこない」と第六文目の「馬鹿にされている」は意味的類似関係にあり，ともに動作者は「先生」だということが容易に導かれる。こうした関係によって第六文目の「馬鹿にされてる」の動作者「先生に」は省略される。

続いて次の例を見てみよう。

(23)＜妻を亡くした田中が息子の栄太郎を連れて鈴木の家に遊びに来ている＞

田中：①5年前・・・栄太郎aが　二歳の時，②[øbは]　妻を亡くし・・・③僕bは　仕事ばかりで，
④[øbは]　一人息子の栄太郎aをかまってやれず，⑤栄太郎aは，母の愛情も家庭の暖かさも知らずに育ったからね。⑥せめて［øbは］お宅に来て，⑦[øbは][øaに]少しでも家庭の味を教えてやりたくてね。

（西岸良平「泣いた一平」『ビッグコミックオリジナル』No.626）

ここでの主要素連鎖は次のとおりである。

(23)　①栄太郎が / ②ø(僕は) ― ③僕は / ④ø(僕は)：栄太郎を / ⑤栄太郎は ― ⑥ø(僕は) / ⑦ø(僕は)：ø(栄太郎に)

また談話構造は，次の図3ように図式化できる。

図3

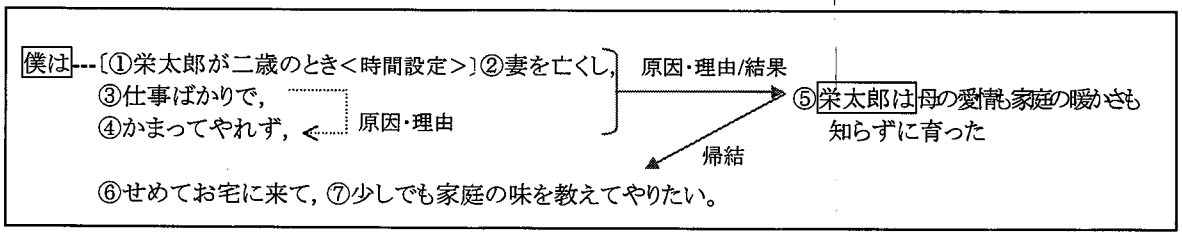


図3に見るように，①～④，⑥，⑦の句は「僕は」という総主題の下に統括される。「栄太郎」という別の主題をもつ⑤は，①～④によって表わされる出来事からの結果を示しており，意味的構造上では，⑥，⑦へ引き継ぐための挿入句となっている。これによって⑥，⑦の主題は，⑤で他の主題をもつ句が介入しているのにもかかわらず，省略される。

各々の主題を個別に見ると次の通りである。

先ず，第一句の主語「栄太郎が」は初出情報であり，言語化されていて，省略は不可能である。第二句目では，関係名詞「妻」が使用されている。第5章で，「父」「先生」などの話者から見た関係をあらわす「関係名詞」を用いた場合，主題の省略がしやすくなることを示したが，第二句目で

は，この関係名詞の使用により，主題が省略される。第三句目の「仕事ばかりで」の主語「僕は」は言語化されているが，前の句からの卓越した主題情報であること，また，それまでの文脈から既出の人物情報は「栄太郎」と「僕」の二人であり，「仕事をする」のは栄太郎ではなく，大人であり，栄太郎の父であるという推論の可能性から，省略も可能と思われる。第三句目と第四句目では，「仕事ばかり」と「かまってやれない」という出来事間に原因・理由という情報のリンクが存在する。従って，第四句目の主題は省略される。第五句目の主題「栄太郎」は言語化されているが，第一～四句と第五句の間には，原因・理由/結果の関係が存在するため，省略も可能と思われる。ただ，第一～四句までの主語は，話者を指す「僕」であり，主語が変換するため，「栄太郎は」はここで言語化されているのだと考えられる。また，第五句と第六～七句の間には帰結という情報のリンクが存在し，第六，七句は総主題の「僕」を主題とするため，第五句は全体の談話の中で挿入的役割を果たすことになり，第六，七句の主題は省略が可能となる。

一方，次の例を見てみよう。他の主題が介入し，その後，最初の主題が省略不可能である。

(24) ＜寄宿舎を飛び出して行った信夫を見つけ出した教師が＞

教師：①信夫君 a…帰ろう。②先生 b の手を取って…。③どんな気持ちが君 a の中にあるの…？
④[ø a は] 三田先生に怒られたことが悲しいの…？ ⑤でも，[ø a は] 三田先生が好きなの？
⑥[ø a は] みんなのことも…そう？ ⑦みんなを好きな気持ち嫌いな気持ち怖い気持ち。
[ø a は] いろんな気持ちが心の中にいっぱいいっぱいあるんだね…？ ⑧私達 b'も そうなのよ，信夫君 a'…。⑨[ø b'は] 心の中のいろんな気持ちを君 a に表してるのよ。⑩でも
君 a は / *[ø は] それを全部ひとりで背負ってまわりの人の気持ちを全部そのままに受けとめてそれをコントロールできなくて苦しんでるのね…。

（山本おさむ 「どんぐりの家」『ビッグコミック』 No.765）

ここでの主要素連鎖は次のとおりである。

(24) ①© － ②© － ③どんな気持ちが － ④ø(君は) － ⑤ø(君は) － ⑥ø(僕は) － ⑦© － ø(君は) － ⑧私達も － ⑨ø(私達は) － ⑩***君は***

第一・二文目は，聞き手に対する勧誘および命令の表現である。第三文目から第七文目までは，聞き手に対する質問であり，話題の変換は見られない。発話場面から質問の相手は他に考えられにくいため，省略されている主語は論理的唯一主題である。そして第八文目で，「私達」というその他の人物情報が介入する。続く第九文目は，第八文目の内容の具体化であり，情報のリンクで結ばれているため，第九文目の「私達は」は省略される。ところが，第十文目でもう一度，信夫を指示対象とする「君は」という主語が再言語化され，省略不可能となっている。

第十文目は「でも」という接続詞が用いられ，逆接の関係が示される。その意味で情報のリンクが存在するのであるが，第十文目の主語「君は」は省略不可能である。その理由は，この要素が

完全対比主題のためである。ここでは第八文目の「私達」と第十文目の「君」とが言語的に対比されている。そのため，言語化が必要なのである。これより，情報のリンクが存在し，話題の変換がなかったとしても，完全対比の場合は主語の言語化が必要であることがわかる。

7.　1･2 人称主題と談話の構造

第 6, 7 章で，1･2 人称主語の言語化･非言語化の振る舞いは，談話における主語の意味機能によってコントロールされることを示した。そしてこの章では，情報のリンクが存在しなかったり，話題が変換する場合には，要素の再言語化が必要となり，省略すると不自然となることを示した。では，主語の意味機能と情報のリンクおよび話題変換の有無は，どちらが強い制約なのだろうか。

談話の第一文目の主題は，主語の意味機能によってその言語化･非言語化の振る舞いが決定される。問題となるのは第二文目以降である。完全対比主題は，どのような場合にも言語化が必要である。主語が予測できない相対対比主題も，省略すると指示対象を予測できないので，言語化が必要である。従ってこれらのタイプは，情報のリンクや話題の変換の有無にかかわらず，常に言語化されると考えられる。実際，先に見た(24)の例は，完全対比主題で言語化が必要である。一方，完全唯一主題は，どのような場合にも言語化することができない。そこで残されるのは，主語が予測可能な相対対比主題および論理的唯一主題であるが，二文目以降の主語が同一指示の連続であれば，その主語は談話上卓越しているため，論理的唯一主題となる。そうでなければ，完全対比主題か完全唯一主題である。しかし，完全対比主題と完全唯一主題は上に述べたように，情報のリンクや話題の変換の有無とは関わらない。従って，情報のリンクや話題の変換の有無について問題となるのは，論理的唯一主題である。

この章で考察した，1･2 人称の主題の例をもう一度見てみよう。

(5) ＜舞はブラックプールというダンス大会へ出場したときのことを回想しながら，＞

舞:①私が　初めて選手としてブラックプールに行ったのは二年前の五月でした。②***私は /*[ø は]***
子供の頃からの夢の実現に確実に近づいたことに興奮していました。

(19) 田中 1:①気持ち悪いですか。②やっぱり，ぼく，気持ち悪いですか。

＜服部も豊子も杉山も，田中のその尋常ならぬ様子に言葉を失う。＞

田中 2:①[ø は]　生まれて初めて好きになった人にもそう言われました。②でも，それは普通の時で，ダンスしてるときじゃなかった。③***ぼくは /???[ø は]***，お医者さんに勧められて，健康の為にダンスを始めました。

(20) ＜舞は，自分がダンスのパートナーと別れた理由を語って，＞

舞:①彼 b は言いました。②カップルを解消しようと。③彼 b は勝っても負けても，このブラックプール

を最後にカップルを解消しようと思っていたというのです。④私aには 理解できませんでした。⑤[øa,bは] 誰よりも長く一緒にいて世界を目指していたのに，どうして 私aを 裏切るのか。⑥私aは/*[øは] すぐに日本に帰ってきました。⑦そして，[øaは] 彼bを見返してやりたい一心で，優秀なダンサーを探しました。

(22) <ダンス教室で。杉山はフロアでレッスン中の舞に目がゆく。奇麗だと思い，じっと見詰める。目が一瞬合って，微笑みかけられたような気がし，思わず顔がゆるむ杉山>

豊子1:先生a，きれいだもんね。

<いつのまにか豊子が隣に座っている。>

豊子2:①あんたbも，あの人a目当てなんでしょ。②だったら，[øbは] 個人レッスンにしなきゃ。③ま，だけど，どうせ [øbは] 相手にされっこないんだから，グループレッスンにして良かったわよ。

(5)，(19)，(20)，(22)で再言語化され，省略不可能となっている主題はすべて，他に主語となる対象が考えにくい論理的唯一主題である。(5)は，一文目と二文目の間に情報のリンクが存在しないため，再言語化が必要である。(19)，(20)はイベントシフトが存在し，かつ話題の変換があるために再言語化が必要である。それに対し(22)は，「だったら」「どうせ」で示される情報のリンクが存在するため，省略が可能となる。

以上を見ると，単文であれば言語化・非言語化ともに可能であった論理的唯一主題であっても，談話の中において，前後の文脈に情報のリンクが存在しなかったり，話題の変換がある場合には，再言語化が必要となるということが言える。

8. 本章のまとめ

以上，主題を中心として，主題が談話の中でどのように省略されるかを考察した。本稿での考察から，談話における省略の可否には情報のリンクや話題の変換の有無という要因が大きく関わっていることが明らかになった。

同一主題が連続する場合，あるいは，主題から格成分，もしくは格成分から主題へと文法的役割が変化する場合，そのどの場合も，前後の文脈に情報のリンクが存在すれば省略は可能である。しかし，たとえ前の発話で主題化されていても，常に省略可能というわけではなく，続く発話の中で再言語化され，それを省略すると不自然となる場合がある。再言語化を強要し，省略を不自然とさせる第一の要因は，スポットライト化の有無ではない。むしろ，情報のリンクや話題の変換の有無である。前後の文脈に情報のリンクが存在しなかったり，話題が変換していれば，既出の要素であっても再言語化しなければならず，省略すると不自然となる。

また，イベントシフト(時空間のギャップ)やその他の主題の介入も，省略の可否を決定する第一

の要因ではない。たとえイベントシフトやその他の主題の介入があったとしても，前後の文脈が意味論理的関係で結び付けられていて，情報のリンクが存在すれば，省略は可能となる。

1・2 人称の主題に関しては，論理的唯一主題が問題となるが，前後の文脈に情報のリンクが存在しなかったり，話題が変換していれば，論理的唯一主題であっても再言語化しなければならず，省略すると不自然となる。

第 8 章で示したが，本稿では大きな文章，談話の中にはそれよりも小さな談話のかたまりがあると想定する。この小さな談話のかたまりには一つの心理的トピックが含まれ，リンクがあればあるほど文と文，発話と発話が意味的に強く結束する。一方，談話のかたまりが次の談話のかたまりへと移行する場合は，そのかたまりの間に意味的な切れが存在する。この意味的な切れは情報のリンクの有無によってもたらされる。

第 10 章　推論と省略

1.　本章の目的

省略されている要素を含む発話の解釈に，推論を働かせる必要のある場合がある。本章では，そうした発話の解釈に推論を必要とするタイプの省略を取り上げる。ただし，本章で取り上げる現象はまだ未解明の部分が多く，ここでははっきりとした原理を打ち出すというよりも，今後の研究のための現象指摘となる。

2.　推論と省略

2-1.　リンクに誘発される推論

発話の解釈に推論が働く最初の例として，リンクによって誘発されるタイプについて見てみる。

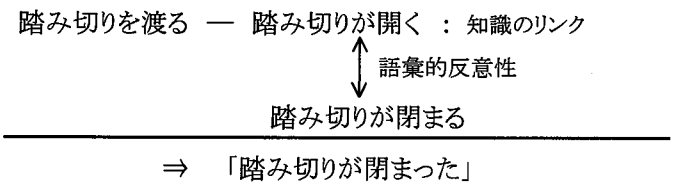
次の例を見てみよう。

(1)①踏み切りを渡ろうとした。②その時，[ø は]　閉まってしまった。

(2)①踏み切りを渡ろうとした。②その時，[ø は]　転んでしまった。

(1)，(2)の第二文目は全く同じである。しかし，省略されている要素は異なり，(1)は「踏み切り」であるが，(2)は「私」である。これらの発話を解釈しようとする場合，聞き手は推論を働かせる必要がある。先ず(1)では，次のような推論が活用される。

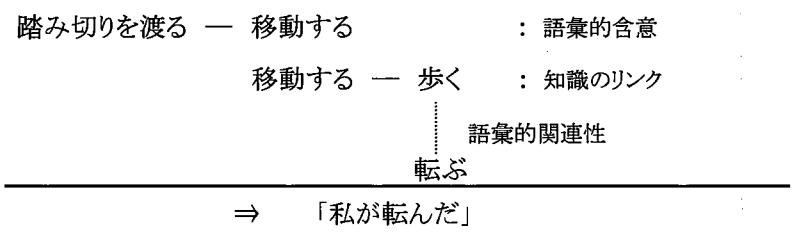
図 1



我々は，「踏切が開いているときに，踏切を渡る」ということを知識として知っている。この知識のリンクによって，「踏切を渡る」という行為から「踏切が開く」という事態が導かれる。そして「開く」と「閉まる」の間には語彙的反意性があり，この語彙的反意性で，「踏切が開く」と「踏切が閉まる」を結び付けることによって，閉まったものは，車のドアでも，踏切の近くの店でもなく，踏み切りであると解釈できる。

続いて(2)には，次のような推論が活用される。

図 2



我々は意味概念的に，「(踏切を)渡る」ということが「移動する」ことを含意していると知っている。また，移動する手段として，歩行者は「歩く」，自動車は「動かす」ことを世界についての知識として知っている。そして，「歩く」という行為は足を動かし前へ進んで行くことであり，そうした行為の中には転ぶこともあるかもしれないという関係から，「歩く」と「転ぶ」は語彙的に関連付けられる。こうした階層的推論を経て，(2)は理解可能となる。

次も，語彙的リンクを使った推論を活用することによって，発話の解釈が行われる例である。

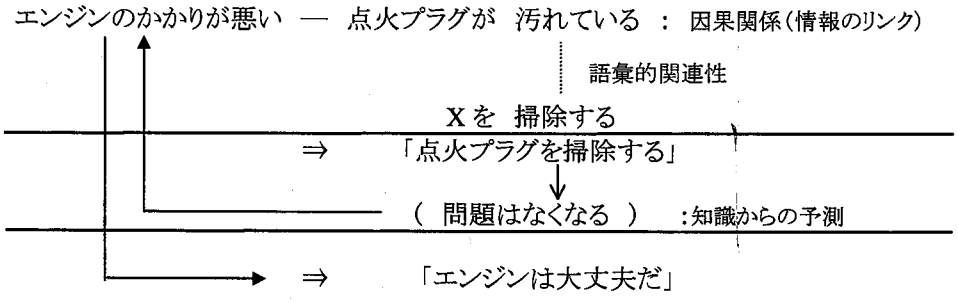
(3) A：エンジンのかかりが悪いんですけど。

B：①ああ，点火プラグが　汚れているだけだよ。②[øを]　ちょっと掃除しとけば，[øは]　大丈夫さ。

（西岸良平「泣いた一平」『ビッグコミックオリジナル』No.626）

(3)では，次のような推論が働く。

図 3



我々は，「汚れたものは掃除する」という観念や知識をもっている。それによって「汚れる」と「掃除する」は，ある種の「反意性」によって語彙的に関連付けらる。そして，「掃除する」対象は「点火プラグ」であるという発話の解釈が可能となる。そして更に，「掃除をすれば，エンジンは大丈夫になる」という結論に導かれる。

続いて次の例を見てみよう。この例は(1)～(3)と異なり，省略されている指示対象を，前の発話の中で直接探すことができない。

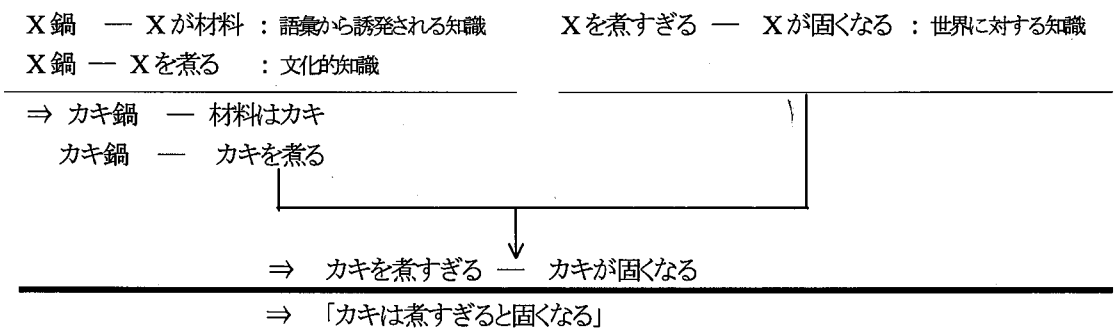
(4) <隣の奥さんがカキをおすそ分けにもってくる>

①カキ鍋の作り方知ってる？ ②[øを] あまり煮すぎると，[øが] 固くなるわよ。

（西岸良平 「雪明かり」『ビッグコミックオリジナル』 No.426）

第二文目で省略されている要素は「カキ」であろう。しかし「カキ」という表現は，前文の中に現われていないにもかかわらず，発話の解釈が可能である。それは，次のような推論が働くためである。

図4



我々は文化的知識から，「『鍋』にはいろいろな種類があり，『X鍋』という名前で呼ばれる鍋には，往々にしてその材料として『X』が使われている」ということを知っている。それは「鍋」という語彙から誘発される知識である。更に，「X鍋」というのは，料理の名前であり，それは材料を「煮て」つくるものだという文化的知識がある。また，「『Xを煮すぎる』と『Xが固くなる』ことがある」という世界に対する知識をもつており，これら一連の知識を推論を介して結び付けることによって，(4)の発話の解釈が可能となる。

2-2. 空間イメージ省略

では次に，空間イメージ省略についてみてみる。

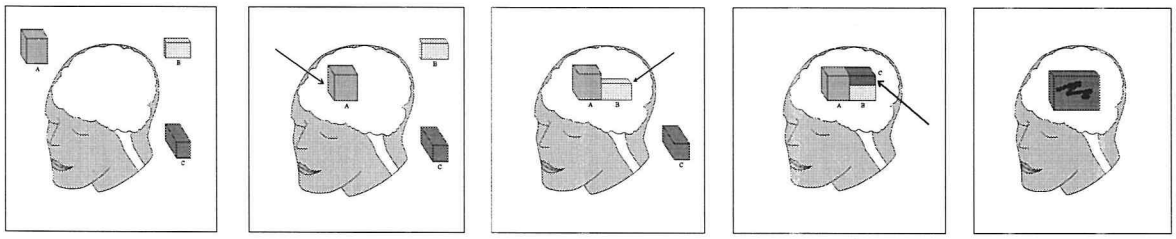
省略された対象が，言語的文脈から直接的に復元できないタイプに含まれる省略のうち，本稿が「空間イメージ省略」と呼ぶものがある。空間イメージ省略とは，聞き手がそれまでの文脈を重層的に処理し，頭の中でイメージを作り上げることによってはじめて，省略されている要素の理解が可能となるタイプである[1]。次の例を見てみよう。

(5) 先ずAの箱を置き，その横にBの箱を置く。最後にBの箱の上にCの箱を重ねる。[øに] 上からスプレーをかければ，継ぎ目は分からなくなる。

[1] 山梨正明(1992)は，このような照応関係を「統合的照応」と呼んでいる。

ここで省略されている要素は，前の発話の中に言語的に直接には現われていない。この発話を解釈するためには，聞き手は下図のようなプロセスで，メンタルイメージを作り上げなければ，省略されている要素を理解することができない。

図 5



1　⇒　2　⇒　3　⇒　4　⇒　5

次も同様に，空間イメージ省略の例である。

(6) ホワイトソースにチーズをたっぷり加え，[ø を]　パスタにからめると，カルボナーラのできあがりです。

(7) 塀を飛び越えると，[ø に]　大きな溝があった。

(8) 山を越え，谷を越え，橋を渡ったら，[ø で]　あの人が待っている。

このような空間イメージ省略の例は，広範囲に見られる。しかしその一方で次の例のように，聞き手が発話の解釈にメンタルイメージを作り上げるというプロセスは同じであるのだが，そのイメージされた対象を省略できない場合がある。

(9) その山を更に奥に進むと，緑色をした川と，青色の川が合流する。僕は　そこに　/*[ø に]　家を建てたいんだ。

どのような場合に空間イメージ省略が可能で，どのような場合に省略が不可能かの詳しい考察は，今後の課題である。

2-3. メトニミー

メトニミーを介して推論が誘発され，発話の解釈が可能となる場合がある。

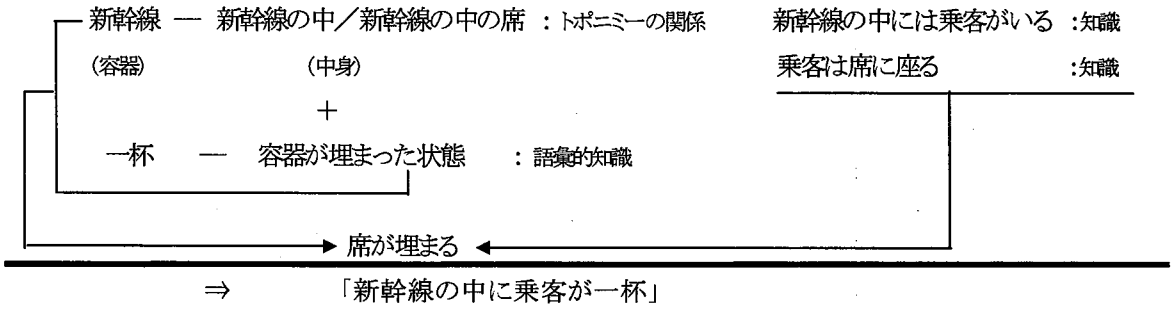
メトニミーは意味拡張のプロセスの一つであり，ある存在物「e_1」の名称を用いて，「e_1」に近接するもう一つの存在物「e_2」を指すことを可能とする。山梨正明 (1992, 1995) に従うと，メトニミーは「トポニミー」と「パートニミー」の二つに下位分類できる，トポニミーは，「空間・場所」の隣接性に基づく表現であり，パートニミーは，「部分・全体」の隣接性に基づく表現であると言える。

では先ず，「空間・場所」の隣接性に基づく，トポニミーが関係する例から見てみる。

(10) 昨日，新幹線に乗ったら，一杯だった。

この発話の中で一杯だった対象は，「新幹線の乗客」である。ここでの発話の理解には，次のような推論のプロセスが働く。

図 6



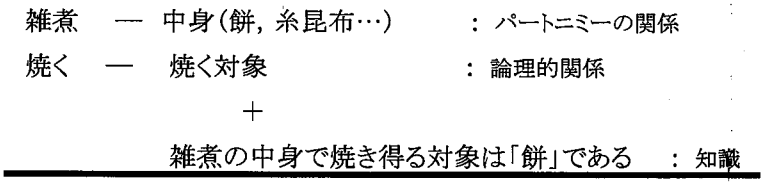
「新幹線」と「新幹線の中」あるいは「新幹線の中の席」にはトポニミーの関係がある。そして我々は，「新幹線の中には乗客がいる」こと，「乗客は席に座る」ことを知識として知っている。また，「一杯」という語彙が，「容器が埋まった状態」を指すことを語彙的知識として知っている。それによって，「新幹線」を容器と見たてた関係から，「席が埋まる」という事態が導かれ，そして，知識との結び付きによって，「席が埋まる」という事態から，「乗客が一杯」という解釈が導かれる。

次は，「部分・全体」の隣接性に基づくパートニミーが関係する例である。

(11) 雑煮は焼いたものがいい。

この発話の理解には次の推論が働く。

図 7



我々は，「雑煮」の中に何が入っているかを文化的知識として知っている。そして，パートニミーによって，全体の名称でその中身を指すことができる。また，その中身の中で焼き得る対象は何かということを世界の知識として知っており，それによって「焼いた」対象は「餅」であると解釈できる。

メトニミー表現は慣用化されているか否かに左右されるところが大きく，そういった問題も含め，メトニミーと省略との関係は，今後の課題の一つである。

3. 本章のまとめ

省略要素を含む発話の解釈に推論が関わる現象は，広範囲に見られる。しかし，この領域の研究はまだ本格的に行われておらず，推論には一体どのようなタイプがあるのか，そしてどのような推論が省略と関わっているのかもまだ未解明である。この領域の更なる考察は，今後の課題としたい。

第 11 章　まとめと今後の課題

本稿では，話者と聞き手によって作り上げられる談話を対象とし，談話における省略現象について考察した。そして，省略現象を捉えるための方策として，「情報ベース」と「リンク」という二つの概念を提示した。

話者と聞き手は，発話の進行に従ってオンラインで「情報ベース」という概念スペースを構築する。情報ベースにインプットされる要素（「情報要素」）には，発話の場面に存在する対象，談話の中で言語化された要素，話者と聞き手の共有知識，そしてそれらの属性および要素間の関係などが挙げられる。これらは，話者と聞き手の意識の中で活性化されている要素である。情報ベースには，談話処理に最も有効で最小の要素のみがインプットされ，情報ベースにインプットされた情報要素は，談話の流れの中で随時キャンセルされて，新しい情報要素にとって変わられ得る。

談話が展開する中で話者は，情報ベースにインプットされている情報要素の中から，ある要素を前景化し，一連の発話を行うことがある。ある情報要素が前景化されると，それに情報を付加する発話が引き続き行われ，前景化された要素は省略可能となる。この前景化された要素を本稿では「心理的トピック」と呼ぶ。

以上が，本稿の想定する情報ベースの性質である。ではなぜ情報ベースという概念を設定する必要があるのだろうか。

第一の理由は，情報の格付け化に関わる。我々は語句の連なりをすべて均等に処理しているわけではない。語句の連なりは，情報価値によって格付け化される。我々は，ライン状につながった言語構造体の中で，談話構築や発話の解釈に有効な，情報価値のある情報のみを取り出して，情報処理を行う。その情報が取り出されて，情報処理が行われる場所を想定する必要があるが，それが情報ベースである。

第二の理由は，場面依存型発話から説明される。話者が，発話場面に存在する対象について何らかの発話を行う。しかし，その対象を言語化しない場合がある。なぜ言語化しないことが可能なのでろうか。また，なぜ対象が言語化されていない要素を含む発話を，聞き手は解釈可能なのだろうか。それには，話者と聞き手がともに問題の対象を意識の中で活性化し，共有していると想定しなければならない。そして，話者と聞き手に共有されている概念スペースを設定し，その中に言語化されていない指示対象が概念的対象として存在すると想定しなければ，こうした現象を適切に説明することはできない。

もう一つの理由は，1･2 人称主語の考察から説明できる。第 5，6 章で示したように，主語は，談話における意味機能によって大きく四つのタイプに分けられる。この意味機能は言語化されていない主語にも適用することができる。たとえ言語化されていない主語の指示対象も，情報ベースの中では概念的対象として存在できる。

こうした理由から，本稿では情報ベースという概念スペースを設定する。ただし，談話が複雑に

なると情報ベースに加えて，情報ベース内にある要素と要素間の意味的関係，あるいは，発話と発話の間の意味的関係を捉える道具が必要となる。その道具が「リンク」である。

リンクには五つの下位タイプがあり，「論理的リンク」，「語彙的リンク」，「認知・概念的リンク」，「知識のリンク」，「情報のリンク」に分けられる。前景化された心理的トピックを中心として行われる一連の発話は，さまざまなレベルで働くリンクによって結束される。そして，明らかなリンクがあればあるほど，発話と発話の結束性は強くなり，心理的トピックは省略され易くなる。しかし，これらのリンクはすべて対等というわけではなく，例えば，談話の整合性に関わるのは，語彙的リンク，知識のリンク，情報のリンク，である。その中で整合性に最も効力をもつのは，情報のリンクである。情報のリンクは，談話の中で省略を生起可能とさせる重要なリンクでもある。情報のリンクは話題の変換とともに，主題の省略に影響を与える。前後に情報のリンクが存在すれば，同じ話題のもとでの発話の継続となり，前景化された心理的トピックは省略可能となる。しかし，前後の文脈に情報のリンクが存在しない場合や，話題の変換がある場合は，そこで一旦，一つの意味的つながりが切れることになる。その際，それまで心理的トピックとして省略可能であった情報要素でも，再言語化の必要が生じ，省略を行うと不自然となる。

本稿での考察は，我々が如何にして発話を産出し，そして如何にして発話を理解するのかの解明を目指して行った。我々は，文字化された文章や，耳に入ってくる発話の連続を平面的に処理しているのではない。情報価値の格付け化を行いながら，そして，我々のもつ知識や概念などと照らし合わせながら情報処理を行い，同じ原理で情報の言語的構築を行っていく。本稿での考察を通して，こうした情報処理や言語構築の原理の解明に少しでも貢献できたのであれば幸いである。しかしながら，本稿で十分に議論し尽くせず，残された問題もある。その一部として，次のものが挙げられる。

1) 心理的トピック以外の要素の言語化・非言語化の振る舞い
2) 省略に関わる推論
3) 原則相互の階層性と強弱関係

1)の心理的トピック以外の要素の言語化・非言語化の振る舞いについて，本論の中では特に考察しなかったが，これはリンクの有無によって規定され得るのではないかと思われる。リンクが存在し，問題の要素が予測可能な場合は省略が可能であるが，そうでなければ言語化される。ただしこの問題は，心理的トピックとの関わりを含め，今後十分な考察が必要である。

2)については，第 10 章で現象の指摘を行ったが，我々が発話の解釈に用いる推論や知識にはどのようなタイプがあるのか，それがどのように働いているのか，まだまだ未解明の部分が多い。こうした未解明の部分を明らかにしていくことが今後の課題である。

そして3番目に，省略に関わるいくつかの原則を挙げたが，本稿の中でこれらの原則の階層性，強弱関係などを十分に論じ得たとは言い難い。理論の整合性，妥当性を主張するためには，この点を今後更に明らかにしなければならないだろう。

引用文献

青木 伶子 1992『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院.

荒木 一雄・安井 稔(編) 1992『現代英文法辞典』三省堂.

石綿 敏雄 1969「構文解析自動化の研究 I ―CLからの構文論の見通し」『国立国語研究所報告34 電子計算機による国語研究II ―新聞の用語用字調査の処理組織―』139-174. 国立国語研究所.

市川 孝 1978『国語教育のための文章論概説』教育出版.

市川 保子 1988「取り立て助詞「ハ」の対比の条件―「花子がコップは割った。」は何故おかしいか―」『日本語と日本文学』10:1-10. 筑波大学国語国文学会.

井上 優 近刊「現代日本語の「タ」―主節末の「…タ」の意味について」『「タ」の言語学』ひつじ書房.

大江 三郎 1975『日英語の比較研究―主観性をめぐって』南雲堂.

大島 真 1983「談話における二重省略」『機能によることばの分析』51-56. 文化評論出版.

大谷 博美 1995a「ハとヲとø」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法 単文編』上:62-66. くろしお出版.

――― 1995b「ハとガとø」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法 単文編』下:287-295. くろしお出版.

岡田 正美 1901『日本文法 文章法大要』訂正増補第二版 吉川半七發行.

尾上 圭介 1973「文核と結文の枠―「ハ」と「ガ」の用法をめぐって」『言語研究』63:1-26. 日本言語学会.

――― 1981「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58-5:102-116. 至文堂.

――― 1987「主語にハもガも使えない文について」国語学会口頭発表.

甲斐 ますみ 1991「「は」はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化』17:113-128. 大阪外国語大学留学生別科・日本語学科.

――― 1992「話者が「は」「が」なし文を発するとき」『KANSAI LINGUISTIC SOCIETY』12:99-109. KANSAI LINGUISTIC SOCIETY.

――― 1993「談話における発話の解釈―省略という現象をめぐって」『東呉日本語教育』16:173-192. 東呉大学日本文化研究所・日本語文学系(台北).

――― 1995「省略のメカニズム―談話の構造と関連性および聞き手の推論を中心

に－」『岡山大学留学生センター紀要』3:1-18. 岡山大学留学生センター.
――― 1997「省略に関わる談話の構造とリンク」『日本語・日本文化研究』7:99-108. 大阪外国語大学 日本語講座.
――― 1998a「発話における省略とその解釈」『世界の日本語教育』8:257-271. 国際交流基金日本語国際センター 日本語教育論集.
――― 1998b「応答発話における再言語化と情報構造」『日本語教育』98:61-72. 日本語教育学会.
――― 1999「主題と省略」『日本語・日本文化研究』9:61-70. 大阪外国語大学 日本語講座.
鏑木(友田) 英津子 1977 Japanese Reflexive 'Zibun' as a Subjective Expression. 『武蔵野女子大学紀要』12:31-51. 武蔵野女子大学.
神尾 昭雄・高見 健一 1998『日英語比較選書② 談話と情報構造』中右実(編) 研究社.
亀山 恵 1999「第3章 談話分析:整合性と結束生」『言語の科学 7 談話と文脈』93-122. 岩波書店.
北原 保雄 1984「文章の主題と文の主題」『文法的に考える:日本語の表現と文法』101-112. 大修館書店.
久野 暲 1973『日本文法研究』大修館書店.
――― 1978『談話の文法』大修館書店.
近藤 泰弘 1994「日本語における異主語省略と能格性」『国語研究 松村明教授喜寿記念論集』764-773. 明治書院.
佐伯 哲夫 1975『現代日本語の語順』笠間叢書.
佐久間 まゆみ 1986「文段認定の一基準(Ⅰ)－提題表現の統括－」『文藝言語研究 言語篇』11:89-136. 筑波大学 文芸・言語学系.
佐久間 まゆみ 1989「文段認定の一基準(Ⅱ)－接続表現の統括－」『文藝言語研究 言語篇』17:35-66. 筑波大学 文芸・言語学系.
佐々木 陽子 1996「視点表示による省略－談話における動作主格の無標省略条件として－」『熊本大学留学生センター紀要』1:169-201.
佐藤 ちゑ子 1976「主題化に関する主格名詞句の特性について」佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集刊行会(編)『国語学論集』929-952. 表現社.
清水 佳子 1995「「NPハ」と「ø(NPハ)」－文連続における主題の省略と顕現－」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法 複文・連文編』下:647-654. くろしお出版.

砂川 有里子 1990「主題の省略と非省略」『文芸言語研究 言語篇』18:15-34. 筑波大学文芸・言語学系.

高津 鍬三郎 1891『日本中文典』金港堂.

高見 健一 1995『日英語対象研究シリーズ(4) 機能的構文論による日英語比較－受身文,後置文の分析－』柴谷方良他(編) くろしお出版.

――― 1997『機能的統語論』くろしお出版.

田窪 行則 1988「対話における知識管理について－対話モデルからみた日本語の特性」『昭和62年度科学研究費特定研究(1)「言語情報処理の高度化」研究成果報告 談話・意味・語用論』1-13.

田中 久直 1964「段落のたて方」時枝誠記他(編)『講座現代語 表現の方法』4:62-80. 明治書院.

塚原 鉄雄 1963「場面とことば」『講座現代語 現代語の概説』1:228-250. 明治書院.

――― 1969「連接の論理－接続詞と接続助詞－」『月刊文法』2-2:68-74. 明治書院.

筒井 通雄 1984「「ハ」の省略」『月刊 言語』13-5:112-121.

寺倉 弘子 1986「談話における主題の省略について」『月刊 言語』15:98-105.

寺村 秀夫 1982『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.

――― 1991『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版.

時枝 誠記 1960『文章研究序説』山田書院.

中川 裕志 1997「複文における因果性と視点」田窪行則(編)『視点と言語行動』77-117. くろしお出版.

永野 賢 1986『文章論総説』朝倉書店.

仁田 義雄 1992『日本語のモダリティと人称』くろしお出版.

日本語教育学会編 1982『日本語教育辞典』大修館書店.

丹羽 哲也 1989「無助詞格の機能」『国語国文』58-10:38-57.

野田 尚史 1991『はじめての人の日本語文法』くろしお出版.

――― 1996『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版.

橋内 武 1999『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版.

畠 弘巳 1980「文とは何か－主題の省略とその働き」『日本語教育』41:198-208.

――― 1985「主題の展開と談話分析」『国際商科大学論叢 商学部編』31:103-117.

長谷川 信子 1995「省略された代名詞の解釈」『日本語学』14-4:27-34. 明治書院.

長谷川 ユリ 1993「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80:158-168

日本語教育学会.
福地 肇 1985『新英文法選書 第10巻 談話の構造』大修館書店.
牧野 成一 1980『くりかえしの文法－日・英語比較対照－』大修館書店.
益岡 隆志 1991『モダリティの文法』くろしお出版.
松下 大三郎 1928『改選 標準日本文法』中文官書店 (復刊版 勉誠社:1974).
丸山 直子 1995「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19-8:365-385. 計量国語学会.
三尾 砂 1948『国語法文章論』三省堂.
三上 章 1960『象は鼻が長い』くろしお出版.
――― 1963『日本語の論理』くろしお出版.
――― 1970『文法小論集』くろしお出版.
南 不二男 1974『現代語の構造』大修館書店.
――― 1981「日常会話の話題の推移－松江テキストを資料として－」『藤原与一先生古稀記念論集 方言学論叢 I 方言研究の推進』87-112. 三省堂
矢野 安剛 1981「談話における名詞句の省略について」『日本語教育』43:89-102.
山田 孝雄 1936『日本文法学概論』宝文館.
――― 1954『日本文法講義』宝文館.
山梨 正明 1992『推論と照応』くろしお出版.
――― 1995『認知文法論』ひつじ書房.
吉川 千鶴子 1988「場面のスクリプトと省略現象」『日本語学』7-3:64-76.
――― 1990「日英語の省略のメカニズム(II)－英語教育の視点から見た対照比較－」『大阪学院大学外国語論集』21:72-92. 大阪学院大学外国語学会.
吉本 啓 1992「日本語の指示詞コソアの体系」金水敏・田窪行則(編)『指示詞』105-122. ひつじ出版 (YOSHIMOTO:1986 "On Demonstratives *KO / SO /A* in Japanese"『言語研究』90号 所収).
渡辺 誠治 1995「ある要素に対する新規の属性の取り入れに関わる形式－「ッテ」と「ø」を中心に－」『日本語・日本文化』21:105-125. 大阪外国語大学留学生別科.
BEAUGRANDE, ROBERT de and WOLFGANG DRESSLER ***Introduction to Text Linguistics***. London and New York:Longman.
BEKEŠ, ANDREJ 1995「文脈から見た主題化と「ハ」」益岡隆志他(編)『日本語の主題と取り立て』155-174. くろしお出版.
BERNARDO, ROBERT 1980 Subjecthood and Consciousness. In:Wallace L. Chafe(ed.) ***The Pear stories***. vol.III:275-299. Norwood, N.J.:Ablex Pub. Corp.

CHAFE, WALLACE L. 1972a Language Comprehension and the Acquisition of Knowledge. In:R. O. Freedle and J. B. Carrol(eds.) ***Discourse Structure and Human Knowledge***. 41-69. New York:Halsted Press.

——— 1972b Discourse Structure and Human Knowledge ***Language Comprehension and the Acquisition of Knowledge***. 41-69. New York:Halsted Press.

——— 1973 Language and Memory. ***Language***. 49-2:261-281. LSA.

——— 1974 Language and Consciousness. ***Language***. 50-2:111-133. LSA.

——— 1976 Giveness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topic, and Point of View. In:Charles N. Li(ed.) ***Subject and Topic***. 25-56. Academic Press.

——— 1980 The Deployment of Consciousness in the Production of a Narrative. In:Wallace L. Chafe(ed.) ***The Pear stories***. vol.Ⅲ:9-50. Norwood, N.J.:Ablex Pub. Corp.

——— 1987 Cognitive Constraints on Information Flow. In:Russell S. Tomlin (ed.) ***Coherence and Graounding in Discourse***. 21-51. Amsterdam / Philadelphia:John Benjamins.

CLANCY, PATRICIA M. 1980 Referential choice in English and Japanese narrative discourse. In: Wallace L. Chafe(ed.) ***The Pear Stories***. vol.Ⅲ:127-202. Ablex Publ. Corporation.

DANEŠ, FRANTIŠEK 1974 Functional Sentence Perspective and the Organization of the Text. In:František Daneš (ed.) ***Papers on Functional Sentence Perspective***. 106-127. The Hague:Mouton.

FAUCONNIER, GILLES 1994 ***Mental Spaces***. Cambridge University Press. 坂原茂他(訳)『メンタル・スペース』1996 白水社.

FIRBAS, JAN 1974 Some Aspects of the Czecoslovak Approach to Problems of Functional Sentence Perspective. In:František Daneš (ed.) ***Papers on Functional Sentence Perspective***. 11-37.

GIVÓN, TALMY 1983 Topic Continuity in Discourse:An Introduction. In:T. Givón(ed.) ***Topic Continuity in Discourse***. 1-41. Amsterdam / Philadelphia:John Benjamins Publishing Company.

GROSZ, BARBARA J.; ARAVIND K. JOSHI; SCOTT WEINSTEIN 1995 Centering:A Framework for Modeling the Local Coherence of Discourse. ***Computational Linguistics***. 21(2):203-225. the Association for Computaional Linguistics.

HALLIDAY, M. A. K. and RUQAIYA HASAN 1976 ***Cohesion in English***. London and New York:Longman. 安藤貞雄他(訳)『テクストはどのように構成されるか』1997

ひつじ書房.

——— 1985 ***Language, Context, and Text:Aspects of Language in a Social-Semantic Perspective.*** Geelong, Vic.:Deakin Univ. Press. 筧壽雄(訳)『機能文法のすすめ』1991 大修館書店.

HASEGAWA, NOBUKO 1984/85 On the So – Called "Zero Pronouns" in Japanese. ***The Linguistic Review.*** 4:289-341. Dordrecht:Foris Publications.

HINDS, JOHN and MASAYOSHI SHIBATANI 1977 Towards a Unified Theory of Anaphora in Japanese Discourse. unpublished manuscript.

——— and WAKO HINDS 1979 Participant Identification in Japanese Narrative Discourse. In:G. Bedell, E. Kobayashi and M. Muraki(eds.) ***Explorations in Linguistics : Papers in Honor of Kazuko Inoue.*** 201-212. Tokyo:Kaitakusha.

HINDS, JOHN 1979 Ellipsis and Prior Mention in Japanese Conversation. In:Wolfgand Wölok and Paul L. Garvin(eds.) ***The fifth LACUS forum 1978.*** 318-335. Hornbeam Press.

——— 1980a Noun Phrase Ellipsis in Written Japanese Text. ***Papers in Japanese Linguistics.*** 7:21-33. Tokyo:Kaitakusha.

——— 1980b Japanese Conversation, Discourse Structure, and Ellipsis. ***Discourse Proceses : A Multidiscriplinary Journal.*** 3:263-286. Norwood, N.J.:Ablex.

——— 1982 In:Anthony L. Vanek(ed.) ***Ellipsis in Japanese.*** Carbondale and Edmonton: Linguistic Research, Inc.

——— 1983 Topic Continuity in Japanese. In:Talmy Givón(ed.) ***Topic Continuity in Discourse : A Quantitative Cross-Language Study.*** 43-93. Amsterdam:Benjamins.

HUBBARD, MAKI HIRANO 1988 Repetition and Ellipses in Japanese Conversational Discourse : A Study of the Cognitive Domain of Conversational Interaction. The University of Wisconsin – Madison, Ph.D. Dissertation. UMI Dissertation Services.

JEFFERSOM, GAIL 1972 Side Sequences. In:David Sudnow(ed.) ***Studies in Social Interaction.*** 294-338. New York:The Free Press.

KAMEYAMA, MEGUMI 1985 Zero Anaphora:The Case of Japanese. Stanford University, Ph.D. Dissertation. UMI Dissertation Service.

KEENAN, ELINOR OCHS and BAMBI B. SCHIEFFELIN 1976 Topic as a Discourse Notion: A Study of Topic in the Conversations of Children and Adults(1). In:Charles N. Li. ***Subject and Topic.*** 335-385. Academic Press.

KURODA, SHIGE-YUKI 1965 Generative Grammatical Studies in the Japanese Language. MIT dissertation. (published in 1979. New York:Garland Publishing Inc.).

MASUNAGA, KIYOKO 1988 Case Deletion and Discourse Context. In: William J. Poser (ed.) ***Japanese Syntax***. 145-156. CSLI.

ROSS, R. N. 1975 Ellipsis and the Structure of Expectation. ***Papers from the fifth annual California Linguistics Conference. May 3-4. San Jose State Occasional Papers in Linguistics***. 1:183-191.

SHIBAMOTO, JANET S. 1990 Sex – Related Variation in the Ellipsis of *wa* and *ga* in Japanese. In: Sachiko Ide, H. Mc Gloin (ed.) ***Aspects of Japanese Woman's Language***. 81-104. Tokyo: Kurosio.

TANNEN, DEBORAH 1979 What's in a Frame? Surface Evidence for Underying Expectation. In: Roy O. Freedle (ed.) ***New Direction in Discourse Processing – Advances in Discourse Processes***. 2:137-181. Ablex Pub. Corp.

TSUTSUI, MICHIO 1983 Ellipsis of GA. ***Papers in Japanese Linguistic***. 9:199-244. Tokyo: Kurosio Syuppan.

WALKER, MARILYN; MASAYO IIDA; and SHARON COTE 1994 Japanese Discourse and the Process of Centering. ***Computational Linguistics***. 20-2:193-233. the Association for Computational Linguistics.

謝辞

先ず，社会人に門戸を開き，もう一度勉強する機会を与えてくれた大阪外国語大学，および私の指導を引き受けてくださった三原健一先生に感謝の言葉を述べたい。

この三年間，精神面，健康面との戦いであった。何度もくじけそうになったが，家族や友人，先輩に励まされて，やっとこの論文を書き上げることができた。ただ心残りは，せっかくもう一度勉強する機会を与えられたにもかかわらず，仕事の関係から，もっと多くの授業を取り，機会を活用することができなかったことである。

三原健一先生には，修士時代から数え，今年で 10 年お世話になっている。研究領域が異なるにもかかわらず，毎回丁寧に論文指導をしてもらい，いつもたくさんのコメントを頂いた。先生が私の原稿に書き込んだ赤字のコメントは，今後の励みに，大切に持っていきたいと思う。また，本稿を構想する上で，杉本孝司先生の授業では，多大な恩恵を受けた。杉本先生には，お忙しい中，貴重なコメントを何度もいただき，本当に感謝したい。

博士課程でもう一度勉強したいと考えたきっかけは，折に触れて，勉強を続けなさい，いい論文を書きなさいという，と声をかけてくださった菊地康人先生および野田尚史先生のお言葉からである。両先生の励ましやお叱りがなければ，紀要にいくつかの論文を出すだけで，終わっていたと思う。また，博士課程在学中，お会いするたびに，岡山大学の岡益巳先生，酒井峰男先生，藤本喬雄先生，宮崎和人先生，そして大阪外国語大学の堀川智也先生をはじめとする多くの方々から励ましのお言葉をいただいた。

これらのよき先輩方を目指し，目標としながら今後も研究活動に励みたいと思う。

また，ここで一人一人お名前を挙げることは出来ないが，多くの方にインフォーマントチェックを引き受けていただいた。ここに合わせて感謝したい。

そして最後に，励まし続けてくれた夫と友人たちに感謝したい。

要旨

甲斐 ますみ

本稿は，話者と聞き手によって作り上げられる日本語の談話を対象とし，談話における省略現象について考察する。そして，様々な省略現象のうち，名詞句の省略に焦点を当てる。

第1章では，何を省略と呼ぶかの定義付けを行い，第2章では，これまでの省略研究を概観する。続く第3章，第4章では，省略現象を捉えるための方策として，「情報ベース」と「リンク」という二つの概念を提示する。これらは，本稿での議論の根幹をなす概念である。

話者と聞き手は，発話の進行に従ってオンラインで「情報ベース」という概念スペースを構築する。そしてこの情報ベースを活用することによって，話者は文中の要素を省略し，聞き手は文中の要素が省略された発話の解釈を行うことが可能となると仮定する。情報ベースにインプットされる要素（「情報要素」）は，発話の場面に存在する対象，談話の中で言語化された要素，そしてそれらの属性および要素間の関係などが挙げられる。また知識や共有情報なども情報ベースにインプットされることがあるが，これらは通常，それぞれの情報の保管庫に仕分けされて保管されている。この情報の保管庫を本稿では「情報領域」と呼ぶ。話者と聞き手は，談話の展開の中で，現在問題としている発話内容に関わる情報を，情報領域の中から必要に応じて参照し，あるいは引き出して，情報ベースにインプットする。

情報ベースには，談話処理に最も有効で最小の要素のみがインプットされる。情報ベースにインプットされる情報要素は，談話の流れの中で随時キャンセルされ，新しい情報要素にとって変わられ得る。こうした要素は，話者と聞き手の意識の中で活性化されている要素である。一方，発話の現在において，情報ベースにインプットされてないが，参照されている情報は，半活性化状態にある。しかし，情報領域に貯蔵されていて，参照されていない情報は，発話の現在において非活性状態にある。

話者は，情報ベースにインプットされている情報要素の中から，ある要素を前景化し，一連の発話を行うことがある。この前景化された要素を本稿では，「心理的トピック」と呼ぶ。談話の中である情報要素が前景化されると，それに情報を付加する発話が引き続き行われ，前景化された心理的トピックは，省略可能となる。

情報ベースは，省略現象を説明する基本的概念であるが，談話が複雑になると情報ベースに加えて，情報ベース内にある要素と要素間の意味的関係，あるいは，発話と発話の間の意味的関係を捉える道具が必要となる。その道具として，「リンク」という概念を提示する。

リンクには，五つの下位タイプがある。「論理的リンク」，「語彙的リンク」，「認知・概念的リンク」，「知識のリンク」，「情報のリンク」である。前景化された心理的トピックを中心として行われる一連の発話は，さまざまなレベルで働くリンクによって結束される。そして，明らかなリンクがあればあるほ

ど，発話と発話の結束性は強くなり，心理的トピックは省略され易くなる。

以上が情報ベースおよびリンクの大まかな説明である。第 5 章以下の考察は，これら二つの概念を用いて行う。

第 5 章，第 6 章では，1・2 人称主語と省略との関わりを論じる。

情報ベースにインプットされ得る要素には，発話の場面に存在する対象がある。発話の場面に存在する対象には，話者と聞き手がいる。そして一般的に，話者や聞き手を指す 1・2 人称主語は省略が可能であると言われている。しかしながら，たとえ話者や聞き手は発話場面に存在するとしても，発話場面自体とは別個の談話という概念領域では，話者や聞き手を指示する名詞句が無条件で省略可能というわけではない。1・2 人称主語の言語化・非言語化の振る舞いは，談話における主語の意味機能にコントロールされている。談話における主語の意味機能は，主語として言語化された名詞句の指示対象が，その他の主語となり得る対象とどのような関係を持っているかによって決定される機能である。

本稿では，主語の意味機能として，「完全排他主格／完全対比主題」「相対排他主格／相対対比主題」「論理的唯一主格／論理的唯一主題」「完全唯一主格／完全唯一主題」の四タイプを挙げる。主語名詞句が「は」を伴うか「が」を伴うかは，文構造，述語の意味など，主語の意味機能とは別のレベルで決定されるため，本稿では，問題の主語がその他の主語となり得る対象とどのような関係を持っているかという点では，「は」主題と「が」格主語を同一に扱えると考える。

「完全排他主格／完全対比主題」は，二つ以上の項目を言語的に対立させることによって対比や排他の意味を強く表わすことができるため，主語は言語化される。一方，「完全唯一主格／完全唯一主題」は，主語を言語化すると不自然となる。「相対排他主格／相対対比主題」は，主語が予測可能か否かによって二つのタイプに分かれる。主語が予測可能な場合には，言語化・非言語化ともに可能であるが，予測不可能な場合には，主語を省略することはできない。「論理的唯一主格／論理的唯一主題」は，話者と聞き手のもつ共有情報，文脈，談話における主語の卓越性などから，主語が唯一的に予測可能なタイプであり，それ故，主語は言語化・非言語化ともに可能となる。

従属節の主語についても，主語の意味機能が関わっている。南不二男（1974）は「従属句」の階層を，描述や判断といった意味機能に基づいて A, B, C の三類に分け，その内部に現れ得る成分について論じている。主語と従属節との関係について言うと，A 類の従属節は，「は」主題も「が」主格も現われることができない。B 類の従属節は，「は」主題は現われることができないが，「が」主格は現われることが可能である。C 類の従属節は，「は」主題も「が」主格も現われることができる。しかしながら本稿では，こうした従属節のタイプだけでは談話の中での主語の言語化・非言語化の振る舞いを説明できないと考える。談話における主語の言語化・非言語化は，南の言う従属節の階層性をベースとして，主語の意味機能によってコントロールされる。A 類の従属節は，

「は」主題も「が」主格も現われることができないので，省略とは関係しない。B類の従属節は，完全対比主題か「が」主格のみが現われることができ，その言語化・非言語化については，完全対比主題にかかわる制約および主格に関する主語の意味機能によってコントロールされる。C 類の従属節は，「は」主題も「が」主格も現われることができ，その言語化・非言語化の振る舞いは，単文の場合と同じである。

談話を構成する文の構造には多種多様なものがあるが，第7章では，質問とそれに対する答えという質疑応答ペアの発話について考察する。質疑応答ペアの発話における答えの部分は，省略が起こりやすい。というのは，話者からある不確定部分を含む命題が提示され，聞き手は少なくとも求められているその不確定部分を満たす情報を提供すればよいからである。そこで問題となるのは，反復言語化（くり返し）の可否である。

久野暲（1978），牧野成一（1980），高見健一（1995，1997）は，くり返しの可否を，情報の新旧のバロメータによって説明する。しかし本稿では，情報の新旧という概念は，くり返しの可否を決定する第一義的要因ではないと考える。くり返しの可否を決定する要因は，情報の新旧ではなく，取り消し可能性である。取り消し不可能な情報は，応答発話でくり返しすることができない。それに対し，取り消し可能な情報は，応答発話においてくり返すことが可能である。それは，取り消し不可能な情報が，発話の前提情報であるからである。

文の命題は，命題構築要素，命題付加要素，スペース設定点の三つからなる。yes-no タイプの疑問文の場合，命題構築要素は述部に対する必須成分であり，くり返しの可否については，その要素が取り消し可能情報か否かに依る。命題付加情報については，「で」格成分や様態副詞が，述語部分の行為や状態のあり方を強く限定し，また，述語部分が前提情報を表す場合には，必ずくり返さなければならない。しかし，量の副詞や，述語部分が取り消し可能情報であり，疑問の焦点でない様態副詞の場合には，くり返しは恣意的となる。スペース設定点は，時の副詞や主題化された場所を表わす成分などであるが，こうした要素は，聞き手が情報ベースにアクセスするためのいわば入口的役割を果たすため，くり返しについては，恣意的となる。

wh タイプの疑問文については，「で」格成分のくり返しは，yes-no タイプの疑問文と異なり恣意的であるが，その他の要素については，yes-no タイプの疑問文と同じ振る舞いが観察される。

第8章では，談話の内部構造に焦点を当て，談話の意味的な切れとつながりについて見ていく。続く第9章では，主題と省略について考察する。Hinds and Shibatani（1977）および Walker, Iida and Cote（1974）は，省略されている要素は，前の文の主題であると述べている。しかし本稿では，省略されている要素の指示対象が，必ずしも前の発話の主題とは限らないことを示す。そしてまた，同一主題の連続であっても，続く発話の中で主題が再言語化され，省略すると不自然となる場合があることを示す。更に，前の発話で主題である要素が，続く発話の中で格成分になった場合，あるいは，格成分が続く発話で主題となった場合，省略される場合と省略されない場合があるが，こ

れらはすべて，情報のリンクおよび話題の変換の有無という要因が関わっていることを主張する。

たとえ同一主題の連続であっても，前後の文脈に情報のリンクが存在しない場合や話題が変換する場合には，主題は再言語化され，省略すると不自然となる。話題が変換しておらず，前後の文脈に情報のリンクが存在する場合は，問題の要素が文法的にどのような役割を担っていようと，省略可能となる。

砂川有里子(1990)およびJ. Hinds and W. Hinds(1971)は，時空間のギャップやその他の登場人物の介入によって，主題の省略がブロックされると述べている。しかしこれらの要因も，第一義的なものではなく，省略をコントロールする最大の要因は，やはり情報のリンクおよび話題の変換の有無である。たとえ時空間のギャップやその他の登場人物の介入があったとしても，前後の文脈に情報のリンクが存在する場合には，要素の省略は可能となる。

第10章では，発話の解釈に推論が関わる例を取り上げる。リンクによって誘発される推論，聞き手が文脈にそってイメージを作り上げることによって発話の解釈が可能となる「空間イメージ省略」，「メトニミー」が関わる省略，の三つのタイプを挙げる。ただし，このような推論が関わる省略は，まだ未解明の部分が多く，詳しい分析は将来の課題である。

SUMMARY

KAI, MASUMI

The aim of this paper is to examine the phenomena of noun ellipsis in Japanese discourse. Ellipsis has been much investigated in the field of syntax theory, functional grammar, and text-linguistics. Less attention, however, has been paid to its phenomena in the discourse that is constructed by the speaker and the hearer so far. We shall explore the principle of ellipsis from the standpoint of utterance production and interpretation in discourse where the speaker and the hearer exist.

In Chapters 4 and 5, two new notions are introduced: 'INFORMATION BASE (IB)' and 'LINKING'. IB and LINKING are the central and basic notions of this paper.

IB is the utterance production model, and this is a mental space which is held by the speaker and the hearer during the utterances are exchanged. The speaker and the hearer make use of IB for the utterance production and interpretation. The items that are put into IB are typically 'individual', 'object', 'attribute', and 'relation'. These items are brought over into IB from what is said actually, perceptions in speech situation, or 'INFORMATION DOMAINs (ID)'. ID are storage of memory and knowledge we have. Items introduced into IB are activated in consciousness of both the speaker and the hearer. Items in ID that are referred to at the time of utterance production are periphery awareness and are semi-activated. Items that are stored in ID are inactive.

IB has one maximally activated and foregrounded entity inside. This foregrounded entity in IB becomes a 'MENTAL TOPIC (Mtopic)'. A Mtopic can be omitted in the discourse. On the other hand, the entities that have not been introduced into IB at the time of utterance cannot be omitted. This is a basic principle for ellipsis. Discourse is, however, a compound under many conditions, then ellipsis phenomenon cannot be explained only by IB. It needs another device - 'LINKING'.

We shall introduce five subtypes of LINKING: 'LOGICAL-LINKING', 'LEXICAL-LINKING', 'COGNITIVE-NOTIONAL-LINKING', 'KNOWLEDGE-LINKING', 'INFORMATINAL-LINKING'. Discourse develops around a foregrounded Mtopic, and is made coherent by LINKINGs. The more are LINKINGs, the stronger coherence a discourse has.

Chapters 5 and 6 examine the ellipsis of personal pronouns. Generally, it is said that the first person and the second person pronouns are easy to omit. It is, however, not always the case. There are some factors to make these pronouns omittable.

First, we assume that there are certain types of predicates which take the first person or the second person subject. We call these predicates 'SPEAKER-HEARER PREDICATES'. When a sentence has this type of predicate, the hearer can predict the subject. There are some other factors which make the first person and the second person subject omittable: 'shared information between the speaker and the hearer', 'subject saliency in discourse'.

These factors affect each other and determine the semantical function of subject in discourse. There are four types of subject according to its semantical function; 1) Topic of absolute contrast (Tac) / Nominative of complete exclusion (Nce), 2) Topic of relative contrast (Trc) / Nominative of partial exclusion (Npe), 3) Topic of logical uniqueness (Tlu) / Nominative of logical uniqueness (Nlu), 4) Topic of absolute uniqueness (Tau) / Nominative of absolute uniqueness (Nau). In the case Tac / Nce, the subject has to be verbalized. On the other hand, for the case Tau / Nau, the subject is normally not verbalized. Trc / Npe are divided into two types according to their predictability. When the subject is predictable through the factors mentioned above, it is to be omitted. When it is not, it must be verbalized. Tlu / Nlu are uniquely identifiable by the factors above, and the subject is omittable. These conditions are equally valid in subordinate clause also.

Chapter 7 explores the repetition of interrogative sentence. Interrogative sentence are divided into two types; yes/no type interrogative and wh type interrogative.

'Premises' are non-cancelable information, and non-cancelable information cannot be repeated in answering utterance for interrogatives.

Proposition is construed by three parts; 'PROPOSITION-CONSTRUCTION element (PC element)', 'PROPOSITION-ADDITIONAL element (PA element)', 'SPACE-ESTABLISHING element (SE element)'. PC element are essential for a predicate in a sentence. PA elements are adverbs typically. SE elements are topicalized locative element or time typically. When the PC element violates a prototype word order, it is interpreted as a focus in the sentence, and it must be repeated in the answering utterance also. The repeatability of PA element is decided according to adverb type. SE element is optional in repetition.

As for wh type interrogative, wh-element is always a focus in a sentence, then it has no concern about word order. The repeatability of PA element and SE element for wh type interrogative have the same behavior as yes/no type interrogatives.

In Chapter 8, we explore the discourse construction, and in Chapter 9, we examine topic ellipsis. It is argued that the main factor which controls the possibility of topic ellipsis is INFORMATIONAL-LINKING. In Sunagawa (1990) and J. Hinds and W. Hinds (1979) it is noted that a time-gapping blocks topic ellipsis. Counter examples are given in this chapter, however,. Even if there is a time gapping in discourse stretch, when there is INFORMATIONAL-LINKING between utterances, ellipsis is not blocked, because INFORMATIONAL-LINKING makes utterances coherent and fills up the time gap.

In Chapter 10, we shall examine inference. We raise three types of ellipsis which need inference for interpretation of the utterance: 'inference concerning LEXICAL-LINKING', 'SPACE IMAGE ELLIPSIS' and 'Metonymy'. SPACE IMAGE ELLIPSIS is the type which the hearer needs to construct an image for interpretation of the utterance which includes elliptical element. The phenomenon presented in this chapter has many unsolved problems and this presents further possibilities for research.